

# 鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 I

昭和60年度

〒890 鹿児島市郡元一丁目21番24号  
鹿児島大学  
埋蔵文化財調査室  
電話0992(54) 7141(内) 2305

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

1986年3月

## 序

鹿児島大学の荒田キャンパスを中心とする地域は、これまで行われた遺跡調査によって、縄文・弥生・古墳・奈良時代から、人々の生活が営まれていたことが明らかにされている。

教養部・理学部・教育学部などに古墳時代の住居跡群が、工学部・理学部・農学部・教育学部などには、古墳時代・奈良時代・平安時代の水田層の存在が確認されている。このように周知の埋蔵文化財包蔵地に立地する本学が、必要とするところの施設整備計画を推進するに当って、文化財保護法の精神を遵守して埋蔵文化財の保護活用をはかることは、研究教育機関としての大学にとって重要な責務である。本学の施設整備計画の実施と埋蔵文化財の保護という二つの命題の調和をはかり、学内の埋蔵文化財の調査研究を進めるといふ趣旨に基づいて、昨年4月、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則が制定され、大学独自の調査機関として、埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室が設置された。新しく発足した調査室は、昭和60年度本学施設計画の理学部1号館増築工事に先立って、増築予定地における発掘調査を行って、ここに埋蔵文化財調査室として第1号の調査結果を刊行することになった。

今回の調査は、本報告に示されているように、理学部1号館増築予定地において、古墳時代の住居の構築法、構造等について新知見を提供するとともに、遺物についても古墳時代成川式土器の終末期の様相を解明するための資料を新しく追加している。

発足したばかりで諸条件不備の中で、調査室の上村俊雄室長、松永幸男主任ほか関係者の真摯な且つ積極的な発掘調査、研究によって、この第1号報告書が刊行されることは、大変意義のあることとお慶びを申し上げる次第である。

昭和61年3月

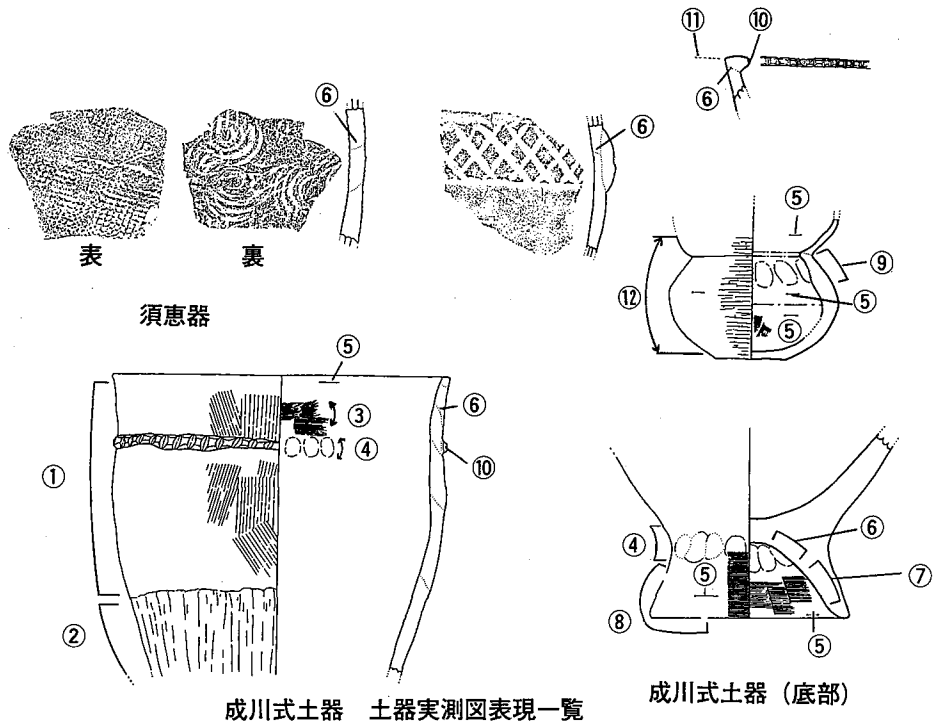
鹿児島大学長

石 神 兼 文






## 例 言

1. 本年報は鹿児島大学構内において鹿児島大学埋蔵文化財調査室が昭和60年6月1日から昭和61年1月31日までにを行った調査研究活動の成果をまとめたものである。
2. 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便であるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と宇宿団地とに設定した。その設置基準は以下のようである。
  - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系 ( $X = -158.200$ ,  $Y = -42.400$ ) を基点として一辺50mの方形地区割を行った(第2図参照)。
  - (2) 宇宿団地では、国土座標第2座標系 ( $X = -161.600$ ,  $Y = -44.400$ ) を基点として一辺50mの方形地区割を行った(第3図参照)。
3. 第IV章1について
  - (1) 遺物番号は土器・特殊遺物と石器とに分けてそれぞれ通し番号を1・S1から順に付した。遺物番号は、本文・挿図・遺物観察表・図版で一致する。
  - (2) 遺構の実測は松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝・奥村真由美・名於利真弓・中園聡・中村直子が主として行い、雨宮瑞生・上山久美子・栗畑光博・下山寛・武石静子・吉本正典の協力を得た。遺構の写真撮影は坪根・松永が行い、実測図整図は松永が行った。
  - (3) 遺物の実測・整図・撮影は、土器・特殊遺物を坪根が、石器を松永が担当した。
  - (4) 土器実測図の表現は、以下のようである。土器実測図表現法一覧図の数字に対応する。
    - ①：終点を流す刷毛目調整
    - ②：ヘラケズリ調整
    - ③：刷毛ナデ調整(刷毛ナデ調整と刷毛目調整は、表記上特に区別はしていない。土器観察表を参照されたい)
    - ④：指頭圧痕(点線の部分は不明瞭であることを示す)
    - ⑤：単なるナデ調整については方向のみ示した。なお、ナデ調整表記において、 $\angle$ がないのは、方向性がないかあるいは不明であることを示す。かろうじて方向性を示し得るものについては $\angle$ で示した。
    - ⑥：肉眼観察による粘土接合の状況を示す(粘土の接合部分は、胎土の状況・粒子の様子等から判断したが、明確なものについては実線で、疑問の残るものについては破線で表現した)。
    - ⑦：始点を押しつける刷毛目調整痕、あるいは刷毛ナデ調整痕を示す。
    - ⑧：推定復原部位であることを示す。



- ⑨：指オサエ
- ⑩：刻目最深部の形状を示す。
- ⑪：傾きに疑問の残るもの、あるいは推定によるものについては点線によって示している。
- ⑫：ミガキ（その方向については矢印によって示す）

また、トーン部分には、それぞれ次のような意味をもたせている。

- ：丹塗り部分
- ：煤付着部分
- ：炭化物付着部分

(5) 焼失住居址出土炭化材については、鹿児島大学農学部林学科藤田晋輔助教に分析を依頼し、プラント・オパール資料分析については宮崎大学農学部藤原宏志助教に依頼し、それぞれ分析結果の報告を賜った。また、石器石材の鑑定は鹿児島大学工学部中村淳子助手・鹿児島大学理学部福元豊氏にお願いした。ここに記して、深甚の謝



意を表したい。

(6) 出土遺物の整理・復元にあたっては、金子千穂枝が主として行い、小林暉子・森山豊子の協力を得た。

(7) 発掘調査期間中、以下の諸氏・機関の御協力・御教示を賜った。記して謝意を表したい。

旭慶男・雨宮瑞生・池畑耕一・上田耕・浦辻栄治・大塚裕之・小田富士雄・鹿児島大学法文学部考古学研究室・河口貞徳・新東晃一・出口浩・中村耕治・成尾英仁・西中川駿・新田栄治・本田道輝・前迫亮一（五十音順）

4. 本書の編集は、上村俊雄の指導のもとに松永・坪根が行った。

5. 本書の執筆は、I・III章を上村・金子が、II章・IV章1(1)・(2)・(3)・3・4を松永が、IV章2を坪根が担当した。IV章1(4)・(5)については溝を除く遺構と出土石器の説明を松永が執筆し、他の部分は坪根が分担した。また、IV章1(6)については住居址・石器の項を松永が、土器の項を坪根が分担執筆した。

6. 鹿児島大学埋蔵文化財調査室発足以前の学内調査（昭和50年度以降）については、鹿児島県教育委員会文化課と鹿児島大学法文学部考古学研究室の了解を得て、事業報告書の概要を転載した。

# 目 次

第Ⅰ章 鹿児島大学埋蔵文化財調査室の概要	10
1. 鹿児島大学埋蔵文化財調査室設置に至る経過	10
2. 鹿児島大学埋蔵文化財調査室の概要	17
3. 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則	18
第Ⅱ章 鹿児島大学構内遺跡の位置と環境	21
第Ⅲ章 鹿児島大学埋蔵文化財調査室設置以前の調査	22
第Ⅳ章 昭和60年度鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	51
1. 郡元団地Ⅰ・Ⅱ — 9・10区（理学部1号館増築地）の発掘調査報告	51
(1) 調査に至る経過と調査組織	51
(2) 発掘調査の経過	51
(3) 基本層位	54
(4) 遺構と遺構出土の遺物	63
(5) 遺構外出土遺物	96
(6) 郡元団地Ⅰ・Ⅱ — 9・10区発掘調査のまとめ	
2. 郡元団地Ⅲ — 3・4区における発掘調査（教育学部福利厚生施設新設に伴う埋蔵文化財確認調査）の報告	138
3. 昭和60年度の立合調査結果	141
4. 昭和60年度の調査活動のまとめ	143
付 編	
1. 鹿児島大学郡元団地Ⅰ・Ⅱ — 9・10区検出17号住居址出土炭化材の樹種鑑定結果	145
2. 鹿児島大学理学部1号館増築予定地（郡元団地Ⅰ・Ⅱ — 9・10区）におけるプラント・オパール分析	147
3. 脇田亀ヶ原遺跡について——鹿児島大学宇宿キャンパス及びその周辺地区に於ける採集遺物の紹介	153
受贈図書目録	159



## 挿 図 目 次

第1図	鹿児島大学主要キャンパス位置図	20
第2図	鹿児島大学郡元団地内遺跡分布図	23
第3図	鹿児島大学宇宿団地内遺跡分布図	28
第4図	釘田第1地点遺跡検出遺構	31
第5図	釘田第1地点遺跡土層図	31
第6図	釘田第1地点遺跡出土土器	32
第7図	鹿児島大学郡元団地構内地形図・字図	33
第8図	釘田第6地点遺跡Ⅳa層出土土器分布図	37
第9図	釘田第9地点遺跡検出遺構	41
第10図	釘田第9地点遺跡出土遺物	41
第11図	釘田第9地点遺跡プラント・オパール分析結果	45
第12図	郡元団地Ⅰ・Ⅱ — 9・10区調査区位置図	52
第13図	Ⅰ・Ⅱ — 9・10区検出遺構全体図	53
第14図	52・53・54 — C区南壁土層図	55
第15図	55・56 — C区南壁・56 — C区西壁土層図	57
第16図	56 — B・A区西壁・56 — A'区北壁土層図	59
第17図	55・54・53 — A'区北壁土層図	61
第18図	1号住居址出土遺物	64
第19図	1号住居址実測図	65
第20図	2号住居址実測図	67
第21図	3号住居址実測図	69
第22図	4号住居址実測図	71
第23図	6・7・8・11号住居址実測図	73
第24図	3・4・6・7号住居址出土遺物	75
第25図	10・11・17号住居址出土遺物	77
第26図	16・19号住居址実測図	79
第27図	17号住居址・5号溝実測図	81
第28図	10・15号住居址実測図	84
第29図	18・19・20・25号住居址出土遺物	86
第30図	2・8・9・16・26・27号住居址出土遺物	87
第31図	26・27号住居址実測図	88

第32図	配石をもつ方形掘り込み実測図	89
第33図	2号溝実測図	91
第34図	4号溝実測図	93
第35図	2号溝出土遺物	94
第36図	4・5号溝出土遺物	97
第37図	Ⅲb・V・Ⅵ層出土遺物	98
第38図	Ⅵ層出土遺物	99
第39図	Ⅵ層出土遺物	100
第40図	突帯(1)	102
第41図	突帯(2)	103
第42図	突帯(3)	104
第43図	手づくね土器	105
第44図	特殊遺物	106
第45図	須恵器出土分布図	108
第46図	須恵器(1)	109
第47図	須恵器(2)	110
第48図	須恵器(3)	111
第49図	須恵器(4)	112
第50図	須恵器(5)	113
第51図	弥生土器	114
第52図	包含層出土石器	116
第53図	包含層出土軽石製品	117
第54図	6号住居址断面図	134
第55図	O — 5区試掘トレンチ位置図	138
第56図	O — 5区試掘No. 1トレンチ北壁・西壁土層図	139
第57図	教育学部校舎新築工事に伴う高压電線配管工事部分位置図	141
第58図	I — 4・5区立合調査実施地点	142
第59図	I — 4・5区立合調査時作成土層模式図	142
第60図	I・J — 9・10区プラント・オパール分析結果グラフ	148
第61図	脇田亀ヶ原遺跡採集土器(1)	155
第62図	脇田亀ヶ原遺跡採集土器(2)	156
第63図	脇田亀ヶ原遺跡採集古銭	157



## 写真目次

写真1	釘田第6地点遺跡出土夜臼式土器	37
写真2	53 — A' 区北壁土層	54
写真3	V層土	54

## 表目次

表1	鹿児島大学郡元団地内遺跡一覧表	24~27
表2	鹿児島大学宇宿団地内遺跡一覧表	29
表3	釘田第9地点遺跡プラント・オパール分析結果	44
表4	郡元団地I・J — 9・10区出土土器観察表	119~131
表5	郡元団地I・J — 9・10区出土石器観察表	132~133
表6	郡元団地I・J — 9・10区17号住居址出土炭化材樹種鑑定結果	146
表7	郡元団地I・J — 9・10区プラント・オパール分析結果	149~152

## 図版目次

図版1	郡元団地I・J — 9・10区検出遺構全景	167
図版2	郡元団地I・J — 9・10区検出遺構	168
図版3	郡元団地I・J — 9・10区検出住居址・配石をもつ方形掘り込み	169
図版4	郡元団地I・J — 9・10区17号住居址	170
図版5	郡元団地I・J — 9・10区17号住居址出土炭化材	171
図版6	郡元団地I・J — 9・10区住居址中央部高環検出状況	172
図版7	郡元団地I・J — 9・10区2号溝	173
図版8	郡元団地I・J — 9・10区2号溝遺物出土状況	174
図版9	郡元団地I・J — 9・10区4号溝	175
図版10	郡元団地I・J — 9・10区VI層遺物出土状況	176
図版11	郡元団地I・J — 9・10区出土土器	177
図版12	郡元団地I・J — 9・10区出土土器・特殊遺物	178
図版13	郡元団地I・J — 9・10区出土土器	179
図版14	郡元団地I・J — 9・10区出土土器	180
図版15	郡元団地I・J — 9・10区出土土器	181
図版16	郡元団地I・J — 9・10区出土土器	182

图版17	郡元团地 I · J — 9 · 10区出土土器	183
图版18	郡元团地 I · J — 9 · 10区出土土器	184
图版19	郡元团地 I · J — 9 · 10区出土土器	185
图版20	郡元团地 I · J — 9 · 10区出土土器	186
图版21	郡元团地 I · J — 9 · 10区出土石器	187
图版22	郡元团地 I · J — 9 · 10区出土石器	188
图版23	郡元团地 I · J — 9 · 10区出土石器	189
图版24	郡元团地 O — 3 · 4区調査状况	190



# 第Ⅰ章 鹿児島大学構内埋蔵文化財保護対策要項

## 1. 鹿児島大学埋蔵文化財調査室設置に至る経過

鹿児島大学構内に埋蔵文化財が包蔵されていることは、昭和26年ごろから知られていたが、にわかに脚光を浴びるようになったのは釘田遺跡の発掘調査によってであった。

昭和50年4月、鹿児島大学学友会所属の考古学研究会の学生が、教養部校舎増築工事現場から土器片を発見し、大学側に善処を求めたことがきっかけとなって、大学当局は県教育委員会に確認調査を依頼した（参考資料1参照）。

以来、昭和55年まで鹿児島県教育委員会が16回、昭和60年3月まで鹿児島大学法文学部考古学研究室が25回、昭和60年6月以降、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が10回調査している。

調査件数は、全面発掘調査・試掘調査・立合調査をすべて含めての回数であるが、その内容については、別項でふれているのでここでは省略したい。

昭和50年8月21日、蟹江学長が評議会に「学内埋蔵文化財対策委員会」の設置を諮問し、昭和51年1月22日、「鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則」を制定するなど、鹿児島大学側でも、埋蔵文化財対策を構じている（参考資料2参照）。

釘田第1地点遺跡より出土した埋蔵文化財は、報告書作成がなされるまで、鹿児島県教育委員会文化課が一時保管することとなり、現在も県文化課の収蔵庫に保管されたままとっている。

この釘田第1地点遺跡に引きつづき、昭和51年の理学部2号館増築地内（釘田第8地点遺跡）の発掘をはじめとして数次にわたって調査が行われた。その結果、各種の遺構が検出され、多量の遺物の出土をみることとなった。

昭和53年11月27日、出土遺物の処理について、蟹江学長から諮問がなされ、同12月12日、埋蔵文化財対策委員会が答申を行っている。

要点をまとめると、「基本的には、出土遺物は文化財保護法の趣旨に則して、保管と活用を図るべきであろう。……大学としては、当面出土遺物を収納し、その散逸、盗難、変質を防止するため、何らかの措置を構ずる必要がある。また将来の保管と陳列、展示などの活用も考慮して、恒久的な保存計画を立てるべきで、その方法等については、今後ひきつづき、本委員会において検討すること」が答申されている。

これらの討議の過程の中で 理学部2号館建設予定地（釘田第8地点遺跡）より出土した埋蔵文化財は、変電室の一階に当分の間収蔵することとなり、現在にいたっている。

一方、報告書作成については大学側でも数回にわたって検討が行われ、県文化課に報告書作成のために要する経費等について相談している。

しかし、教養部・理学部だけでも膨大な資料であり、それに加えて工学部、法文学部、体育

館、電子計算機室、全体確認などの資料を含めると、整理費、印刷費だけでも総計1166万円にのぼる見積りがなされたため、その経費をどこからも捻出することができずそのままとなっていた。それまで学内に考古学の専任教官が1人もいなかったことも大学側の埋蔵文化財対策に大きく影響していた。

従来の発掘調査は、県教育委員会文化課に依頼して実施してきた。しかし近年文化課の業務の増加に伴い、大学からの発掘調査依頼に直ちに対応してもらえることが期待できない状態となったため、緊急な発掘調査は学内の考古学教官が依頼され、実施してきた。しかし多くの時間と労力を要し、大学教官の本務である教育・研究がおろそかになり、学生に教育、指導を十分に行えないという事態が生じるようになった。このままでは施設計画を円滑に推進できないため、埋蔵文化財調査を実施する全学的機関を設置して大学独自の調査機能を確立する必要があるという気運が高まってきた。

昭和58年12月下旬、石神兼文学長より、昭和59年度以降の、学内施設計画に伴って生ずる埋蔵文化財対策に関する具体案について早坂祥三埋蔵文化財対策委員会委員長に諮問があり、委員会で検討した結果、現在の委員会組織及び対応策では十分に対処し得ないこと、また文化財保護法の規定を遵守し、かつ大学本来の施設計画を円滑に実施していくためには、その目的にふさわしい新たな組織を早急に学内に設ける必要があるとの結論に達した。

具体案としては、本学の現状並びに他大学（東京大学・京都大学・岡山大学・広島大学・山口大学・九州大学など）に既に設置されている同種組織の内容を勘案しつつ、慎重に検討した結果、試案が作成され、昭和59年1月17日答申されている。

この答申に基き、石神学長は埋蔵文化財対策委員会報告（答申）で示された問題点を整理するとともに、その実施方策についての検討を行うことを目的に評議会埋蔵文化財対策特別小委員会（委員長 荒川譲）の設置を要請した（昭和59年3月8日 第490回評議会審議）。この結果、以下の諸氏から成る委員会が設置されることとなった。

#### 埋蔵文化財対策特別小委員会委員名簿

法文学部	楠元 茂	教育学部	楠元 司	理学部	早坂 祥三
医学部	朝倉 哲彦	歯学部	小片 丘彦	工学部	間庭 愛信
農学部	小倉 弘司	水産学部	大城善太郎	教養部	荒川 譲
付属図書館	五味 克夫				

この委員会において、試案に関する主な問題点として、

- ① 調査委員会の目的・権限及び調査の範囲
- ② 指導委員会と調査委員会との関連
- ③ 調査室の組織上の位置付け、助手定員の確保、人事上の位置付け、技能・事務補佐員の予算上の問題、調査費、人件費の予算措置



などがあげられ、昭和59年4月24日以降、11回におよぶ審議の結果「当面する埋蔵文化財対策の具体案について」下記の結論が昭和59年12月5日鹿児島大学評議会議長（石神兼文学長）に答申された。

周知の埋蔵文化財包蔵地を含む地域に立地する本学が、所要の施設整備計画を推進するに際して、文化財保護法の趣旨と規定を遵守して埋蔵文化財の保護対策を講ずることは、学術・文化機関としての大学に課せられた重要な責務である。そのためには、埋蔵文化財対策についての全学的責任体制の整備と大学独自の調査機関の設置が必要である。

## 1 責任体制の整備

埋蔵文化財対策は通常、学内の施設計画に伴って生ずること、最終的には高度の総合的判断が必要であり、かつそれが学外に対しても責任を持たねばならないことを勘案して、埋蔵文化財対策委員会を改組する。対策委員会は学長、部局長、事務局長、学生部長で構成し、埋蔵文化財対策に関する基本計画の策定と個別の保護対策の事例について最終的判断を行うことを任務とする。対策委員会には専門委員会として埋蔵文化財調査委員会並びに実務機関として埋蔵文化財調査室を設置する。

## 2 調査機能の確立

### (1) 埋蔵文化財調査委員会

調査委員会は各学部、教養部から選出された教員と埋蔵文化財調査室の代表で構成され、全学的合意のもとに埋蔵文化財の調査、保護活動を行うとともに、調査室の運営にあたる。委員には考古学・歴史学のほか、地質学・植物生態学・環境保全等関連分野の専門家が含まれるよう配慮する。

### (2) 埋蔵文化財調査室

調査室は学内の埋蔵文化財の分布調査（予備調査に相当）、施設建設に際しての本調査並びに埋蔵文化財の保護に関して必要な業務を行う。調査室には、全学的協力体制の下に考古学の研究者若しくは専門的知識を有する者その他必要な職員を配置する。調査室は配置事由が消滅するまで存続するものとし、5年ごとに行われる施設整備長期計画（マスタープラン）策定の時期に必要な性を検討するものとする。職員の配置については必要な事項は別途検討されたい。

## 3 必要経費

埋蔵文化財対策に要する経費は埋蔵文化財発掘調査経費（（目）施設整備費）並びに学内共通経費をもってあてる。

## 4 過去の発掘調査に関する事項

新組織発足以前に行われた発掘調査（教養部・理学部・第二体育館・法文学部・工学部電子計算機室等）に関する報告書の作成、出土品の整理、保存について必要な事項は新組織において検討するものとする。

## 5 埋蔵文化財対策の実施に必要な事項を定める規則案（別紙）



以上の答申に添付された説明資料の中に調査委員会、指導委員会、調査室などそれぞれの目的、性格、相互関係、その他について明確にされている（参考資料3参照）。

以上のような経過をふまえて、昭和60年6月1日全学的組織として鹿児島大学埋蔵文化財調査室が発足した。

（参考資料1）

教養部校舎建築工事現場から発見された埋蔵文化財（釘田遺跡）の発掘調査と事後処理について

1 発見から調査まで

昭和50年4月3日教養部校舎増築工事現場から土器片が出土しているのを発見した旨、4月8日考古学研究会の学生から大学に通知があり、大学は県教育委員会に確認調査を依頼した。4月10日確認調査が行われ、校舎増築工事区域360㎡の全面調査が必要との結論が出されたので、県教育委員会に緊急調査を委嘱し、4月28日から7月5日まで調査が実施された。

2 調査の概要

調査は県文化財専門委員河口貞徳氏の指導助言のもとに、県教育委員会文化課主任文化財研究員平田信芳氏、文化課主事小村耕治氏、及び同吉永正史氏が担当し、校舎増築工事現場360㎡について、5m単位のグリットを組み発掘調査が実施された。

3 調査の結果（県教育委員会報告書の要約）

調査地は海拔6mの沖積地で、弥生時代から古墳時代にかけての海岸線に近かったと推測される。遺物は地表面下1m～1.6mの黒褐色粘質土層に含まれており、その上部からは成川式土器・土師器の小破片及び軽石礫が全面にびっしりつまった状態で出土し、須恵器・丹塗高杯の破片が点在していた。下部になると土器破片も大型化し、完形土器が多く出土した。この層の下には黒色粘質土層が存在し、この層に重複した住居址30が検出された。この住居址中には二度使用した痕跡の認められるものもあった。また住居址群の中央に、幅約60cm・深さ約40cmのU字状溝が掘られていた。この遺跡の性格は要約すると次のとおりであり貴重な遺跡といえる。

- (1) 30の住居址が重なりあっている複合住居址群であり、その切り合いから新旧関係を推定できると同時に、かなり長期間の集落址を想定できる。
- (2) 住居址内に完形土器の出土が多く、住居址の新旧関係を基準として、成川式土器・土師器・須恵器の編年を考察することができる。
- (3) 丹塗高杯の出土が多く（約200点）、その祭祀的性格を検討する上で貴重な資料となる。
- (4) この遺跡は調査地点から四方に拡がるものと考えられる。

4 事後処理について

7月7日県教育委員会から発掘調査事業報告書が届けられ、同報告書について調査担当研究員の説明が行われた。学長は同報告書並びにそれについての説明、及び施工の実態などを総合的に検討し次の結論をえて、7月15日開催の評議会に報告、了承を求めた。

- (1) この文化財は教養部校舎増築工事の工事請負契約成立後、工事の施行途中に発見されたもので

あり、360㎡の調査地域内には、既に110本の杭が打設されており、これによる遺跡の破壊が既に調査開始前、不明の裡に行われていた。

(2) 報告書によると、校舎増築予定地の全般にわたり、遺跡の完全な記録をとりながら発掘調査が進められ、360㎡の地域が7月5日までに完掘されている。

(3) (1)・(2)の実態から、本遺跡の全般的な現場保存はもはや不可能な状態にあり、従って教養部校舎の増築工事は、続行するも止むをえないものと判断する。

(4) 出土遺物は所定の手続きによる届出を行い、早急にその保管と活用に関する基本方針を樹立するつもりである。また鴨池キャンパスにおける今後の建築計画等に当っては、埋蔵文化財の調査を先行させ、支障がないとの結論をえたうえで、立案または着工するつもりである。

#### 5 その後の処置について

(1) 大学は本遺跡の価値を勘案し、基礎工事の設計の一部を変更し、残存住居址を砂で覆い保護を図った。尚このことを県教育委員会に文書をもって報告した。

(2) 学長は8月21日開催の評議会に「学内埋蔵文化財対策委員会（仮称）」の設置を諮問した。

(鹿児島大学)

(鹿大広報 第37号 昭和50年9月10日発行より転載)

#### (参考資料2)

鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則（昭和51年1月22日制定）

#### 設 置

第1条 鹿児島大学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（以下「委員会」という。）を置く。

#### 目 的

第2条 委員会は、学長の諮問に応じ、鹿児島大学構内の埋蔵文化財に関し必要な事項を審議する。

#### 組 織

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織し、学長が委嘱する。

- (1) 評議会から選出された委員 3名
- (2) 学部・教養部及び医学部附属病院から選出された委員 3名
- (3) 事務局長

#### 任 期

第4条 前条第2号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

#### 委員長

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した委員が、その職務を行う。

## 議 事

第6条 委員会は、委員の過半数の出席により成立し、議事は、出席委員の過半数により決する。ただし、可否同数のときは、議長の決するところによる。

## 委員以外の者の出席

第7条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

## 幹 事

第8条 委員会に幹事を置き、経理部長及び施設部長をもって充てる。

## 事 務

第9条 委員会に関する事務は、施設部企画課において行う。

## 附 則

この規則は、昭和51年1月22日から施行する。

### (参考資料3)

「当面する埋蔵文化財対策の具体案について」の答申添付資料

#### ・添付資料1

- ◎ 調査委員会、指導委員会のそれぞれの目的、性格審議事項等及び調査室の目的、性格、業務内容並びにこれらの委員会、調査室の相互関係について
  - ・ 調査委員会は学内の施設計画にかかわる埋蔵文化財の発掘調査計画の検討および調査結果をふまえた総合的判断、発掘資料の保存と調査報告書作成に関する立案、各種の事業計画の調整、人事、予算、その他管理運営に関する重要事項を審議する。
  - ・ 指導委員会は調査委員会の運営を補助すると同時に、発掘調査に関する専門的事項について助言および指導を行う。
  - ・ 調査室は学内における埋蔵文化財の調査研究および保存に関する業務を処理し、指導委員会に資料を供するために次の業務を行う。
    - ① 保護、調査、発掘等の実施計画の立案
    - ② 発掘調査、分布調査および確認調査の実施
    - ③ 遺物の整理および調査報告書の作成
    - ④ その他必要な事項

#### ・添付資料2

- ◎ 施設計画実施上の問題点について

ー特に施設部と上記委員会との関連についてー

鹿児島大学構内は埋蔵文化財が包蔵されている周知の遺跡地である。文化財保護法を遵守するためには、新営工事に先立って事前調査を行う義務がある。

大学構内における建築物新営工事等は施設部が最も深い係りをもっており、新営工事等の敷地の属する部局の長あるいは部局附属施設の長とは互いに協議しなければならない。



また、委員会、調査室等の業務は関係部局の協力を得て施設部において処理する。

埋蔵文化財調査室設置の目的（以下「調査室」という）

本調査室は、文化財保護法の趣旨にもとづき、鹿児島大学構内に所在する埋蔵文化財を調査研究し、詳しい内容を把握することによって、その恒久的な保存と活用と体制を確立するとともに大学構内の建設計画との調整に資する。

・添付資料 3

#### ◎ 調査室設置の理由

- 1 本大学では、宇宿地区において、医学部、大学病院等の建設工事に伴って、縄文時代、弥生時代の埋蔵文化財が発見されたにもかかわらず調査、記録保存のための措置がとられなかったことは関係者のよく知るところである。農学部の入来牧場も埋蔵文化財包蔵地である。

荒田キャンパスにおいても、この10年来教養部・全体確認・理学部・体育館・法文学部・工学部・電算室・農学部・その他で発掘調査が行われ、その結果、荒田キャンパス全域にわたって、埋蔵文化財（縄文・弥生・古墳・歴史の各時代）が包蔵されていることが確認された。しかし、これら一連の発掘調査が行われたにもかかわらず、整理・報告書作成・資料の公開などはまだなされておらず、文化財保護法の趣旨は生かされていない。

電算室は古墳時代の水田址が発見されたために設計変更の止むなきに至っている現状である。学内の長期的な建設計画に重大な支障を生じないためにも、埋蔵文化財の正確な所在をあらかじめ把握しておく必要がある。

- 2 本調査室は埋蔵文化財調査指導委員会の方針と指導を受けて、調査・研究事業を実施するが、その具体的内容は次のとおりである。
  - ① 大学全地区において埋蔵文化財の所在とその範囲を確認するための試掘調査を行い、文化財保護区域・建物建設区域等を区別するための資料をつくる。
  - ② 建物建設により、埋蔵文化財が破壊される恐れがある場合、文化財保護法によって義務づけられている事前の発掘調査を行う。
  - ③ 文化財保存地区における遺跡の内容を発掘調査によって詳しく把握し、地下遺構の恒久的保存措置をはかるとともに、地上において遺構の復原や標示を行って史跡としての活用をはかる。
  - ④ 出土遺物の整理・復元・実測・拓本・写真撮影等を行い、各遺物の製作技法および年代的特徴・地域的特徴を調査研究する。これにより報告書を発刊するとともに優れた遺物については展示等を行い、遺跡と一体となった文化財的な活用をはかる。

## 2. 鹿児島大学埋蔵文化財調査室の概要

鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会委員（昭和60年4月18日現在）

委員長 石神兼文（鹿児島大学学長）

委員 米谷静二（法文学部長）	亀田 久（教育学部長）
長谷綱男（理学部長）	橋村三郎（医学部長）
浦郷篤史（歯学部部長）	碓 醇（工学部長）
小倉弘司（農学部部長）	野澤洽治（水産学部部長）
荒川 讓（教養部長）	上村剛一（附属図書館長）
井形昭弘（医学部附属病院長）	川越昌宣（歯学部附属病院長）
岡本洋三（学生部長）	福井悌次郎（事務局長）

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会委員（昭和60年6月24日現在）

委員長 難波直彦（農学部教授）	任期（60. 5. 17～62. 3. 31）
委員 小田 洋（法文学部教授）	（60. 6. 24～62. 3. 31）
桑波田興（教育学部教授）	（60. 5. 17～62. 3. 31）
大塚裕之（理学部助教授）	（ 〃 ）
中野勝磨（医学部教授）	（ 〃 ）
小片丘彦（歯学部教授）	（ 〃 ）
桐岡 健（工学部教授）	（ 〃 ）
片岡千賀之（水産学部助教授）	（ 〃 ）
新田栄治（教養部助教授）	（ 〃 ）
上村俊雄（調査室長併任 法文学部教授）	（60. 6. 10～62. 3. 31）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室（昭和60年6月1日現在）

室長（併）	法文学部教授	上村俊雄
主任（併）	法文学部助手	松永幸男
	技術補佐員	金子千穂枝
	技術補佐員	坪根伸也

### 特色・意義

本調査室は、重要な埋蔵文化財を高度な学問的内容で調査するとともに、建設計画と文化財



保護の調和をはかるためのものであり、いわば学問上の効果と行政上の効果を有機的に結びつけた独自の組織である。学内の文化財及びその調査成果を永く保存・管理し、公的・学術的機関としての大学が文化財保護法の趣旨を率先して行い、一般に範を示すとともに、文化財とその調査成果を公開することによって、一般社会の文化的要求に応えることの意義もきわめて大きい。

### 3. 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

(設置)

第1条 本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(審議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行うため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

- (1) 基本計画の策定に関すること。
- (2) 調査結果に基づく対策に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 各学部長，教養部長，附属図書館長，医学部附属病院長及び歯学部附属病院長
- (3) 事務局長
- (4) 学生部長

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の3分の2以上をもって決する。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことが出来る。

(調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行うため、埋蔵文化財調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置く。

第8条 調査委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。
- (3) 第13条に規定する調査室の予算に関すること。



(4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関すること。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

(1) 各学部及び教養部の教授、助教授、講師の中から選出された者各1名

(2) 第15条第2項に規定する調査室長

2 前項第1号の委員の任期は2年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前条第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(調査室)

第13条 調査委員会は、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行うために埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行う。

(1) 調査実施計画の立案

(2) 発掘調査・分布調査及び確認調査

(3) 調査報告の作成

(4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長・主任及びその必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(その他)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行う。

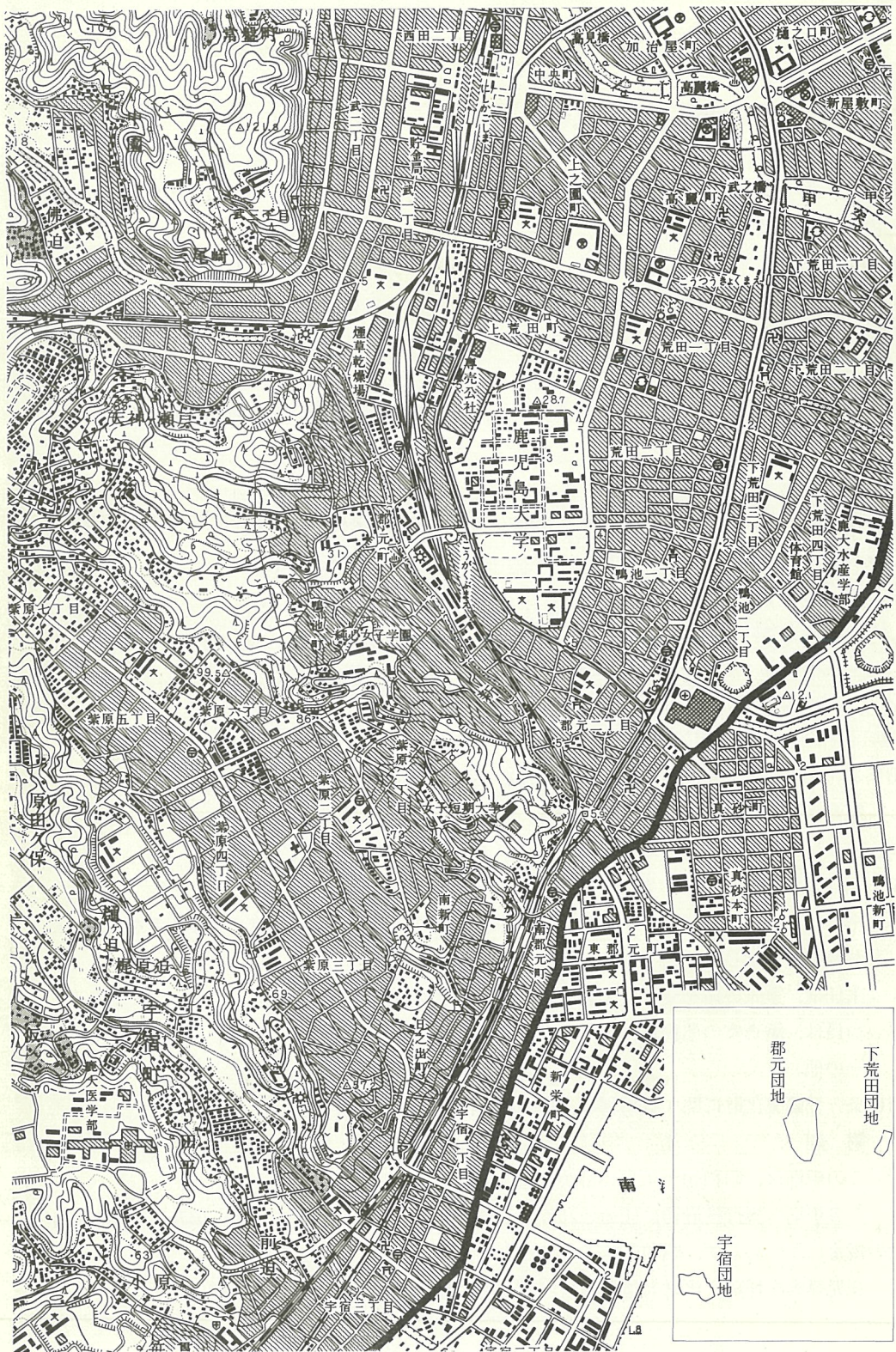
#### 附 則

1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第9条第2項及び第15条第4項の規定にかかわらず、昭和62年3月31日までとする。

3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則(昭和51年1月22日制定)は、廃止する。





第1図 鹿児島大学主要キャンパス位置図 (1/25000)



## 第Ⅱ章 鹿児島大学構内遺跡の位置と環境

薩摩半島東半部には吉野・武岡・紫原・五位野などのシラス台地が形成されており、これらを浸食して稻荷川・甲突川・田上川・脇田川・永田川といった諸河川が東流し鹿児島湾へと注ぐ。そして、これらの河川によって形成されたデルタ地帯を中心として展開する鹿児島市に鹿児島大学のキャンパスは位置する。

鹿児島大学の主要キャンパスである郡元団地・宇宿団地・下荒田団地は、それぞれ上記のデルタ地帯・シラス台地上・鹿児島湾岸部に位置し、そのキャンパス内に数多くの遺物包蔵地をもつ。<sup>(1)</sup>特に郡元団地は鹿児島市のデルタ地帯のほぼ中央部に位置し、その周辺部及びキャンパス内に重要な遺跡が存在している。

郡元団地においては既に数次にわたって調査が行なわれており、縄文時代前・晩期・弥生時代前・中期、及び古墳時代から中世にかけての遺物・遺構が検出されている。<sup>(2)</sup>特に古墳時代成川式土器の出土量は膨大な量に達し、該期の集落址の存在も知られている。現在の教養部から理学部にかけての地域は郡元団地の中でもきわめてわずかではあるものの高い部分をなしているが、教養部において住居址30軒が、今回の理学部の調査によって住居址27軒がそれぞれ検出されており、成川式期の集落の中心の一つがこの部分にあったことが推測される。この他、成川式期の遺構としては現在の教育学部グラウンド内の県立医大遺跡で検出された円形住居址、附属中学校敷地内検出の隅丸方形住居址、及び理学部2号館建設地において検出された数条の河川、それに伴う木杭列等が知られている。

郡元団地近傍には弥生時代の住居址4軒が検出されたことで学史上著名な一宮神社遺跡<sup>(3)</sup>がある。また「郡元」という地名は、当地が鹿児島郡の中心であった可能性も考えさせるものである。

現在医学部・歯学部が所在する宇宿団地は、郡元団地の南方約2.5kmの亀ヶ原台地上に位置する。当地においては、宇宿団地造成直後の昭和45年から46年にかけて中間研志・本田道輝両氏等によって数次にわたる表面採集が行われ、縄文時代早・前・後期・弥生時代前・中期の遺物が採集されている。<sup>(4)</sup>特に弥生前・中期の資料は鹿児島県内においても例数が少なく貴重なものである。このほか、洪武通宝も採集されている。

註 (1) ただし、水産学部が所在する下荒田団地においては、現在のところ遺構・遺物の存在は確認されていない。

(2) 上村俊雄「遺跡の位置と環境」【神川堤第一地点】鹿児島大学工学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室 1985年

(3) 河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺蹟について」【鹿児島考古学会紀要】第2号 1952年  
河口貞徳「一の宮遺蹟報告」【考古学雑誌】37-4 1951年

(4) 註(2)に同じ。



## 第三章 鹿児島大学埋蔵文化財調査室設置以前の調査

鹿児島大学構内においては昭和60年6月1日の調査室発足以前に、河口貞徳氏・鹿児島県教育委員会・鹿児島大学法文学部考古学研究室によって郡元団地を中心に数多くの調査が実施されている(第2図・表1)。またこの他にも、中間研志・本田道輝両氏等によって宇宿団地での分布調査が行われている(第3図・表2)。これらの調査は数多くの貴重な成果をあげているにもかかわらず、残念なことにその内容についてはほとんど知られていない。そこで本章においては、河口貞徳氏調査分については氏の報告をもとにその概要を記し、鹿児島県教育委員会及び鹿児島大学法文学部考古学研究室調査分についてはその事業報告を掲載することによって、これらの調査成果の一端を紹介したい。

### 1 県立医大住居址

昭和26年に発掘調査されている。地表下1.5mのところまで竪穴住居址の床面に達している。住居址は円形竪穴で、径4.42m、深さ45cmの大きさである。柱穴の数については、『鹿児島のおいたち』と『鹿児島市史I』では、その数がくいちがっているので混乱をさけるためにここでは触れない。床面はふみ固められ、炉を有していないが床面には灰と木炭が少量検出されている。出土遺物によって弥生時代後期のもものと報告されているが、一の宮上層式・笹貫式と同一形式でしかも須恵器を共伴しているため、6世紀代(古墳時代)に属するものと判断してよいであろう。

なお、発掘調査位置は当時の県立医大構内講堂東南の角付近で、現在の鹿児島大学附属中学校敷地内にあたりとされている。

1. 河口貞徳「医大住居址」『鹿児島のおいたち』鹿児島市 昭和30年
2. 河口貞徳「県立医大遺跡」『鹿児島県考古学会紀要 2』昭和27年
3. 河口貞徳「原始古代編」『鹿児島市史I』鹿児島市史編纂委員会 昭和44年

### 2 附属中学校敷地内住居址

昭和38年に調査され、隅丸方形の竪穴住居址が発見されている。長径4.4m・短径4m・深さ40cmの大きさである。床面中央に炉があり、58cm×53cmの不正円形で深さ10cmである。壁に沿って四隅に1つずつ4個の柱穴があり、北角の柱穴は軽石で固められている。東南隅の床面が壁に沿って、幅1.3m・奥行き1.1mの範囲に一段深く掘りこまれ、あたかも入り口のような観を呈する遺構が確認されている。

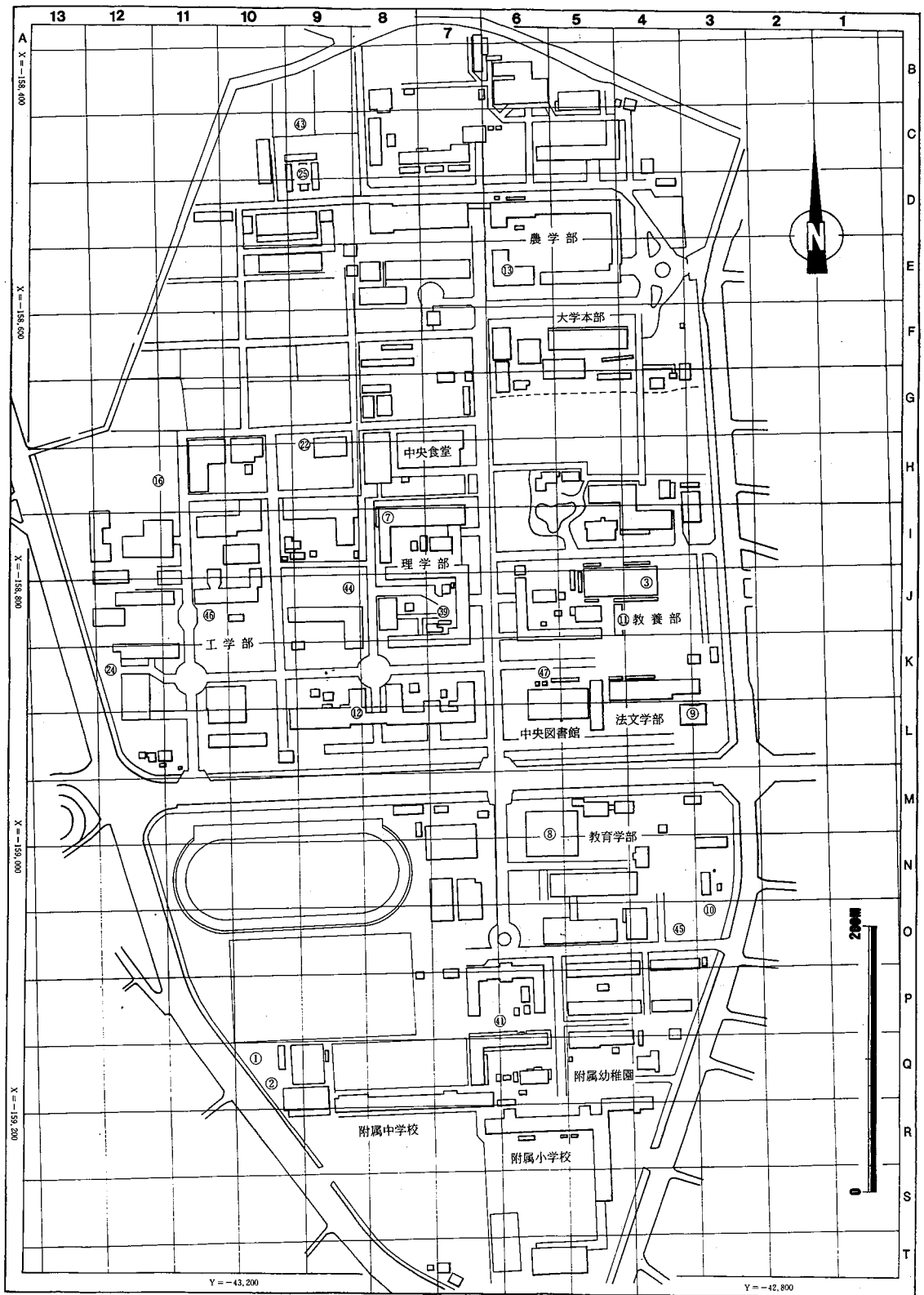
発掘調査位置は、昭和26年調査の県立医大住居址の東南方向約20mの位置にあたりとされている。当時、附属中学校敷地内に保存措置がとられたが、20年近い年月の中で風雨にさらされ原状をとどめていない。

(河口貞徳「原始古代編」『鹿児島市史I』鹿児島市史編纂委員会 昭和44年)

### 3 釘田遺跡 (釘田第1地点遺跡)

所在地 鹿児島市郡元一丁目21番30号 鹿児島大学教養部敷地内

調査期日 昭和50年4月28日～昭和50年7月5日



第2図 鹿児島大学郡元団地内遺跡分布図 (1/6000)



表1 鹿児島大学郡元団地内遺跡調査一覧

番号	調査年月日	遺跡名・調査地名	担当者	調査の種類	面積	遺構	遺物	文献	構座内標	備考
1	昭和26年 3月20日～ 4月5日	県立 医大遺跡	河口貞徳	学術	14㎡	円形住居址	古墳(成川式・須恵器)	鹿児島県考古学会紀要第2号 鹿児島のおいたち	Q-10 区	小字高田 教育学部グラウンド
2	昭和38年 4月～5月	附属中敷地内	河口貞徳	学術		隈丸方形住居址	古墳(成川式)	鹿児島市史I	Q-10 区	小字高田 附属中体育館西側
3	昭和50年 4月28日～ 7月5日	釘田遺跡 (教養部校舎地)	平田信芳 中村耕治 吉永正史	全面	360㎡	住居址(30)・溝	弥生・古墳(成川式・須恵器・土師器・丹塗高坏)・砥石・軽石加工品		J-4 区	小字釘田 (久木田) 釘田第1地点
4	昭和50年 6月20日	荒田キャンパス	平田信芳 出口浩	分布調査						
5	昭和50年 9月17日～ 9月24日	理学部・教養部・工学部・教育学部	平田信芳 出口浩	試掘	各10㎡を数カ所		理学部・古墳(成川式) 教養部・古墳(成川式) 工学部・近代側溝			
6	昭和51年 1月	理学部2号館増築予定地	県文化課	試掘						小字江夏町・塩焼
7	昭和51年 5月17日～ 12月3日	理学部2号館増築予定地	平田信芳 新東晃一 池畑耕一 池崎譲二 西田茂	全面	1000㎡	住居址・杭列	縄文(前期深浦式) 弥生(前・中期) 古墳(成川式・須恵器) 有肩石斧・石包丁・砥石・軽石加工品・紡錘車・土製勾玉・小玉・木製品(土器は完形品多数)		I-8 区	小字江夏町・塩焼 釘田第8地点
8	昭和53年 7月10日～ 8月28日	教育学部第2体育館予定地	戸崎勝洋 吉永正史	試掘	142㎡		縄文(晩期夜臼式) 弥生(中期)・土師器・須恵器		M・N -5・ 6区	小字板変 釘田第6地点
9	昭和54年 5月21日～ 5月24日	法文学部講義室	吉永正史 青崎和憲	試掘	40㎡		縄文(晩期夜臼式) 古墳(成川式)		L-3 ・4区	小字釘田(久木田)釘田第5地点(釘田第3地点の誤認か?)
10	昭和54年 5月23日～ 5月24日	教育学部校舎	吉永正史 青崎和憲	試掘	27㎡	溝	土器		O-3 区	釘田第7地点

番号	調査年月日	遺跡名・調査地名	担当者	調査の種類	面積	遺構	遺物	文献	権座	内標	備考
11	昭和54年	教養部講義室	県文化課	試掘	18㎡		弥生				小字釘田(久木田)釘田第2地点
12	昭和54年	教養部講義室	県文化課	試掘	49㎡	用水路					小字江夏町・釘田第4地点
13	昭和54年	農学部研究棟	県文化課	試掘	45㎡				E-6区		旧荒田村・釘田第5地点
14	昭和54年	理学部実験研究棟	県文化課	試掘	40㎡		弥生				小字塩焼・釘田第9地点?
15	昭和54年	電算機センター	県文化課	試掘	36㎡						
16	昭和55年 7月21日～ 8月9日	工学部機械工学科校舎建設予定地	池畑耕一 中島哲郎	全面	260㎡	溝(古墳～近代)	古墳(成川式)・土師器・須恵器・青磁・染付・備前焼			H-12区	小字江夏町
17	昭和55年 7月21日～ 8月9日	教育学部	池畑耕一 中島哲郎	試掘	16㎡	中世水田・溝	古墳(成川式)・青磁				小字宮田・板交
18	昭和58年 3月25日	工学部実験工場	上村俊雄	立合	8㎡						小字溝添
19	昭和58年 3月29日	農学部獣医学科建設予定地(2号館)	上村俊雄 本田道輝	立合	16㎡						旧荒田村
20	昭和58年 6月	農学部獣医学科建設予定地	上村俊雄	立合							旧荒田村
21	昭和58年 6月	農学部家畜病院	上村俊雄 本田道輝	立合	8㎡						旧荒田村
22	昭和58年 8月8日～ 9月3日	電子計算機室	池畑耕一 吉永正史	全面	600㎡	水田(古墳～古代)・溝	古墳(成川式)・土師器・須恵器			G・H-9区	小字塩焼
23	昭和58年 12月1日～ 12月8日	理学部車庫建設予定地	上村俊雄 本田道輝	試掘	6㎡		縄文(前期)・弥生(前中期)・古墳(成川式)			J-7区	小字江夏町



番号	調査年月日	遺跡名・調査地名	担当者	調査の種類	面積	遺構	遺物	文献	構座内標	備考
24	昭和58年 12月19日～ 12月28日	工学部危険 物薬品庫改 築工事予定 地	上村俊雄	全 面	36㎡	水田 (古墳・ 古墳・ 奈良) ・足跡	古墳 (成川式)・ 須恵器・青磁・染 付・双孔棒状土錘	神川堤第 1地点遺 跡 (工学 部発掘調 査報告 書) 昭和 60年3月	K-12 区	小字神川堤
25	昭和58年 12月19日～ 12月28日	農学部温室 建替え予定 地	本田道輝	試 掘	18㎡	溝・土 壌・ピ ット・ 水田 (室 町以前)	中世陶器・古銭		C. D - 9区	旧荒田村 栽培育種実 験用施設ガ ラス室新設
26	昭和59年 1月6日～ 1月8日	教養部駐車 場東側歩道 舗装工事	上村俊雄 新田栄治 本田道輝	立 合						小字釘田 (久木田)
27	昭和59年 1月18日	電子計算機 室横道路マ ンホール工 事	上村俊雄	立 合						小字塩焼
28	昭和59年 1月26日	農学部獣医 学科 (2号 棟) 校舎・ 新営側溝工 事	上村俊雄	立 合						旧荒田村
29	昭和59年 2月1日～ 2月4日	農学部獣医 学科 (2号 棟) 校舎・ 新営電気工 事	本田道輝	立 合						旧荒田村
30	昭和59年 2月6日～ 2月7日	農学部ガス 工事	上村俊雄	立 合						旧荒田村
31	昭和59年 2月 6・7・9日	電算施設給 水工事	上村俊雄	立 合						小字塩焼
32	昭和59年 2月 6・8・9日	農学部給水 工事	上村俊雄	立 合						旧荒田村
33	昭和59年 2月8日～ 2月10日	農学部電気 工事	上村俊雄	立 合						旧荒田村
34	昭和59年 2月6日～ 8日・10・ 11日	電算施設電 気工事	本田道輝	立 合						小字塩焼
35	昭和59年 2月7日	工学部給水 工事	上村俊雄	立 合						小字江夏町
36	昭和59年 5月30日	農学部附属 農場入来牧 場	上村俊雄	分 布	21.100 ㎡		縄文・石斧・石鏃 ・黒曜石			薩摩郡入来 町
37	昭和59年 8月13日～ 8月末	教養部電気 工事	上村俊雄	立 合	30㎡					小字釘田 (久木田)

番号	調査年月日	遺跡名・調査地名	担当者	調査の種類	面積	遺構	遺物	文献	構座内標	備考
38	昭和59年 10月	農学部胸像 建立予定地	本田道輝	立合						旧荒田村
39	昭和59年 11月6日～ 12月7日	理学部車庫 建設予定地	本田道輝	全面	66㎡	ピット ・溝 (古墳 時代集 落の一部)	縄文(前期)・弥 生(前・中期)・ 古墳(成川式・須 恵器)・石斧・磨 製石鏃・軽石加工 品		J-7 区	小字江夏町
40	昭和59年 11月13日	工学部・理 学部中間道 路電気ケー ブル工事	上村俊雄	立合						小字江夏町
41	昭和59年 11月19日～ 昭和60年 3月末	教育学部校 舎棟建設予 定地(水町 第1地点)	上村俊雄 本田道輝	全面	400 ㎡	水田・ 溝・足 跡・牛 のひず めの跡 ・人の 足跡	弥生(中期)・古 墳(成川式)・奈 良・平安・中世 (須恵器・青磁) ・勾玉		P-7 ・6区	小字水町
42	昭和60年 2月6日～ 3月27日	附属図書館 前庭環境整 備工事	上村俊雄	立合						小字釘田 (久木田)
43	昭和60年 3月5日～ 3月26日	農学部園芸 学科実験温 室および網 室新設予定 地	本田道輝	試掘	80㎡				B・C -9区	旧荒田村
44	昭和60年 6月17日～ 10月5日	I・J-9 ・10区	鹿児島大 学埋蔵文 化財調査 室	全面	約500 ㎡	方形住 居址・ 溝	成川式土器			理学部1号 館増築に伴 う事前調査
45	昭和60年 6月24日～ 6月28日	O-3・4 区	鹿児島大 学埋蔵文 化財調査 室	試掘	4㎡					福利厚生施 設(食堂) 新設に伴う 事前調査
46	昭和60年 10月17日	J-11区	鹿児島大 学埋蔵文 化財調査 室	立合						建柱作業に 伴う立合調 査
47	昭和60年 11月28日	K-6区	鹿児島大 学埋蔵文 化財調査 室	立合						高圧電線管 付け替え工 事に対する 立合調査





第3图 鹿兒島大学宿团地内遺跡分布图



表2 鹿児島大学宇宿団地内遺跡調査一覧

表採地点	表採期日	担当者	表採から得られた所見
A	昭和45～46年	中間 研志 本田 道輝 他	大部分が荒地・雑木林であったが、畑には弥生中期土器破片がみられる箇所もあった。
B			曾畑式土器や弥生前期土器が表採されている。D・H地点の次に遺物の散布が多い。
C			縄文早・前期土器が採集されている。
D			前平式土器をはじめとする遺物が多数認められた。石斧も採集されている。
E			所屬時期は不明であるが、土器片の散布が認められた。
F			塞ノ神式土器・弥生土器等が採集されている。
G			塞ノ神式土器包含層を確認。
H			弥生前・中期土器が多数採集されている。この他に指宿式土器・石鏃・石斧・磨石・古銭（洪武通宝）等が採集されている。
①	昭和60年 7月24日	埋蔵文化財調査室 (上村俊雄・中園 聡)	縄文早・前期土器を採集

調査主体 鹿児島大学

調査指導 河口貞徳（鹿児島県文化財専門員）

調査担当者 平田信芳（県文化課主任文化財研究員） 中村耕治（県文化課主事） 吉永正史（県文化課文化財研究員 5月21日より参加）

(1) 調査までの経過

昭和50年4月2日、鹿児島大学教養部校舎増築の基礎工事現場において、土器片が出土しているのを鹿児島大学考古学研究会の学生達が発見し、鹿児島大学当局に知らせた。このため鹿児島大学は鹿児島県教育委員会に確認調査を依頼した。鹿児島県教育委員会は昭和50年4月10日、戸崎勝洋（県文化課文化財研究員）牛ノ浜修（県文化課主事）による確認調査を行い、校舎増築工事区域360㎡の全面調査が必要とみなした。鹿児島大学は鹿児島県教育委員会と協議の上、緊急調査を鹿児島県教育委員会に委嘱し、文化課職員2名、5月21日以降は3名が緊急調査を実施した。教養部の校舎に沿って、5m単位のグリッドを組み、校舎増築予定地の360㎡を完掘した。

(2) 調査概要

遺跡地は、鹿児島市郡元一丁目21番30号（住居表示変更以前は鹿児島市鴨池町201番地、明治中期以前は鹿児島郡中村字釘田）の鹿児島大学教養部敷地内にあり、直線距離で一宮遺跡より約800m、県立医大遺跡より約600mの位置にある。また海拔6mの沖積地で、弥生時代から古墳時代にかけての海岸線に近かったと推測される。

遺跡の層位は、Ⅰ層灰褐色砂質土、Ⅱ層黄褐色砂質土、Ⅲ層茶褐色土（Ⅱ・Ⅲ層は旧水田の

基盤とみなされる), IV層黒褐色粘質土, V層黒色粘質土, VI層黄褐色砂層となっており, 地表下1m~1.6mの第IV層が遺物包含層である。

第IV層上部は, 成川式土器・土師器の小破片および軽石礫が全面にびっしりつまった状態で出土し, 須恵器・丹塗高杯の破片が点在する。第IV層下部になると, 土器破片も大型化し, 完形土器が多く出土する。

第V層上部で住居址のプランが確認され, 重複した住居址30を検出した。さらに住居址の中には, 二度使用した痕跡が認められるものもある。また住居址群の中央を幅約60cm深さ約40cmのU字状溝が掘られている。

この遺跡の性格を要約すると, 次のとおりであり, 貴重な遺跡といえる。

- ① 30の住居址が重なりあっている複合住居址群であり, その切り合いから新旧関係を推定できると同時に, かなり長期間の集落址を想定できる。
- ② 住居址内に完形土器の出土が多く, 住居址の新旧関係を基準として, 成川式土器, 土師器, 須恵器の編年を考察することができる。
- ③ 丹塗高杯の出土が多く(約200点), その祭祀的性格を検討する上で貴重な資料となる。
- ④ この遺跡は, 調査地点より, 四方にひろがるものと考えられる。

### (3) 出土遺物の取り扱い

出土した遺物は, 定められた手続きにより届出をされたい。さらに埋蔵文化財の保管と活用に関する基本方針に従って, 鹿児島大学に展示, 収蔵施設を整備され, 研究の資料として活用できるよう配慮されたい。

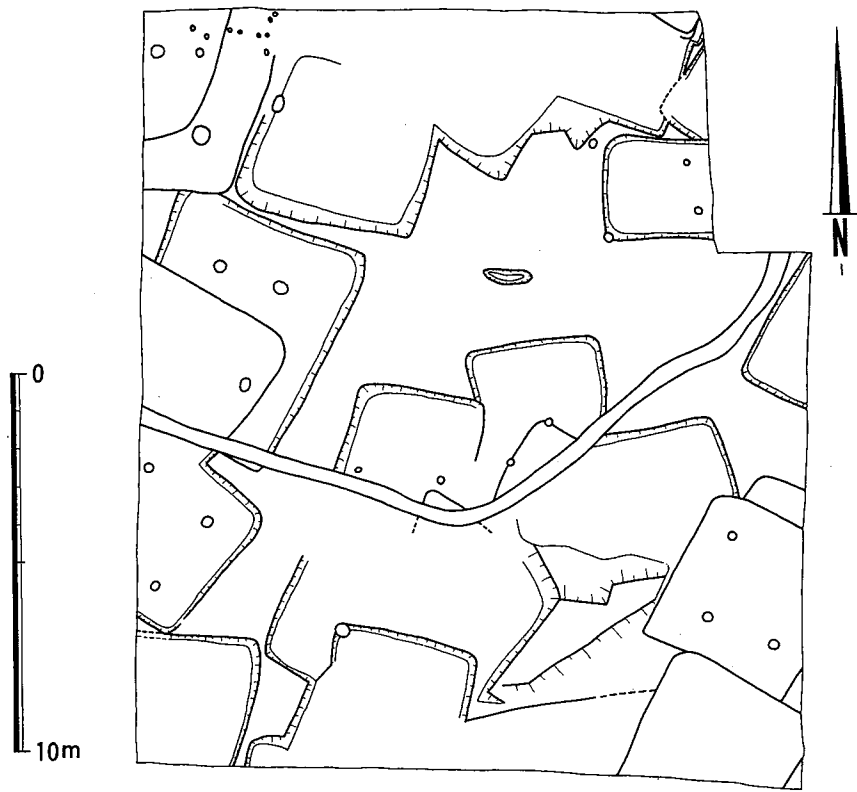
#### (出土遺物)

成川式土器・土師器   ダンボール箱 70箱,                   須恵器   パンケース 1箱,  
丹塗高杯   約200点,                   てづくね土器 4点,                   砥石 7点,  
軽石加工品   4点(線刻などがみられるものが4点で, 磨った状態のものは多数),  
凹み石 4点,                   棒状叩き石 1点,                   黒曜石片 3点,

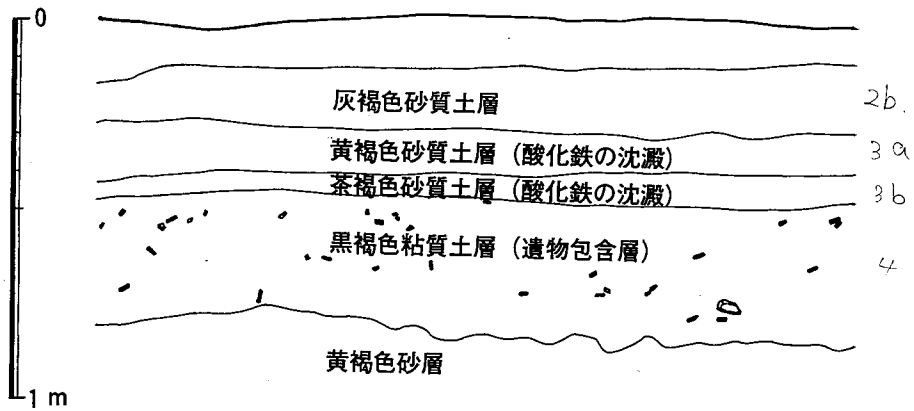
### (4) 分布調査(遺跡の範囲)

昭和27年刊行の「鹿児島県考古学会紀要」第2号所載の鹿児島県遺跡地名表に「鹿児島高農遺跡」の名があげられており, 研究者には知られていた遺跡地であったが, その範囲は不明確であった(鹿児島高農の敷地が, 今日, 鹿児島大学となっている)。

雨天で作業不能の日を利用して, 鹿児島大学構内の分布調査を行い, 当遺跡を考察する一資料とすると共に, 遺跡のひろがりがある程度明確にする必要を感じて, 作成したものが添付した地図である。なお, 鹿児島大学考古学研究会の学生達に, 分布調査が基本であることを指導しておいたので, 分布調査時の見落しは, 彼らの調査によって補足されることになる。

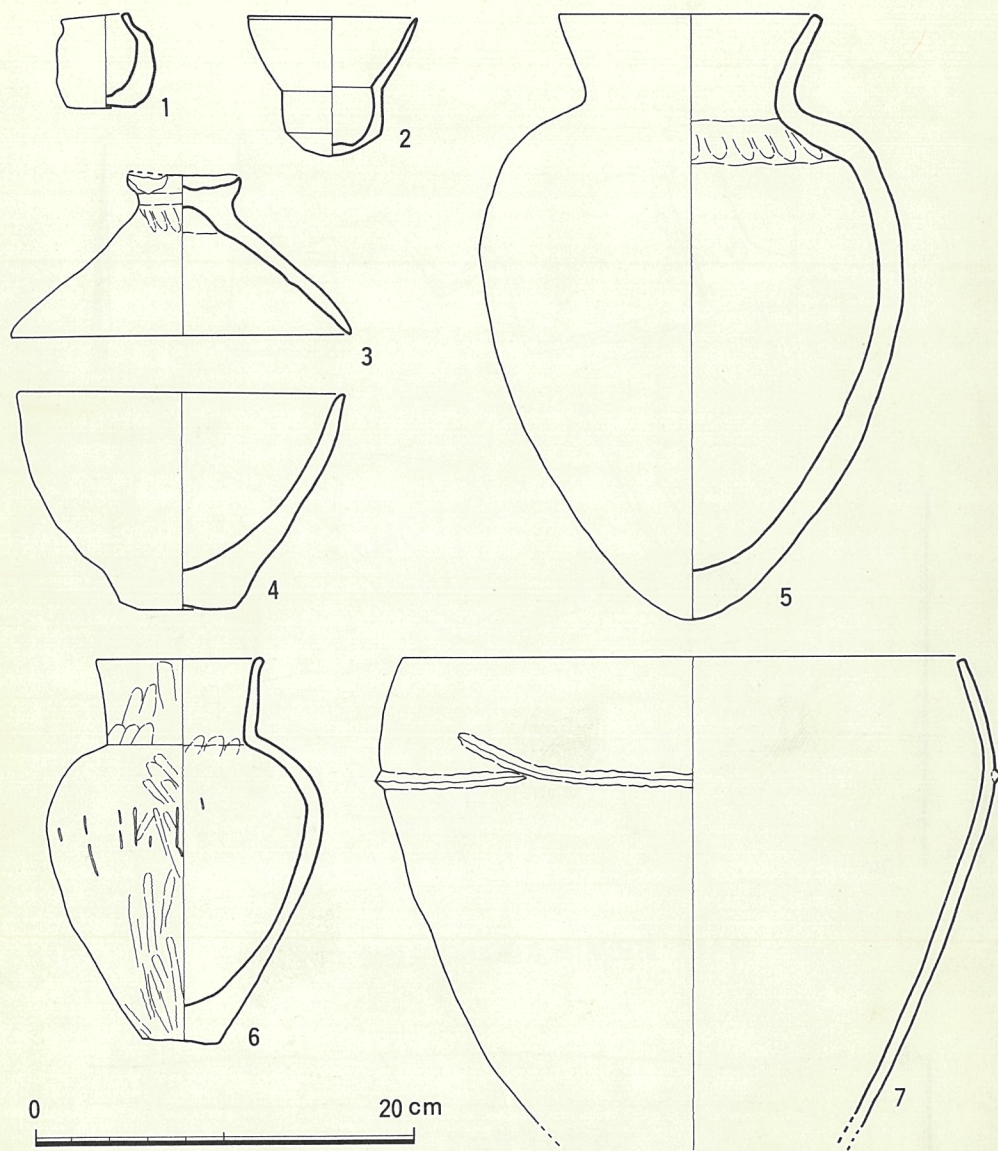


第4図 釘田第1地点遺跡検出住居址 (1/200)



第5図 釘田第1地点グリッド北壁実測図 (1/40)

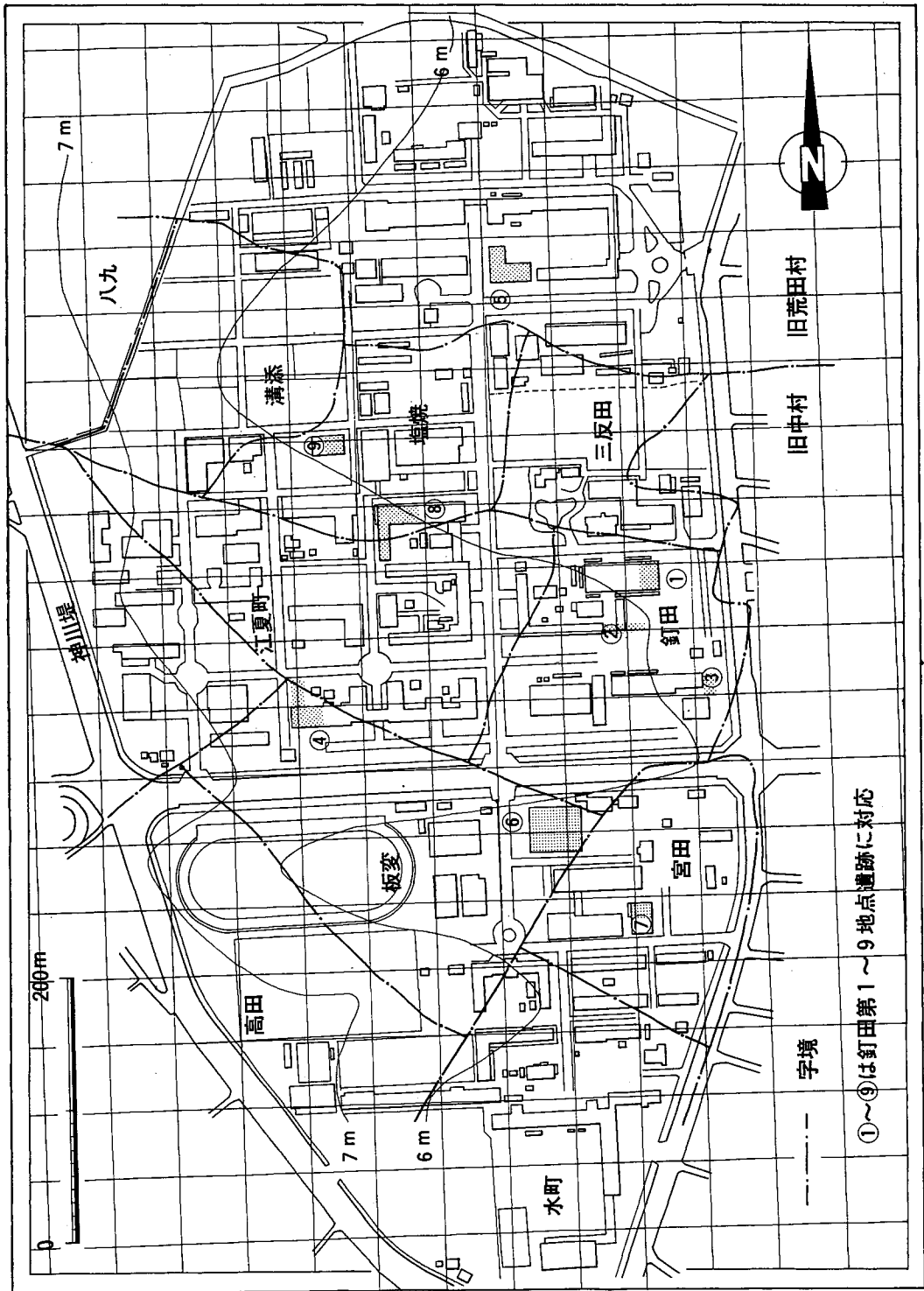




第6図 釘田第1地点遺跡出土土器（1／4）

小字「塩焼」・「釘田」・「江夏町」は随所に土器片の散布がみとめられ、一連の遺跡地とみなされる。また教育学部の敷地内も、土器片の散布がみとめられ、鹿児島大学のキャンパスは遺跡の上に立地しているようなものである。

当遺跡の隣接地に「塩焼」と云う小字名があることから、製塩と関連の深い海浜集落址が、明らかにされる可能性があり、また漠然と律令期の鹿児島郡衙の所在を示す郡元一帯の遺跡であるところから、郡衙成立の基盤をなす集落址をとらえる可能性もある。今回の調査はわずかな一部分をとらえただけであり、一の宮神社・中郡小学校・鹿児島大学にかけての地域内ではそれらが発見される可能性がある。



第7図 鹿児島大学郡元地構内地形図・字図 (1/5000)



#### 4 釘田遺跡 (釘田第8地点遺跡)

所在地 鹿児島市郡元一丁目21番35号 鹿児島大学理学部2号館敷地内

調査期日 昭和51年5月17日～昭和51年12月3日

調査主体 鹿児島大学

調査責任者 嶋元牧雄(鹿児島県教育庁文化課長)

調査指導 稲田孝司(文化庁技官) 河口貞徳(県文化財審議員)

調査担当者 平田信芳(県文化課主任文化財研究員) 吉永正史(県文化課文化財研究員) 池畑耕一(文化課主事 8月20日以前) 新東晃一(文化課主事 8月23日以降) 牛ノ浜修(文化課主事 木組遺構の実測に参加) 西田茂(文化財調査員 木組遺構の実測に参加) 池崎譲二(文化財調査員 8月5日より8月17日まで)

##### (1) 調査までの経過

昭和50年、釘田遺跡の調査に際し、遺跡の存在が明らかとなり、校舎増築工事予定地であるため、鹿児島大学は、鹿児島県教育委員会と協議の上、事前調査を鹿児島県教育委員会に委嘱した。釘田遺跡第1地点(鹿児島大学教養部)調査時に設定した5m単位のグリッドを延長拡大し、B・C・D・E・F・G・H・I・J・43・44・45・46・47・48・49区内の1000m<sup>2</sup>について、発掘を行った。調査成果を高めるために、多角的分野から分析検討をすすめることとなり、各担当が決まった。

三好教夫教授(岡山理科大学 花粉分析) 露木利貞教授(鹿児島大学 地質学)  
米谷静二教授(鹿児島大学 地理学) 品川昭夫教授(鹿児島大学 土壌学)  
有隅健一教授(鹿児島大学 植生分析) 迫 静男講師(鹿児島大学 植生分析)

##### (2) 調査概要

調査地点は、鹿児島市郡元一丁目21番35号の鹿児島大学理学部敷地内にあり、釘田遺跡第1地点の西、200mの位置になる。海拔6mの沖積地で、弥生時代から古墳時代にかけての海岸線に近かったと推測される。

遺跡の層位は、Ⅰ層灰褐色砂質土、Ⅱ層黄褐色砂質土、Ⅲ層茶褐色土で、Ⅱ、Ⅲ層が旧水田の基盤であることは、第1地点と同様であるが第1地点の遺物包含層であるⅣ層黒褐色粘質土は、発掘地点の南端に若干残るのみで、大半は河床および氾濫原を示す軽石混じりの砂層である。Ⅳ層においては、大半が破壊されていたが、第1地点と類似した住居跡を2基検出することが出来、川に面した集落の存在を推定できる。地表下1.2m～3.5mの河床および氾濫原を示す砂層中には、弥生後期の成川式土器が濃密に包含されている。発掘地点東北部に上端幅1.2m・基底部幅3m・長さ15mの堰とみられる木組遺構が検出された。地表下2.5m～3.0mに、その下部遺構は良好な状態で残存していたが、上部構造は、成川期終末の洪水ですべて切られていた。しかし杭用材は鋭利な鉄製品で切った形がなまなましく残存し、茅(?)を杭列の間



にサンドイッチ状に詰めこみ、さらに竹で編んだアンペラで茅を抑えるなどの技術をうかがい知ることができた。以下この遺跡の特徴を要約する。

- ① 自然の河川ばかりでなく、人工の加わった水路を捕捉できたことにより、これを拠点にして、古代の集落・水田等の生産の場を追求することが可能となった。杭列は、現時点では延長を追求することは不能であるが、西北、東南の両方向にその延長が推測できる。
- ② 旧石器時代の遺物は出土していないが、縄文前期以降各時代の遺物が出土し、縄文期の遺跡も近くに存在することを示唆する。
- ③ 成川期の土器が完全な形で数多く出土し、その編年を細かく考察する貴重な資料となる。とくに成川期の終末には、5・6世紀の須恵器を伴うことが、第1地点、第8地点の調査で明確になった。
- ④ この遺跡は、調査地点より四方にさらにひろがる広大な遺跡である。

(出土遺物)

縄文式土器片 約50片, 弥生式土器(前期・中期) ダンボール箱 3箱,  
成川式土器 完全なもの 約200点, 完形に復元できるもの 約800点, 破片  
ダンボール箱 約300箱, 須恵器 パンケース 5箱, 打製有肩石斧  
1点, 磨製石庖丁 1点, 紡錘車 1点, 土製勾玉 1点,  
土製小玉 1点, 軽石加工品 若干, 砥石 若干, 杭用材  
365本, 木製品(農具・矢板等) 7点, 木の葉(タブ, カシテック  
イetc) 多数, 木の実類(チャンチンモドキ 2点, クルミ 1点,  
ドングリ 若干, ひょうたん 1点, まつかさ 1点, さる  
のこしかけ 2点) 風倒木の樹根 11本, うち1本は分析の結果, タブと判明,  
他は分析依頼中。

### (3) その他

#### ① 遺跡名について

遺跡地の小字名によって遺跡の名称を付けるのが通例であるが、隣接した一連の遺跡に別の小字名を付けるのは、かえって混乱を招くので、当初手がけた釘田で代表させることにした。しかし、鹿児島大学の構内は、江戸、明治期の三村にまたがる規模であり、釘田ひとつで代表させることも問題である。したがって、旧郡元村、旧中村、旧荒田村を単位として遺跡名を区別した方がよいであろう。釘田遺跡は旧中村に位置する。なお第8地点としたのは昭和50年9月に、校舎建築予定地8カ所の予備調査を行った際、既調査の教養部を第1地点とし、以下一連番号を9地点まで付した折の、第8地点を便宜上付したものである。

#### ② 校舎建築と遺跡の保存について

既調査の鹿児島医専遺跡、付属中住居址および第1地点・第8地点の調査結果から、鹿児島大学のキャンパスは広大な遺跡の上に立地することが明らかになって来た。校舎を増築し、施

設を整えることも文化の向上に寄与することは判るが、やみくもに発掘調査、記録保存の手段を繰り返すことは学問の府として一考を要する問題である。今後組織的、計画的に範囲確認調査を行って、安全な校舎建築の範囲を確認する必要がある。万止むを得ず、記録保存の方法をとるにしても、全体的見通しの立たぬ中に、校舎建築のための発掘調査を単発的に繰り返すことは、虫喰い的な調査に終わってしまう危険性が大である。発掘調査は報告書をもって終了となる。第1地点・第8地点もその意味では調査は未完の状態である。今後記録保存の調査をするにしても、第1地点・第8地点の調査結果を踏まえた上で、とりくまなければならないと考える。第1地点・第8地点の出土遺物の整理は考えただけでも気の遠くなる分量であり、これを的確に処理することが最優先する課題である。

従来、数多くの鉄筋校舎の建築によって、知らずに遺構が破壊されていることも明瞭になったが、破壊されていない敷地の方がはるかに広い面積を占有している。従って、今後、塵捨場や下水道工事など小規模の掘り下げにあたっては、鹿児島大学構内においては、1.2m以上の掘り下げは遺物包含層に影響を及ぼすことを承知されたい。調査中こんな破片はどこを掘っても出るなどと、言われたりしたが、鹿児島大学構内のどこでも土器片が出て来ること自体が問題だと云える。

## 5 釘田遺跡（釘田第6地点遺跡）

所在地 鹿児島市鴨池町

調査期日 昭和53年7月10日～昭和53年8月28日

調査主体 鹿児島大学

調査責任者 谷崎哲夫（鹿児島県教育庁文化課長）

調査担当者 戸崎勝洋（県文化課文化財研究員） 吉永正史（県文化課文化財研究員）

### (1) 調査の経過

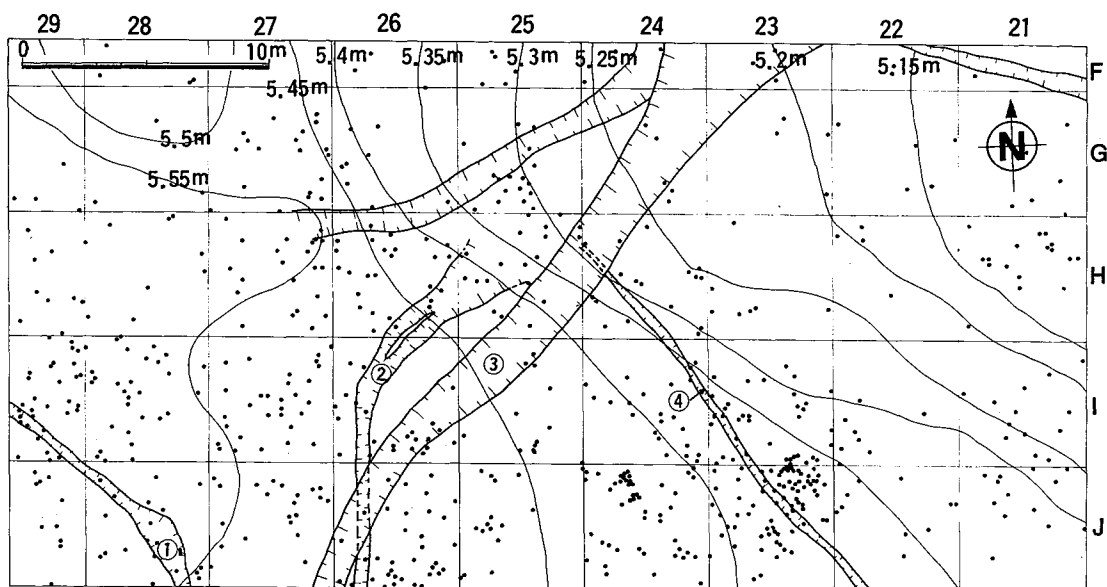
鹿児島大学構内は弥生時代～古墳時代にかけての遺跡として知られ、これまでに鹿大釘田第1地点（昭和50年5月～7月）、同第8地点（昭和51年6月～12月）の発掘調査が行われた。

今回調査の第6地点は昭和51年体育館建設予定に伴い試掘調査を実施し、遺跡の存在が確かめられていた。その後、大学と県文化課は調査開始について協議を重ねていたが、昭和53年7月に発掘調査を実施することとし、946㎡を発掘した。

### (2) 調査概要

グリッドは、鹿大釘田第1～第8地点を包括する鹿大全体のグリッド図に合わせ設定した。第6地点はF～J-21～29区となり、標高約6.7mを測り層位は以下のとおりである。

I層 灰褐色砂質層、 II層 灰褐色砂質層（酸化鉄混じりでやや濃い）、 III層 茶褐色層



第8図 釘田第6地点遺跡IV a層出土土器分布図  
(1/300)

(酸化鉄混じり), IV a層 灰褐色粘質層  
(酸化鉄混じり), IV b層 灰褐色粘質土,  
V層 黒色土層, VI a層 黒色土層(軽石  
混じり), VI b層 灰白色土層(軽石混じ  
り), VII層 砂層, このうち遺物包含層は  
IV a層であるがIV b層にも若干出土する。

(遺構と遺物)

遺構はIV層からの落ち込みの溝状遺構が5  
条検出された。このうち③は巾が約1~2  
m, 深さ約10cmの溝状遺溝で, 砂が埋土とな  
り北東より南西に走るものである。溝は浅く  
遺物は発見されなかった。①・②・③・④は  
巾50cm内外, 深さ10cmくらいのもので③同様  
に砂が堆積していた。遺物はIV a層を主体に  
出土するが, 若干その前後層にも出土する。

土器は弥生式土器(弥生中期該当の口縁  
部), 成川式土器, 土師器(坏), 須恵器片, 縄文晩期(夜臼式該当)である。このうち須恵器  
を模した土師質の蓋と手づくね土器は注目されたが, 須恵器と成川式土器の共伴関係は本地区  
では明確にされなかった。又, 出土土器は小破片が多く磨耗の著しいものが目立った。なお,  
これらの出土土器は図示するように南側にかけて濃密に分布する傾向を示す。

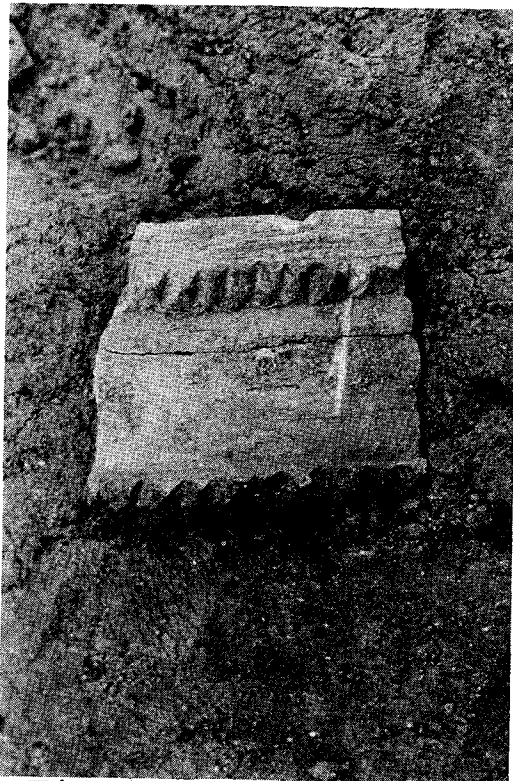


写真1 釘田第6地点遺跡出土夜臼式土器



## 6 釘田遺跡（釘田第5地点遺跡）

所在地 鹿児島市郡元一丁目  
調査期日 昭和54年5月21日～昭和54年5月23日  
調査主体 鹿児島大学  
調査責任者 山下典夫（鹿児島県教育庁文化課長）  
調査員 吉永正史（県文化課文化財研究員），青崎和憲（県文化課主事）

### (1) 調査の経過

鹿児島大学は、法文学部の新校舎増築工事に先立ち、事業の推進と文化財保護の調整のため県教委に遺跡の確認を求めた。そのため、次の要領で遺跡の確認調査を実施し、40m<sup>2</sup>を発掘した。

### (2) 調査の概要

#### ・トレンチの設定

トレンチは、鹿児島大学構内釘田第1～8地点を包括する全体のグリッドにあわせて、W-3区（2×4m）、W-5区（2×4m）、W-17区（3×4m）、S-17区（3×4m）の4カ所を設定した。

#### ・土層

土層は第Ⅰ層（表土）から第Ⅵ層（砂層で基盤）までであった。

第Ⅰ層 表土， 第Ⅱ層 灰褐色砂質層， 第Ⅲ層 茶褐色土層（Ⅲ層はⅢb層より酸化鉄を多く含む。）， 第Ⅳ層 暗茶褐色粘質土層， 第Ⅴ層 黒色粘質土層， 第Ⅵ層 茶褐色砂層， W-17区， S-17区では、埋設ケーブル等のため土層は一部攪乱されている。

#### ・遺物

遺物は第5層から成川式土器の小破片が散布状態で出土したが、量は少なかった。また、縄文時代晩期の夜臼式土器がW-3区の第Ⅳ層から出土した。

## 7 釘田遺跡（釘田第7地点遺跡）

所在地 鹿児島市郡元一丁目  
調査期日 昭和54年5月23日  
調査主体 鹿児島大学  
調査責任者 山下典夫（鹿児島県教育庁文化課長）  
調査担当者 吉永正史（県文化課文化財研究員），青崎和憲（県文化課主事）

### (1) 調査の経過

鹿児島大学は、教育学部の校舎改築工事に先立ち、事業の推進と文化財保護の調整のため県教委に遺跡の確認を求めた。そのため、次の要領で遺跡の確認調査を実施することとし27平方

メートルを発掘した。

## (2) 調査概要

### ・トレンチの設定

トレンチは、雑木等のため鹿児島大学構内釘田第1～第8地点を包括する全体のグリッドにあわせることができなかつたので、任意に3×3mのトレンチを3カ所設定した。

## (3) 土層

土層は第Ⅰ層（表土）から第Ⅵ層（砂層で基盤層）までであった。

第Ⅰ層 表土（耕作土）、第Ⅱ層 灰褐色砂質層、第Ⅲ層 茶褐色土層（Ⅲa層はⅢb層より酸化鉄を多く含む）、第Ⅳ層 暗茶褐色粘質土層、第Ⅴ層 黒色粘質土層、第Ⅵ層 茶褐色砂層

## (4) 遺物

遺物の散布はみられなかつた。

## 8 釘田遺跡

所在地 鹿児島市郡元町

調査期日 昭和55年7月21日～昭和55年8月9日

調査主体 鹿児島大学

調査責任者 山下典夫（鹿児島県教育庁文化課長）

調査担当者 池畑耕一（県文化課主事）、中島哲郎（県文化課文化財調査員）

### (1) 調査の経過

工学部の校舎新築工事に伴う試掘調査を5月に実施し、中世の溝を検出した。そのため、この溝に添って発掘区域を設定し、調査した。教育学部も校舎新築工事が計画され、鹿児島大学から県教委に調査を求められたので、工学部の調査を併行して発掘調査を実施した。

### (2) 工学部の調査

#### ・調査の概要

#### ① 溝3

20区あたりから7G区方面へ流れる幅約5m、深さ60cmの溝で、延長約26mを検出した。中央付近は幅80cmほど浅いくぼみになっており、西側は段がつく。埋土より土師器、須恵器、青磁、染付、備前焼きなど、中世の遺物が出土している。

## ② 溝3'

溝3とほぼ並行して流れる幅約1.5m、深さ40cmの溝である。時期ははっきりしないが、溝3より新しい。

## ③ 溝4

石垣のある溝で、西半分を検出した。部分的に石垣は壊されているが、裏込石が残っている。これは、戦後の航空写真にもある溝で、荒田方向へ流れている。

### (3) 教育学部の調査

#### ・調査の概要

調査は建設予定地内に、任意に起点を定め、南北方向を中心にしてL字形をとり、15m間隔で2m×2mのトレンチを4カ所設定した。

#### ・基本層序

I層 表土、II層 灰色で砂質土、III層 灰色でマンガン粒を多く含む、IV層 黄褐色で砂質、鉄分を含む、V層 灰褐色で砂質、マンガン粒を多く含む、VI層 黒褐色で硬質土、鉄分を含む、VII層 黒色で砂質、若干軽石を含む、VIII層 茶褐色で砂質、軽石を多く含む、IX層 若干軽石を含む砂質土、X層 赤褐色で砂質土、鉄分を含む、XI層 砂質土で細い。

以上のような層位が見られたが、VIII層以下は砂質で砂浜の様相を呈しており、何層にも重なる砂層独特の堆積がみられた。また、II層からVI層までは泥炭層を含む層序となっている。IV層に鉄分を含む黄褐色の砂質土があり、III層に青磁片が出土したことにより中世期の水田面と思われる。V層に成川式土器片が少量ではあるが包含されていた。VII～IX層の軽石を含む層は、当時、河川敷の一面ではないかと思われる。

#### ・調査の結果

① トレンチにおいては、比較的安定した堆積状況であったが、他ではV層以上がやや不鮮明であった。トレンチにおいては、切り込み上面ははっきりしないが、VI層まで切り込んだ溝状遺構と思われるものが2本検出できた。

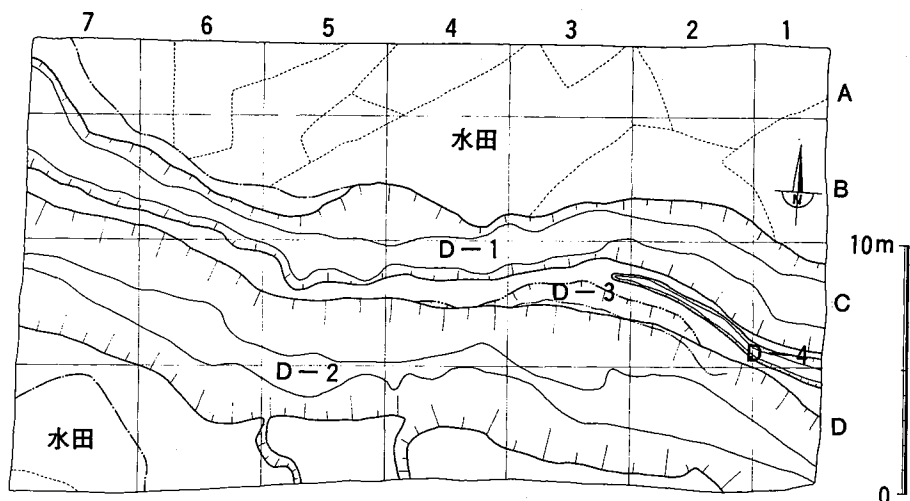
② 成川式土器の包含層が第V層に見られたが、包含層が薄く遺物も僅少だった。また、中世遺物等も出土しているが、ごく少量である。

### 9 釘田遺跡（鹿児島大学電子計算機室新築工事に伴う）

所在地 鹿児島市郡元町

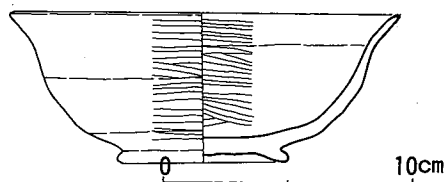
調査期間 昭和58年8月8日～昭和59年9月3日





第9図 釘田第9点（電子計算機室）遺跡検出遺構（1/300）

調査主体 鹿児島大学  
 調査担当者 吉永正史（県教育庁文化課 文化財研究員）、池畑耕一（県教育庁文化課 主事）



第10図 釘田第9地点（電子計算機室）D-2出土遺物（1/3）

(1) 調査の経過

鹿児島大学構内は以前から遺跡の存在が知られていたため、建物建築と併行して過去7回の埋蔵文化財発掘調査が実施されてきた。今回農学部実習地に電子計算機室の建設が予定されたため、事前調査を実施した。

(2) 層序

発掘地点は河川の氾濫あるいは溝の構築などによって部分的に層の分断などがあるが、調査できた部分では基本的に22層に分けることができる。この中には水田跡かと思われる層がみられたため、宮崎大学農学部へプラント・オパール定量分析を依頼した。下のほうから層の観察結果を記しておきたい。21・22層は黒褐色あるいは青灰色を呈する粘質をおびた砂層である。21層には軽石も多く含まれており、海岸線あるいは河口付近の様相を呈している。17～20層は黒色あるいは黄白色などを呈する粘土の層である。ヨシなどがはえていた低湿地の様相を呈している。13～16層は黄灰色あるいは白灰色を呈する砂層で14層のみが砂質粘土である。14層は低湿地であるが、他は河川の氾濫による砂の堆積と思われる。7～12層は白灰色、黒灰色などを呈する粘質砂あるいは粘土の層で、平安時代前期の溝がこれらの層を削っていることにより平安時代前期以前の層であり、一部を除き水田の跡と思われる。12層の年代は他地点との土層

比較や遺跡のつながり等からして古墳時代中頃と思われる。1～6層は灰褐色を主とする土で、上部は攪乱をうけている所もある。これらは平安時代以降の水田跡である。第9地点における22の層序は海岸の時期から沖積化による沼沢化、更には水田化への変遷を呈示しているものといえる。

### (3) 遺構

東西方向に流れる溝4本とこれに直交する溝1本、更に水田1面が検出された。

#### ・溝状遺構

##### ① D-1

1C区から7A・B区へ向かって流れる幅1.5m～3.5m、深さ0.4m～0.5mの溝である。埋土は最下層に砂が、その上に灰色粘質土があり、その上には灰褐色土(6層)が堆積している。層序からして溝状遺構2と相前後した時期のものである。

##### ② D-2

1D区から7B・C区へ向かって流れる幅4.5m～6m、深さ1m～1.2mの大きい溝である。下位に砂層が、中位の粘土層には木片、木の葉、昆虫の羽などが多く含まれていた。上位、下位の砂層中に土師器・内黒土師器などがあり、これらは平安時代前期のものである。

##### ③ D-3

D-2と重複しているため2～4C区だけに溝の北の肩が一部残っている。灰色を主とした砂質の土がはいっており、深さ0.7mを測る。D-2より古い。

##### ④ D-4

1C・D区から3C区へ続く溝で、3C区では浅くなっておりこの区以西には残存していない。灰白色の粘質土がはいっており、幅0.7m、深さ0.6mを測る。途中で白灰色粘質土(11層)がはいっており、古墳時代中頃の溝と思われる。

#### ・水田遺構

12層から上は一部を除きプラント・オパール定量分析によってイネの存在が確認された。12層の上にはシラスの2次堆積層(11層)がみられたので、これを排除し12層上面での水田面検出に努めた。溝に切られていたため残存部は少なく、約200m<sup>2</sup>のみが残っていた。

調査の結果、畦、溝、足跡などはつかめなかったが、レベル差45cmを測り、いくらかの高低差による地域割りをつかむことができた。

### (4) まとめ

第9地点は表面採集の結果、密な散布をしていたが、これは校舎建築の際、他地点からもちこまれた土の中にはいていたことがわかった。今回の調査ではほとんど遺物が出土せず、プラント・オパール定量分析の結果からしても水田が長期間にわたって営まれていたことが予測できる。この水田は湿田で数回の洪水によって壊滅的破壊もうけている。また平安時代頃には

その南半を川が流れたこともあった。今回は畦など視覚的に具体的な水田遺構をとらえられなかったが、今回までの調査結果から考え9地点から北のほう（農学部）には水田跡の広がっていることが予想されよう。

・鹿児島大学構内釘田第9地点遺跡におけるプラント・オパール定量分析結果(第11図・表3)

宮崎大学農学部 農作業管理学研究室

- (1) イネ (*Oryza sativa*) の生産量については、1 A地点・7 D地点ともほぼ同様の結果だったので、1 A地点について検討する。1層から12層までの間に大きく三つのピークが検出され、14層以前の層ではイネが検出されなかった。
- (2) 1層から5層に分布するピークは5層以降連続してイネが栽培されたことを示している。8層のピークは著しく大きく、水田というより、イネの収穫・調整に関連する場であった可能性もある。12層にあるピークは11層でイネが検出されなかったことからみて8層からの落ち込みではなく独立したピークと考えてよいことを示している。その量からみて水田層であろう。
- (3) 7 D地点の14層でイネが少量でているが、その量からみて、周辺からの混入ないしは試料のコンタミであろう。
- (4) 両地点で若干の違いがあるが、イネのピークが出る以前はヨシが圧倒的に多く、タケ亜科は少ない。イネが出始めるとヨシも減ることがわかる。このことから、ヨシの湿原を拓き開田された様子が伺える。

## 10 農学部温室建て替え予定地の試掘調査概要

鹿児島大学法文学部考古学研究室

本田道輝

農学部温室建て替え予定地の試掘調査を依頼され、昭和58年12月19日～12月28日（22日は雨天のため中止）の9日間調査を実施したのでその概要を報告する。

◦温室建て替え予定地域3地点に試掘トレンチを設定し調査を実施した。このうち1地点については、地層確認のため地表下-360cmまで掘り下げ、基盤と思われる砂層を検出した。地層は深掘り部で23層を数え、このうち第5層、第6層には浅い土拵・ピット・溝と思われる遺構が発見され若干の遺物が発見された。遺物は、古銭（洪武通宝）、陶磁器片であり、これらの遺物よりこの遺溝が歴史時代（中世）のものであることが判明した。また第19層から第21層は、木片、ドングリ、マツボックリ、草等を含みその遺存度は良好で、うち1点の木片は加工品の可能性がある。第2層以下は、藤原宏志助教授（宮崎大学農学部）に土壌分析を依頼しており、その結果によって遺物が検出されなかった層のうちにも、水田址と考えられる遺構が存在する可能性がある。

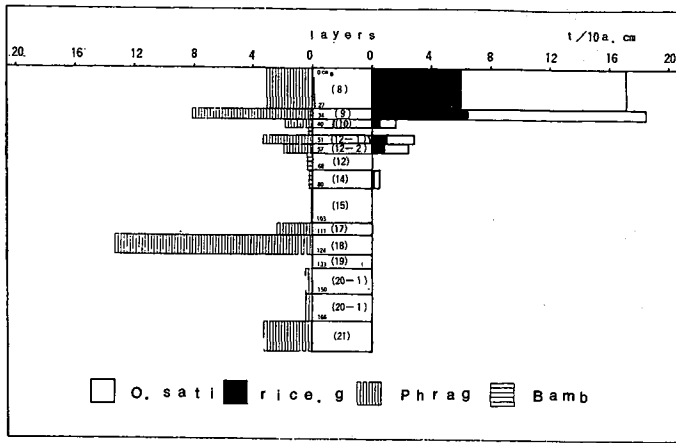


N o. 9-1A地点

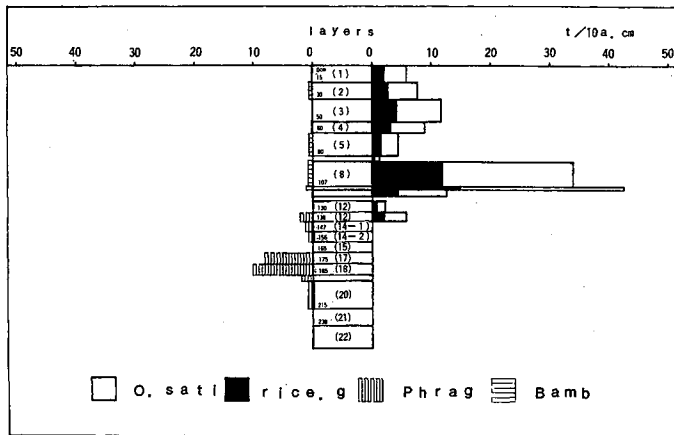
表 3 釘田第 9 地点遺跡プラント、オパール分析結果

N o. 9-7D地点

層名	N o. 9-1A地点				層名	N o. 9-7D地点			
	植物体乾重 ( t / 10 a. c m )					植物体乾重 ( t / 10 a. c m )			
	イネ (O.sati.)	イネ粃 (rice g.)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)		イネ (O.sati.)	イネ粃 (rice g.)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)
1	5.820	2.039	0.000	0.238	8	17.121	5.998	3.104	0.000
2	7.664	2.685	0.000	0.626	9	18.436	6.459	8.148	0.188
3	11.669	4.088	0.000	0.119	10	1.574	0.551	1.854	0.128
4	8.886	3.113	0.000	0.242	11	0.000	0.000	0.000	0.283
5	4.315	1.512	0.000	0.705	12-1	2.833	0.993	3.339	0.000
7	1.210	0.424	0.000	0.000	12-2	2.467	0.864	1.938	0.134
8	33.910	11.880	0.000	0.874	12	0.000	0.000	0.000	0.365
9	42.383	14.848	0.000	1.193	14	0.509	0.178	0.000	0.249
10	12.607	4.417	0.000	0.229	15	0.000	0.000	0.000	0.094
11	0.000	0.000	0.000	0.196	17	0.000	0.000	2.421	0.067
12	2.142	0.750	0.000	0.087	18	0.000	0.000	13.382	0.000
12	5.737	2.010	0.000	0.156	19	0.000	0.000	0.000	0.000
14-1	0.000	0.000	1.320	0.091	20-1	0.000	0.000	0.462	0.000
14-2	0.000	0.000	0.782	0.054	20-1	0.000	0.000	0.431	0.000
15	0.000	0.000	0.000	0.000	21	0.000	0.000	3.283	0.000
17	0.000	0.000	8.192	0.095					
18	0.000	0.000	10.256	0.178					
19	0.000	0.000	1.986	0.000					
20	0.000	0.000	0.825	0.000					
21	0.000	0.000	0.000	0.000					
22	0.000	0.000	0.000	0.000					



カダイ:No9-7D 8/17 '83



カダイ:No9-1A 8/17 '83

第11図 釘田第9地点遺跡プラントオパール分析結果

。農学部温室建て替え予定地は、地表下-100cm付近に中世の遺構が存在し、さらに地表下-250cm付近に遺存度の良好な植物を包含する層があり木器等の出土する可能性がある。また土壌分析の結果によっては、水田址が発見される可能性もある。よって温室建て替え以前に該当地域の全面発掘調査を実施することが必要である。 以 上

・調査結果

第1層 表土及び大学建設時の攪乱、 第2層～第4層 無遺物、 第5層～第6層 陶磁器、古銭（歴史時代・中世）、 第7層～第23層 無遺物層（ただし第21層出土の木片1点に加工の可能性のあるものあり）

以上の結果から見ると、第5・6層は歴史時代（中世）の遺物包含層であり、第7層上面で遺構も発見された。他の層は、1点の木片を除いて遺物は発見されていない。

藤原宏志助教授（宮崎大学農学部）から送付されたプラント・オパール定量分析結果の数値表と併せ考えると、歴史時代（中世）の遺構面より下部の第8・9層、第11層に水田もしくは何らかの稲作施設があったものと考えられる。これらは少なくとも歴史時代（室町時代）以前のものである。

## 11 工学部危険物薬品庫改築工事予定地の試掘調査報告

鹿児島大学法文学部考古学研究室

上 村 俊 雄

工学部の危険物薬品庫改築工事予定地の試掘調査を終了しましたので概要を報告します。

- ① 日時 昭和58年12月19日～12月28日
- ② 東西3.6m×南北10mのトレンチを設定した。深さは浅いところで1.8m、深いところで3m掘り下げた。層位は22層に分けられ、10層から古墳時代、9層から奈良時代、8層より上から中世（鎌倉～室町時代）の遺物が出土した。上記のいずれの層も稲作に関わりがあると見られるが、宮崎大学の藤原助教授にプラント・オパールの分析を依頼中であるので近日中に結果は判明するものと思われる。中世の遺構からは柱穴らしき遺構も検出された。
- ③ 工事予定地をほぼ全域にわたって試掘したので本調査の必要はないものと判断する。
- ④ 事業報告（試掘調査）を6カ月以内に提出するが、あわせて昭和59年度内に報告書を印刷発行し、記録保存することを条件に建築工事に着工することを認めるものとする。

以 上



・調査結果

第1層 表土（第三次攪乱層）， 第2層～第5層（第二次攪乱層）， 第6層～第8層  
第一次攪乱層（染付・青磁・土師器・成川式を包含）， 第9層 須恵器，土師器（奈良時代），  
第10層 成川式（古墳時代5世紀）， 第11層以下 無遺物層

以上の結果から見ると，第6層～第8層は中世（室町時代が主体），第9層が奈良時代，第10層が古墳時代と推定される。

藤原宏志助教授（宮崎大学農学部）から送付されたプラント・オパール定量分析結果の数値表と併せ考えると，古墳時代（5世紀）と奈良時代の2時期にまたがって水田経営が営まれていたものと考えられる。  
（上 村 俊 雄）

## 12 理学部公用車車庫建設予定地の発掘調査

本地域は一昨年2カ所にトレンチを入れて遺跡の有無を調査した結果，良好な遺物包含層が検出され，予定地全域を発掘調査することとなった。

調査は，昭和59年11月6日～同年12月7日（土・日を除く23日）に面積66㎡を対象に実施した。

### (1) 層 序

第1層 現代の攪乱層で50cm～1mの堆積があり，場所により深く掘り込まれている。

第2層 灰褐色砂質土層で2層に細分できる。共に5cm程の厚さで第1層の掘り込みによって部分的にしか存在しない。2a層を埋土とする2本の溝が検出されている。時期が明確でないが，中～近世の頃の層ではないかと思われる。

第3層 古墳時代の土器を包含する30cm～50cmの厚さをもつ黒褐色土層で鉄分を含み固い。1本の溝と多数のピットが検出されている。

以下は遺物を全く含まない砂層で，場所により地表下3m程掘り下げた。砂層は4層に分離したが細く分けることも可能でいずれも水成作用を受けている。

### (2) 遺 構

第2層を埋土とする並行する浅い溝状遺構2，第3層を埋土とする浅い溝状遺構1，同じく第3層を埋土とするピット群（浅いものが多い）

### (3) 遺 物

第2層で陶器片1点，第3層で古墳時代の土器片（須恵器を少量含む）多数，軽石加工品10数点，石器（石斧，磨製石鏃等）数点が出土している。なお第1，第3層で弥生前・中期土器片が比較的多く混出し，縄文前期土器片2点も存在する。

#### (4) まとめ

本地域は古墳時代集落址の一面と考えられ、その後中～近世頃(?)にも遺構が形成されている。混出した縄文・弥生土器から判断すれば、弥生中期中葉頃の遺跡が本地域から比較的近くに存在することが予想され、また縄文前期・弥生前期遺跡の存在の可能性(キャンパス内)もある。

・〈土壌分析〉 宮崎大学 藤原宏志先生所見

第Ⅱ層は水田層と考えられる

第Ⅲ層は水田とみるにはややプラント・オパール量が少なく水田近傍地とみるのが妥当である。

第3層を埋土とする浅い溝は、水田用排水路として利用された時期があることを伺わせる。

### 13 農学部園芸学科温室建設予定地の試掘調査概要

農学部園芸学科温室建設予定地内の遺跡確認のため試掘調査を依頼され、昭和60年3月6日～3月26日(土・日・雨天を除く12日間)調査を実施したのでその概要を報告する。

#### (1) 調査の経過

建設予定地は荒田キャンパス北西隅に位置し、かつて獣医学科の建物があり、現在は農場として利用されている。今回は便宜上建設予定地全域を2m方眼で区切り、東西線を東側より西側へA・B・C……W区、南北線を南側より北側へ1・2・3……22区とし、それらを合せて区域の名称として使用した。このうちA-1～3区、A-19～21区、L-8～10区、W-12～14区の5カ所60㎡を試掘箇所として選定し、トレンチを設定して調査を実施した。各トレンチは、建設予定地の南東・北東隅・中央部・南西・北西隅に位置することになる。A-1～3区ではコンクリート基礎が出土したA-1区を除いて地表下2m前後まで、一部は土層確認のため、3.5m前後まで掘り下げて調査をおこない、21層を確認した。A-19～21区は、地表2m前後まで、一部は土層確認のため3.3m前後まで掘り下げて調査をおこない、19層を確認した。L-8～10区では土管や水道管が検出された10区を除いて、地表下2.9m前後まで掘り下げて調査をおこない、14層を確認した。W-1～3区は地表下1.4m前後まで掘り下げて調査をおこない、7層を確認した。第7層上面では、足跡状の凹みが検出されるため、以下の掘り下げは中止した。W-12～14区は地表下1.1m前後まで掘り下げて調査をおこない、6層を確認した。第6層上面では多数のビットや土塚等が検出されたため、以下の掘り下げを中止した。なお、宮崎大学農学部藤原宏志助教授に水田土壌検出のためプラント・オパール分析をお願いし、A-2区及びA-19区まで土壌サンプルの採取を実施していただいた。

## (2) 各トレンチの土層と遺物・遺構

建設予定地の土層は、トレンチ毎にやや異なるが、おおよそ下部に粒子の荒い砂層と粘質土層が交互に堆積し、中部に灰色を基調とする砂質土層や粒子の細かい砂層が存在し、上部に獣医学科時期及びそれ以前の攪乱層と畑地にする際の盛土が認められている。中部以下は鉄分を含んだ層が多く、また砂層は流水作用による堆積と考えられる。A-1～3区は第1層～第5層(地表下1.1m前後)までが盛土および攪乱層である。第6層～第8層は灰色を基調とする砂質土層や粒子の細かい砂層からなり、これらの層には少量であるが中・近世の陶磁器片が包含され、第8層下面では浅い溝状遺構が検出された。第9層～第21層は砂層と粘質土層が交互に堆積し、その一部から植物遺体が検出されるが、その他の遺物の出土は認められない。A-19～21区は第1層・第2層(地表下80cm～2.1m前後)までが盛土および攪乱層であり、第2層(10層程に細分できる)時期に数回にわたって深く掘り込まれており(これらは獣医学科時期のゴミ穴と考えられる)、第10層までがその影響を受けて一部を残して消失している。第3・4層は灰色を基調とした砂質土層で、少量の中・近世の陶磁器片を包含する。第5層～第19層は砂層で粘質土層が交互に堆積し遺物は認められない。第7層の黒色粘質土層上面には小さな盛り上がりがあり2カ所認められ、藤原宏志助教授より水田の小畦の可能性があるとのお指摘を受けた。L-8～10区は第1層～第4層(地表下1.1m前後)までが盛土および攪乱層である。第5層～第10層は灰色を基調とした砂質土層で、中・近世の陶磁器片を少量包含し、第5層及び第9層下面で土拵が検出された。第11層～第13層は粒子の荒い砂層で形成され、第11層から土師器高台部の小片が1点出土している。第14層の黒色粘土層上面には畦状の盛り上がりがあるが認められる。W-1～3区は第1層～第3層(地表下1m前後)までが盛土および攪乱層である。第4層～第6層は灰色を基調とする砂質土層及び粒子の細かい砂層からなり、少量の中・近世の陶磁器片を包含する。第7層の淡灰色粘質土層上面には足跡状の小さな凹みが検出された。W-12～14区は第1層～第3層(地表下50cm前後)までが盛土および攪乱層である。第4層～第5層は灰色を基調とする砂質土層で、比較的多くの中・近世の陶磁器片や、鉄片、土錘等が出土し、第6層上面では第5層を埋土とする多数のピットや土拵等が検出された。

## (3) まとめ

温室建設予定地は、地表下50cm～1.1m前後に盛土や攪乱層が堆積し、その下位に中・近世の遺物を包含する地層が広がっている。この層は、その土質や色調から当時の水田である可能性が高く、遺物の少なさもそれによるものと考えられる。A-1～3区、L-8～10区の土拵や溝状遺構はそれに伴う何らかの施設と思われ、一方W-12～14区でのピットや土拵のあり方からみて、予定地北西部には遺物の存在が予想される。A-19～21区、L-8～10区では、さらにその下層で畦状の盛り上がり部分が検出され、分析結果を待たないと断言できないが、これも水田の可能性があり、地層から判断して古墳時代あるいはそれ以前のものと考えられる。調査結果から判断して、現在の計画での温室建設予定部分では基礎工事を地表下70cmまでにと



どめ、温室床面は地床またはいつでも除去できる程度の厚さにコンクリートをはることが必要である。また、網室・ガラス室建設予定部分のうち、北側半分と附属棟予定部分については、計画通り建設されれば遺跡の一部を破壊する恐れがあるため発掘調査が必要である。なお、計画を変更され今後の発掘調査の必要がない場合には、今回試掘調査分に関してその内容や意義が公表され一般に活用されることが望ましく、またそれは研究者の立場では義務づけられていることである。以上の点から速やかに遺跡調査報告書を刊行されることが望ましい。

昭和60年 3月29日

鹿児島大学法文学部考古学研究室 本 田 道 輝

## 第Ⅳ章 昭和60年度鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

### 1. 郡元団地 I・J-9・10区（理学部1号館増築地）の発掘調査報告

#### (1) 調査に至る経過と調査組織

鹿児島大学郡元団地は、鹿児島湾西側に広がるデルタ地帯のほぼ中央部にあたる標高5～7mの低平な土地に展開している。そして、この郡元団地中央部は西から東へとごくわずかではあるが高い部分を形成しており、この地域に現在理学部・教養部・中央図書館等が位置する。

鹿児島大学郡元団地では各時代の遺構・遺物が検出されているが、中でも古墳時代成川式土器の出土量は膨大な量に達する。特に理学部から教養部にかけての一带においては、昭和50年の教養部校舎増築地内（釘田第一地点遺跡）の発掘調査で住居址30軒が、また昭和51年には理学部2号館増築地（釘田第八地点遺跡）において住居址・河川・木杭列等が検出され、これらの遺構に伴って大量の成川式土器も出土している。このほか昭和59年には理学部車庫建設地の調査が行われ、成川式期の溝1条と性格不明のピット群が検出された。

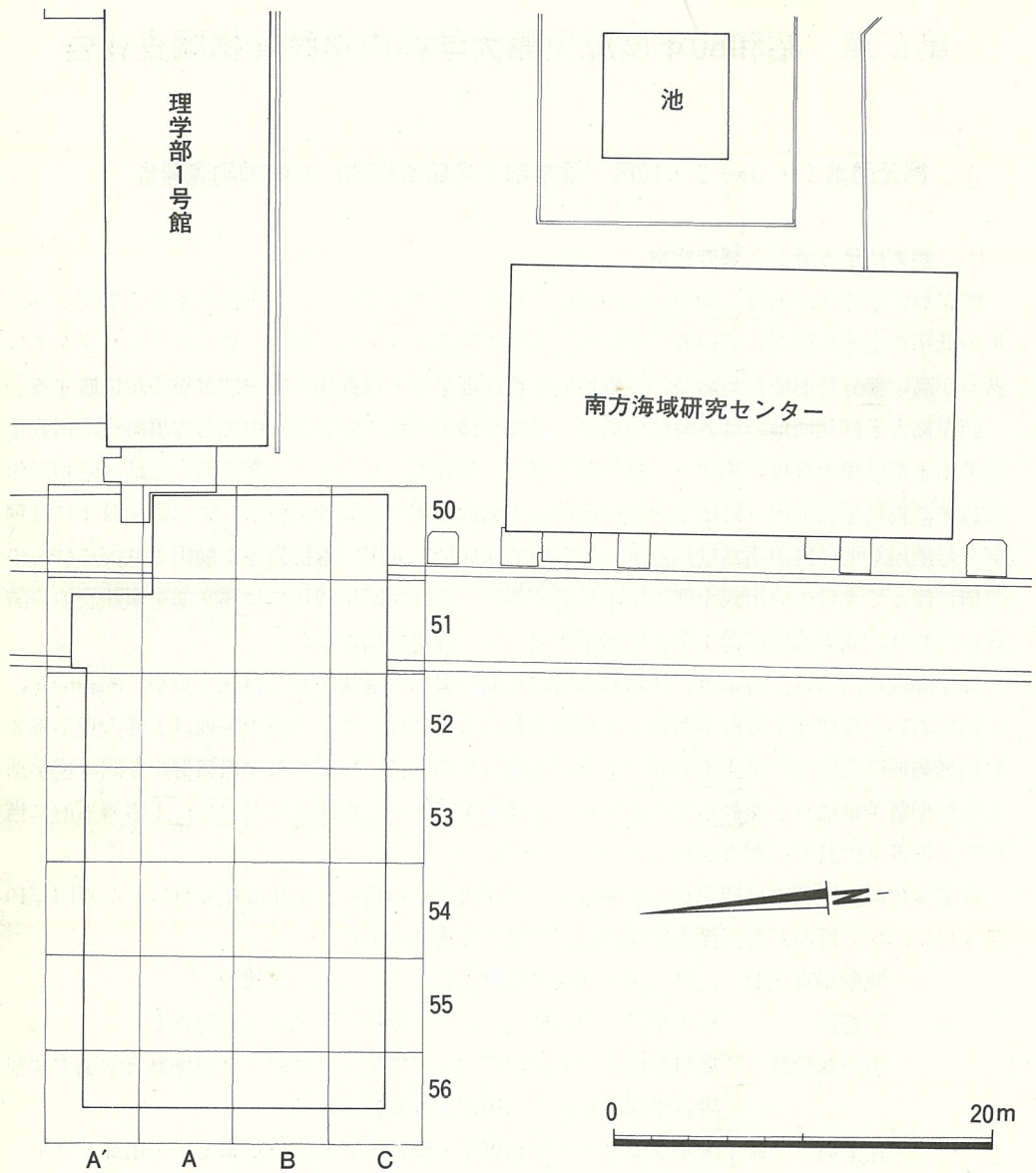
理学部敷地内にはこのように古墳時代成川式期の遺構・遺物が密に存在するが、昭和60年、当地において理学部1号館が西方へと増築されることになった。増築予定地は上述の理学部2号館増築地の西南方に接する位置にあり、昭和51年の調査で検出された遺構群が今回の理学部1号館増築予定地へと連続して存在することは確実であると推測されたため、工事着工前に当地域の埋蔵文化財発掘調査が行われることとなった。

埋蔵文化財発掘調査は鹿児島大学埋蔵文化財調査室が担当し、昭和60年6月17日から同年10月5日にかけて行われた。調査組織は以下のような構成である。

発掘調査全般	上村俊雄（埋蔵文化財調査室長・法文学部教授）
調査員	松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝（埋蔵文化財調査室）
調査補助員	奥村真由美・名於利真弓・中園聡・中村直子（鹿児島大学法文学部考古学研究室）・山田富美（筑波大学）
作業員	大平ツギエ・大平利恵子・岡崎カスミ・狩集エミ子・川畑ミヤ子・下野トキ子・東條フミ・名越ヒデ子・野口オスミ・野下セツ子・野下萬利子・野下ヨブ子・原口オワト・前田スガ・盛満アイ子・盛満ヨシ子・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子

#### (2) 発掘調査の経過

今回調査を行った地域は、鹿児島大学郡元団地に設定した一辺50mの方形地区割のうち、I・J-9・10区にわたる約500m<sup>2</sup>である。調査は昭和60年6月17日に開始され、同年10月5日

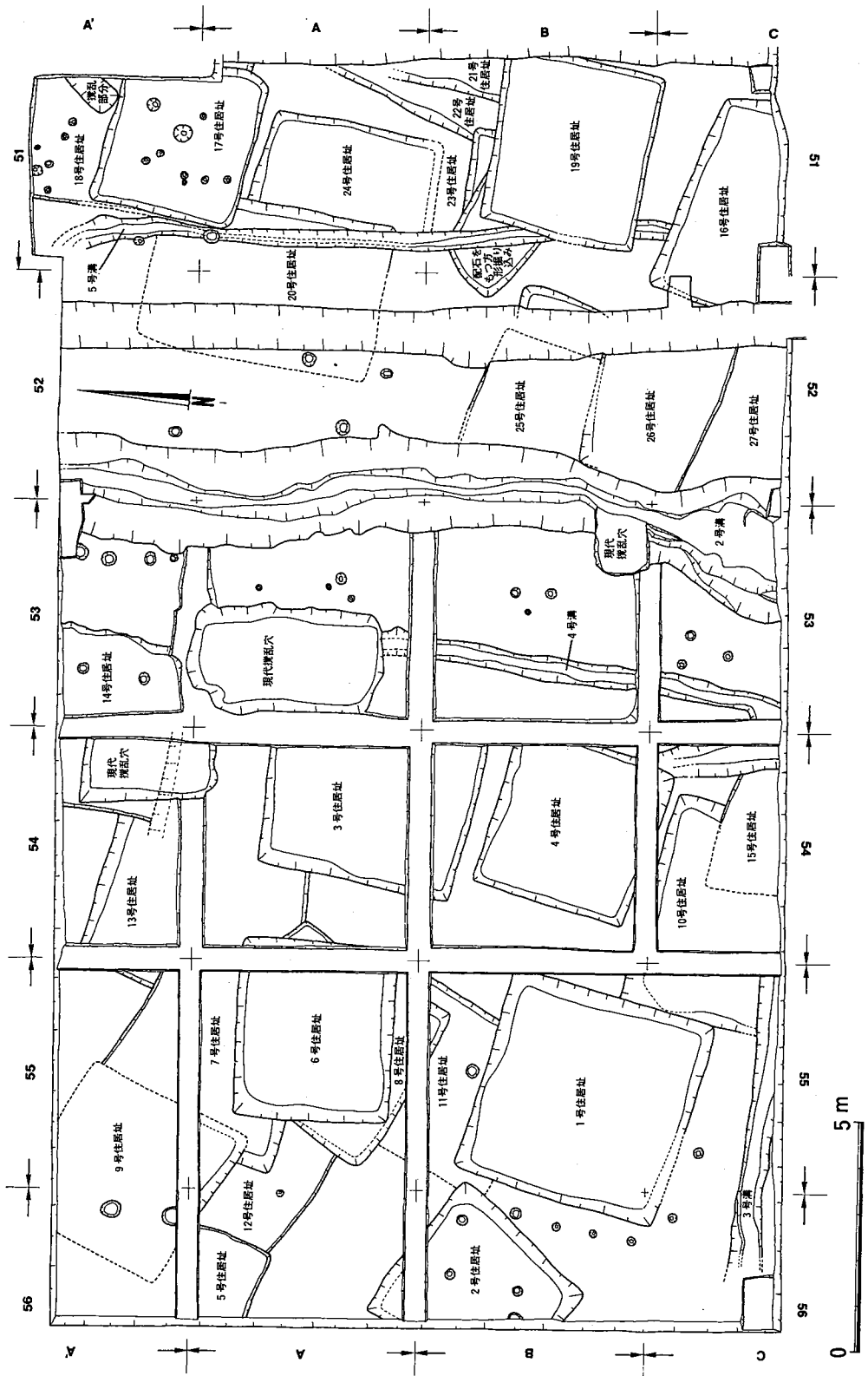


第12図 調査区位置図 (1/400)

まで行われた。

本調査区周辺においては、理学部2号館増築部分、及び理学部車庫建設地において調査がなされており、住居址・自然河川、及びそれに伴う杭列・ピット・溝等が検出されているのは前述の通りである。特に理学部2号館増築地において確認された住居址はその西南方に存在する今回の調査区へと展開することが予想された。そのため今回の調査においては理学部2号館増築地内の調査において用いられたグリッドを拡張・利用することとし、前回の調査成果との対応を容易ならしめることを目指した。その結果、本調査区においては東から西へ50・51・…・55





第13图 1·J-9·10区 検出遺構全体图 (1/100)

・56区、北から南へA'・A・B・C区のグリッドが設定されることとなった(第12図)。

調査区は南北に走る舗装道路及び駐車場として利用されていた場所であり、舗装道路部分については古墳時代遺物包含層のほぼ直上まで既に削平されていた。駐車場部分については表層の攪乱層を除去した結果、深さ2mほどの現代のゴミ廃棄穴によって既に破壊された部分も数カ所認められたものの、古墳時代の包含層が厚いシラスの二次堆積土の下におおむね良好に保存されており、該期の住居址27軒及び溝5条、そして配石をもつ方形の堀り込み等が検出された(第13図・図版1)。

### (3) 基本層位(第14~17図・写真2・3)

地表から約2.3mの深さまでの間で19層を確認した。Ⅷ層以下はプラントオパール分析資料採取のための深掘り部のみでの確認であり、土層の拡がりについては未確認である。Ⅶ層以上については、Ⅳb層が調査区北東部に偏在するのを除き、ほぼ調査区全域にわたって認められた。基本層位として、Ⅰ層：表土層・Ⅱ層：灰色砂質土層・Ⅲ層：淡灰茶褐色砂質土層・Ⅳa層：明黄褐色砂質土層・Ⅳb層：明黄褐色粗砂層・Ⅴ層：淡茶褐色砂質土層・Ⅵ層：灰褐色シルト質土層(後述のようにⅥa・Ⅵb・Ⅵcの3層に細分される)・Ⅶ層：淡灰褐色シルト質土層・Ⅷ層：淡灰褐色粘質土層・Ⅸ層：黄白色粘質土層・Ⅹ層：暗灰褐色砂混じりシルト質土層・ⅩI層：暗灰色砂質土層・ⅩII層：砂層・ⅩIII層：黒色粘質シルト質土層・ⅩIV層：黒茶



写真2 53-A'区北壁土層

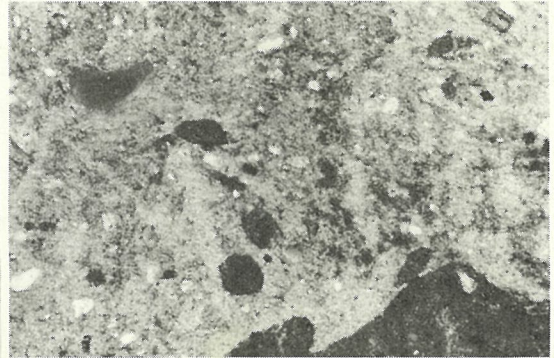


写真3 V層土

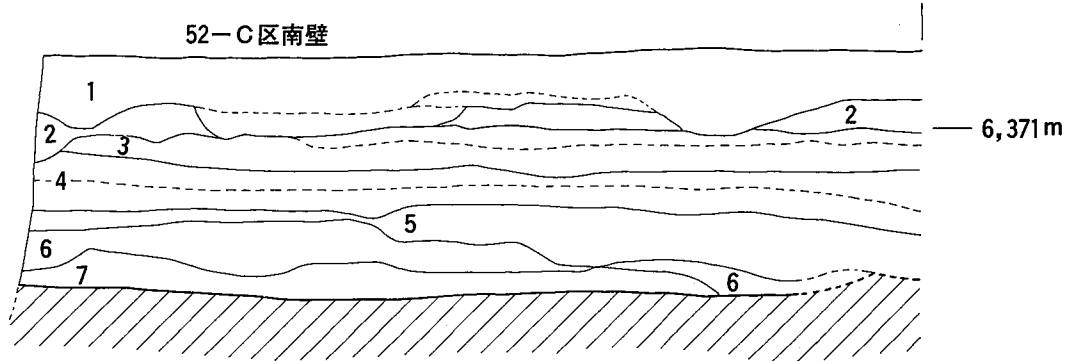




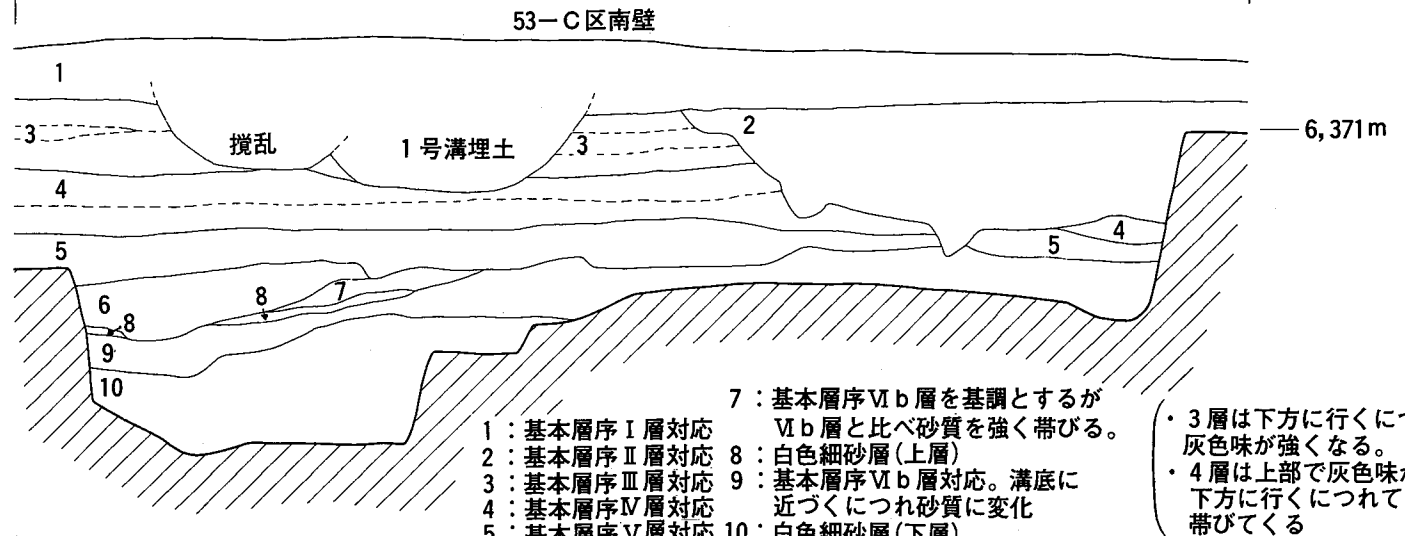
正誤表

頁	行	誤	正
21	19	一宮神社遺跡	一の宮神社遺跡
23	第2図	遺跡分布図 (1/6000)	波線部削除
37	27	①・②・③・④	①・②・④・⑤
38	23	第5層	第V層
54	6	方形の掘り込み	方形の掘り込み
55-56	第14図	Ⅵ52・53・54	波線部削除
63	13	方形掘り込み	方形掘り込み
83	19	方形掘り込み	方形掘り込み
90	3	成川武	成川式
135	9	第55図	第54図
139	7	凝灰石	凝灰岩
141	16	第58図	第57図
141	第57図	浩司部分位置図	工事部分位置図
159	1	1985年1月31日	1986年1月31日

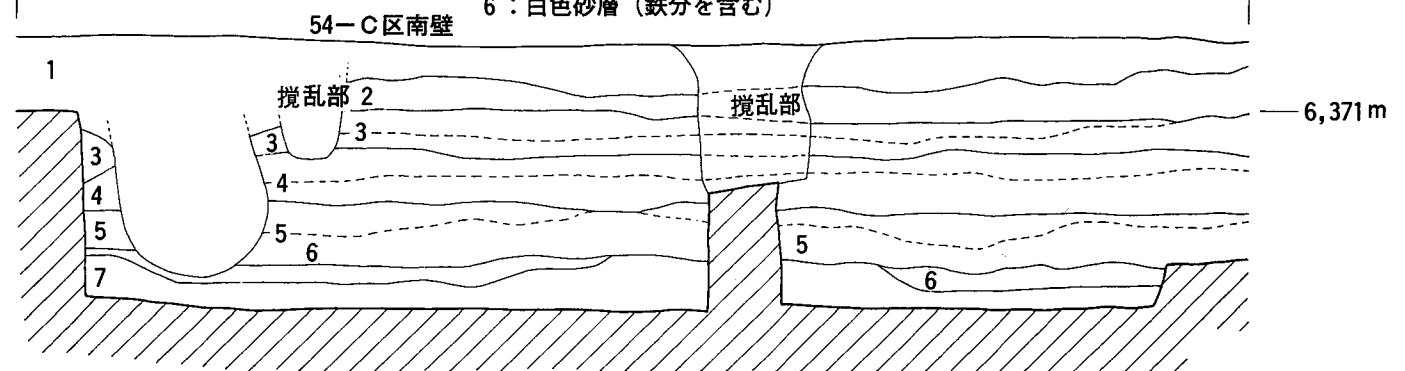




- 1 : 基本層序 I 層対応
  - 2 : 基本層序 II 層対応
  - 3 : 基本層序 III 層対応
  - 4 : 基本層序 IV 層対応
  - 5 : 基本層序 V 層対応
  - 6 : 基本層序 VI a 層対応
  - 7 : 基本層序 VI c 層対応
- (・3層は下へ行くにつれて灰色味を増す  
・4層は上部において鉄分の浸透がみられる)



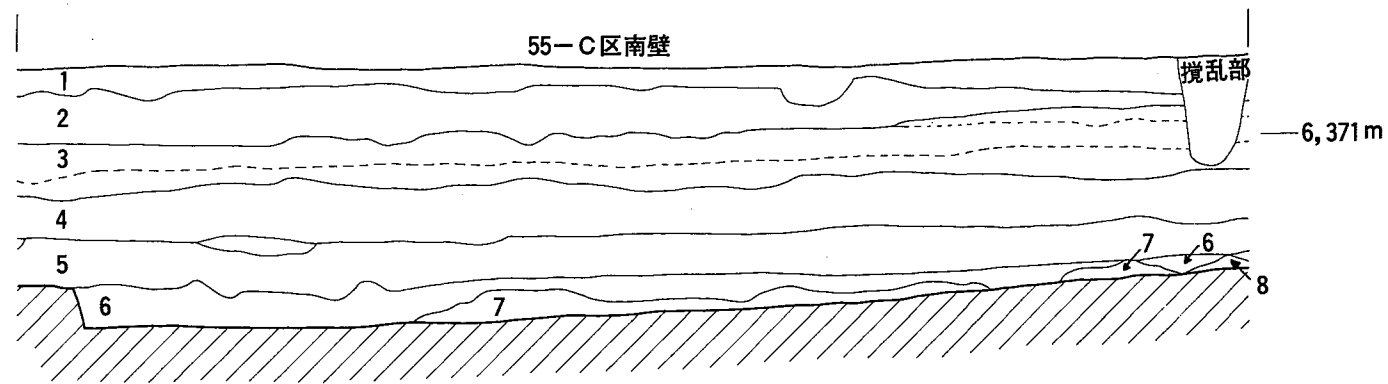
- 1 : 基本層序 I 層対応
  - 2 : 基本層序 II 層対応
  - 3 : 基本層序 III 層対応
  - 4 : 基本層序 IV 層対応
  - 5 : 基本層序 V 層対応
  - 6 : 白色砂層 (鉄分を含む)
  - 7 : 基本層序 VI b 層を基調とするが VI b 層と比べ砂質を強く帯びる。
  - 8 : 白色細砂層 (上層)
  - 9 : 基本層序 VI b 層対応。溝底に近づくにつれ砂質に変化
  - 10 : 白色細砂層 (下層)
- (・3層は下方に行くにつれ灰色味が強くなる。  
・4層は上部で灰色味が強く下方に行くにつれて白色味を帯びてくる)



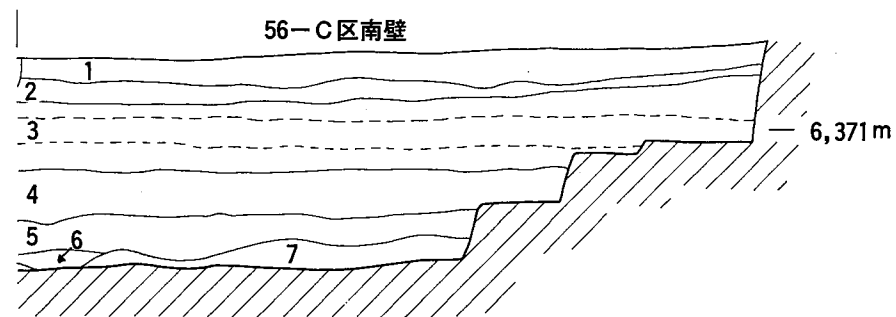
- 1 : 基本層序 I 層対応
  - 2 : 基本層序 II 層対応
  - 3 : 基本層序 III 層対応
  - 4 : 基本層序 IV 層対応
  - 5 : 基本層序 V 層対応
  - 6 : 基本層序 VI b 層対応
  - 7 : 基本層序 VI c 層対応
- (・3層は下方へ行くほど灰色味が強くなる。  
・4層は上部に鉄分の浸透がみられ、下部と色調をやや異にする。  
・5層は下部に鉄分の浸透が著しい。)



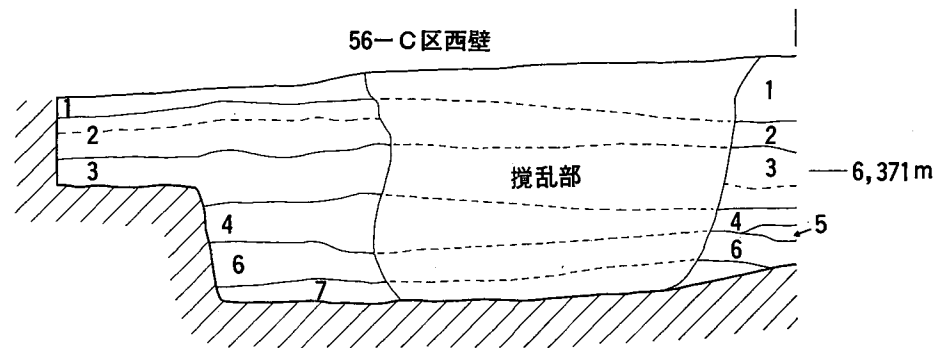
第14図 VI52・53・54-C区南壁土層図 (1/30)



- |                  |                   |                                |
|------------------|-------------------|--------------------------------|
| 1 : 基本層序 I 層対応   | 5 : 3号溝埋土         | (・3層は上方から下方へ行くに従って<br>灰色味を強める) |
| 2 : 基本層序 II 層対応  | 6 : 基本層序 VI b 層対応 |                                |
| 3 : 基本層序 III 層対応 | 7 : 基本層序 VI c 層対応 |                                |
| 4 : 基本層序 IV 層対応  | 8 : 基本層序 VII 層対応  |                                |



- |                  |                   |                               |
|------------------|-------------------|-------------------------------|
| 1 : 基本層序 I 層対応   | 5 : 3号溝埋土         | (・3層は上方から下方へ行くに従い<br>灰色味を強める) |
| 2 : 基本層序 II 層対応  | 6 : 基本層序 VI c 層対応 |                               |
| 3 : 基本層序 III 層対応 | 7 : 基本層序 VII 層対応  |                               |
| 4 : 基本層序 IV 層対応  |                   |                               |

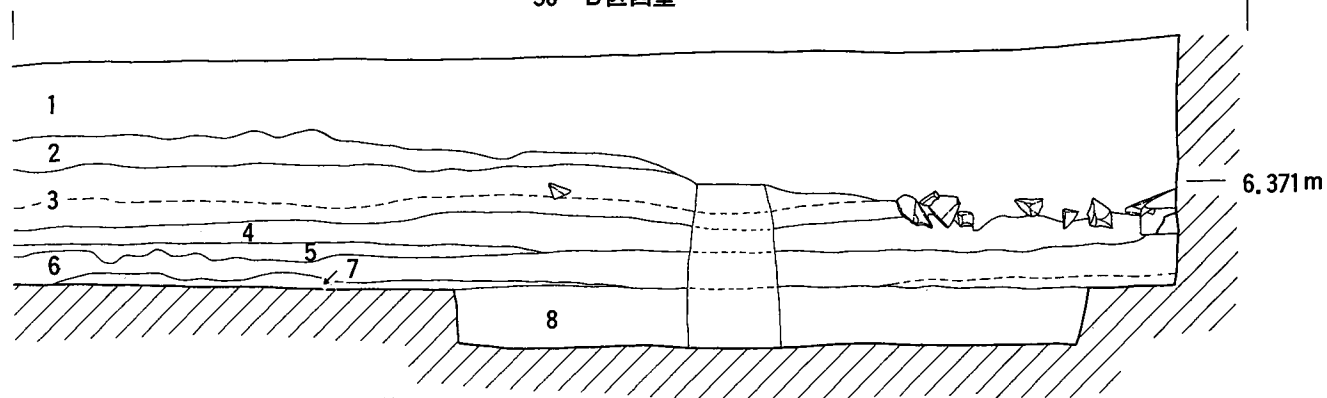


- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1 : 基本層序 I 層対応   | 5 : 基本層序 V b 層対応  |
| 2 : 基本層序 II 層対応  | 6 : 基本層序 V 層対応    |
| 3 : 基本層序 III 層対応 | 7 : 基本層序 VI a 層対応 |
| 4 : 基本層序 IV 層対応  |                   |

0 1 m

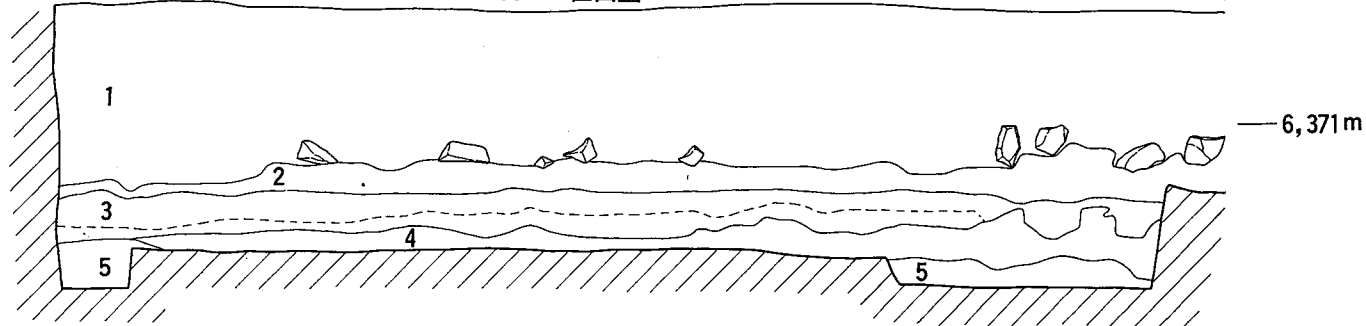
第15図 55・56-C区南壁・56-C区西壁 (1/30)

56-B区西壁



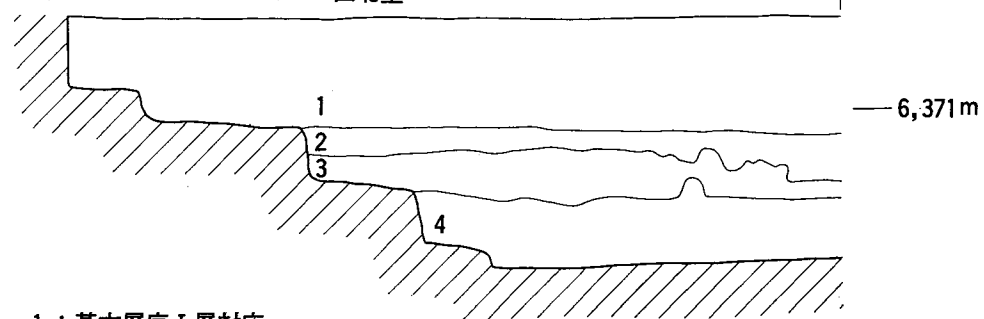
- |                   |                   |  |
|-------------------|-------------------|--|
| 1 : 基本層序 I 層対応    | 5 : 基本層序 IV a 層対応 | ( ・ 3層は下部に行くに従い灰色を増す。<br>・ 5層は下部に行くほど粒のキメが細くなり色調も灰色味が濃くなる。 ) |
| 2 : 基本層序 II 層対応   | 6 : 基本層序 V 層対応    |  |
| 3 : 基本層序 III 層対応  | 7 : 基本層序 VI a 層対応 |  |
| 4 : 基本層序 IV a 層対応 | 8 : 基本層序 VI c 層対応 |  |

56-A区西壁



- |                 |                   |   |
|-----------------|-------------------|---|
| 1 : 基本層序 I 層対応  | 4 : 基本層序 VI a 層対応 | ( ・ 3層はその上部から下部に移行するにつれキメが細くなり、<br>灰色味を増す ) |
| 2 : 基本層序 IV 層対応 | 5 : 基本層序 VI c 層対応 |   |
| 3 : 基本層序 V 層対応  |                   |   |

56-A区北壁

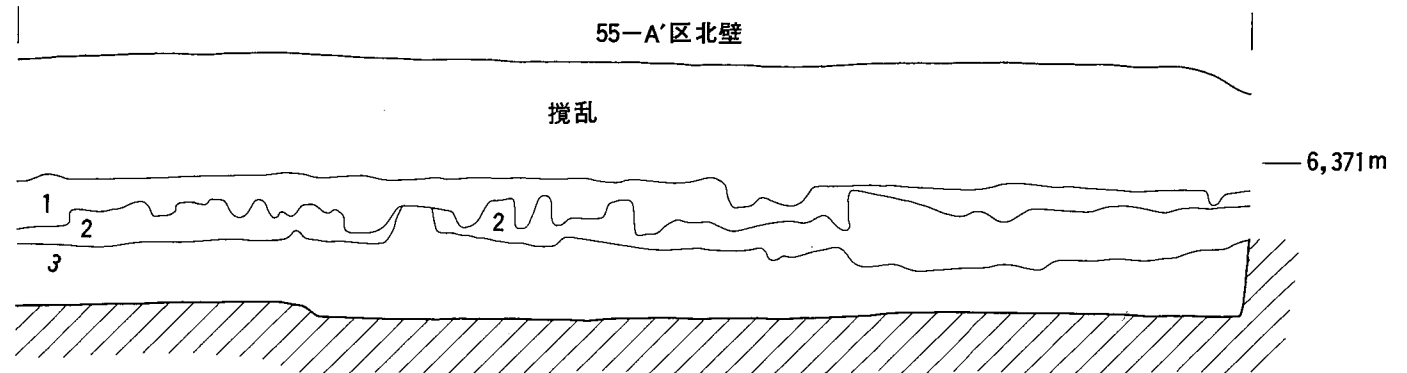


- |                   |   |
|-------------------|---|
| 1 : 基本層序 I 層対応    | ( ・ 4層は VI b 層が主体で、VI b 層上部に部分的に VI a 層<br>が認められる部分もある。 ) |
| 2 : 基本層序 IV a 層対応 |   |
| 3 : 基本層序 V 層対応    |   |
| 4 : 基本層序 VI 層対応   |   |



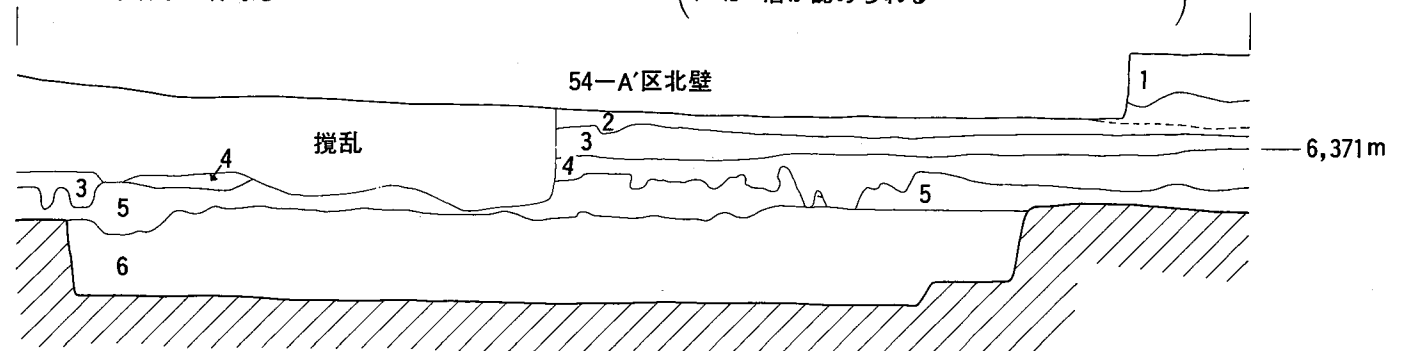
第16図 56-B・A区西壁・56-A区北壁土層図 (1/30)





1 : 基本層序IV層対応      3 : 基本層序VI層対応      (3層はVIb層を主とし, その上部に部分的にVIa層が認められる)

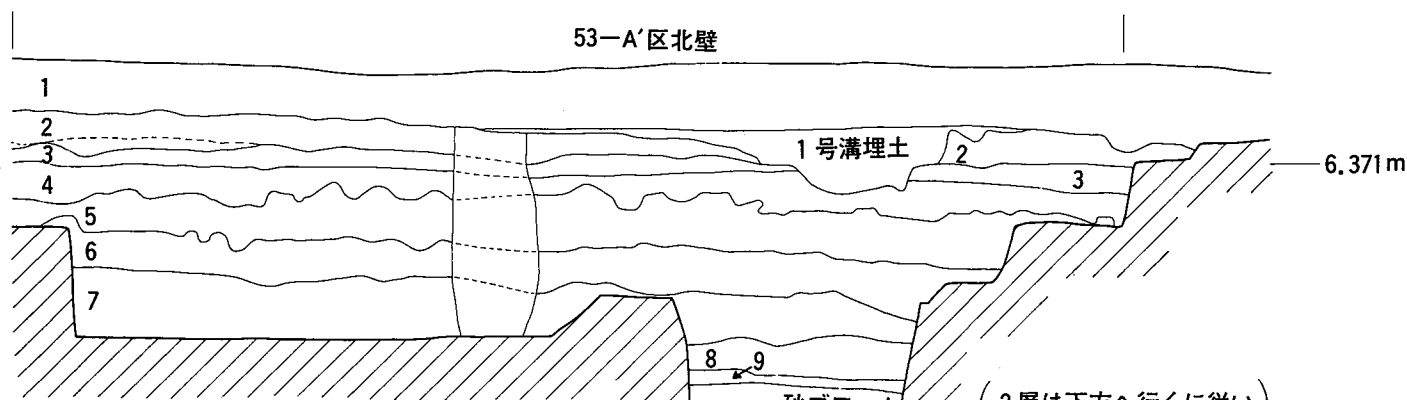
2 : 基本層序V層対応



1 : 基本層序I層対応      4 : 基本層序IVb層対応      (6層はVIb層が主体であり, その上部に部分的にVIa層がみられる)

2 : 基本層序III層対応      5 : 基本層序V層対応

3 : 基本層序IVa層対応      6 : 基本層序VI層対応



1 : 基本層序I層対応      9 : 基本層序IX層対応      (2層は下方へ行くに従い灰色味を増す)

2 : 基本層序III層対応      10 : 基本層序X層対応

3 : 基本層序IVa層対応      11 : 基本層序XI層対応

4 : 基本層序IVb層対応      12 : 基本層序XII層対応

5 : 基本層序V層対応      13 : 基本層序XIII層対応

6 : 基本層序VIb層対応      14 : 基本層序XIV層対応

7 : 基本層序VII層対応      15 : 基本層序XV層対応

8 : 基本層序VIII層対応      16 : 基本層序XVI層対応

第17図 55・54・53-A'区北壁 (1/30)

褐色粘質土層・X V層：茶褐色粘質土層・X VI層：暗茶褐色シルト質土層がみられた。

これらの層のうちⅡ～V層はシラスの二次堆積土であり、IV b層を除き土質はほとんど変わらないが、IV a層以上とV層の間には調査区東半部のみに広がるIV b層が介在しており両者は堆積の契機を異にすると考えられる。

V層はVI層土のブロックを多量に混じえており（写真3）、成川式土器の出土も下部に集中する。そして、V層とVI層の境はかなり不整な面をなす。このような堆積状況はV層土が運搬されてきた際にかかなりの労力がはたらいてVI層上部を削り、VI層土をその包含する遺物とともに巻き上げたことを示している。

VI層は成川式土器包含層であり、便宜的に上部の鉄分の浸透をみる部分をVI a層、それ以下の部分で住居埋土に相当する部分をVI c層、それ以外をVI b層とする。

Ⅶ層以下は無遺物層であるが、成川式期の遺構はⅦ層上面で検出された。

#### (4) 遺構と遺構出土の遺物

今回の調査において検出された遺構としては、住居址27軒・配石を伴う方形堀り込み1基・溝6条をあげることができる。以下、各遺構ごとにその伴出遺物とともに説明を加える。

##### (i) 住居址

27軒検出されているが、すべて方形プランを呈しその備える内容も斉一的である。以下、出土遺物とあわせて1号住居址から順に説明を加える。

##### ・1号住居址（第19図）

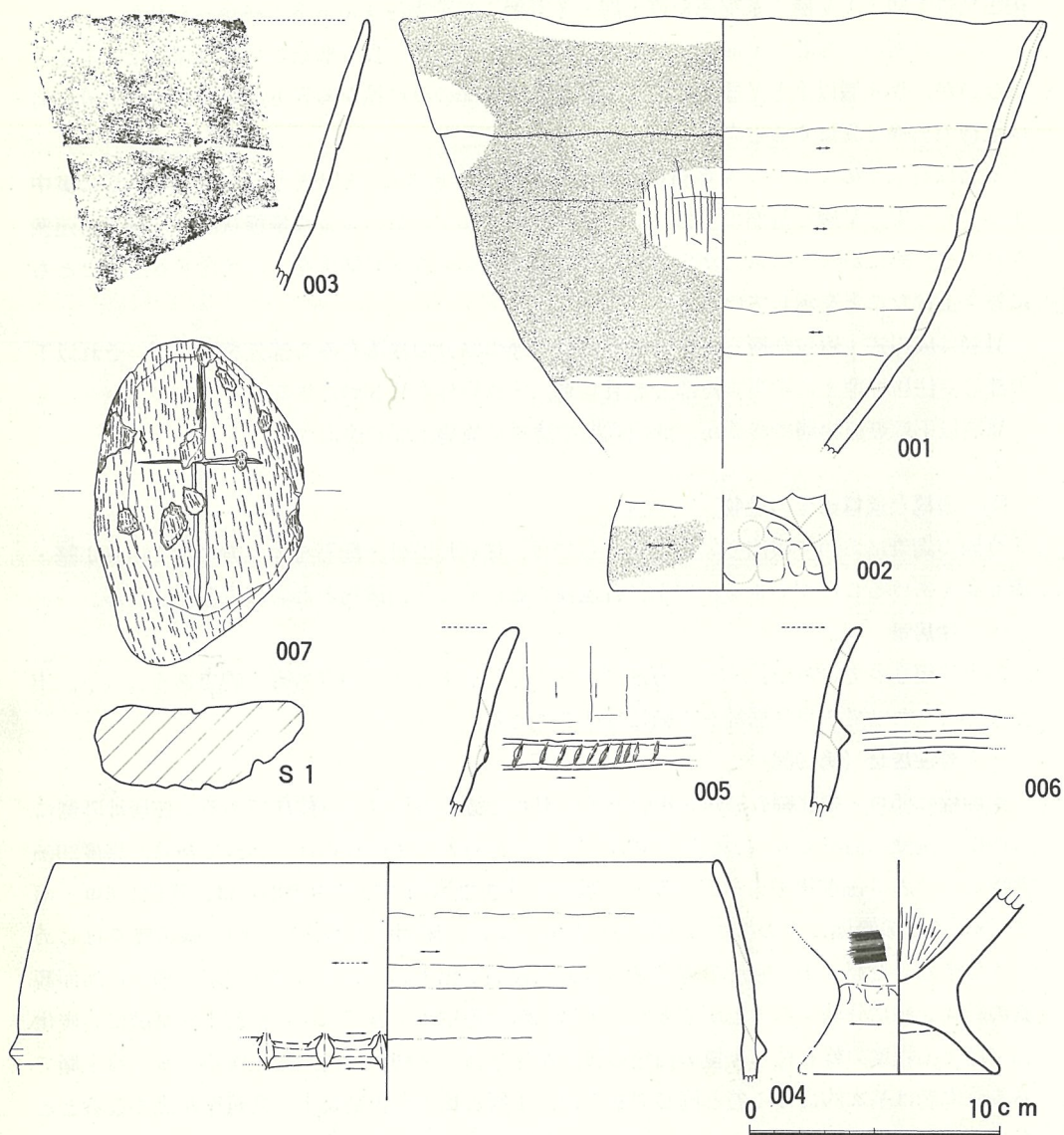
東西幅4.65m・南北幅4.55m・現存壁高0.31mを測る方形プラン住居である。住居址外側には西壁と南壁に沿って6つの柱穴が並ぶ。これらの柱穴の上縁径は16～19cmであり、深度20cm前後のもの5cm前後のものが交互に並ぶ。住居址床面のほぼ中央部には、東西1.6m・南北0.8mほどの範囲に炭の拡がりが見られる。また、床面直上からは内湾口縁の甕をはじめとする土器、及び「十」字形の線刻をもつ軽石製品が出土している。本住居址の埋土は断面観察の結果3層に分層することができた。1層は暗灰色粘質土層で、灰色粘質土を基調にし炭化物・径1cm程度の軽石粒・少量の白色砂質土塊を含む。2層は暗灰色を呈するシルト質土層である。本層は基本的には1層と同じであるが、1層と比べ白色粘質土の含有率が高くなるとともにその大きさもやや大きくなる。また、炭化物の混入率も増大する。3層は白灰色シルト質土層である。本住居址の貼り床に相当する。白色粘土を基調とし、白色砂質土塊・黒色砂質土塊などを含み粘性は非常に大きい。

本住居址は10号住居址・11号住居址を切って構築されている。

出土土器（第18図001～003）

甕形土器片の出土がみられる。

甕形土器は口縁部を粘土帯によって肥厚させるタイプのものが床面直上から出土している。（001、003）炭の堆積範囲中からの出土であり、検出時は灰まみれという状況であった。



第18図 1号住居址出土遺物(1/3)

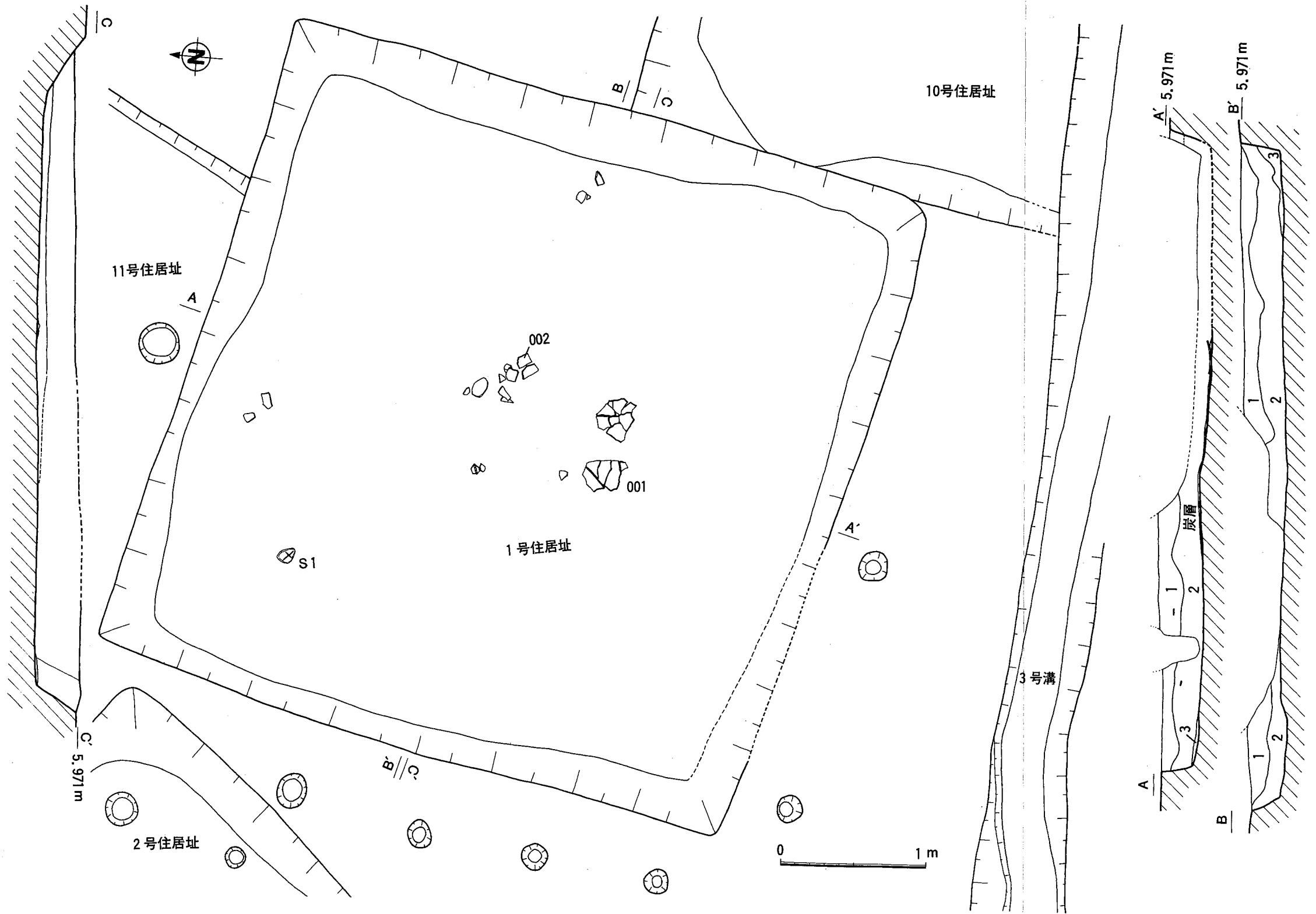
器外面が床面に密着した状態で出土し、床面にスタンプが残る。およそ半個体分の出土であり、上部に位置していたと思われる部分は失われている。002は底部片であり、胎土・焼成・色調などが001に酷似しており、同一個体と思われる。001, 002には共に煤の付着がみられる。

出土石器(第18図S1)

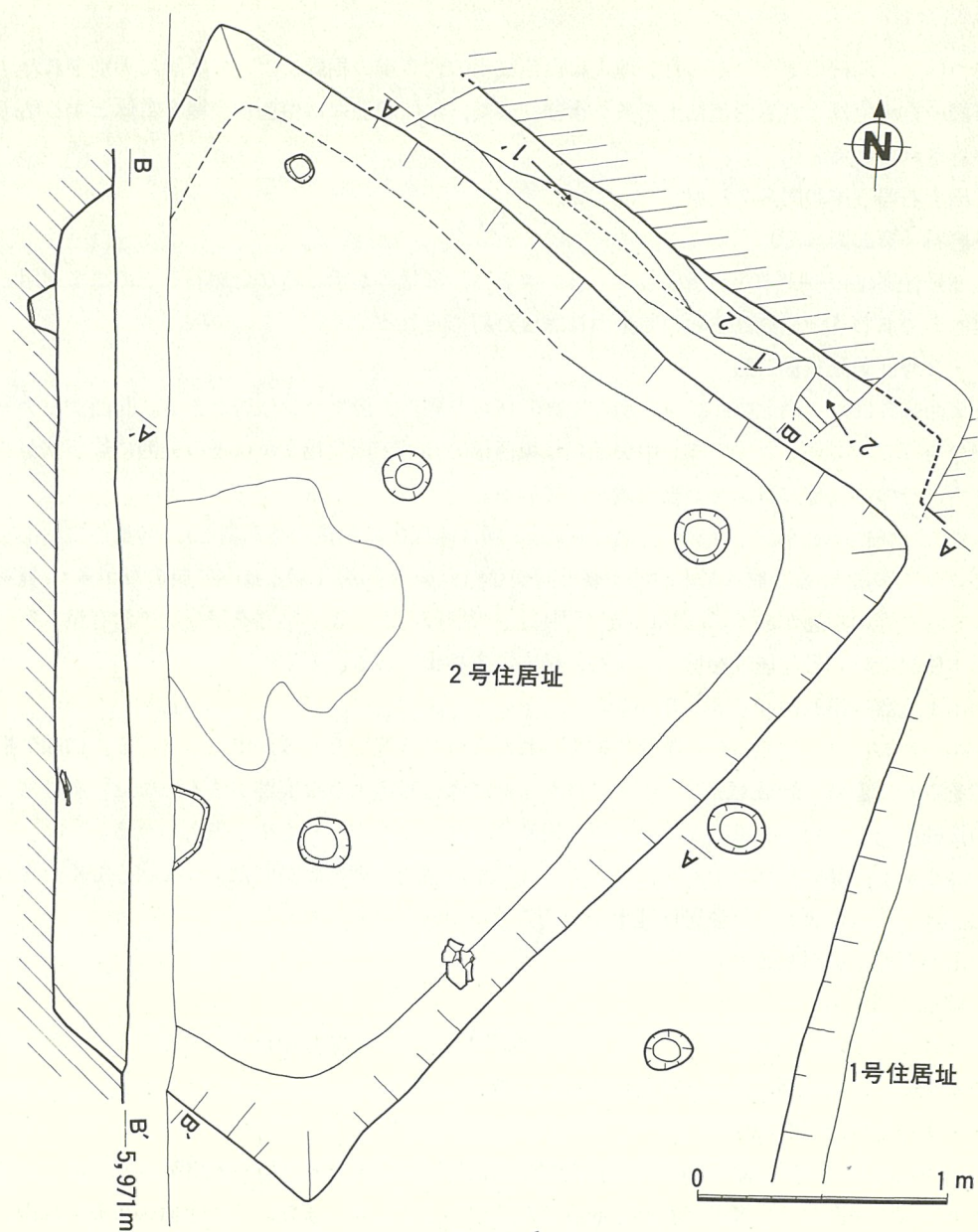
軽石製品(第18図S1)

1号住居址の床面から出土している。横断面は偏平なカマボコ形をしており、平坦な面の方





第19图 1号住居址实测图 (1/30)



第20図 2号住居址実測図 (1/30)

に「十」字状の線刻を施している。

・ 2号住居址 (第20図)

西側コーナー部が調査区域外にかかるが、おおよそ3.6m×3.5mほどの若干不整な方形プランを呈するようである。現存壁高は23cmを測る。住居中央部に炭の拡がりが存在し、このほぼ中央に凹部が認められる。他の住居址例から考えて、この部分にはおそらく高坏の坏部が据えられていたと考えられる。ピットも数基検出しているが、本住居址に伴う柱穴であったか否か

については明確にできなかった。埋土は白色粘土の含有率の相違によって2層に大別された。下層の方が上層よりも白色粘土を多く含む。また、本住居址には白色粘土塊を主体とする貼床が施されている。

出土石器(第30図S7)

磨石(第30図S7)

2号住居址の埋土中から出土している。大きさ・形状等が手ごろな自然石をそのまま利用したものであろう。側縁部を除いて全面に磨痕が認められる。

#### ・3号住居址(第21図)

東西幅4.26m・南北幅4.12m・現存壁高0.16mを測る方形プラン住居である。北西コーナ一部分をゴミ穴で切られている。中央部には東西幅0.75m・南北幅1mほどの範囲に炭が拡がり、さらにその中央部には高環が据え置かれている。

埋土は観察の結果次の3層に分層できた。1層は暗灰色の粘質土を基調とし、薄黄色の粘土をブロック状に含む。2層は基本的に1層と同様な内容を示すが、1層と比べて炭の量が多く、軽石粒を含む等の相違がある。3層は上部2層に比べ茶味が強く、より粘性を帯び炭の含有量も多い。

本住居址は13号住居址を切る。また、柱穴は未検出である。

出土土器(第24図008・009)

中央炉の掘りくぼめられた部分に据えられたような状況で008が出土している。口縁欠損端を中心に磨滅・剝離が進む。内面にはかすかに煤付着のような痕跡が残る。また、脚柱部との接続部に削ったような跡があり、再使用時に二次加工を施したものと考えられる。

009も高環の坏部であるが、これも、住居址南東角に据え置かれたような状態で検出された。炭や灰は含まれず、住居址埋土と同様の土が包含されていた。

出土石器(第24図S2)

敲石(第24図S2)

3号住居址埋土からの出土。長さ9.7cm・幅2.4cmほどの小振りの自然石をそのまま利用しているもので、上下両端部に敲打痕が認められる。

#### ・4号住居址(第22図)

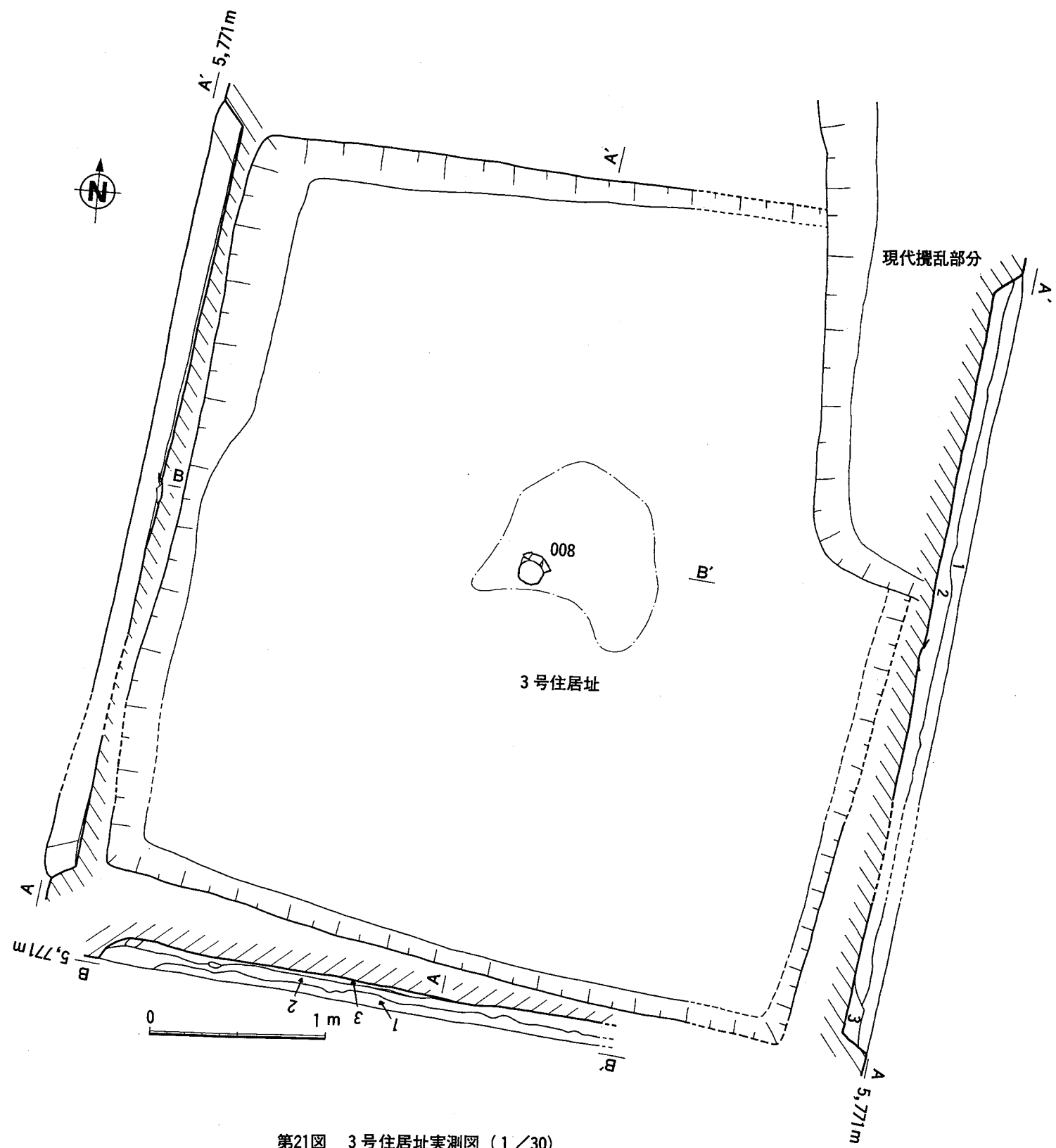
東西幅3.7m・南北幅3.48m・現存壁高約10cmを測る。6号溝を切って構築されている。住居址ほぼ中央西寄りに甕形土器が床面直上から出土している。また、この土器の東側には南北長80cm・東西幅30cmほどを測る深さ約6cmの浅いくぼみが認められる。そして、この土器と凹部との周囲に炭が拡がる。炭の範囲は1m×0.8mほどである。柱穴は検出されなかった。

埋土は灰紫色を基調とし炭粒が散在する。鉄分を斑状に含み、また白色の砂質土をブロック状に含む。

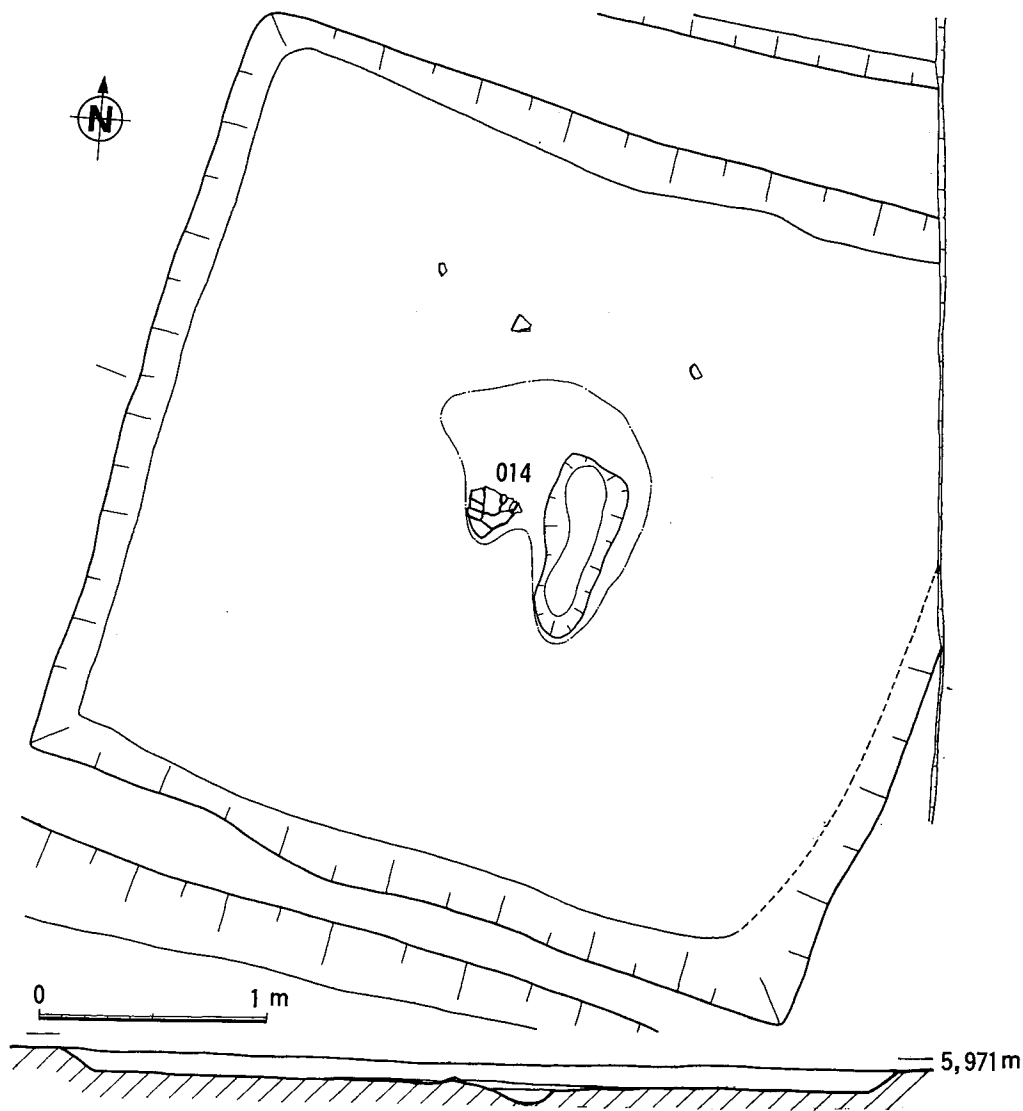
出土土器(第24図014)

直口口縁をもつ甕形土器の出土がみられる。この土器もまた、中央炉の炭堆積範囲内床面直上に検出された。内器面を上方に向けて、土圧のためか、つぶれたような状態で、床面直上に





第21图 3号住居址实测图 (1/30)



第22図 4号住居址実測図 (1/30)

略水平位で出土している。内外面とも非常に風化が進む。

出土石器 (第24図S 3)

スクレイパー (第24図S 3)

4号住居址床面からの出土である。磨製石器の欠損片に生じた鋭利な縁片部をそのまま刃部として利用している。二次的な調整は施されていないようであるが、刃部には使用による刃こ

ぼれが認められる。

・ 5号住居址 (第13図)

9号住居に切られ、西側部分は調査区域外にかかるため南東コーナー部分のみを検出している。方形プランを呈するが、規模等は不明である。

・ 6号住居址 (第23図)

7号住居址・8号住居址を切って構築されており、東西幅3.94m・南北幅3.42m・現存壁高23cmを測る。中央部に1.2m×1.1mほどの炭の拡がり認められる。貼床土中から石庖丁の半欠品が出土している。埋土は3層認められた。1～3層ともに灰褐色を呈する層で1層と比べ3層の方が褐色粘土の混入率が高い。両層ともに炭及び小さな軽石粒を含む。2層中には灰白色砂のごく薄い層が認められる。

出土石器 (第24図S 4・5)

石庖丁 (第24図S 4)

6号住居址の貼床土内から出土したもので杏仁形を呈する。穿孔部分で折損しており、身のほぼ半分を欠く。刃部には使用のために生じたと思われる刃こぼれが目立つ。紐孔の穿孔は、両面から行われている。

砥石 (第24図S 5)

6号住居址の埋土中からの出土である。珪岩製の砥石で、上下両端を除く4側面を砥面として利用している。砥面は非常に平滑な面をなすが、長軸方向にごくわずかな程度の起伏ながら波状の凹凸の連続が認められる。上下両端部には面取りが施されている。

・ 7号住居址 (第23図)

6号住居址・9号住居址に切られており、住居中央部と南西コーナー部分のみが残存している。規模等は不明であるが、方形プランを呈するものと考えられる。住居中央部と考えられる部分には高坏坏部が裾えられており、その周囲には炭が拡がる。炭は径1.8mほどのほぼ正円状に拡がるようである。高坏のほぼ中央を通るラインで炭の堆積状況を観察した結果、貼床土を挟んで上下二層の炭層が堆積していることが認められた。

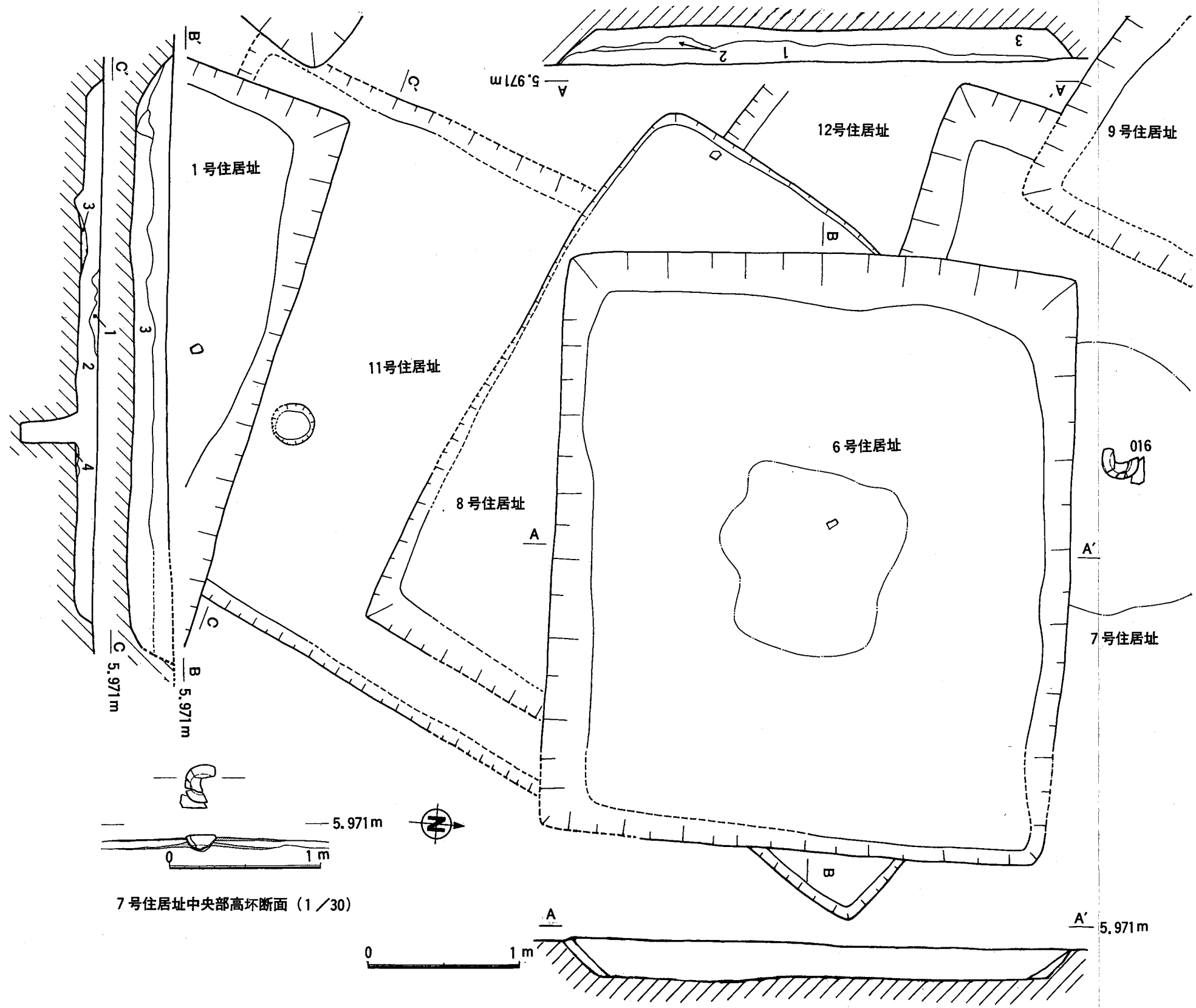
出土土器 (第24図0 1 6)

床面上にはほとんど土器がみられないが、中央炉と思われる炭堆積部分中央に0 1 6がまとまった形で検出されている。高坏の坏部であり、煤の付着、二次加熱の痕跡などはみられない。

・ 8号住居址 (第23図)

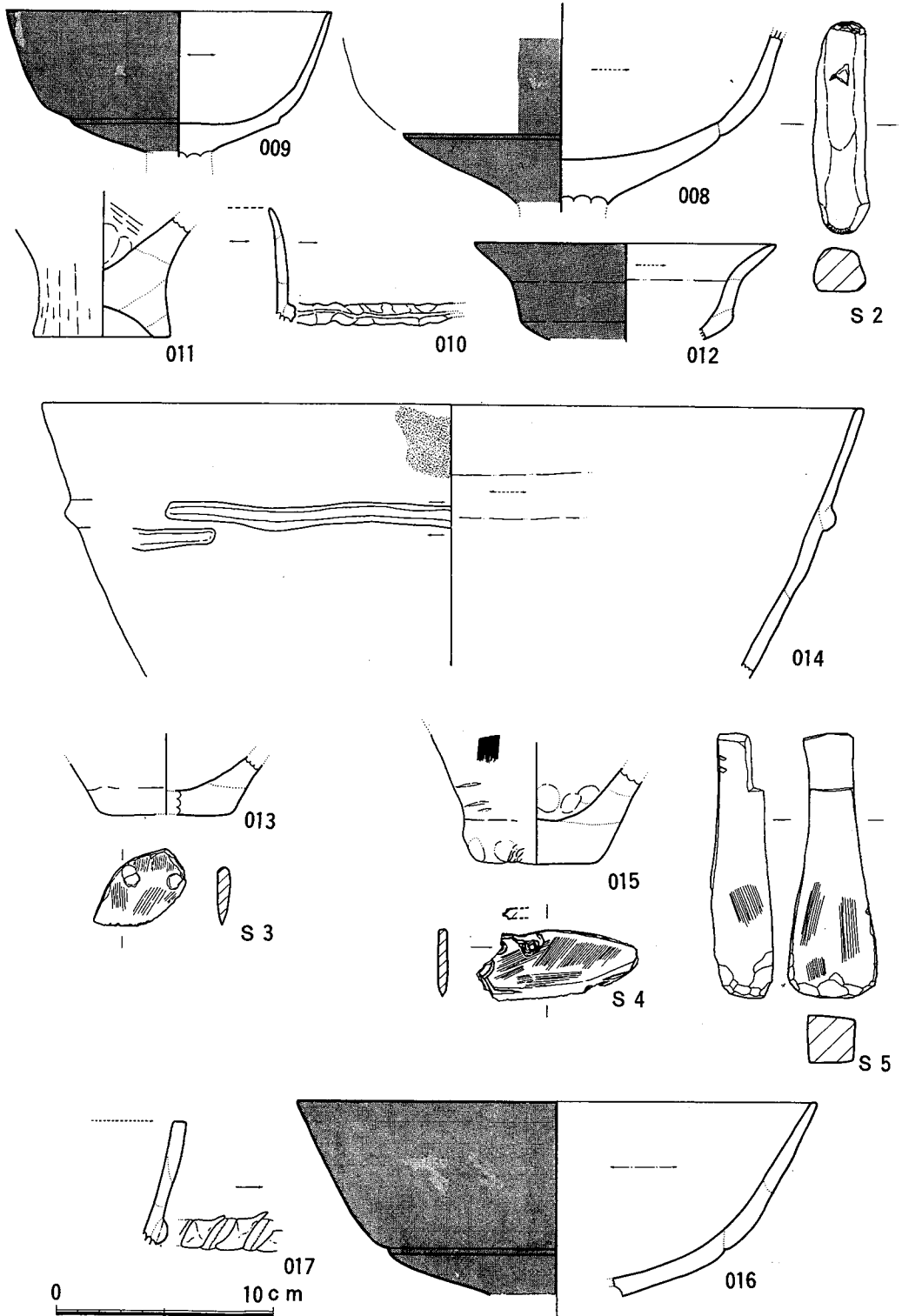
6号住居が主軸方向をほぼ45度ずらして本住居址に重なるように構築されているため、東・西・南の3コーナー部分が残存しているのみである。3.92m×3.95mほどの方形プランを呈する。柱穴等の存在は不明である。11号住居址と12号住居址を切る。





7号住居址中央部高环断面 (1/30)

第23图 6·7·8·11号住居址实测图 (1/30)



第24图 3·4·6·7·号住居址出土遺物 (1/3)

出土石器（第30図S 8）

敲石（第30図S 8）

やや細長い形態の手ごろな大きさの自然石を利用したもので、8号住居址床面から出土している。上下両端に敲打痕が認められる。

・9号住居址（第13図）

3.25m×3.25mほどの方形プランを呈する住居址である。南辺の一部を除いて輪郭は不明瞭であった。柱穴の存在等は不明である。

出土石器（第30図S 9・10）

縦断面楔形敲打用石器（第30図S 9）

縦断面形が楔形を呈し、厚みのある方を基部とし、薄く弧状をなす縁辺部を使用部位として用いられたと考えられる。縁辺部付近には打撃を受けたために生じた剝離及び敲打痕が著しい。おそらく厚味のある基部を握って振り降ろし、薄い縁辺部で対象物に打撃を与えたものと考えられる。9号住居址埋土中からの出土である。

砥石（第30図S 10）

S 5と同様に珪岩を利用した砥石である。9号住居址の床面から出土している。一方に偏して穿孔が施されているが、これが紐孔であるならば、この砥石は携帯用の手持ち砥石として利用されたことも考えられる。

・10号住居址（第28図）

東西両側部分をそれぞれ1号住居址・15号住居址によって切られ、住居南半部分は調査区域外にかかる。東西幅推定4.8m・現存壁高13cmを測る方形プランを呈すると考えられる住居址である。住居中央と思われる部分に高坏坏部が裾えてあり、それを中心として1.3m×0.8mほどの炭の拡がり認められた。柱穴等の存在は不明。

出土土器（第26図0 1 8）

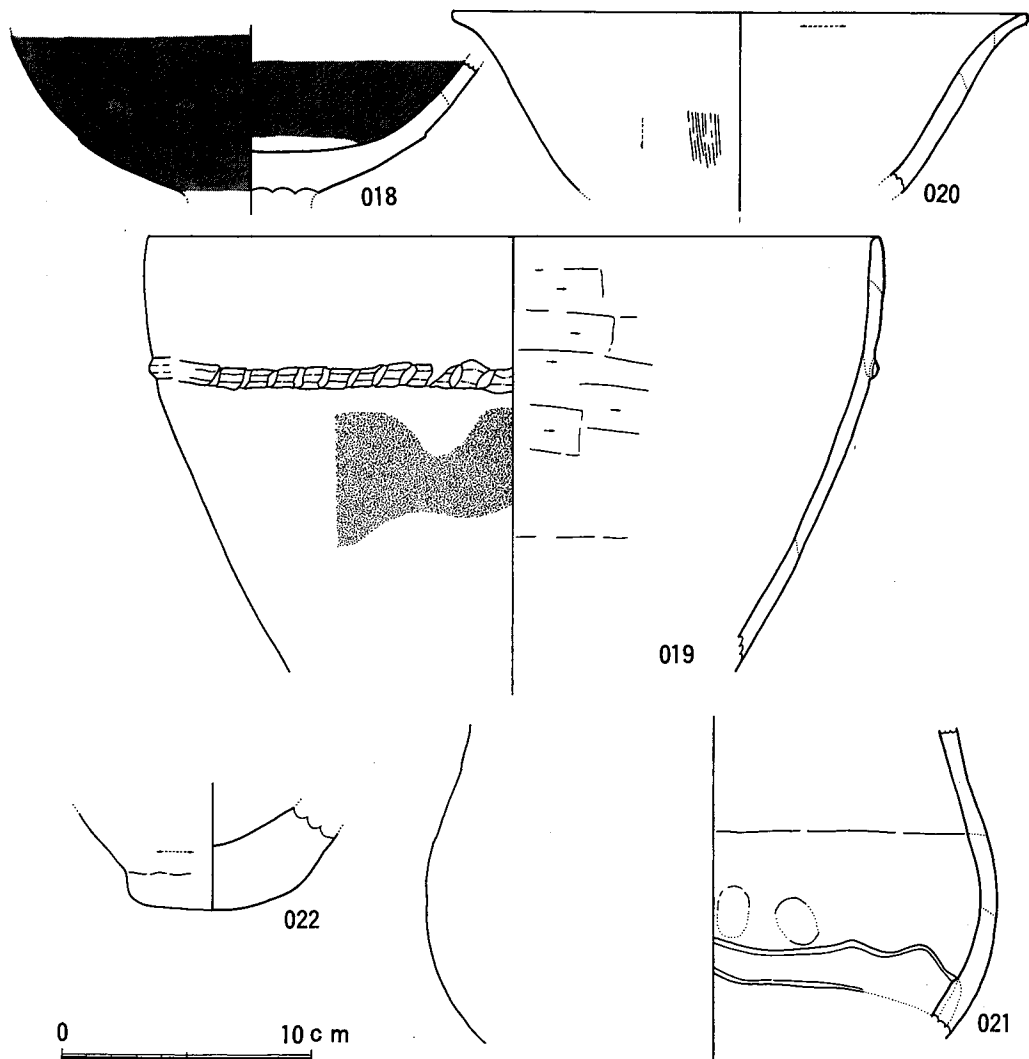
3号住居址・7号住居址と同様、炉の中央に裾えられた高坏の坏部である。全面にわたりかなり磨滅が進んでいる。内面にも丹を塗ってあり、また、煤の付着もみられる。

・11号住居址（第23図）

1号・2号・8号住居に切られており規模等不明であるが、方形プランを呈すると考えられる。東西幅約3.55mで柱穴1を検出している。柱穴の上縁径は28cm・深さは約36cmである。

埋土はほぼ単一であり、そこにブロック状に1・3・4層が認められる。1層は灰色粘質シルトを基調とし、淡黄白色粘質土のブロック及び炭のブロックを含む。炭の量はかなり多い。2層は灰色粘質シルト層で本住居址の残存埋土の主体をなす。淡黄白色粘質土のブロックを含む。また、1層に比べかなり少ないものの炭のブロックも少量含む。3・4層は淡黄白色を呈する粘質土であり、炭のブロックを多量に含んでいる。





第25図 10・11・17号住居址出土遺物 (1 / 3)

出土土器 (第25図019・020)

床面直上より、甕形土器片1, 鉢形土器片1が確認されている。甕形土器は内湾化する口縁部を持ち、刻み目突帯を有するものである。内面はヘラナデ調整により平滑にしあげられる。底部は欠損しており不明。鉢形土器片は浅鉢になると思われる。突帯などはいっさい付かず、外側にゆるく外反する口縁部を持つ。底部は不明。

・12号住居址 (第13図)

5・6・7・8・9号住居址に切られ、南辺のみを検出している。規模等是不明である。

・13号住居址 (第13図)

方形プランを呈する住居で、北辺と西辺の一部を検出している。7号住居址・14号住居址に

切られる

・14号住居址 (第13図)

東西幅約3.8mを測る住居址で、おそらく方形プランを呈するものと考えられる。住居址東半部に柱穴2本を検出している。柱穴間距離は1.35m、北側の柱穴の上縁径は21cm・深さは34cm、南側の柱穴はそれぞれ24cm・19cmである。住居ほぼ中央には炭の拡がり認められる。その現存南北幅・東西幅はそれぞれ1.7m・0.55mである。

・15号住居址 (第28図)

住居址北側の一部のみを調査している。10号住居址を切り、西側部分は6号溝で切られている。このため規模等は不明であるが、現存東西幅は2.75mを測る。

・16号住居址 (第26図)

南半部が調査区域外にかかるが、北壁長は4.4mを測り、南側へやや開く不整な方形プランを呈するようである。住居中央部と考えられる部分には東西幅1.7mほどの炭の拡がりが見られる。

出土石器 (第30図 S11)

縦断面楔形敲打用石器 (第30図 S11)

16号住居址の埋土中から出土している。S9と同様に弧状の縁辺部を使用部位として対象物を敲击潰したものと考えられる。基部はかなり厚く、縁辺部には敲打痕及び二次的な剝離が著しい。

・17号住居址 (第27図, 図版4・5)

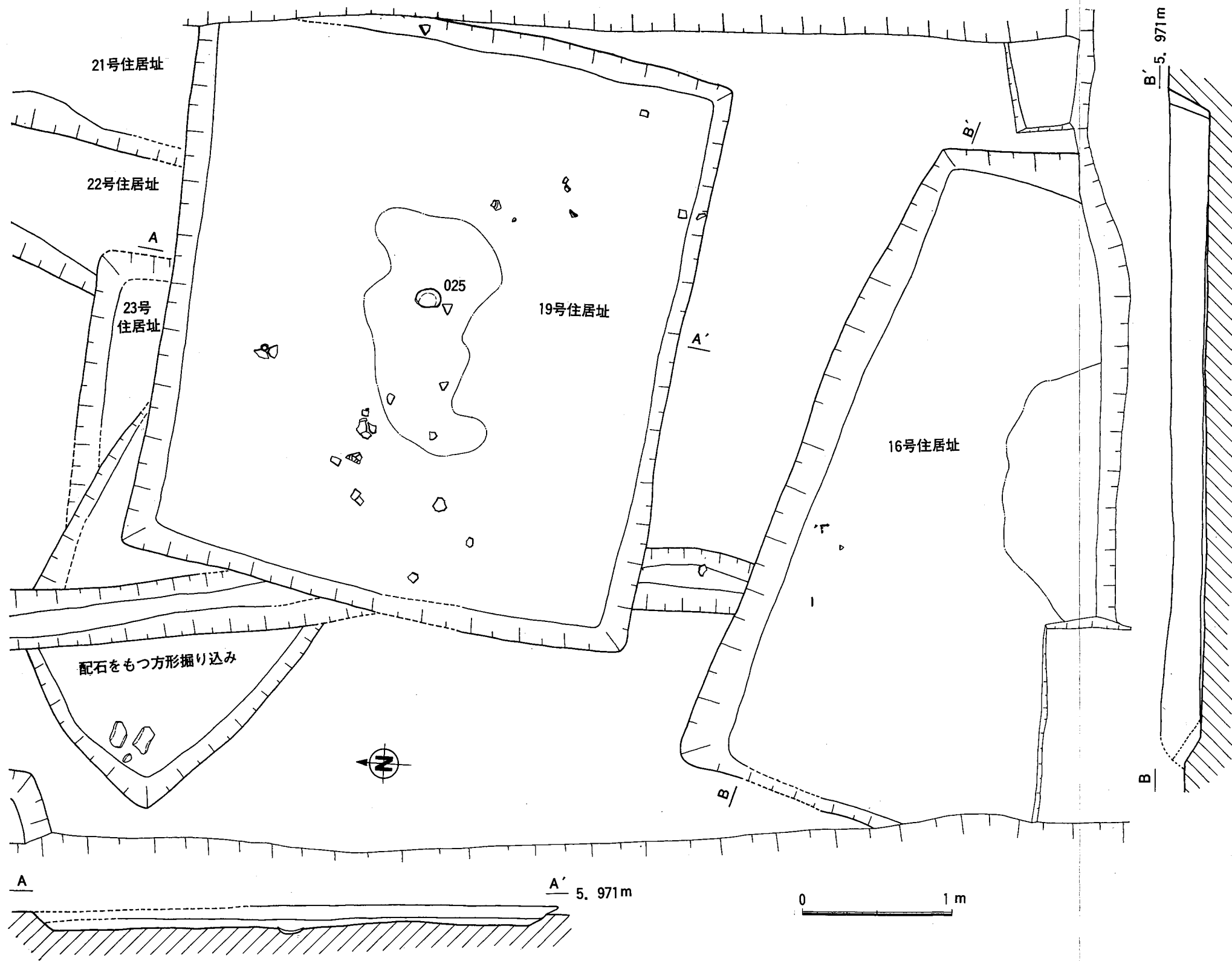
南北長3.4m・東西幅3.46mを測る方形プラン住居である。東壁部分の3/4ほどが調査区域外にかかる。柱穴4本が床面中央付近で検出されている。説明の便宜上北西の柱穴を起点とし左回りにP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>とする。各柱穴の径はP<sub>1</sub>から順に0.16m・0.18m・0.14m・0.275m、また深さは0.29m・0.18m・0.17m・0.25mを測る。柱穴間距離は $\overline{P_1P_2}$ が0.91m・ $\overline{P_2P_3}$ が1.33m・ $\overline{P_3P_4}$ が1.1m・ $\overline{P_4P_1}$ が1.25mを測る。さらに、住居中央部には径0.39m・深さ8cmほどのほぼ正円形の凹部が存在する。

本住居は焼失住居であり、その東半部を中心として炭化材が遺存している。炭化材は径5～10cmほどで、住居址コーナー部分のものを除き各壁に直交する方向をとって遺存している。コーナー部分の炭化材は住居中央部へ向かって倒れこんでおり、以上のような出土状況から考えてこれらの炭化材は住居上屋を構成する垂木が落ちこんだ可能性が考えられる。炭化材間には茅かと思われる炭化物も認められている。また、本住居床面においては7ヶ所の焼土が検出された。

埋土は灰白色シルト質土を基調とするが、炭化材を含んでいることもあり黒味が非常に強い。検出面から床面までの深さが浅く、埋土の分層は不可能であった。

出土土器 (第25図 021)

炭化材の残り方に比して、遺物の残存状況は良好とは言えない。床面直上には土器片が1点存在した。住居北西角付近において検出されたものである。内面を上方に向けた格好で出土し



第26図 16・19号住居址実測図 (1/30)





第27図 17号住居址・5号溝実測図 (1/20)

・図中の矢印は検出された炭化植物の繊維方向を示し、実線・点線・一点破線により示された範囲は植物繊維検出範囲と一致する。

(矢印表記について)

- ←→ 実線 確実に方向性をとらえることができたもの。
- ←- - 一点破線 部分的に方向性をとらえることができたもの。
- ←... 点線 かろうじて方向性をとらえることができたもの。

(検出範囲表記について)

- 実線 明瞭に検出された部分 (境界明瞭)。
- - - 一点破線 部分的に検出された部分 (境界不明瞭)。
- ... 点線 かろうじて検出され、ぼんやりとした感を呈す部分 (境界不明瞭)。

トーン部=焼土の検出範囲を示す。

た。そのため、外器面の床接地面には焼失住居に伴う植物繊維の痕跡が明瞭に残る。胴部破片のため器種その他、詳細は不明である。内面には粘土帯の貼付がみられる。

#### ・18号住居址（第13図）

南側を17号住居址に切られ北側及び東側は調査区域外にかかるため規模等は不明であるが、西壁が直線的に伸びることから考えると方形プランを呈するであろう。

#### 出土土器（第29図023・024）

床面直上出土土器としては比較的まとまった出土状況を示す。器種を明確に把握できるものに甕形土器2個体がある。023はゆるやかに外反する口縁部を持ち、一条の刻み目突帯を有す。外面に炭化物の付着がみられる。024もまた、外反する口縁部と一条の刻み目突帯を持つ。023とは、突帯貼付部分において若干くびれる傾向にあるという器形上の差異が認められる他、024の方が器壁が厚く、また、外面は刷毛目によって仕上げられるなどの相異点が認められる。内、外面ともに鉄分の付着がみられる。

#### 出土石器（第29図S6）

#### 敲石（第29図S6）

横断面が不整形形を呈する自然石を利用した敲石である。18号住居址の埋土中から出土している。下端部の平坦面については、これが人工的に作り出されたものであるか否か不明であるが、この面には敲打痕が著しく中央部がややくぼんでいる。

#### ・19号住居址（第26図）

21号・22号・23号住居址及び配石をもつ方形堀りこみ、そして5号溝を切る方形プラン住居址である。東西幅3.95m・南北長3.4mを測り、床面ほぼ中央部に裾えられた高坏を中心として1.5m×0.8mほどの範囲に炭が拡がる。

埋土は灰色シルト質土層を基調とし、白色シルト質塊・白色粘質土を含む。また少量ではあるが炭も認められる。

#### 出土土器（第29図025）

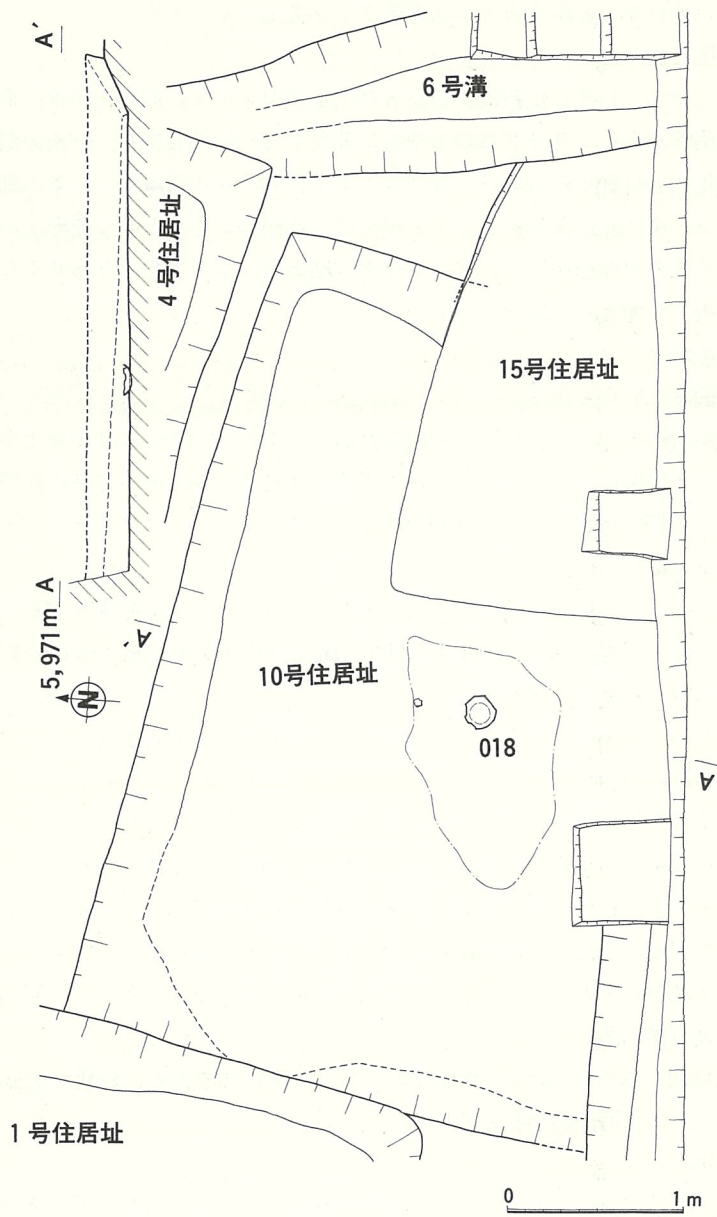
床面直上には少量ながら遺物が散在する。しかしながら、まとまりのない出土状況を示し、そのため、中央炉中に検出された高坏の坏部のみを図化するにとどまった。025は全面磨滅が進みながらも、残りは良い。脚柱部とは接合面ではずれたものである。また、図中の矢印より上方部分の剝離が特に著しく目を引く。二次加熱の痕跡、煤の付着などは認められない。

#### ・20号住居址（第13図）

17号住居址に切られる5m×3.5mほどの方形プラン住居である。住居中央部に高坏の坏部を裾えており、この周囲に炭が拡がる。

#### 出土土器（第29図）

中央炉の炭の堆積が、攪乱直下2～3cmの所で検出され、また、部分的に床面下まで攪乱が及んでいる。そのため、床面直上出土としてとらえることのできたものは026のみである。中央炉にやはり、裾え置かれるような形で検出された。土器自体の破損はひどく、口縁部・脚



第28图 10·15号住居址实测图 (1/30)



部との接合部分はすべて欠損しており、ドーナツ状に残存する。外面丹塗り部分の剝離も著しい。

・21号住居址（第13図）

西壁の一部を検出したのみである。おそらく方形プランを呈すると考えられるが、その規模等は不明である。22号住居址を切り、19号住居址に切られる。

・22号住居址（第13図）

19・21・23号住居址に切られており、西壁を検出したのみである。規模等は不明であるが、方形プラン住居址であろう。

・23号住居址（第13図）

19号・24号住居址に切られ、東北隅を残すのみである。コーナー部の存在から考えて方形プランを呈すると考えられるが、規模等については不明。

・24号住居址（第13図）

南北長約4m・東西幅2.5m以上の方形プランを呈する住居址である。20号住居址に切られる。柱穴は未検出。埋土は灰色シルト質土を基調とし、白色シルト塊を含む。

・25号住居址（第13図）

北辺のごく一部を検出しているのみであるが、方形プラン住居であろうと考えられる。26号住居址に切られる。規模等については不明である。

出土土器（第29図029）

埋土中にも少量ながら土器片を包含するものの、すべてかなり磨滅している。床面直上出土のものとしては甕形土器の脚台部分がある（029）。脚裾部はゆるやかに外側に開く。全面磨滅しており、そのため、調整などについては詳細不明である。

・26号住居址（第31図）

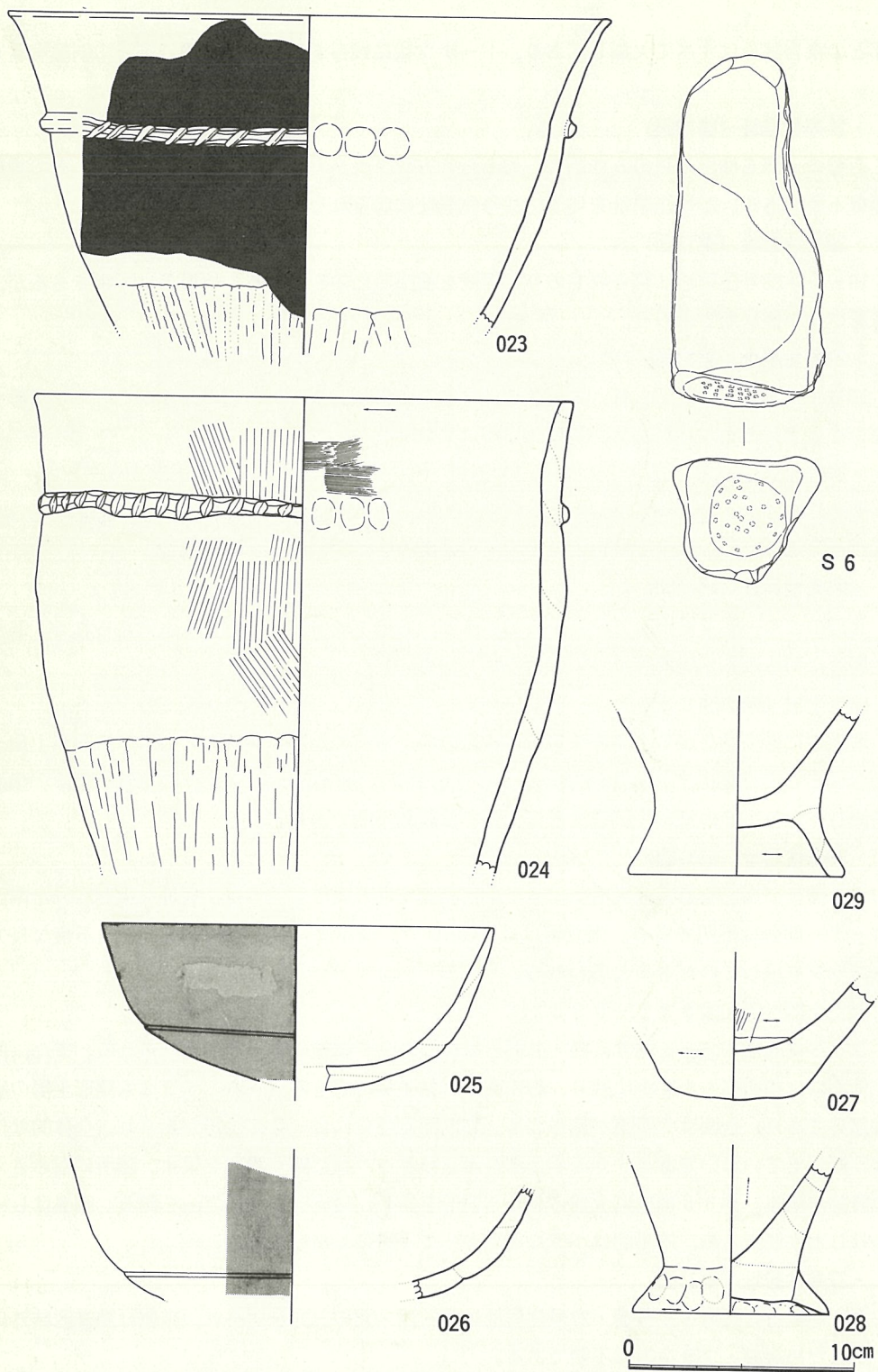
2号溝及び高圧電線管理設溝によって東西両側を切られており、本住居址の東側部分と南西コーナー部分は不明である。南北幅はほぼ2.8mで、現存部分から推測するとやや不整な長方形プランを呈していたものと思われる。

出土土器（第30図032～035）

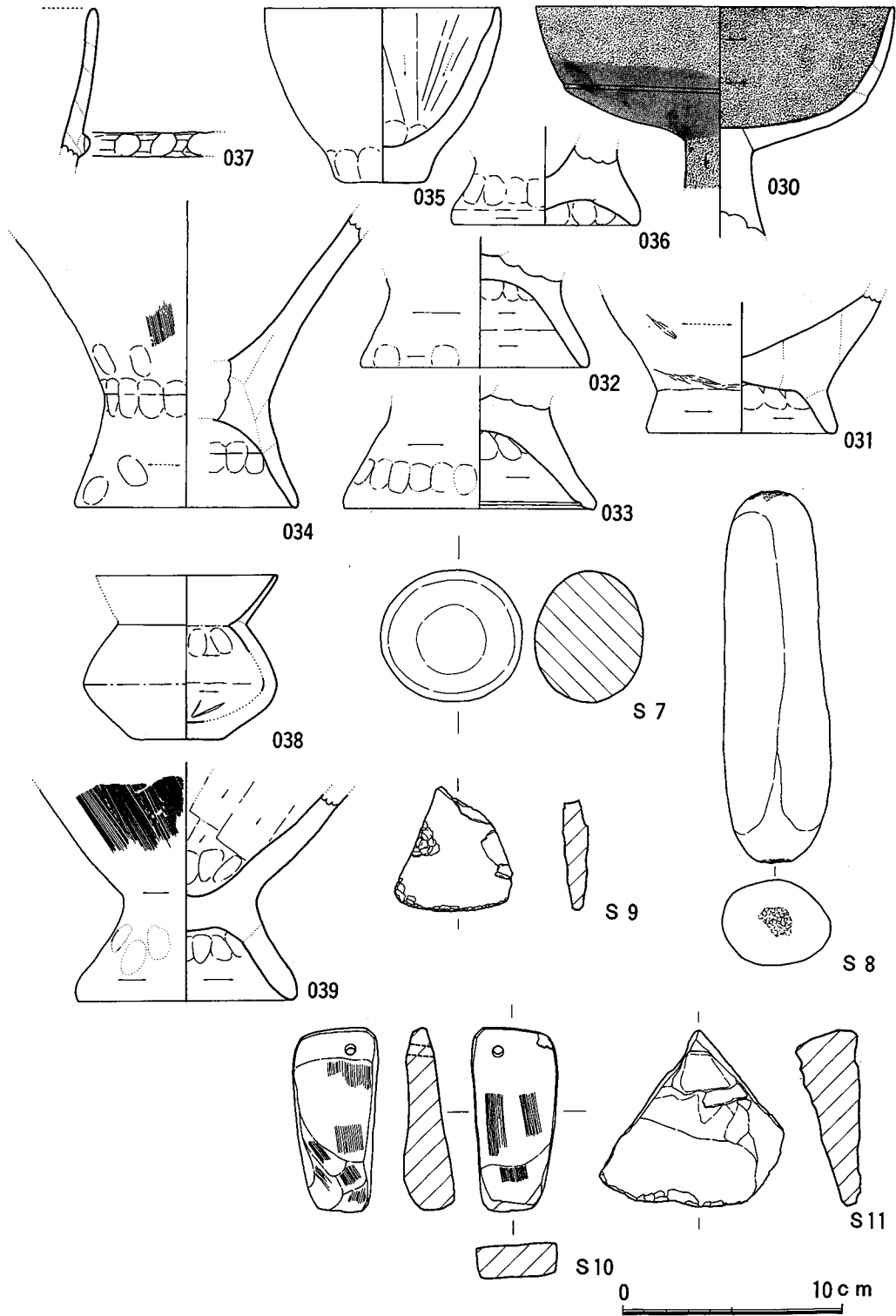
032は底径10.5cmを測り、内・外面とも横位のナデ調整によって仕上げられる。また、内・外面には指頭痕もかすかに残り、脚内面には粘土接合痕もみられる。033も甕形土器の脚台部分であり、全面ナデ調整が施される。脚内面裾部分には一条の沈線がみられ、全体的な作りは概していいいである。034は脚台部よりラッパ状に開く器形を呈す。随所に指おさえの痕跡が残る。035は椀形土器のような器形を呈し、復元口径約10.7cmを測る。底部はしっかりした平底であり、内器面はヘラなどによって平滑にしあげられる。

・27号住居址（第31図）

高圧電線管理設溝・2号溝・27号住居址に東・西・北の三方を切られ、南側は調査区域外にかかるため規模・プラン等は不明である。

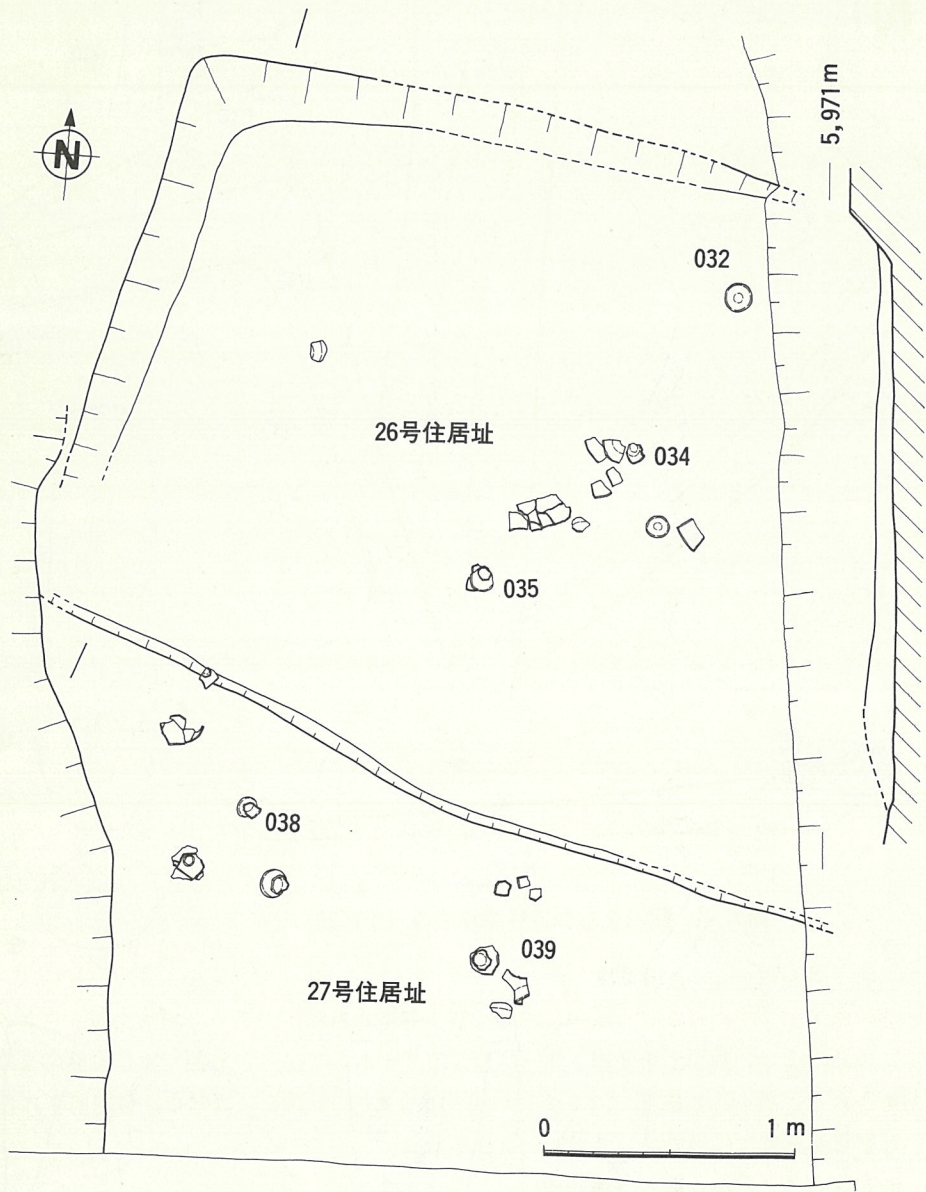


第29图 18·19·20·25号住居址出土遗物 (1 / 3)

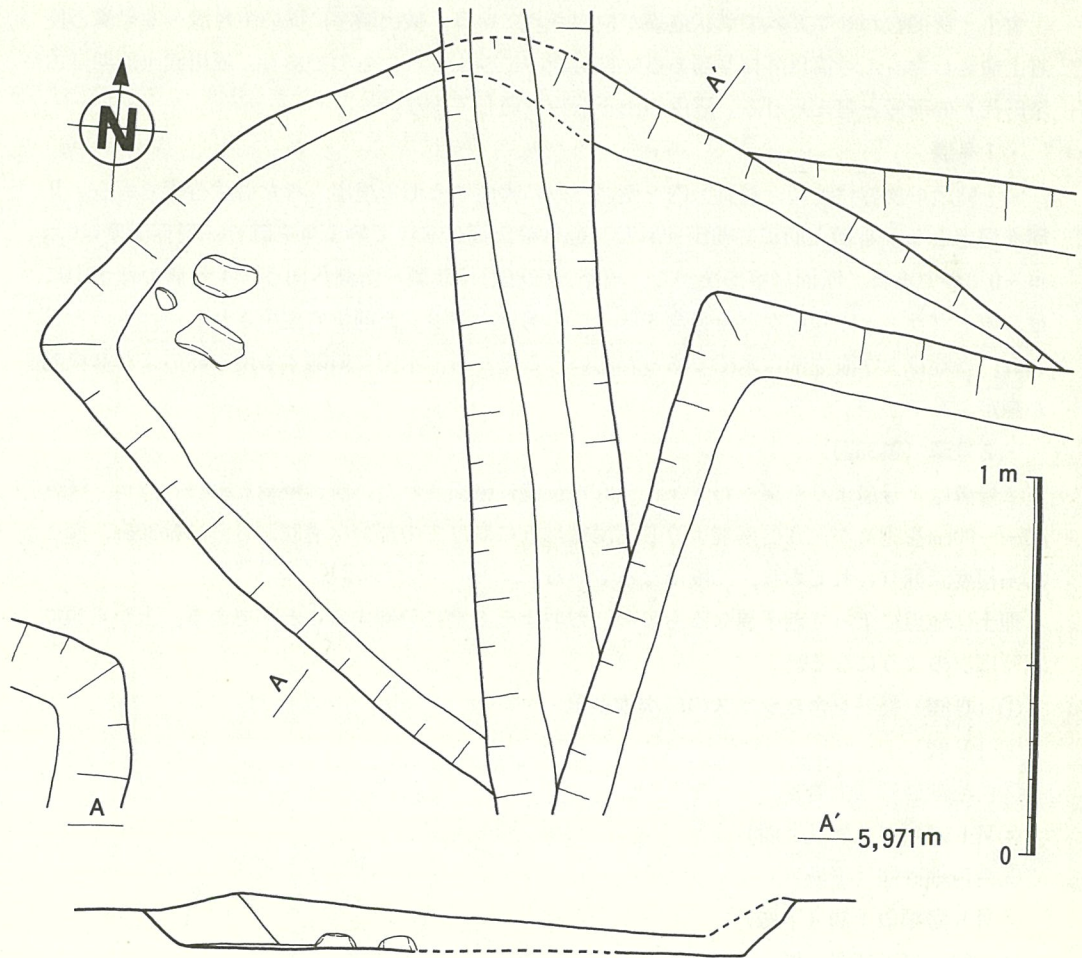


第30图 2・8・9・16・26・27号住居址出土遺物(1/3)





第31图 26・27号住居址实测图 (1/30)



第32図 配石をもつ方形掘り込み (1/20)

出土土器 (第30図 038・039)

住居址床面出土と确实視されるものに埴形土器・甕形土器底部がある。埴形土器 (038) は非常にきめの細かい精製土を使用。作りは概していねいであり、外面および底面にまでミガキが施される。甕形土器底部 (039) は復元底径9.8cmを測る。器壁は比較的厚手に作られていながらも調整は精緻でありていねいに作られる。

(ii) 配石をもつ方形掘り込み (第32図)

東西幅約1.8m・南北長2.0m以上を測る不整な長方形プランを呈する掘り込みである。西北コーナー部に長さ17cm・幅10cmほどの河原石2個と長さ7cm・幅4cmほどのやや小振りの石1個を配している。全形は判然としないが、おそらくは住居址と比べかなり小形の掘り込みであること、及び上述のように配石をもつことから住居とは異なる機能を果たしたものと考えられる。



### (iii) 溝状遺構

大小・新旧合わせて6本の溝状遺構が検出されている。検出順序に従い1号溝～6号溝と便宜上命名した。1号溝以外はV層あるいはVI層中に検出されたものであり、成川武土器期（古墳時代）の所産と考えられる。溝中の出土遺物は概して少ない。

#### ・1号溝

52・53区の境界付近に、調査区内を南北方向に縦断する形で検出された溝状遺構である。II層を埋土とし、III層上面にて検出された。幅は検出面において約1mを測り、現存深度は0.2m～0.3mである。断面U字形を呈し、流路方向(註)は北側～南側へ向う。1号溝の埋土中には、炭・ガラス・土管片などを包含する。この溝は大学設立直前まで使用されていたものと思われ、当地は大学設立前は水田であったということから、水田に附随する用水路のような機能が想定される。

#### ・2号溝(第33図)

2号溝は1号溝よりも東へわずかにずれた位置に検出された。溝は幅約1.8m～2.2m、深さ40cm～90cmを測るが、A区南端よりB区南端付近にかけての部分には溝底がさらに幅30cm、深さ30cm程度深掘りされており、二段になっている。

埋土は地点によって若干異なるものの、おおよそ6層に分層することができる。上から順に示せば次のようになる。

- ① (IV層) 軽石を含むシラスの二次堆積土
  - ② (V層)
  - ③ 白色細砂層(上層)
  - ④ VI b層類似土層(上層)
  - ⑤ 白色細砂層(下層)
  - ⑥ VI b層類似土層(下層)
  - ⑦・⑧ 最下部混土層
- ③～⑧が2号溝埋土に相当する。③と⑤、④と⑥は土質などについて差異は認められない。このことは当地が数回に渡り、それも短期間のうちに、洪水のような状況に見舞われたことを示すものと考えられる。

流路方向は北側→南側であり、A区中央付近において深さを除々に増し、C区に至っては一種の溜りのような状況をなす。

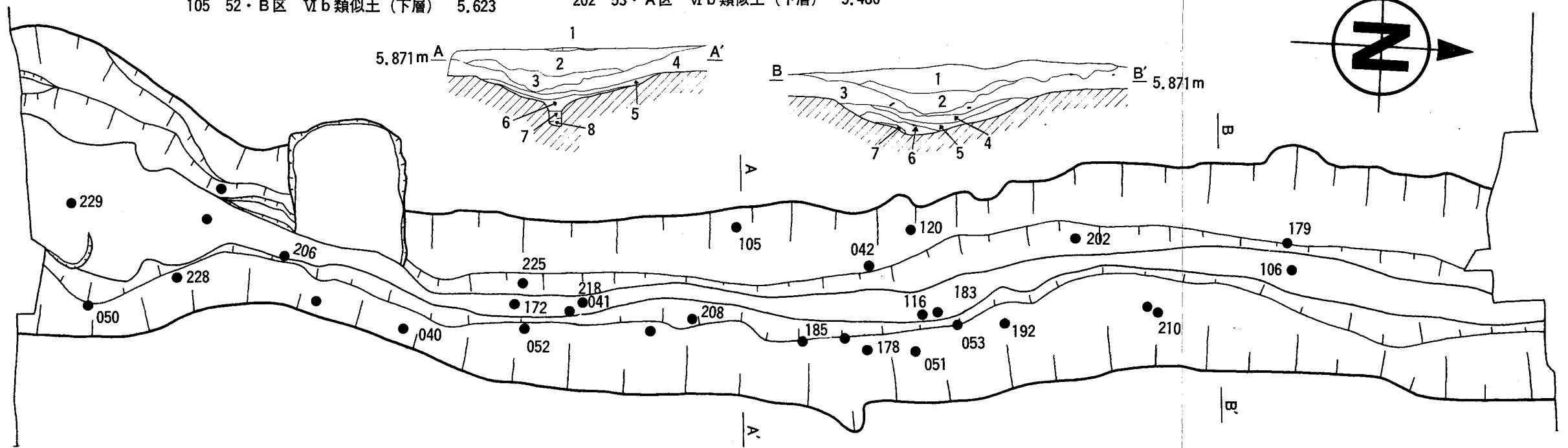
出土遺物は、成川式土器片を主体とし、他に須恵器片、石器などが出土している。しかしながら、いずれも小片が多く、そのほとんどが著しく磨滅している。出土状況も散発的であり、まとまりなく出土する。遺物は主に、③白色細砂層(上層)下部および、④VI b層類似土層(上層)上部、⑤白色細砂層(下層)下部およびVI b層類似土層(下層)上部、最下部混土層上面の3つの部位に特に集中してみられる。各層ごとにみられる遺物の間に時期差、型式差は特に認められない。



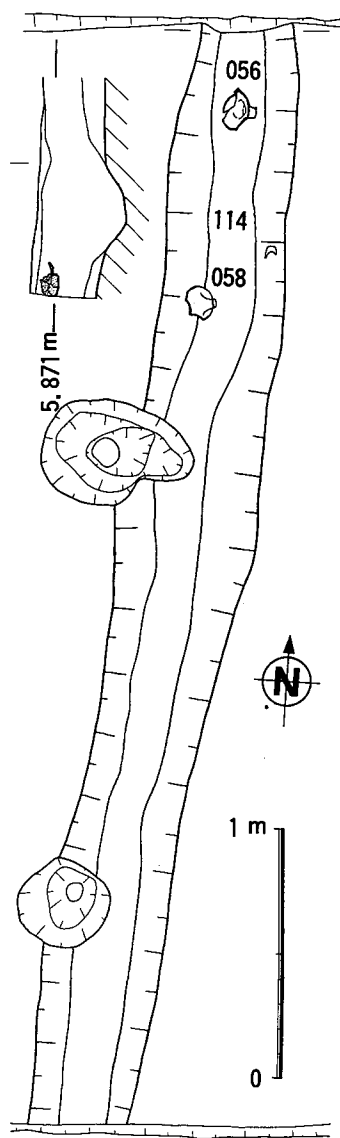
2号溝遺物分布図

040	53・B区	白色細砂層 (上層)	5.636	106	53・A区	Ⅵb類似土 (上層)	5.532	206	53・B区	白色細砂層 (上層)	5.616
041	52・B区	白色細砂層 (上層)	5.614	116	52・A区	Ⅵb類似土 (上層)	5.527	208	52・B区	Ⅵb類似土 (下層)	5.502
042	53・A区	白色細砂層 (上層)	5.535	120	53・A区	Ⅵb類似土 (下層)	5.531	210	52・A区	白色細砂層 (下層)	5.469
045	53・C区	Ⅵb類似土 (上層)	5.607	172	52・B区	Ⅵb類似土 (下層)	5.444	218	52・B区	白色細砂層 (上層)	5.571
049	53・C区	白色細砂層 (下層)	5.467	178	52・A区	Ⅵb類似土 (上層)	5.546	225	52・B区	白色細砂層 (上層)	5.624
050	52・C区	Ⅵb類似土 (下層)	5.591	179	55・A区	最下部混土層	5.589	228	52・C区	Ⅵb類似土 (下層)	5.595
051	52・A区	Ⅵb類似土 (下層)	5.472	183	52・A区	Ⅵb類似土 (上層)	5.336	229	53・C区	白色細砂層 (下層)	5.194
052	52・B区	Ⅵb類似土 (下層)	5.504	185	52・A区	Ⅵb類似土 (下層)	5.302				
053	52・A区	Ⅵb類似土 (下層)	5.472	192	52・A区	Ⅵb類似土 (下層)	5.531				
105	52・B区	Ⅵb類似土 (下層)	5.623	202	53・A区	Ⅵb類似土 (下層)	5.480				

・各項の末尾にしめした数字は海拔高である(単位・m)



第33図 2号溝実測図 (1/50)



・ 3号溝 (第13図)

調査区南西角において第Ⅵ層上面で検出した東西に続く溝で、その西端は明確にとらえることができなかったが、東西約7mにわたって検出した。溝は55区での幅約55cm、深さ20cmを測る。灰色砂質土層を埋土とし、断面は略梯形をなす。流路方向は西→東である。

遺物としては成川式土器小片 (いずれもかなり磨滅している) の他、須恵器小片が比較的多く出土するのが注意された。

・ 4号溝 (第34図)

調査区ほぼ中央、2号溝に並走する形で、第Ⅶ層上面にて検出された。検出面において幅約50cm、深さ約15cmを測る。北端部分は近年の攪乱穴により破壊を受けていたため不明であり、延長部分を検出することはできなかった。南端部においては、西側に若干カーブするきざしを見せる。あるいは6号溝としたものに接続するのかもしれない。

流路方向としては北→南の方向性をとらえることができる。灰茶褐色土を埋土とし、断面U字形を呈す。

・ 5号溝 (第27図)

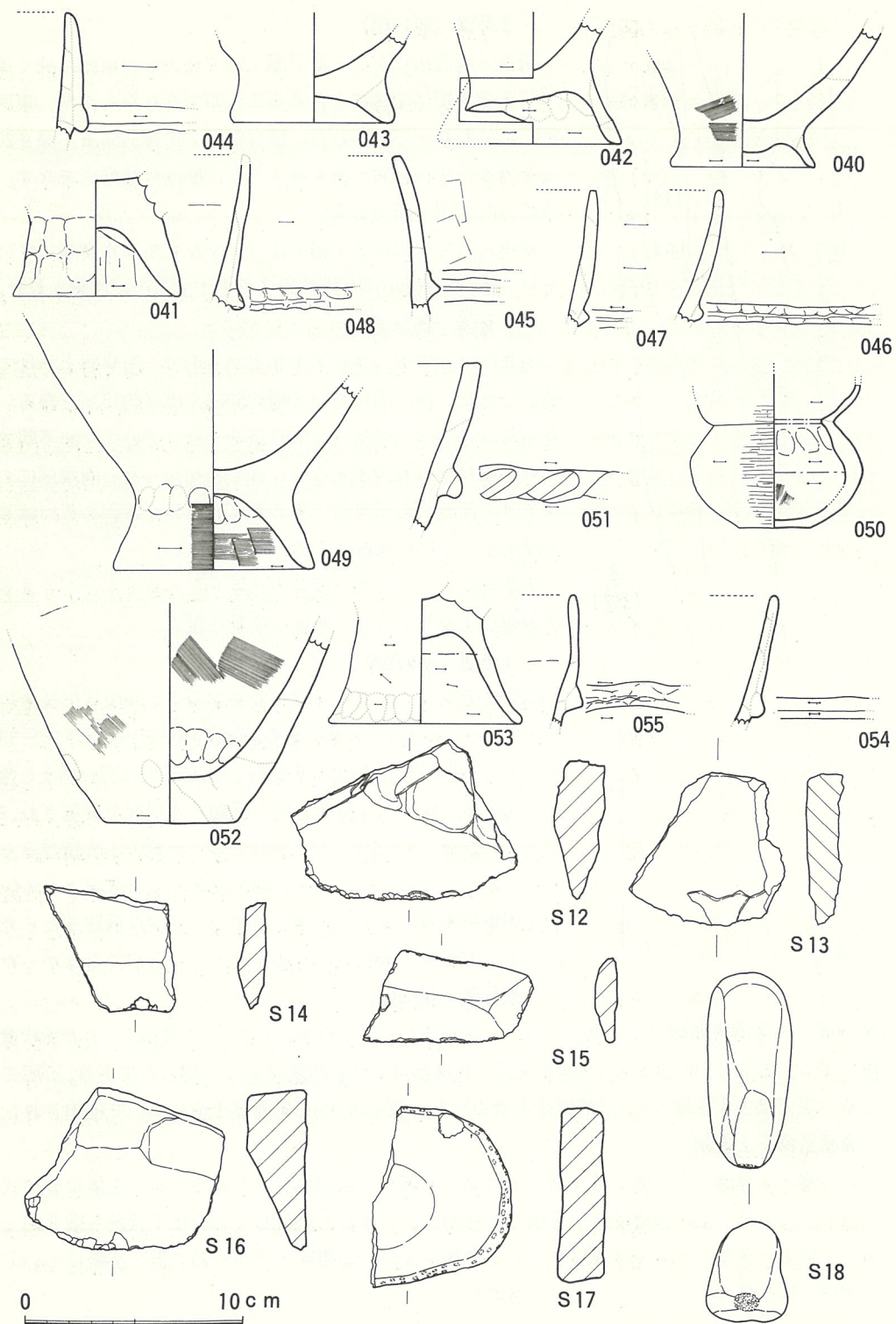
調査区東側、やはり2号溝と並走するような位置に長さ約13mに渡って検出された溝である。溝幅約40~50cm、深さ20~30cmを測る。埋土は灰茶褐色土を基調とし、部分的に白色粘土を含む。北端部において、2号溝方向へ屈曲する状況が確認され、この部分に磨滅した土器小片を中心とした土器の小集積がみられた。かなりの部分について住居址貼床粘土と溝埋土との区別が困難であり、そのため大半の部分で確実な溝底をとらえることができず、流路方向の検証は行うことができなかった。

・ 6号溝 (第13図)

第34図 4号溝実測図 (1/30) 54-C区東側において長さ約3mにわたり検出された溝状遺構である。幅約0.7m、深さ約0.3mを測る。北端部は4号住居址によって切られており、不明である。灰茶褐色土を埋土とし、成川式土器小片を少量包含する。第Ⅶ層上面において検出された。

溝状遺構出土遺物

2号溝・3号溝・4号溝・5号溝・6号溝の各溝から遺物の出土がみられる。主体は成川式土器小片であり、他に須恵器片・石器などがある。いずれも磨耗しており出土状況も散発的である。以下、各溝ごとの出土遺物について概観するが、須恵器・手づくね土器・突帯については別項で取り扱っているのでここでは触れない。



第35图 2号沟出土遗物 (1/3)



## 2号溝出土遺物 (第35図)

土器 (第35図040～055)

各層ごとの出土遺物番号を示せば次のようになる。

白色細砂層 (上層) 040～044

VI b層類似土層 (上層) 045～048

白色細砂層 (下層) 049～053

VI b層類似土層 (下層) 054・055

042は甕形土器の脚台片である。一部、脚台部分が接合部からはずれており、接合状況を観察することができる。043もまた、脚台であるが、外面に丹が塗られている。044は甕形土器の口縁部片である。口縁端部はわずかに内湾する。たれさがり気味のだれた三角突帯を付し、口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させている。049は甕形土器の脚台部分であるが、脚台内面に刷毛ナデ調整の調整原体痕が明瞭に残る。050は、非常にきめの細かい胎土を使用し、全面でいねいな横位のミガキが施される埴形土器である。口縁端部が欠損する。

石器 (第35図S12～18)

縦断面楔形敲打用石器 (S12・14・16)

S9・10等と同様に身の薄い方の縁辺部を利用して敲打に用いられたと考えられる。いずれも縁辺部に二次的な剝離や敲打痕が認められる。

石皿 (S13)

小片でありまた原状をとどめているものの片面のみであること等のために器種を同定し難いが、残存部については全面にわたって磨痕がみられほぼ平坦な面をなしていることから、とりあえず石皿として記載する。

剥片利用石器 (S15)

手ごろな薄い石片を利用したもので一部折損している。石片周囲に生じた鋭い縁辺部のうち、上・下縁については刃潰し調整が施されており、おそらくはこの部分を把握部分とし右側縁部から下縁右端部にかけての部分をも刃部として利用したものと考えられる。

凹石 (S17)

平面形小判形を呈すると思われる偏平な凹石である。片面のほぼ中央部にごく浅い凹部が形成されている。

敲石 (S18)

掌にちょうど収まるぐらいの大きさの自然石をそのまま利用した敲石である。下端部にのみ敲打痕が認められる。

## 3号溝出土遺物

遺物としては、成川式土器小片の他、須恵器小破片が比較的集中して出土しているが、いずれも磨耗が著しく、凶化できるものは皆無であった。

#### 4号溝出土遺物（第36図・第43図）

土器（第37図056～058・第44図114）

遺物としては成川式土器片が主体をなすが、磨滅した小破片が大部分を占め、出土量も多くない。図化できるものとして高坏脚部2点（056・058）、鉢形土器底部片1点（057）、手づくね土器1点（114）がある。056・058は共に溝底面に密着した形で検出された。両者とも全面に磨滅が進んでいる。特に056に至っては欠損部の磨滅が特に著しい。

#### 5号溝出土遺物（第36図）

土器（第36図059・062・063）

出土遺物としては磨滅土器小片が多数出土している。それらの中で、比較的破片が大形で、図化できるものについて掲載した。059は鉢形土器である。脚台部分は欠損している。内・外面とも刷毛ナデ調整によって仕上げられる。062は一種のミニチュア土器であろうと思われる。作りは非常にていねいであり、該期の甕形土器の特徴をよくとらえている。刻み目断面はU字形を呈し、刻み凹部には布目圧痕がみられる。063は甕形土器の口縁部片であり、胴部最大径の位置に煤の付着がみられる。

石器（第36図S19）

軽石製品（第36図S19）

長さの短い横断面三角形の素材の一側面に幅1.5cmほどの沈線が一本施されている。

#### 6号溝出土遺物

磨滅した土器小片が少量ながら出土している。すべて磨滅が著しく、図化できるものは1点もない。

（註） この場合の流路方向とは水が流れることを仮定した場合に水の流れる方向を示すものであり、必ずしも溝使用時に水が流れたとは限らないということを断っておく。

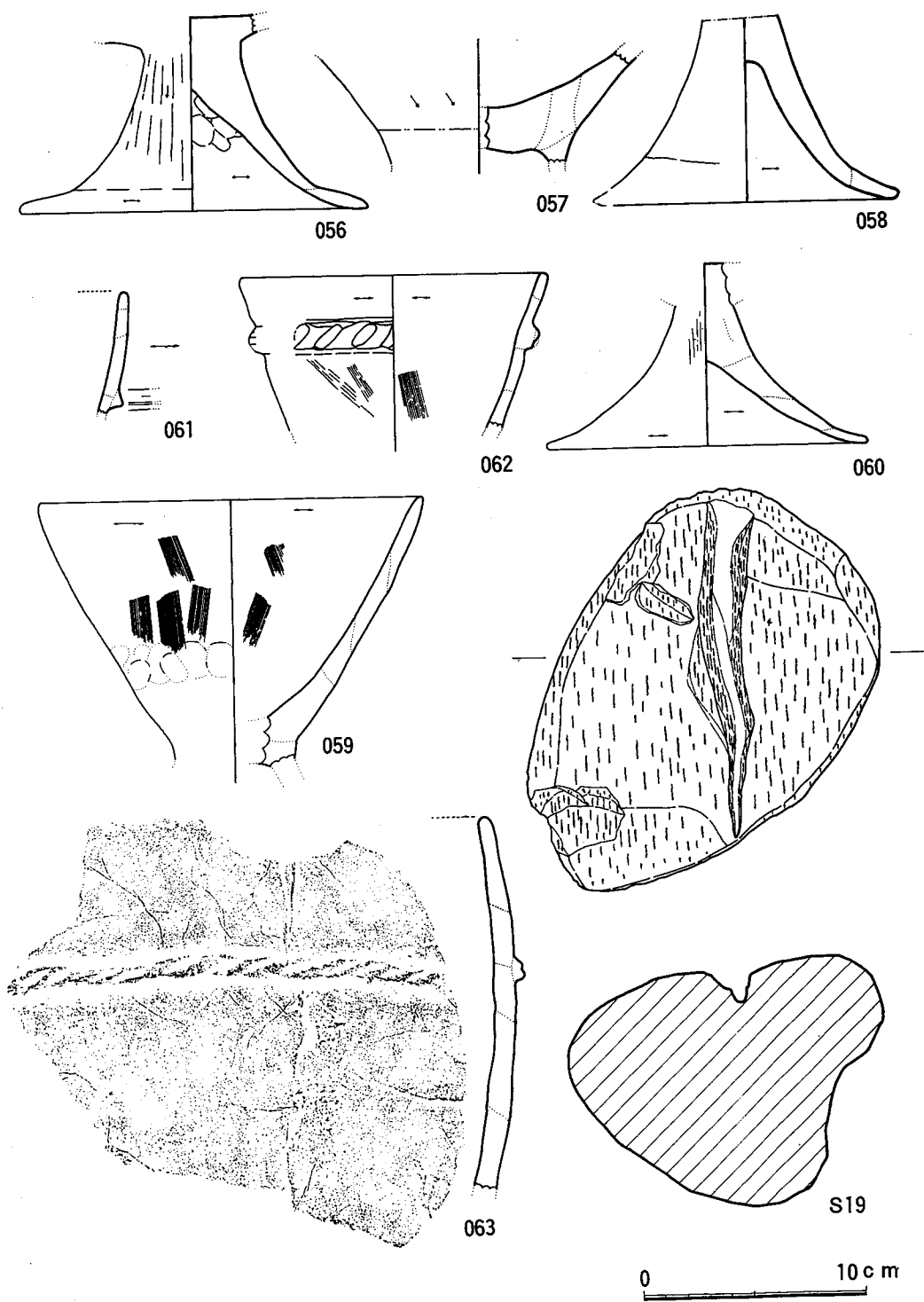
### (5) 遺構外出土遺物（第37図～第39図）

#### 1 土器

本遺跡出土遺物の主体をなすものは5～6世紀の成川式土器であり、その他に石器類・須恵器・少量の弥生土器片がある。いずれも小破片が大部分を占め、摩耗が著しい。2cm×2cm程度の土器破片がかなりの量出土している反面、まとまった形で出土したものは少い。これは層堆積時の環境などに起因すると思われる、本調査区の遺物出土状況の一特性としてとらえることができる。

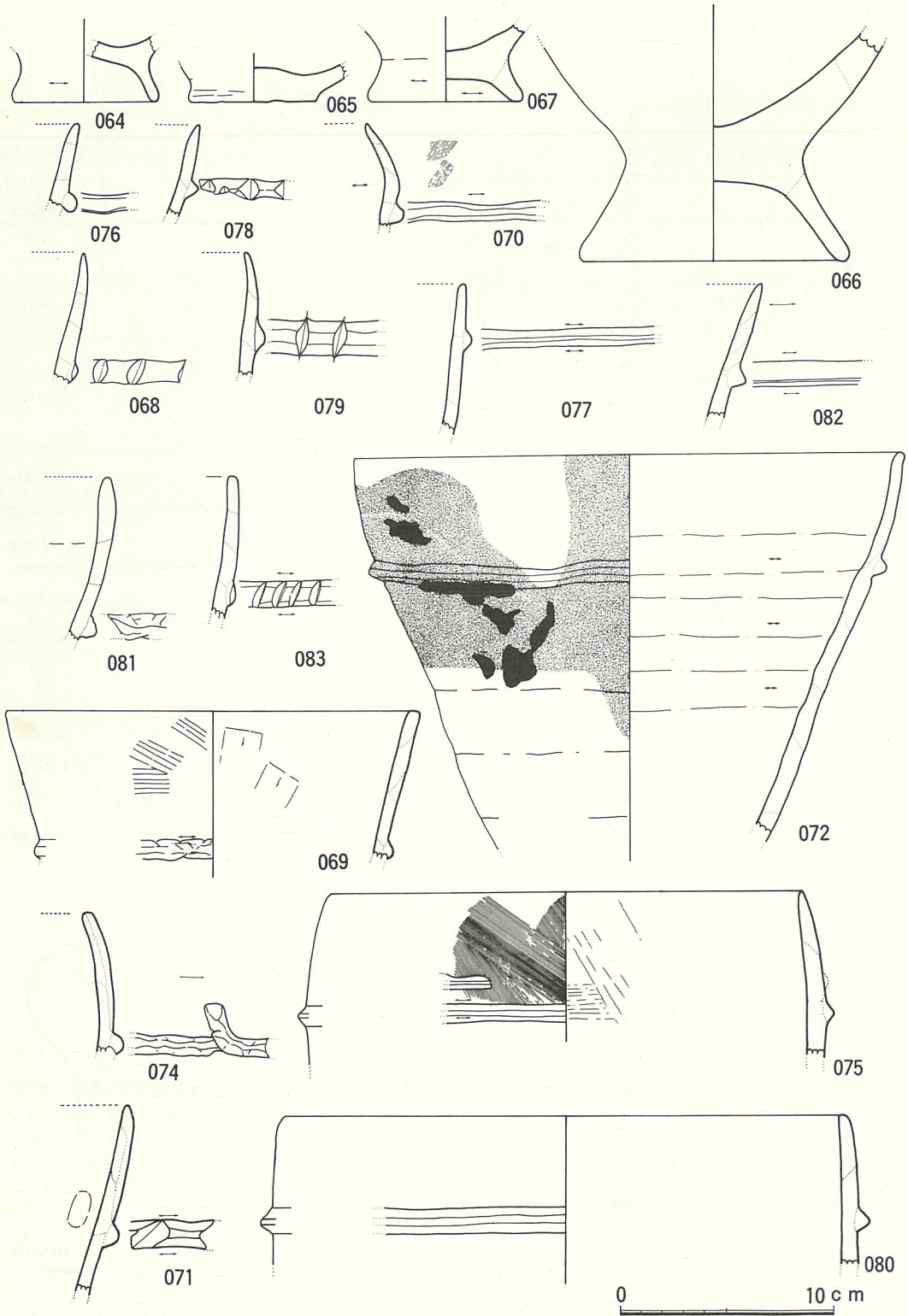
##### ① 第Ⅲb層出土土器（第37図）

土師器片が2点出土している（064・065）。064は非常にきめの細かい精製土により製作された脚台片である。焼成・色調などにおいて、一般的に「成川式土器」と呼ばれているものとは趣を異にする。065もまた精製土により作られた土師器の底部片である。底面にはヘラ切痕のようなものがみられ、外器面にはヘラ状工具様のものによる擦過痕が認められる。064・065両者とも非常に磨滅している。

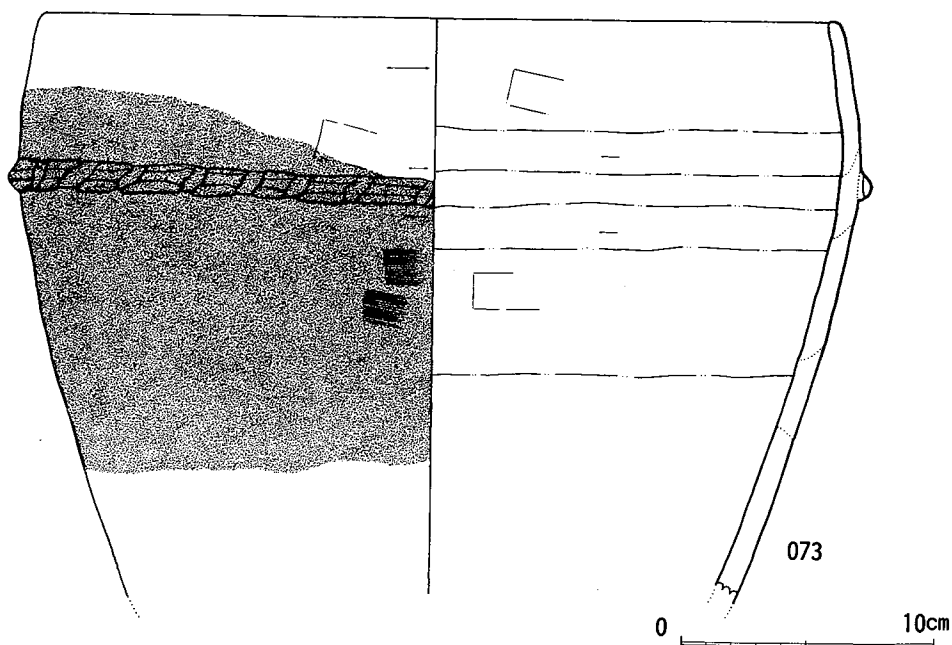


第36图 4·5号沟出土遗物 (1/30)





第37图 Ⅲb層・Ⅴ層・Ⅵ層出土土器 (1/3)



第38図 VI層出土土器 (1/3)

② 第V層出土土器 (第37図)

そのほとんどが激しく磨滅しており、かろうじて図化し得たものはわずかに2点のみである(066・067)。066は鉢形土器の脚台部分であるが、ある程度まとまった形で検出されたにもかかわらず、全面にわたり磨滅している。そのため、器面調整など詳細についてはまったく不明である。067は脚台片である。これもまた、全面的に磨滅が進んでおり、細部調整などを観察することはできない。

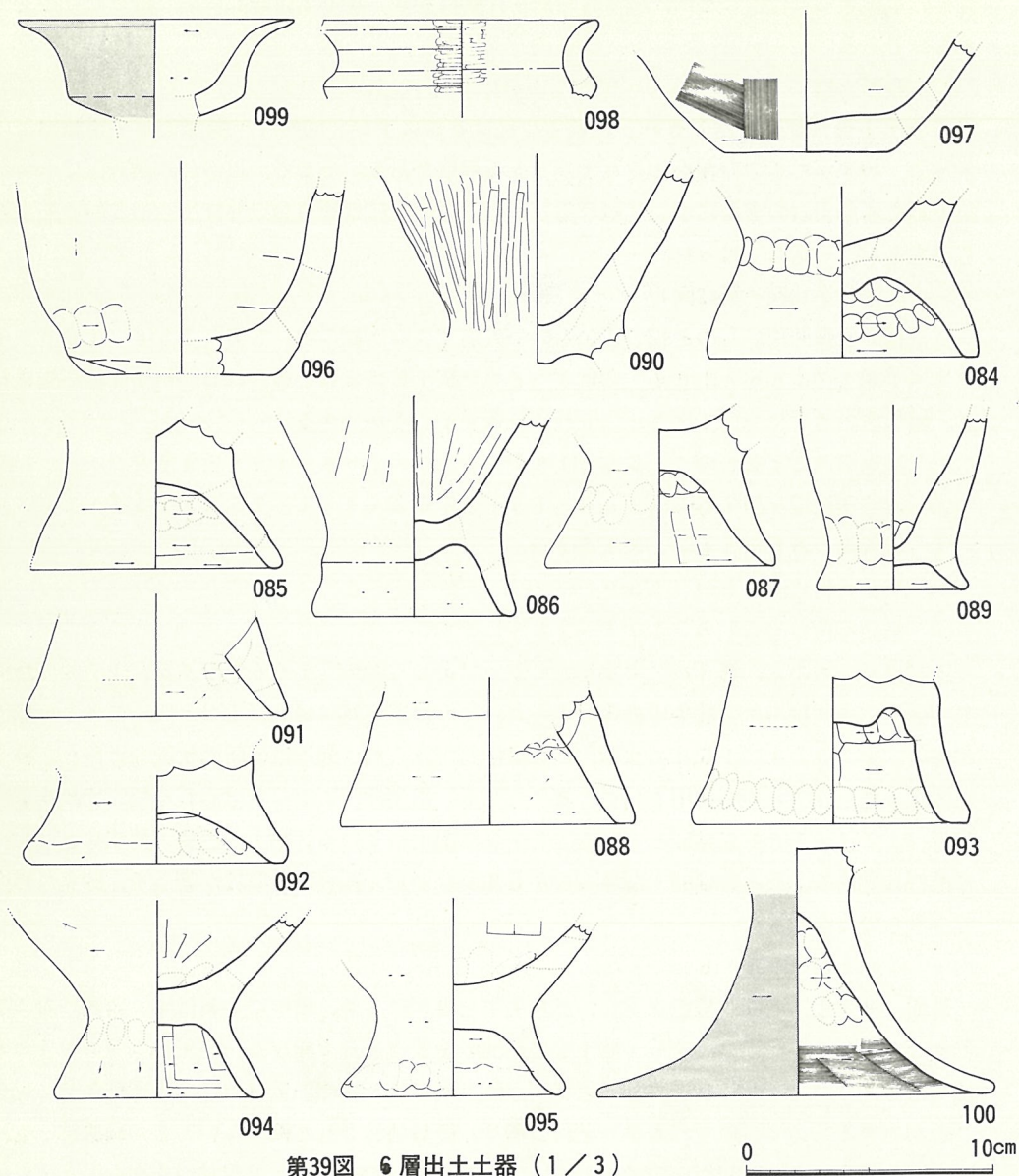
③ 第VI層出土土器 (第37図～第39図)

a 甕形土器

068～083は甕形土器の口縁部である。口縁部が直線的に開くもの(直口型口縁)と口縁端部が内湾するもの(内湾型口縁)によって占められる。

072は、復元口径約25.8cmを測る。わずかに内湾した口縁部を持ち、非常にシャープさを欠く三角突帯を付す。外器面には煤の付着がみられる他、部分的に炭化物の付着が認められている。この甕形土器片は包含層中にあり、内器面を上方に向け、略水平位で出土した。そのためであろうか、外器面にはまったく風化の痕跡が認められないのと対照的に内器面は風化作用を受けており、そのため細部調整を観察することはできない。077は直口型口縁・三角突帯を持つ甕形土器の口縁部であるが、他の土器に比して突帯の貼付位置が高所にある点で目を引いた。073は復元口径31.6cmを測る内湾型口縁を持つ甕形土器である。底部を欠く。現存率が非常に高いにもかかわらず、破片接合面はひどく磨耗している。すべて内器面を上方に向け、





第39図 6層出土土器 (1/3)

破片が折り重なるような状況で出土した。外器面には煤の不着がみられる。。

084~095は本調査区内から出土した中空の脚台付底部であるが、この部分のみでは甕形土器と鉢形土器との区別が困難であるのでここでは一括して取り扱った。形態もバラエティに富んでおり、脚裾部が内湾するもの(084)・外開きになるもの(086・087・089・091・092・093・095)などがある。また、084・086のように脚内面に突起様のコブを持つものも少量ながら認められる。086は脚裾部の粘土接合部に段を有する。093は底径11.3cmを測る脚台付底部であるが、脚内面に横位の粘土接合痕の他に縦位の接合



痕を観察できる。このことは、粘土帯を鉢巻き状に巻き、甕形土器底部に貼り付けたことを示すものである。

#### b 壺形土器

壺の出土量は甕形土器のそれと比較するとはるかに少い。底部片・胴部突帯・頸部突帯によって、わずかにその存在を知ることができる程度である。そこで、以下に本調査区において出土した壺形土器の突帯について触れる。なお、この中には第Ⅵ層以外で出土しているものも若干あるが、一括して扱った。

##### ・ 突帯（第40図～第42図）

突帯幅の比較的狭いものと幅の広いものに大別できる。幅の狭いもの（158・160・162・164・165・167）にはすべてヘラ状工具によると思われる斜格子沈線が施される。幅の広いものについてはさらに5種に分類することができる。

- ① 沈線のみによるもの（155・161・163・168・169・170）
- ② 斜格子沈線を施すもの（150・151・153・154・156・157・173）
- ③ 竹管によるもの（171・172）
- ④ 半載竹管によるもの（159）
- ⑤ 指頭押圧によるもの（174～185）

上記以外のものに、横「ハ」の字形をモチーフとしたもの（166）がある。166の断面V字形を示す沈線内には数条の細線がみられ、刻み目施文具は刷毛目工具と同一である可能性が強い。173および150の沈線内には繊維痕がみられ、刻み目の断面状況などから、施文原体には縄紐状のものが使用されたと考えられる。指頭押圧によると思われる幅の比較的広い突帯（174～185）は52-A・A区を中心に出土している。胎土・色調・焼成などはすべて酷似しており、あるいは同一個体なのかも知れないが、割れ口の摩耗が著しく、確実に接合できるものはなかった。

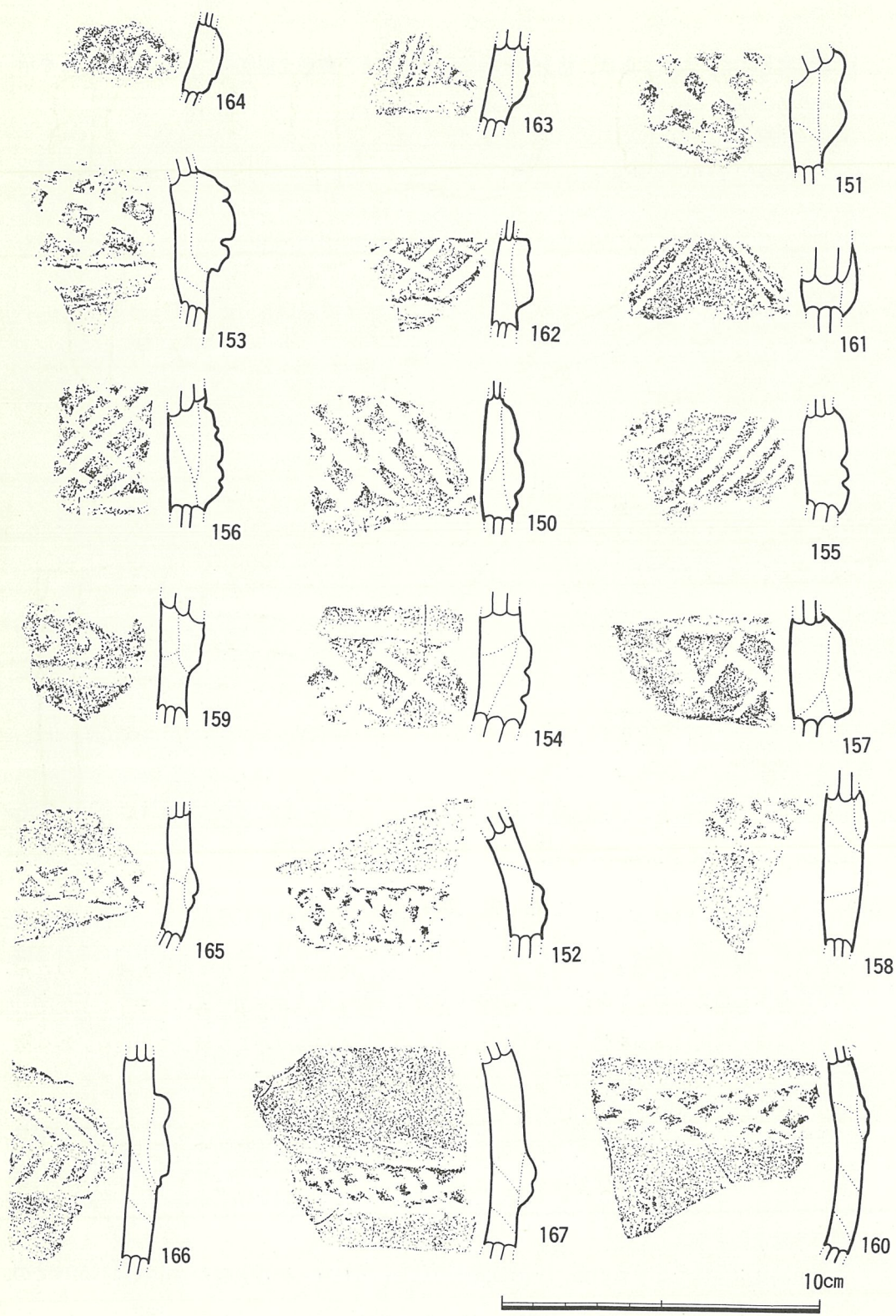
##### ・ 不明土器片（186）

外面・淡黒色、内面淡橙色を呈し、三角突帯を縦位に4条、横位に3条付す。器種、および器部など一切不明。色調・焼成・胎土などが他の土器と著しく異なる。鹿児島県内における縦位突帯を貼りつける例としては、日置郡吹上町入来遺跡<sup>(1)</sup>・薩摩郡里村中町馬場遺跡<sup>(2)</sup>などに見ることができるものの、いずれも単一貼付であり、複数貼付された例はない。また両遺跡とも、弥生時代中期に属する甕形土器にみられる。今後の資料の増加を待ち、再度検討を加えたい。

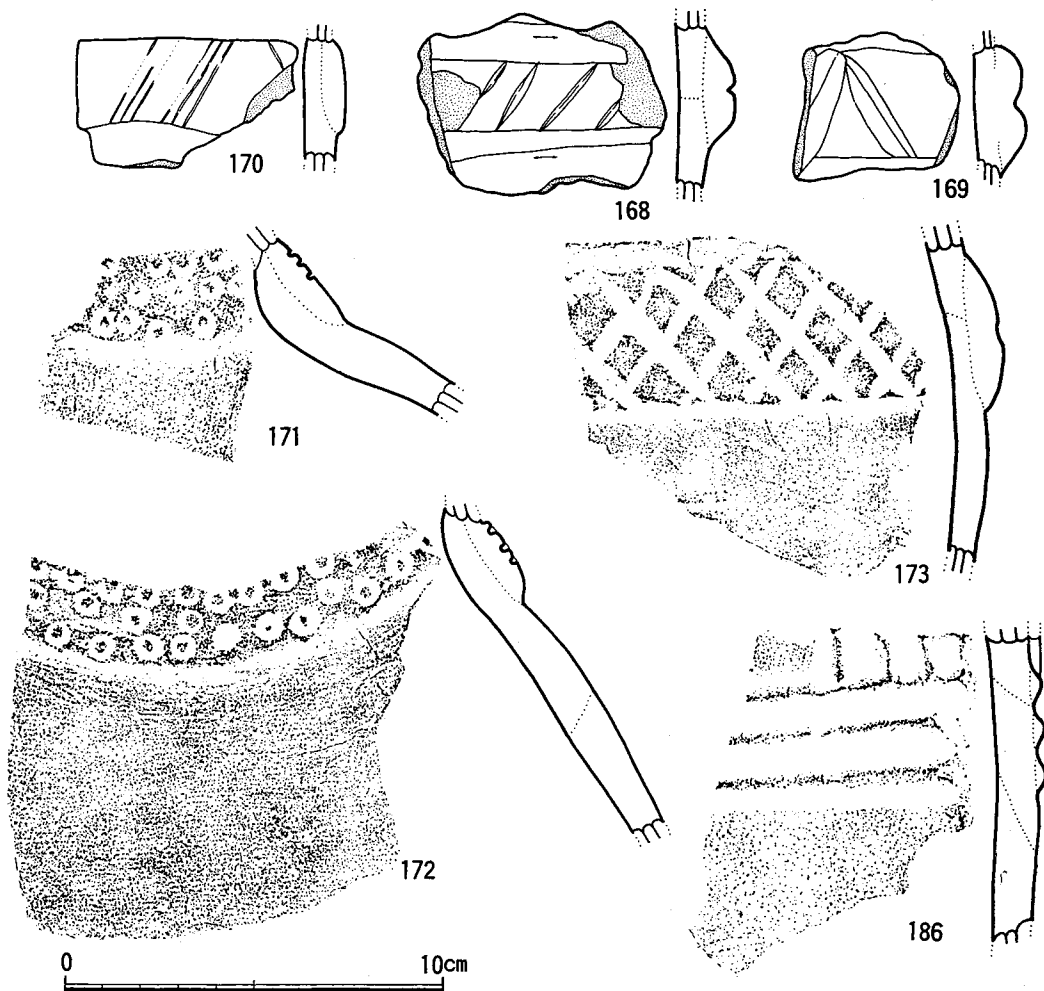
#### c 高坏形土器（第39図）

本調査区では、高坏形土器破片（主に脚柱部）が相当数出土しているものの、小破片ばかりであり、全容を知り得るものは少い。住居址中央炉に伴う高坏、あるいは構状遺構出土のものについては、すでに前章で取り扱ってあるので、ここではそれ以外のものを中心に説明を加えていくことにする。

出土高坏の主体をなすものは、坏部が椀形をなし、脚柱部との接合部から口縁部へかけての



第40图 突带 (1) (1/2)

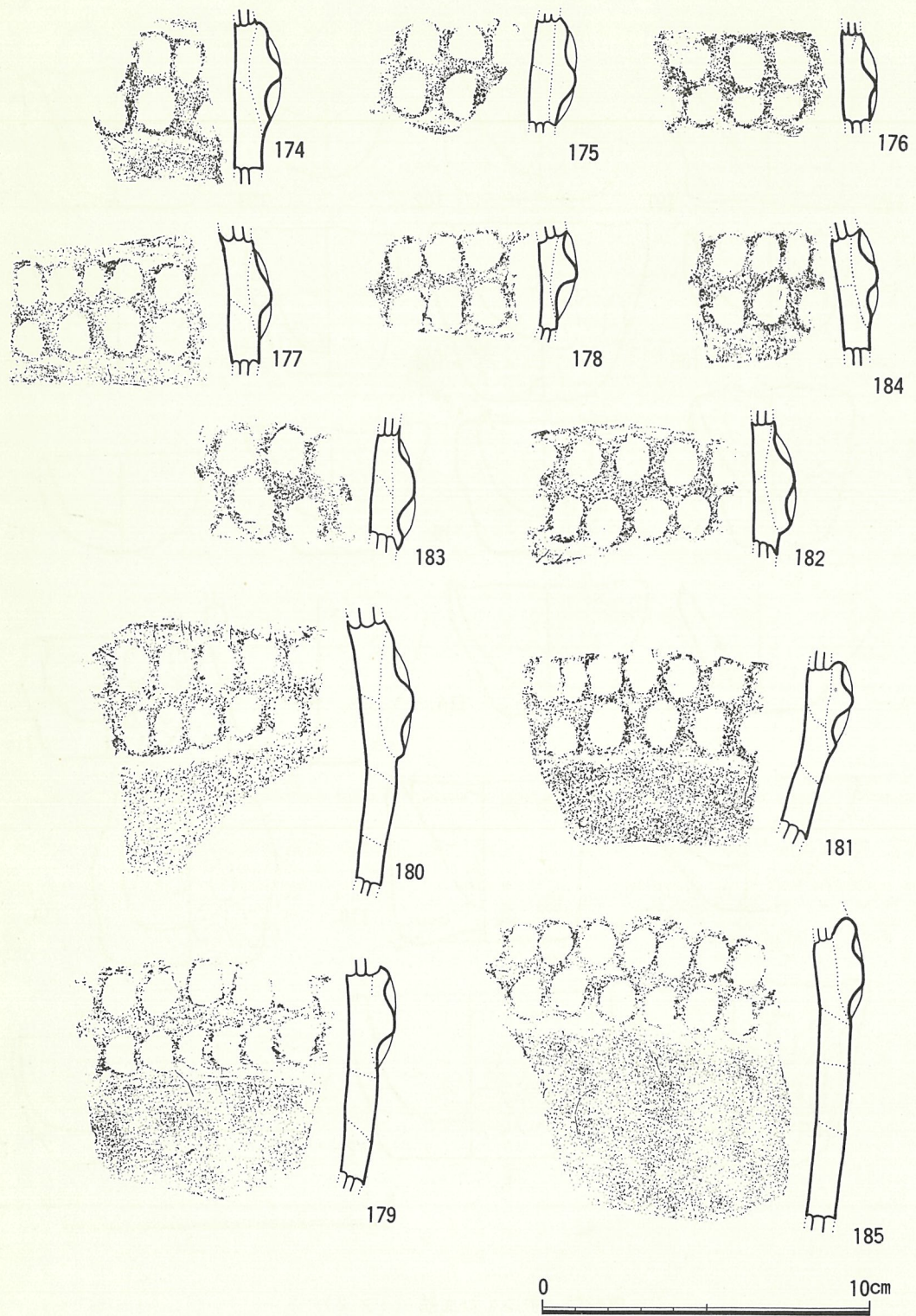


第41図 突帯 (2)

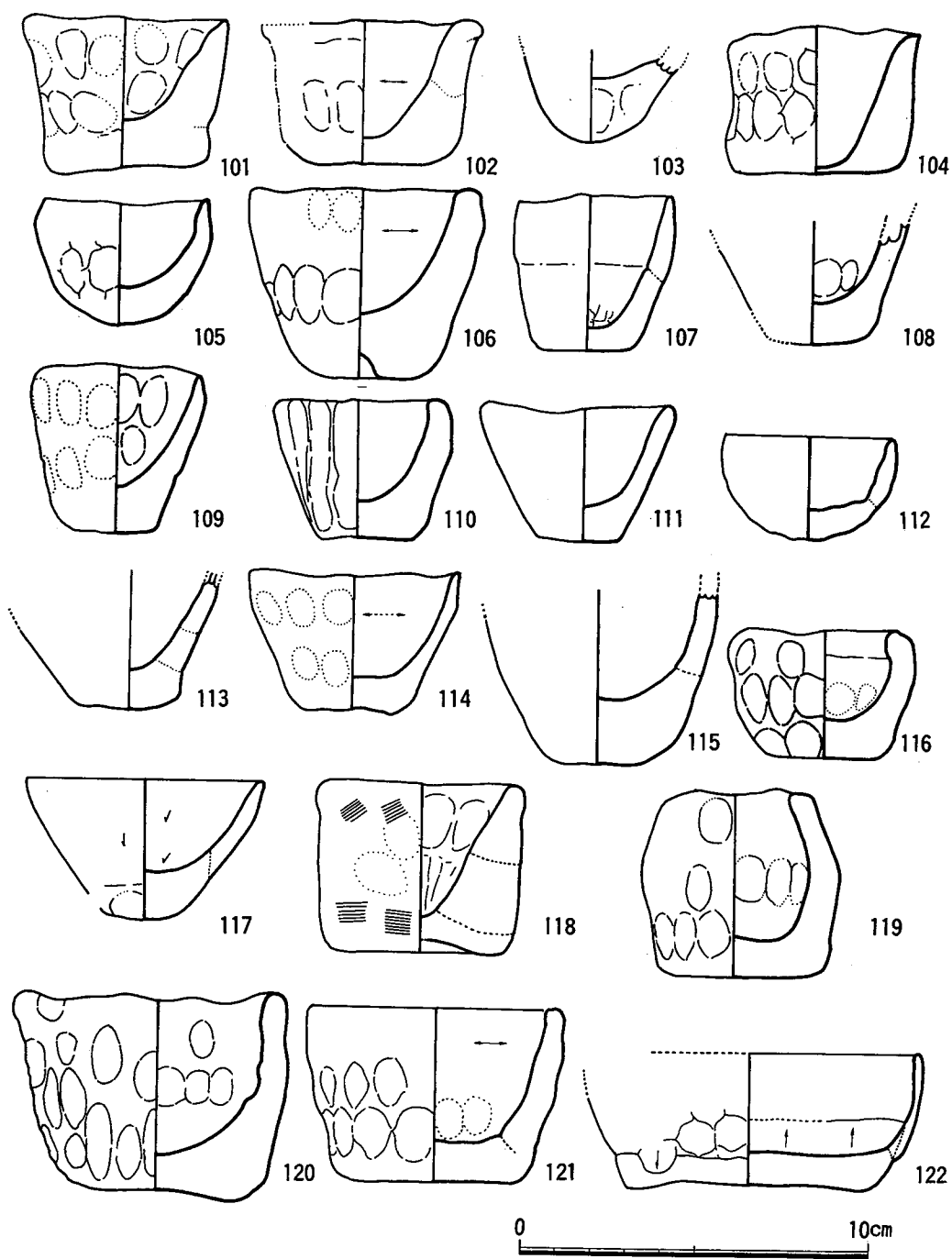
立ちあがり部に凹線を施すものである(016など)。坏部が楕形をなす高坏の他に少量ながら、坏部の稜線から大きく外反し、口唇部が舌状にすぼまる形状を示すものが出土している。098は復元口径11.8cmを測る。内外面とも横位のていねいなみがきが施されている。丹は塗られていない。099は復元口径11.2cmを測り、口縁部は坏部稜線から大きく外反する。口唇部は舌状を呈し、外面には丹が塗られる。

脚部については、100のように、脚柱部と坏部との接合部からゆるやかに外開きとなり裾部に至るものが最も多い。他種脚部は、破片からその存在を知ることはできたが全形をとらえることのできるものはない。



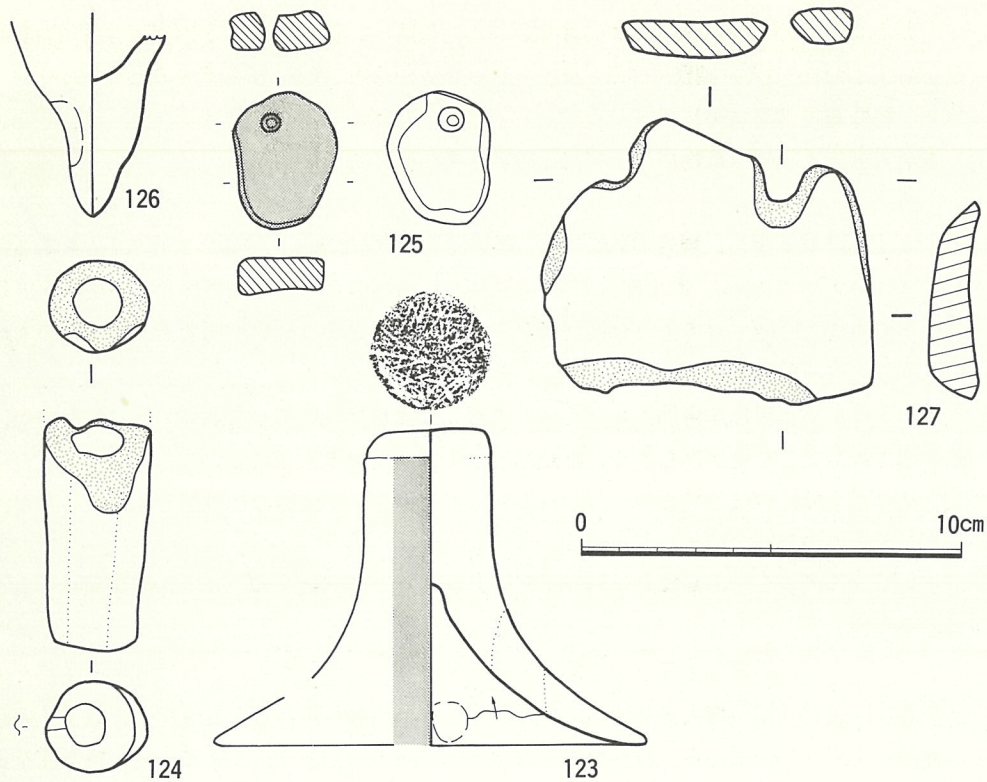


第42图 突带 (3) (1/2)



第43図 手づくね土器 (1 / 2)





第44図 特殊遺物 (1/2)

d てづくね土器 (第43図)

11個の完形品を含め、総計21個の出土をみた。底部が平底のもの(101・102・104・106~111・113~116・118~121)と丸底気味の尖り底を呈するもの(103・105・112・117)に大別することができる。

102は安定した平底を持ち、粘土帯の折り曲げにより、口縁部を形作る。外器面には指頭による調整痕を明瞭に残す。106は口径6.7cm、器高5.5cmを測る。底部中央に穿孔が認められるが貫通はしていない。また、胴中位にかすかな段を有し指頭圧痕がこの位置に集中する。107もまた、胴中位にかすかな段を有し、内面のこの部分に対応する部分に接合痕がみられる。このような106・107にみられる状況は、109・112・114・117・118・119・121などにもみられる。特に117においては外面にも接合痕がみられるばかりでなく、断面でも接合状況の観察を行うことができる。以上のことは、本調査区出土のてづくね土器が、器面調整などの調整段階においては従来のてづくね土器と同一歩調をとりながらも、製作技術の上では一種の「輪積み」技法を並用していることを示唆している。今後、このような状況が成川式土器文化圏内において普遍的にみられる現象なのか、それとも大学構内遺跡内にのみ特徴的に存在するものなのかを十分検討していかなければならない。



122は手づくね土器ではないが、本項目にて、一括して取り扱った。円盤状を呈す底部に粘土帯を貼り付け作られる。調整は非常に雑であり接合痕が明瞭に残る。2号溝中の出土である。

e 特殊遺物 (第44図)

本調査区出土の特殊遺物には土製品と線刻を持つ高坏脚部とがある。

土製品

124は筒状を呈し、現存長約6.2cm、幅は大きい方が2.8cm、小さい方が2.4cmを測る。穿孔孔径は最大部で1.3cm、最小部分で1.1cmを測り、磨滅のため器面調整などは不明。下方端部には不明瞭ながら紐ずれのような浅い溝がみられる。用途等は一切不明である。類似のものが、揖宿郡喜入町「野畑遺跡」<sup>(3)</sup>にて出土している。

125は丹塗土器片を再加工したものである。全面かなり磨滅しており判然としないが、一部に紐ずれのような跡がみられる。垂飾品としての利用が考えられる。

126も全面に磨滅しており、詳細は不明である。杓子型土器の柄の部分と解釈したが、あくまで可能性の範囲に留めておきたい。

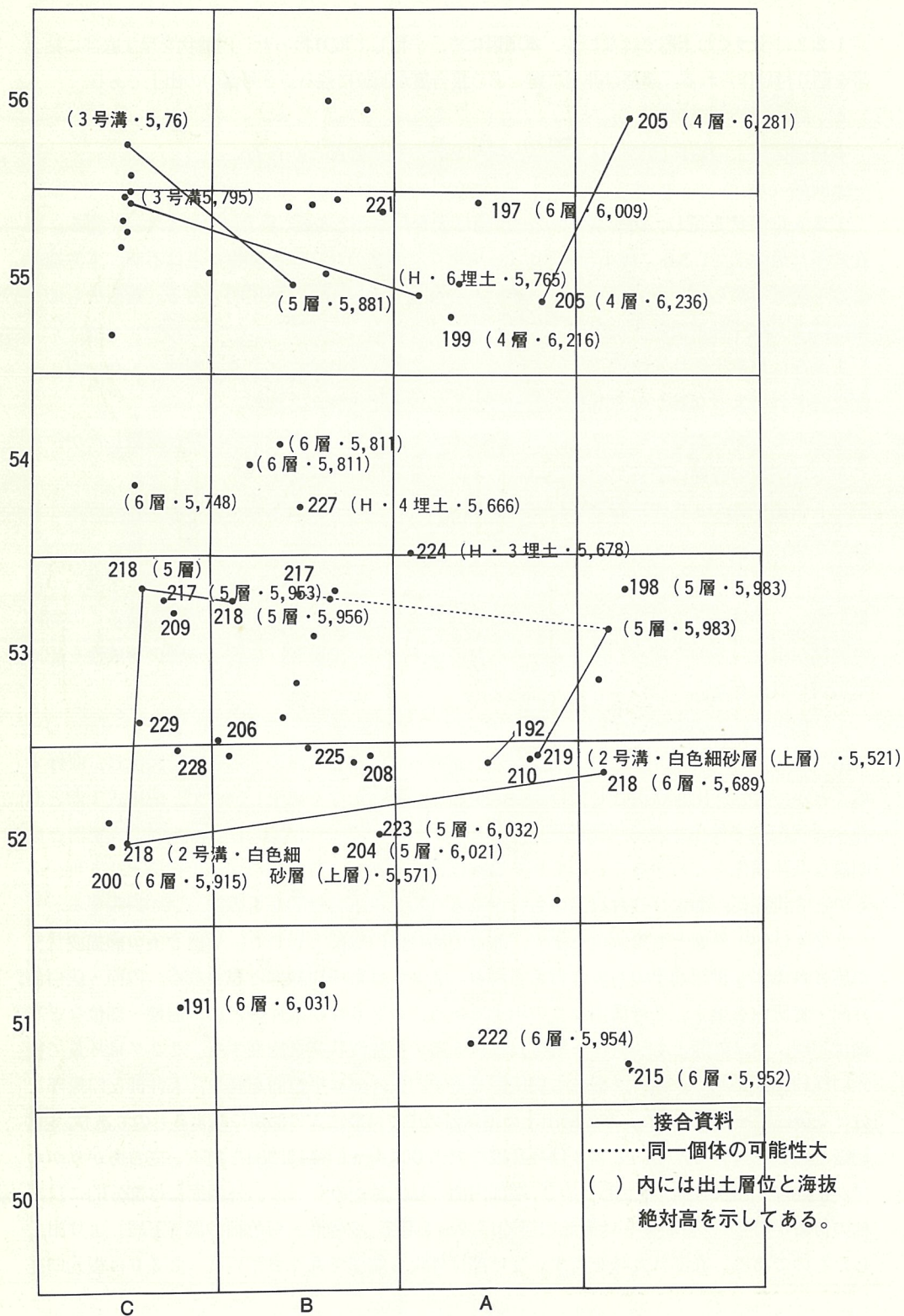
127は径約7ミリの補修孔を持つ土器片である。全面磨耗が著しく、詳細を知りうることはできない。

123は、高坏の脚部上面(接合部)に線刻を施したものである。これは脚部と坏部との接合に際し、接着面積の増大を意図つけられたものと思われる。しかしながら、数多くの高坏の脚部が出土していながら、線刻がみられるのは1点のみであり、ここに一種の特異性を認め、本項目に収録した。

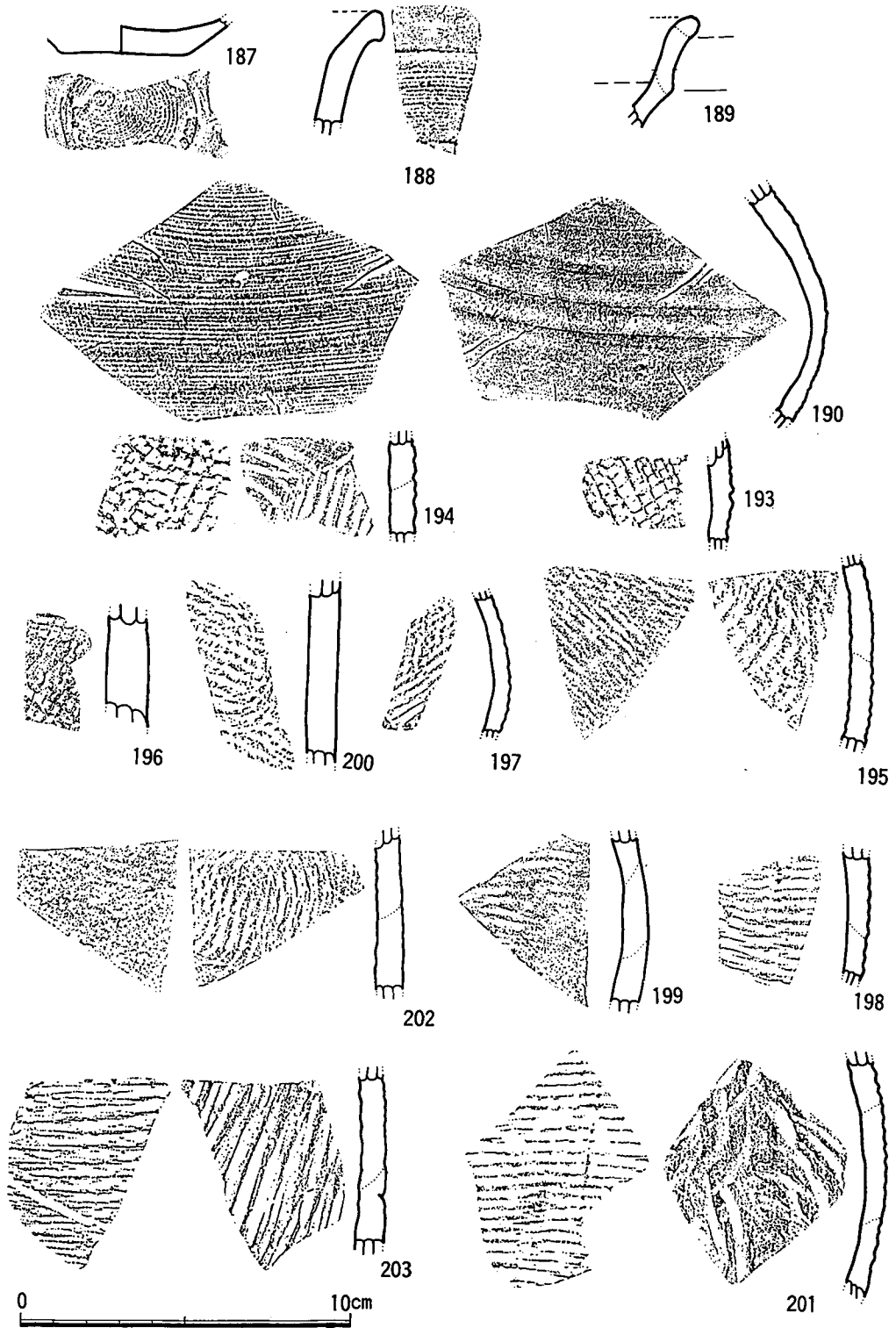
f 須恵器 (第46図～第49図)

第VI層を中心に小破片を含め87点の出土が認められた。それらのうち44点を図化し、収録することができた。出土状況としては調査区全面にまんべんなく出土し、また、成川式土器と混在する状況にて検出される(第45図)。残念なことに遺構との関連において、成川式土器との明確な共伴関係をとらえることのできる資料は皆無である。時期的には5世紀後半～6世紀のものとして8世紀代、およびそれ以降のものがみられる。以下特徴的なものについて略説する。

224は内・外面とも黒灰色を呈す。無蓋の高坏の口縁部と思われる、単位8条の櫛描波状文が施される。6世紀前半のものと考えられる。225は甕の口縁部と思われる。内面・灰白色、外面・青灰色を呈す。2号溝中よりの出土である。226は小破片のため、器種・部位など詳細は不明。内・外面とも灰白色を呈し、単位5条の櫛描波状文を施文する。227は坏蓋で復元口径13.2cmを測る。内・外面とも青灰色を呈す。天井部は平坦面を有し、天井部と口縁部を分ける稜はシャープである。本遺跡出土の須恵器の中では最古式の部類に属するものであり、5世紀後半に位置づけられる。228は坏身破片であり、復元口径13.3cmを測る。立ちあがりわずかに内傾し、受け部は外上部へのび、端部内面には凹線がみられる。外器面には部分的に自然釉の付着がみられる。229は復元口径約15.9cmを測る。2号溝・白色細砂層(下層)より出土したものである。底部は丸味を有す。受け部は外反し端部を丸くおさめる。230は復元口径

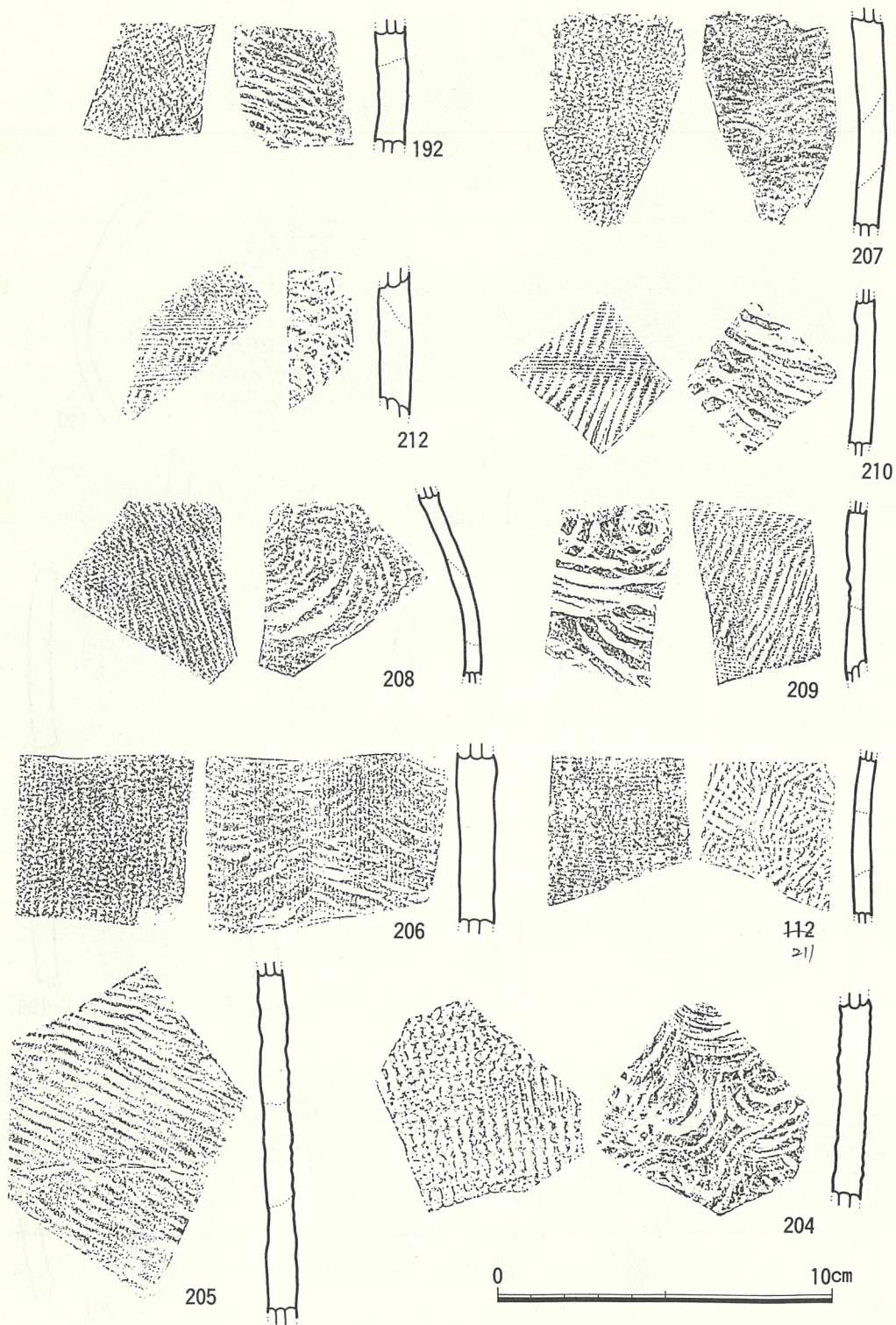


第45図 須恵器出土分布図 (1/3)

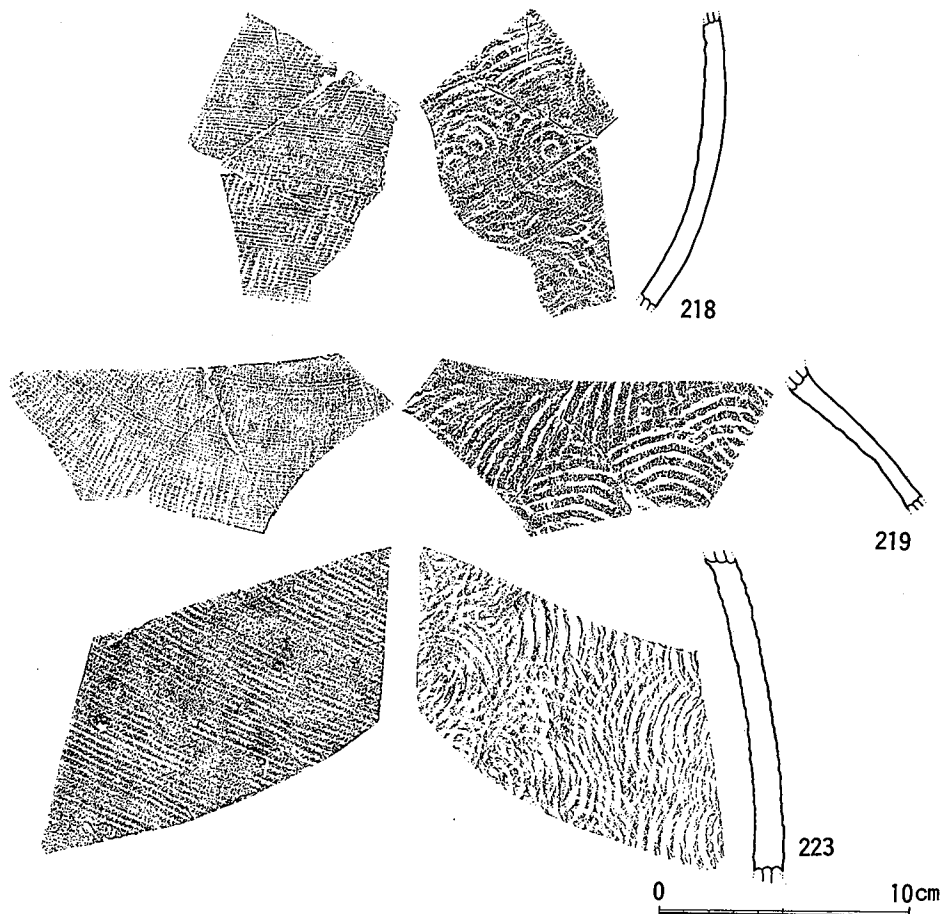


第46図 須恵器 (1) (1/2)





第47図 須恵器 (2) (1/2)



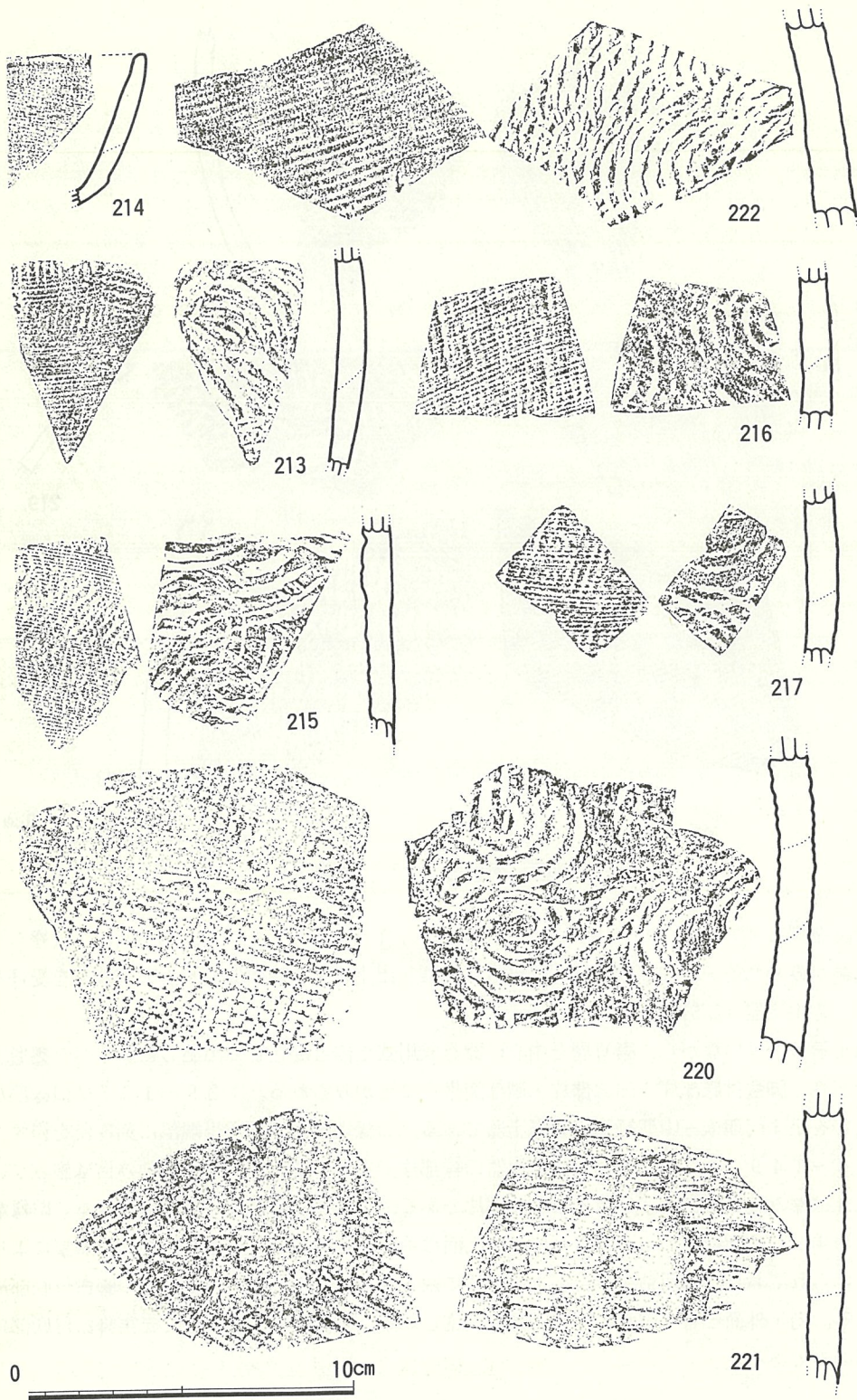
第48図 須恵器(3) (1/3)

14.2cmを測る坏であり、内・外面とも青灰色を呈し、焼成は良好である。体部外面には火樺らしき痕跡がみられる。伊佐郡菱刈町「岡野古窯跡群」出土のものに類似するとの御教授を受けた。<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup>

④ 弥生土器(第51図)

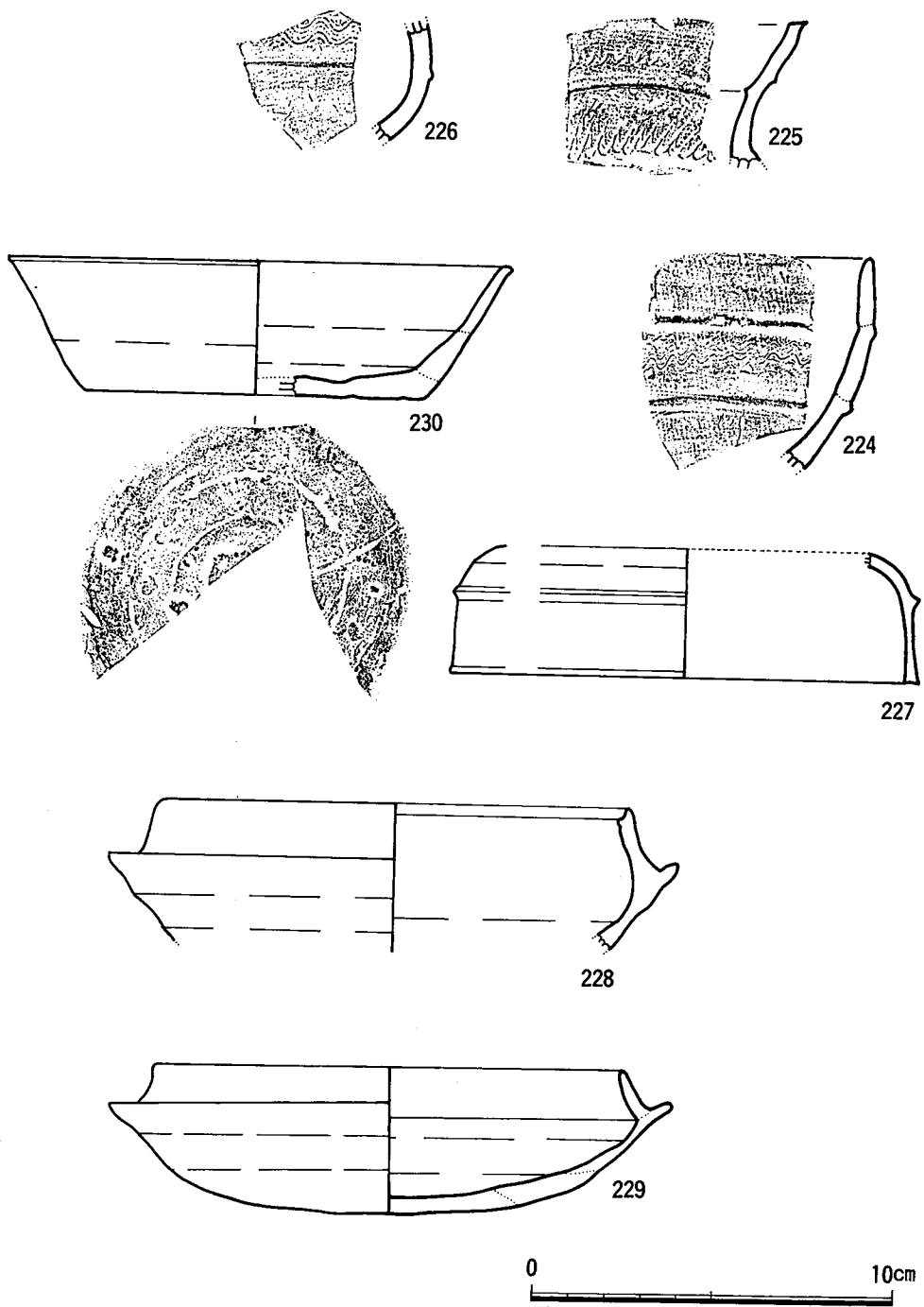
出土量は少ないながら、第Ⅵ層を中心に22点成川式土器と混在して出土した。すべて甕形土器であり、脚台付底部片・口縁部片・胴部突帯片などがみられる。129～137は口縁部が逆L字を呈す前期末～中期初頭の甕形土器である。口縁端部および突帯端部に刻み目を施す。138～149は弥生時代中期の甕形土器口縁部片である。逆L字形を呈し刻み目は施さない。139は厚みのある逆L字を呈する口縁部片であり、全面に横位のなで調整痕が残る。口縁端部はわずかにくぼむ。146もまた口縁部上面は平坦面を有する。全面横位のなで調整により仕上げられており、内面粘土接合部を沈線状に残している。128は中期土器の脚台付底部片である。内・外面ともていねいなナデ調整が施される。本調査区で出土した充実脚台付底部は本例のみである。



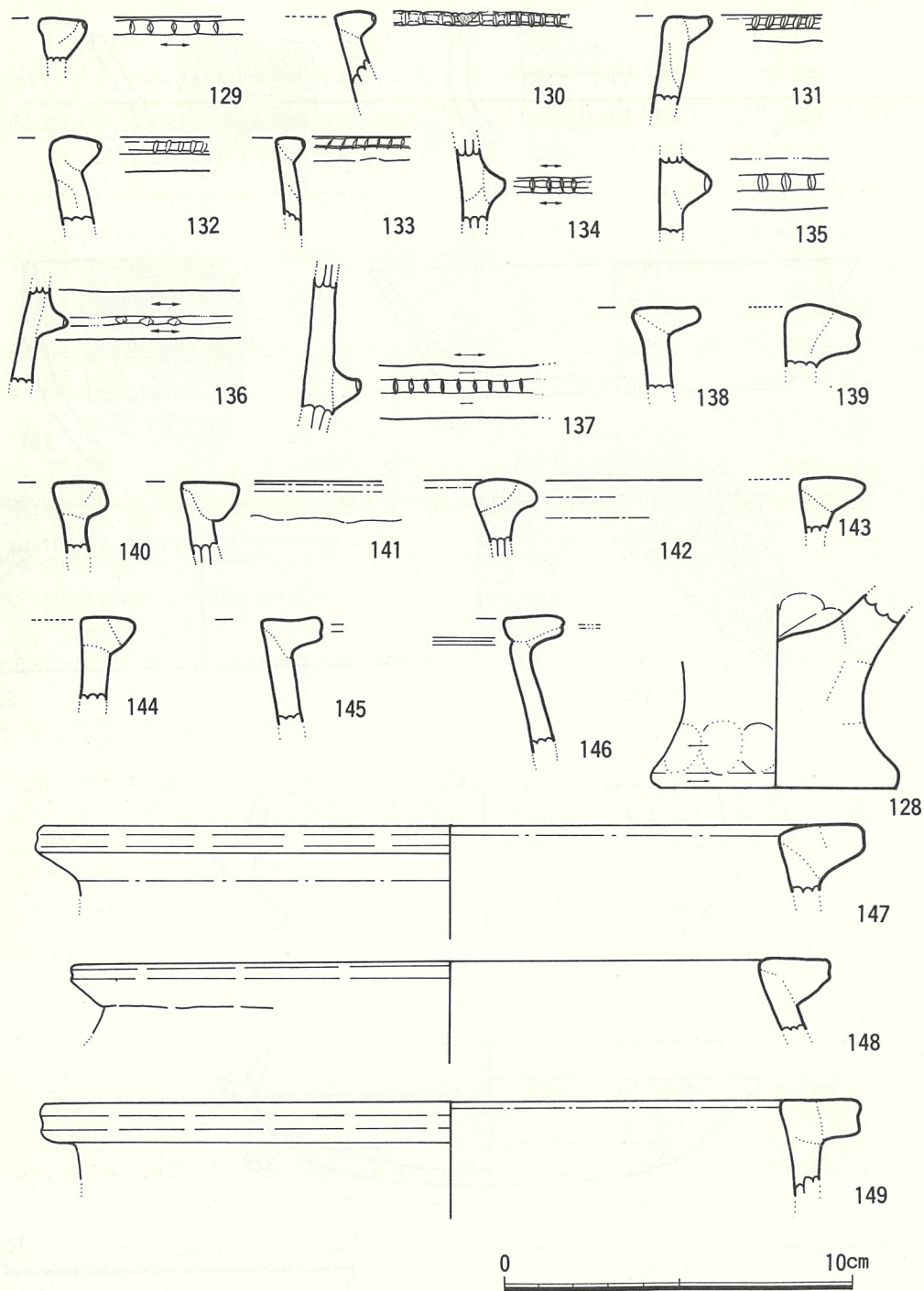


第49図 須恵器 (4) (1/2)





第50図 須恵器 (5) (1 / 2)



第51图 弥生土器实测图 (1/2)

## 2 石器 (第52・53図 S 20～34)

### 石皿 (第52図 S 20・21)

S 20は縁辺部に近い部分の破片である。小片ではあるが表裏両面に磨痕の認められる凹部が形成されていることが看取される。S 21は小片であり、しかも片面の一部しか原状をとどめていないが、その部分に認められる磨面と浅い凹部の存在とから便宜的にここに記載した。

### 凹石 (第52図 S 22～24)

S 22～24はいずれも整形のための加工は施されておらず、自然石がそのまま用いられている。S 22の他、S 23も両面を利用しているようである。

### 縦断面楔形敲打用石器 (第52図 S 25)

縦断面形はかなり偏平であるが、下方の縁辺部には打撃による敲打痕及び剥離が認められ、S 9・11・12・14・16等と同様の用いられ方をしたものと考えられる。両側縁部は敲打によって整えられている。

### 台石 (第52図 S 26・27)

S 26はかなり偏平な石を、S 27はやや厚みのある石を用いているが、両者とも器面に凹部が形成されそこに敲打痕が認められる。おそらくこの凹部に対象物を置き、敲打によって打撃を加えたものと思われる。

### 敲打石 (第52図 S 28・29)

S 28・29ともに自然石をそのまま利用している。S 28は上下両端を、S 29は下端部のみを使用している。S 28の上下両端部の欠損は使用時に生じたものと考えられる。

### 軽石製品 (第53図 S 30～34)

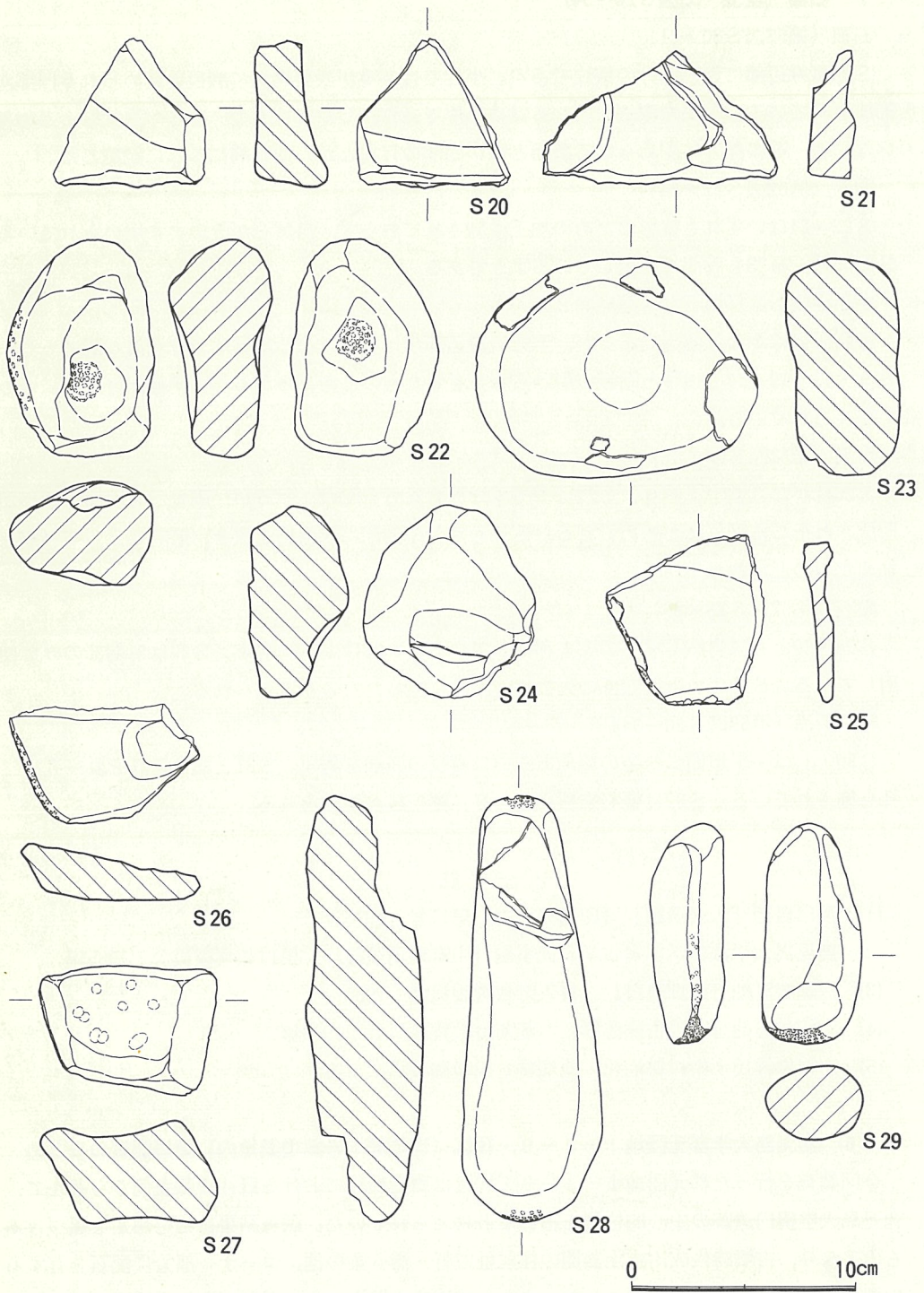
S 30・34は一平坦面に一条の線刻あるいは縦長の凹部を施す。S 31・33はそれぞれ一孔、二孔を施されている。S 32は軽石末製品であり、整形痕が認められる。

## 註

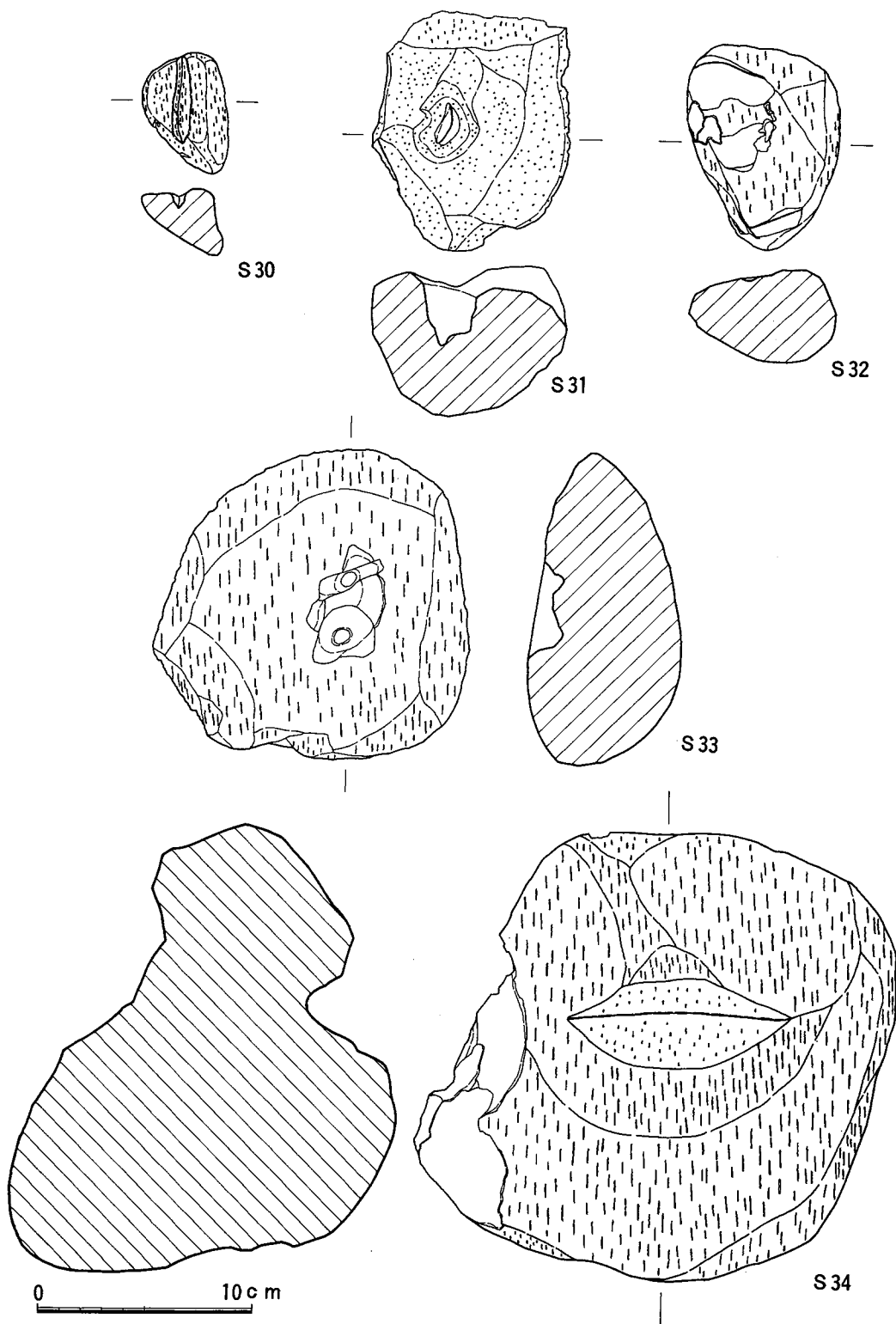
- (1) 河口貞徳「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 1976年
- (2) 鹿児島大学法文学部考古学研究室編『中町馬場遺跡』里村教育委員会 1985年
- (3) 戸崎勝洋他『野畑遺跡』喜入町教育委員会 1985
- (4) 青崎和憲他『岡野古窯跡群』菱刈町教育委員会 1983年
- (5) 上村俊雄氏・中村耕治氏・池畑耕一氏の御教示による。

(6) 鹿児島大学郡元団地 I・J-9・10区 (理学部1号館増築地内) 発掘調査のまとめ  
今回調査を行った郡元団地 I・J-9・10区は周辺地域における既往の調査例から考えて、鹿児島大学構内遺跡の中心的位置を占めると考えられていた。調査結果はその想定を裏づけるものとなり、古墳時代成川式土器期の住居址27軒・溝5条の他、コーナー部分に配石を有する小型の方形掘り込み等が検出された。また、成川式土器を中心に各種の遺物も検出されており、





第52図 包含層出土石器 (1/3)



第53図 包含層出土軽石製品 (1 / 3)

## ・遺物観察表

### 図番号

本文・挿図・図版のものと一致する。

### 法量

単位はcmである。口縁径・底径の判明するものについて記述してある。復元径のものには( )を付け区別した。胴部最大径を示しているものもある。

### 出土位置

遺構内出土遺物を対象とし、遺構内での出土位置を略記した。

### 色調

肉眼観察による相対的なものであり、絶対的なものではない。㊦とあるのは器肉中の色調を表わす。

### 胎土

肉眼観察による。胎土中に粒子を混入する場合にはその平均的な大きさを記してある。粒子の量に関しては、特に多い場合に限り記述している。混和材については、透明としたものは長石に、白としたものは石英に、黒としたものは角閃石におおむね相当するという基準に基づき、肉眼観察により識別した。また、「赤色粒子」については鉱物比定を行っていない。

### 現存率

㊧は口縁部分の現存長を、㊨は突帯部分の現存長をそれぞれ示す。単位はcmである。

### 備考

各遺物の特徴的な事象を略記する。また、刻み目の施文順位および施文方向は遺物が直立状態、あるいは、掲載実測図と同様の位置関係にある場合においてのものである。

### 焼成

「焼成」という項目は特に設けていない。相対的に焼成が不良のものや、逆に著しく良好なものについては備考の欄にて記述し示すことにした。

最後に、遺物観察表中における索引一覧を示す。

- 001～039—住居址内出土土器
- 040～055—2号溝中出土土器
- 056～058—4号溝中出土土器
- 059～063—5号溝中出土土器
- 064～065—Ⅲb層出土土器
- 066～067—Ⅴ層出土土器
- 068～100—Ⅵ層出土土器
- 101～122—てづくね土器
- 123～127—特殊遺物
- 128～149—弥生土器
- 150～186—突帯
- 187～230—須恵器



表4 郡元団地I・J-9・10区出土土器観察表

図番号	器種(器部)	法量	出土区	出土層位	出土位置	器面調整			色調			胎土						現存率	分類	備考
						外器面	内器面	底面(脚内面)	外器面	内器面	底面(脚内面)	胎土状況	長石	角閃石	黒雲母	石英	赤色			
001	甕形(甕部)	(26.0)	55・B	1号住	床面	縦位の板などで調整(一部)	縦位の通筋指ささえ(接合部)	指おさえ	赤褐色	淡橙色	米色	精製土使用						口縁部粘土帯は左回りに貼付		
002	甕形(底部)	(9.0)	55・B	1号住	床面	横などで調整	横位通筋指ささえ	指おさえ	赤褐色	淡褐色	米色	精製土使用						外面漆付着		
003	甕形		55・B	1号住	床面	指おさえの後横などで調整	横位通筋指ささえ	指おさえ	赤褐色	黄白色	米色	精製土使用								
004	甕形	(26.5)	55・B	1号住	埋土	縦位の板などで調整	縦位の通筋指ささえ(接合部)	横位通筋指ささえ	赤褐色	淡褐色	米色	精製土使用						突帯部分・横位のなで		
005	甕形		56・B	1号住	埋土	縦位の板などで調整	縦位のヘラなどで調整	縦位のヘラなどで調整	赤褐色	淡褐色	米色	精製土使用	●					突帯下漆付着		
006	甕形		55・C	1号住	埋土	縦位の板などで調整	縦位のヘラなどで調整	縦位のヘラなどで調整	赤褐色	淡褐色	米色	精製土使用	●							
007	甕形(底部)	(0.8)	55・B	1号住	埋土	縦位の板などで調整	縦位のヘラなどで調整	縦位のヘラなどで調整	赤褐色	赤褐色	赤褐色	精製土使用						口縁部損端部は磨減が進む		
008	高(坏部)		55・B	3号住	床面(中央)	丹塗り(縦位のミガキ)	丹塗り(縦位のミガキ)	丹塗り	赤褐色	赤褐色	赤褐色	精製土使用						口縁部損端部は磨減が進む		
009	高(坏部)	15.0	53・A	3号住	床面	不明	不明	不明	赤褐色	淡褐色	赤褐色	精製土使用	●					口縁部若干欠く		
010	甕形		53・A	3号住	埋土	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	赤褐色	黄白色	黄白色	精製土使用	●							
011	甕形(底部)	(6.5)	53・A	3号住	埋土	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	赤褐色	淡褐色	淡褐色	精製土使用	●							
012	高(坏部)	(13.7)	55・B	3号住	埋土	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	赤褐色	淡褐色	淡褐色	精製土使用								
013	不(底部)	(6.0)	55・A	4号住	埋土	不明	不明	不明	赤褐色	赤褐色	赤褐色	精製土使用	●					磨減がはげしく調整不明		
014	甕形	(37.0)	54・B	4号住	床面	不明	不明	不明	赤褐色	赤褐色	赤褐色	精製土使用	●					磨減がはげしく調整不明		
015	不(坏部)	5.7	55・A	6号住	埋土	縦位の通筋指ささえ	縦位の通筋指ささえ	縦位の通筋指ささえ	赤褐色	淡褐色	淡褐色	精製土使用	●					底面近くにヘラ工具による磨減がみられる		
016	高(坏部)	23.5	55・A	7号住	床面(中央)	丹を塗った後縦位のミガキを施す	丹を塗った後縦位のミガキを施す	丹を塗った後縦位のミガキを施す	赤褐色	赤褐色	赤褐色	精製土使用						接納部一部欠損		
017	甕形(口縁部)		55・A	7号住	埋土	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	赤褐色	淡褐色	淡褐色	精製土使用	●					列み目施文原体は脚毛目		
018	高(坏部)	不明	54・C	10号住	床面(中央)	丹塗り(縦位のミガキ)	丹塗り(縦位のミガキ)	丹塗り(縦位のミガキ)	赤褐色	淡褐色	淡褐色	精製土使用	●					原体と同一か		
019	甕形	(29.0)	55・A	11号住	床面	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	縦位の板などで調整	赤褐色	淡褐色	淡褐色	精製土使用	●					口縁部損端部は磨減が進む		









図番号	器種(器部)	法量	出土区	出土層位	出土位置	器面調整			色			胎					現存率	分類	備考	
						外器面	内器面	底面(脚内面)	外器面	内器面	底面(脚内面)	胎土状	状況	長石	角閃石	黒雲母				石英
077	甕(口縁部)	/	53・B	6層	/	横位のなで調整	/	/	淡茶褐色	淡黄色	/	径1~2 <sup>スリ</sup> 粒子多し	●				◎7cm ◎8.5cm	4類	だれた三角突帯(傾きに葉間あり)	
078	甕(口縁部)	/	55・B	6層	/	横位のなで調整	横位のため(不明)	/	淡茶褐色	淡茶褐色	/	径5~1 <sup>スリ</sup> 粒子多し					◎6cm ◎4cm	4類	刻み目突帯(断面V字形)(傾きに葉間あり)	
079	甕(口縁部)	/	55・B	6層	/	横位のため(不明)	横位のため(不明)	/	茶褐色	茶褐色	/	径1~2 <sup>スリ</sup> 粒子含む	●				5×5cmの破片	5類	刻み目突帯(断面V字形)(傾きに葉間あり)	
080	甕(口縁部)	(16.4)	56・A	6層	/	横位のなで調整	横位のため(不明)	/	淡黒褐色	淡黄色	/	径1~2 <sup>スリ</sup> 粒子含む	●				◎5.5cm ◎2cm	4類	三角突帯(傾きに若干葉間あり)	
081	甕(口縁部)	/	不明	不明	/	指なで	指なで	/	茶褐色	淡褐色	/	径1 <sup>スリ</sup> 粒子多し					6×4cmの破片	4類	絡繩状突帯(傾きに葉間あり)	
082	甕(口縁部)	/	51・A	pit・1	/	横位のなで調整	横位のため(不明)	/	淡茶褐色	淡褐色	/	径1~2 <sup>スリ</sup> 粒子多し	●				◎3.7cm ◎4.5cm	4類	三角突帯(傾きに葉間あり)	
083	甕(口縁部)	/	不明	不明	/	横位のなで調整	横位のため(不明)	/	淡褐色	淡褐色	/	径1~2 <sup>スリ</sup> 粒子多し	●				◎3.7cm ◎4.5cm	5類	刻み目断面V字形呈す(傾きに葉間あり)	
084	甕(口縁部)	(10.8)	53・A	6層	/	横位のなで調整	指なで(?)	横なで指おさえ	淡褐色	淡褐色	淡褐色(赤味強し)	精製土	●				脚台部分約1/2残存			
085	甕(口縁部)	(10.3)	50・A	6層	/	横位のなで調整	横位のため(不明)	横なで指おさえ	淡赤褐色	黒色	淡赤褐色	径1~3 <sup>スリ</sup> 粒子多し	●				脚台部分約1/2残存			
086	甕(口縁部)	(8.1)	51・C	6層	/	横位のなで調整	横位のため(不明)	横なで指おさえ	褐色	褐色	褐色	精製土	●				約1/2		脚台接合部に破を有す	
087	甕(口縁部)	9.4	51・A	6層	/	横位のなで調整	横位のため(不明)	横なで指おさえ	褐色	褐色	褐色	精製土	●				底部完存			
088	甕(脚台片)	(12.0)	51・A	6層	/	横位の指なで調整	横位のため(不明)	横方向の指おさえ	黄白色	黄白色	黄白色	径2 <sup>スリ</sup> 粒子多し	●							
089	甕(底部)	6.2	51・A	6層	/	横位の指なで調整	横位のため(不明)	横方向の指おさえ	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土	●							脚台接合部にて、わずかに破を有す
090	甕(底部)	/	51・A	6層	/	横方向の指おさえ	横位のため(不明)	横方向の指おさえ	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土	●							
091	甕(脚台部片)	(10.8)	51・B	6層	/	横位の指なで調整	横位のため(不明)	横方向の指おさえ	赤褐色(橙黄色)	赤褐色(橙黄色)	赤褐色(橙黄色)	精製土・径1~3 <sup>スリ</sup> 粒子	●							
092	甕(底部)	10.8	54・B	6層	/	横位の指なで調整	横位のため(不明)	横方向の指おさえ	淡褐色	淡褐色	淡褐色	径1~2 <sup>スリ</sup> 粒子多し	●							外面・粘土接合破が残る
093	甕(底部)	11.3	52・A	6層	/	横位の指なで調整	横位のため(不明)	横方向の指おさえ	淡褐色	淡褐色	淡褐色	径1 <sup>スリ</sup> 粒子	●							脚台部分にて、わずかに破を有す
094	甕(底部)	(8.7)	53・A	6層	/	横位の指なで調整	横位のため(不明)	横方向の指おさえ	淡黄色	淡黄色	淡黄色	径1 <sup>スリ</sup> 粒子	●							脚台部分にて、わずかに破を有す
095	甕(底部)	9.3	52・B	pit内	埋土	横位のため(不明)	横位のため(不明)	横方向の指おさえ	淡黄色	淡黄色	淡黄色	径1 <sup>スリ</sup> 粒子	●							脚台部分にて、わずかに破を有す



図 番 号	器 種 (器 部)	法 量	出 土 区	出 土 層 位	出 土 位 置	器 面 調 整			色			胎					分 類	備 考
						外 器 面	内 器 面	底 面 (脚 内 面)	外 器 面	内 器 面	底 面 (脚 内 面)	長 石	有 四 角 石	黒 雲 母	石 英	赤 色		
096	鉢(底部)	(7.7)	51・A	6層	ヘラなどで調整(指おさえ)	なで調整	不明	淡灰色	黄白色	淡灰色	径1~2 <sup>s</sup> の粒子	●				底部部分で約1/2残存	底部外面下部にヘラ彫り痕のようないびつな痕跡がみられる	
097	壺(底部)	(6.7)	51・B	6層	剛毛などで調整	横位での調整	なで調整	黄白色	黄白色	黄白色	径1 <sup>s</sup> の粒子		●			底部部分約1/2残存		
098	高(口縁部)	(11.3)	53・A	6層	横位での調整(指おさえ)	横位での調整(指おさえ)		淡灰色	黒色(黒斑)	黒色	精製土		●			(傾きに疑問あり)		
099	高(口縁部)	(11.2)	54・C	6層	丹塗(かなり)刺織が通(む)	横位での調整		淡赤褐色(丹塗部分)	淡黄色	淡黄色	精製土		●			口縁部分約1/2残存	脚柱部との接合部にてはすれる	
100	高(脚部)	15.9	52・B	かく乱pit	横位での調整	横位での調整	指おさえ(剛毛)などで調整	淡赤褐色(丹塗部分)	淡黄色	丹白色	精製土	●				脚部ほぼ完存		
101	てづくね	5.8	51・A	5号溝	指おさえ(七分)	横位での調整	なで調整	淡灰色	淡黄色	淡灰色	径1 <sup>s</sup> の粒子多し	●				完形	輪郭痕のような痕跡が認められる	
102	てづくね	(6.3)	53・A	14号住	横位での調整	横位での調整	なで調整	黒褐色	黒褐色	黒褐色	精製土	●				口縁~底部上端約1/2欠損	輪郭痕のような痕跡が認められる	
103	てづくね(?)		55・A	6層	指おさえ	横位での調整	なで調整	灰白色	灰白色	灰白色	径1 <sup>s</sup> の粒子	●				底部完存		
104	てづくね	5.5	51・A	pit内	指おさえ	荒い横位での調整(ユビナデ)	なで調整	黄褐色	黄褐色	黄褐色	精製土		●			完形		
105	てづくね	4.8	52・B	2号溝	指おさえ	横位での調整(ユビナデ)	なで調整	赤褐色	赤褐色	赤褐色	精製土		●			完形		
106	てづくね	6.7	53・A	2号溝	指おさえ	荒い横位での調整(ユビナデ)	なで調整	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	径1 <sup>s</sup> の粒子	●	●			完形	胸中位にかすかな凹を有す 底部中央に穿孔あり	
107	てづくね	4.5	53・B	5層	横位での調整	横位での調整(指おさえ)	なで調整	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	径1 <sup>s</sup> の粒子	●	●			完形	胸中位におよぶかすかな凹を有す 内面接合痕残る	
108	てづくね	(2.8)	52・C	27号住	横位のため(不明)	指おさえ	不明	淡灰色	淡灰色	淡灰色	径1 <sup>s</sup> の粒子	●				底部完存		
109	てづくね	4.8	53・C	2号溝	指おさえ	横位での調整(ユビナデ)	なで調整	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	径0.5 <sup>s</sup> の粒子	●				完形	胸中位にかすかな凹を有す	
110	てづくね	4.8	52・B	6層	縦位の連続指おさえ(ユビナデ)での調整	横位での調整(ユビナデ)	なで調整	黄褐色	黄褐色	黄褐色	精製土					完形	内・外面とも化粧土を貼付	
111	てづくね	5.7	51・A	6層	横位での調整	横位での調整	なで調整	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	径1 <sup>s</sup> の粒子	●	●			完形	調整は概していいないで あり指頭痕を残さない	
112	てづくね	4.8	54・B	6層	横位のため(不明)	横位のため(不明)	不明	茶褐色	茶褐色	茶褐色	精製土					1/2残存	輪郭による	
113	てづくね(?)	2.8	51・C	5層	横位での調整	横位での調整(不明)	不明	茶褐色	茶褐色	茶褐色	精製土					底部のみ	壺の底部の可能性あり	
114	てづくね	(6.1)	53・B	4号溝	指おさえ	横位での調整	指おさえ	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	径1 <sup>s</sup> の粒子	●				口縁部1/2欠損	胸中位にかすかな凹を有す	



図番号	器種(器部)	法量	出土区	出土層位	出土位置	器面調整			色			胎						現存率	分類	備考	
						外器面	内器面	底面(脚内面)	外器面	内器面	底部(脚内面)	胎土状況	長石	有内石	黒雲母	石英	赤色				その他
115	てづくね(?)	2.8	53・C	5層		外器面 なで調整(磨減のため詳細不明)	内器面 (磨減のため不明)	底面(脚内面) 不	淡黄色	淡黄色	淡黄色	径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●			底部完存		壺の底部の可能性あり	
116	てづくね	5.8	52・A	2号溝	6b類 似土 (上層)	外器面 指おさえ	内器面 横位のため調整(ユビナデ)	底面(脚内面) 不	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土						完形		指頭瓦が明確に残る	
117	てづくね	(6.8)	54・A	6層		外器面 なで調整(ユビナデ)	内器面 横位のため調整(ユビナデ)	底面(脚内面) 指おさえ	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土	●				◎約1/10 ◎約1/10			外面に明確に接合痕が残る	
118	てづくね	(5.8)	51・A	5号溝	埋土	外器面 指おさえ・荒毛目調整	内器面 指おさえ・へラけすり緑の調整	底面(脚内面) (あげ底)	淡黄色	黒褐色	淡褐色	精製土 径1 <sup>s</sup> 粒子	●				約1/2残存			輪漉の痕跡あり	
119	てづくね	3.7	52・A	6層		外器面 指おさえ	内器面 指おさえ	底面(脚内面) なで調整(?)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●		完形			胴中位にかすかに段を有す	
120	てづくね	7.8	53・A	2号溝	6b類 似土 (下層)	外器面 指おさえ	内器面 指おさえ	底面(脚内面) なで調整	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土			●		完形			内面中位に指頭痕集中	
121	てづくね	(7.5)	52・C	5層		外器面 指おさえ	内器面 横位のため調整(ユビナデ)	底面(脚内面) なで調整	淡黄色	淡黄色	淡黄色	径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●		底部完存 口縁部わずかに残存			内面に接合痕がかすかに残る	
122	杯(?)	(9.6)	52・A	2号溝	白色細砂層 (上層)	外器面 荒いなで調整(ユビナデ)	内器面 横位のため調整(ユビナデ)	底面(脚内面) 指おさえ	淡黄色	淡黄色	赤褐色	径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●		口縁部約1/4欠損			作りは素であり、接合痕が明確に残る。	
123	高(脚部)	(11.5)	53・C	2号溝	白色細砂層 (下層)	外器面 横位のため調整(ユビナデ)	内器面 横位のため調整(ユビナデ)	底面(脚内面) 部分的に指おさえ	丹塗り (淡黄色)	淡黄色 (淡黄色)	灰黒色	精製土	●		●		脚内面完存 脚縁部1/10残存			杯部との接合部に線刻がみられる	
124	不		52・B	6層		外器面 磨減のため不明	内器面 磨減のため不明	底面(脚内面) 磨減のため不明	黒灰色	黒灰色	黒灰色	径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●		—			完存部分間にひもずれの磨減がかかり運び一部ひもずれのような跡がみられる	
125	垂飾品?		52・B	6層		外器面 丹塗りのため不明	内器面 磨減のため不明	底面(脚内面) 磨減のため不明	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土	●				—			突起部先端は黒塗のため黒色を呈す	
126	不		53・B	5層		外器面 指おさえ	内器面 不	底面(脚内面) 不	淡灰色	淡灰色	淡灰色	精製土	●		●		—			土器の補修孔か	
127	不		55・C	6層		外器面 磨減のため不明	内器面 磨減のため不明	底面(脚内面) 磨減のため不明	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土	●				—				
128	甕(底部)	7.2	52・C	2号溝	6b類 似土 (下層)	外器面 横位のため調整	内器面 横位のため調整(ユビナデ)	底面(脚内面) ユビナデ	淡褐色	淡褐色	淡褐色	精製土 径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●		脚台部 完存				弥生中期遺土器脚台
129	甕(口縁部)		53・B	6層		外器面 横位のため調整	内器面 横位のため調整(ユビナデ)	底面(脚内面) 磨減のため不明	淡褐色	淡褐色	淡褐色	精製土 径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●		◎3cm				知み目は断面U字形呈す
130	甕(口縁部)		51・A	17号住	埋土	外器面 横位のため調整	内器面 横位のため調整	底面(脚内面) ヘラミがき	黒褐色	黒褐色	黒褐色	精製土	●		●		◎約5cm				知み目は断面V字形呈す
131	甕(口縁部)		かく乱			外器面 なで調整	内器面 なで調整	底面(脚内面) なで調整	淡褐色	淡褐色	淡褐色	精製土	●		●						知み目は断面V字形呈す
132	甕(口縁部)		かく乱			外器面 横位のため調整	内器面 横位のため調整	底面(脚内面) 横位のため調整	淡褐色	淡褐色	淡褐色	径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●		◎約25cm				全面磨減のため知み目も明確でない
133	甕(口縁部)		51・A	6層		外器面 なで調整	内器面 なで調整	底面(脚内面) なで調整	淡黒色	淡黄色	淡黄色	径1 <sup>s</sup> 粒子	●		●		◎約3cm				知み目は断面V字形を呈す

図番号	器種 (器部)	法量	出土区	出土 層位	出土 位置	器面調整			色		調部 (脚内面)	胎土状況	胎土					現存率	分類	備考
						外器面	内器面	底面 (脚内面)	外器面	内器面			底面 (脚内面)	長石	角閃石	黒雲母	石英			
134	甕形 (胴部突帯)	/	54・A	6号住	埋土	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡灰色	淡灰色		精製土	●				●	◎2.3cm		刻み目断面V字形 (上下関係および傾き不明)
135	甕形 (胴部突帯)	/	55・B	1号住	埋土	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡灰色	淡灰色								◎3cm		刻み目部分には磨滅のため 明瞭でない(上下関係および傾き不明)
136	甕形 (胴部突帯)	/	51・B	19号住	埋土	横位のため調整	不明	不明	橙褐色	橙褐色		精製土	●					◎5.5cm		刻み目断面V字形を呈す (上下関係および傾き不明)
137	甕形 (胴部突帯)	/	53・B	6層		横位のため調整	不明	不明	淡茶褐色	淡茶褐色		精製土	●					◎4.5cm		刻み目断面V字形(上下関係および傾き不明)
138	甕形 (口縁部)	/	52・A	6層		横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	黒色	黄色		精製土	●					◎約5.5cm		作りは概して荒い
139	甕形 (口縁部)	/	55・A	7号住	埋土	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡灰色	淡灰色		径1.5が粒子						◎約4cm		(傾きに疑問あり)口唇部に凹がみられる
140	甕形 (口縁部)	/	54・B	3号住	埋土	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	黒褐色	淡灰色		径1.5が粒子	●					◎約2cm		全体的に風化が進む
141	甕形 (口縁部)	/	55・A	6号住	貼床内	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	赤褐色	赤褐色		精製土	●					◎約3.7cm		所々にニガミがみられる
142	甕形 (口縁部)	/	53・C	6層		横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡灰色	淡灰色		径1.5が粒子	●					◎約4.5cm		全体的に風化が進む
143	甕形 (口縁部)	/	53・B	5層		横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡灰色 淡黄白色	淡灰色 淡黄白色		径1.5が粒子	●					◎約4.5cm		(傾きに疑問あり)全体的に風化が進む
144	甕形 (口縁部)	/	51・A	6層		横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡黄色 淡白色	淡黄色 淡白色		径1.5が粒子	●					◎約3.5cm		(傾きに疑問あり)全体的に風化が進む
145	甕形 (口縁部)	/	52・B	6層		横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	赤褐色	赤褐色		径1.5が粒子	●					◎1cm		(全体的に風化が進む)
146	甕形 (口縁部)	/	52・B	6層		横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡茶褐色	淡茶褐色		径1.5が粒子	●					◎約2cm		内面、接合部分を沈線の ように残す
147	甕形 (口縁部)	(24.2)	55・B	現代か 乱 2号溝	埋土	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	黄白色	黄白色		径1.5が粒子	●					◎約5cm		
148	甕形 (口縁部)	(21.8)	53・C	2号溝	最下部 埋土層	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡灰色	淡灰色		径1.5が粒子	●					◎約6.5cm		
149	甕形 (口縁部)	(23.8)	51・B	6層		横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡茶褐色	淡茶褐色		径1.5が粒子	●					◎約6cm		全体的に風化が進む
150	甕形 (胴部突帯)	/	53・B	6層		横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	橙黄色	橙黄色		径1.5が粒子	●					拓本参照		刻み目は編状のもので磨 される(上下関係・傾き 不明)
151	壺形 (胴部突帯)	/	54・A	3号住	埋土	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡灰色	淡灰色		径1.5が粒子	●					拓本参照		刻み目断面V字形 (上下関係・傾き不明)
152	壺形(?) (胴部突帯)	/	54・C	10号住	埋土	横位のため調整	横位のため調整	横位のため調整	淡灰色 淡白色	淡灰色 淡白色		径1.5が粒子	●					拓本参照		刻み目断面V字形 (上下関係・傾き不明)

図番号	器種 (器部)	法量	出土区	出土層位	出土位置	器面調整			色調			胎土					現存率	分類	備考
						外器面	内器面	底面 (脚内面)	外器面	内器面	底面 (脚内面)	胎土状況	長石	角閃石	黒雲母	石英			
163	壺形 (胴部突附)		54・A	3号住	胎末面	横位のなで調整	不明		灰白色	淡橙黄色		精製土 径1.5 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面U字形 底文順位 左下り→右下
164	壺形 (胴部突附)		54・C	6層		なで調整	不明		灰白色	淡白色		精製土						拓本参照	知み目・断面V字形 底文順位 左下り→右下
165	壺形 (胴部突附)		52・A	6層		(磨滅して)お り不明	(磨滅して)お り不明		赤橙黄色	赤橙黄色		径1~2 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面V字形
166	壺形 (胴部突附)		56・A	5層		(磨滅して)お り不明	(磨滅して)お り不明		灰黑色	淡橙黄色		径1 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面V字形 底文順位 左下り→右下
167	壺形 (胴部突附)		55・A	5層		横位のなで調整	横位のヘラな で調整		灰白色	淡褐色		精製土						拓本参照	知み目・断面V字形 底文順位 左下り→右下
168	壺形 (胴部突附)		51・A	6層		ヘラなで調整	ヘラなで調整		淡黒茶 褐色	淡橙黄色		径1~2 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面V字形 底文順位 左下り→右下
169	壺形 (胴部突附)		53・B	2号溝	最下部 冠土層	ヘラなで調整	(磨滅して)お り不明		淡橙黄色	淡橙黄色		径2 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・半截竹管による 刺突
170	壺形(?) (胴部突附)		55・C	6層		(磨滅して)お り不明	なで調整		淡橙黄色	淡橙黄色		径1 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面V字形 底文順位 左下り→右下
171	壺形 (胴部突附)		55・B	8号住	埋土	なで調整	(磨滅して)お り不明		灰白色	淡白色		精製土使用						拓本参照	知み目・断面V字形
172	壺形 (胴部突附)		53・C	6層		なで調整	(磨滅して)お り不明		淡橙黄色	淡橙黄色		径1 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面U字形 底文順位 左下り→左下
173	壺形 (胴部突附)		51・C	17号住	埋土	横位のなで調整	横位のなで調整		淡橙黄色	淡橙黄色		径1 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面V字形
174	壺形(?) (胴部突附)		51・B	19号住	埋土	(磨滅のため 不明)	(磨滅のため 不明)		茶褐色	赤橙黄色		径1 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面U字形 底文順位 左下り→右下
175	壺形(?) (胴部突附)		52・C	6層		横位のなで調整	横位のなで調整		灰褐色	淡白色		径0.5 <sup>s</sup> 粒 子	●					拓本参照	知み目・断面U字形 底文順位 左下り→右下
176	壺形 (胴部突附)		51・A	5号溝	埋土	横位のなで調整	横位のなで調整		淡橙黄色	淡橙黄色		精製土 径1 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面U字形 底文順位 左下り→右下 知み目・施文具は刷毛目工 具と同一か
177	壺形(?) (胴部突附)		51・A	17号住	埋土	横位のなで調整	(磨滅のため 不明)		灰褐色	淡白色		径1~1.5 <sup>s</sup> 粒子多し	●					拓本参照	知み目・断面U字形
178	壺形 (胴部突附)		53・C	2号住	白砂層 (上層)	横位のなで調整	横位のなで調整		淡灰褐色	淡灰褐色		精製土 径1 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	知み目・断面V字形
179	壺形 (胴部突附)		50・B	6層		(磨滅のため 不明)	(磨滅のため 不明)		赤橙黄色	淡黄色		精製土使用	●					拓本参照	知み目・断面V字形
180	壺形 (胴部突附)		53・A	6層		(磨滅のため 不明)	(磨滅のため 不明)		淡白色	淡白色		精製土 径0.5 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	沈線は浅く不明瞭
181	壺形 (胴部突附)		52・A	6層		横位のなで調整	(磨滅のため 不明)		淡白色	淡白色		精製土 径1 <sup>s</sup> 粒子	●					拓本参照	刺突竹管文 (縦きに疑問あり)



図番号	器種 (器部)	法量	出土区	出土層位	出土位置	器面調整			色調			胎土					分類	備考
						外器面	内器面	底面 (脚内面)	外器面	内器面	底面 (脚内面)	胎土状況	長石	角閃石	黒雲母	石英		
172	壺 (頸部突帯)	形	52・B	2号溝	6b類 似土 (下層)	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡褐色	黄白色	黄白色	精製土 径1.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	刺突竹管文 (傾きに疑問あり)
173	壺 (頸部突帯)	形	52・C	2号溝	6b類 似土 (下層)	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡褐色	淡褐色	淡褐色	精製土 径1.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	刻み目・断面U字形 施文順位 左下り→右下り
174	壺 (頸部突帯)	形	52・A	2号溝	6b類 似土 (下層)	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
175	壺 (頸部突帯)	形	52・B	6層	—	(磨滅のため 不明)	(磨滅のため 不明)	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
176	壺 (頸部突帯)	形	51・A	6層	—	(磨滅のため 不明)	(磨滅のため 不明)	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
177	壺 (頸部突帯)	形	52・A	6層	—	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
178	壺 (頸部突帯)	形	52・A	2号溝	6b類 似土 (上層)	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
179	壺 (頸部突帯)	形	55・A	2号溝	最下部 粗土層	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
180	壺 (頸部突帯)	形	51・A	5号溝	埋土	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
181	壺 (頸部突帯)	形	52・A	5層	—	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
182	壺 (頸部突帯)	形	52・A	2号溝	6b類 似土 (上層)	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
183	壺 (頸部突帯)	形	52・A	2号溝	6b類 似土 (上層)	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
184	壺 (頸部突帯)	形	52・A	かく乱 pit	埋土	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
185	壺 (頸部突帯)	形	52・A	2号溝	6b類 似土 (下層)	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	指頭による押圧 (傾き・上下関係不明)
186	不明		52・B	pit・ 1	埋土	横位のた め調整	横位のた め調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径1.5 <sub>g</sub> 粒子	●				拓本参照	三角突帯を付す (傾き・上下関係不明)
187	坏(底部)	3.8	53・B	かく乱	—	回転な で調整	回転な で調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土					拓本参照	内面・自然釉の付着がみ られる
188	甕(?) (口縁部)		51・A	4b層	—	回転な で調整	回転な で調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径1.5 <sub>g</sub> 粒子					拓本参照	部分的に釉の付着がみ られる
189	不明 (口縁部)		52・A	3層	—	回転な で調整	回転な で調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子					拓本参照	(傾きに疑問あり)
190	不明		52・B	5層	—	幅約1.5 <sub>g</sub> の キ目調整	回転な で調整	底面 (脚内面)	淡黄色	淡黄色	淡黄色	精製土 径0.5 <sub>g</sub> 粒子					拓本参照	(傾き・上下関係不明)

図番号	器種(器部)	法量	出土区	出土層位	出土位置	器面調整			色調			胎土					現存率	分類	備考
						外器面	内器面	底面(脚内面)	外器面	内器面	底面(脚内面)	胎土状況	底石	角石	黒雲母	石英			
191	不	明	51・C	6層	6b類 似土 (下層)	平行叩き+なで	同心円叩き		青灰色	青灰色	青	精製土						拓本参照	(傾き・上下関係不明)
192	不	明	52・A	2号溝		縄状叩き(?) +なで	同心円叩き		青灰色	灰白色	赤	精製土					拓本参照	202に類似 (傾き・上下関係不明)	
193	不	明	52・C	3b層		幅4.5 <sup>s</sup> ×4.5 <sup>r</sup> の格子目叩き	なで(?)		青灰色	青灰色		精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
194	不	明	53・B	6層		幅3.5 <sup>s</sup> ×4.5 <sup>r</sup> の格子目叩き	同心円叩き+ 平行叩き(幅 3.5 <sup>s</sup> ) +なで		淡黒色	淡黒色	灰	精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
195	不	明	51・A	5層		平行叩き(幅 約2.5 <sup>s</sup> )	同心円叩き		青灰色	青灰色		精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
196	不	明	55・A	6層		格子目叩き (3×4)	(器面が荒れ ており不明)		淡灰 黒色	淡灰 黒色	灰	精製土 径0.5 <sup>s</sup> 粒子					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
197	不	明	55・A	6層		平行叩き(幅 約2.5 <sup>s</sup> )	なで		青灰色	青灰色	灰	精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
198	不	明	55・A	4層		平行叩き(幅 約3.5 <sup>s</sup> )	なで		淡灰 白色	淡灰 白色	黒	精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
199	不	明	55・A	4層		平行叩き(幅 約3.5 <sup>s</sup> )	指なで		淡灰色	赤褐色		径1.5 <sup>s</sup> 粒子 多し					拓本参照	205に類似 (傾き・上下関係不明)	
200	不	明	52・C	6層		同心円叩き+ 平行叩き(幅 2.5 <sup>s</sup> )	(詳細不明)		灰白色	灰白色		精製土 径0.5 <sup>s</sup> 粒子					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
201	不	明	55・A	3層		平行叩き(幅 約3.5 <sup>s</sup> )	同心円叩き		灰白色	灰白色		精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
202	不	明	53・A	2号溝		6b類 似土 (下層)	縄状叩き		青灰色	灰白色	赤	精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
203	不	明	53・A	かく乱			同心円叩き 約4.5 <sup>s</sup> )		淡灰色	淡灰色		精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
204	不	明	52・B	5層		平行叩き(幅 約2.5 <sup>s</sup> )	同心円叩き		淡灰 白色	淡灰 白色	黒	径0.5 <sup>s</sup> 粒 子					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
205	不	明	55・A	4層		格子目叩き (2.5×4.0)	指なで		淡灰色	赤褐色	灰	径1.5 <sup>s</sup> 粒子 多し					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
206	不	明	52・B	2号溝		白色細 砂層 (上層)	縄状叩き(?)		青灰色	青灰色	黒	径0.5 <sup>s</sup> 粒 子					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
207	不	明	53・A	14号住			同心円叩き +なで		青灰色	青灰色	黒	精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
208	不	明	52・B	2号溝		6b類 似土 (下層)	平行叩き(幅 1.5 <sup>s</sup> ) +カキ 目		青灰色	灰白色	灰	精製土 径0.5 <sup>s</sup> 粒子					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	
209	不	明	53・C	5層		平行叩き(幅 2.5 <sup>s</sup> ) +カキ 目	同心円叩き		淡灰色	赤褐色		精製土					拓本参照	(傾き・上下関係不明)	



図 番 号	器 種 (器部)	法 量	出 土 区	出 土 層 位	出 土 位 置	器 面 調 整			色 調			胎 土			現 存 率	分 類	備 考
						外 器 面	内 器 面	底 面 (脚内面)	外 器 面	内 器 面	底 面 (脚内面)	胎 土 状 況	長 石	有 閃 石			
210	不 明		52・A	2号溝	白色細砂層(下層)	平行叩き(幅約3.5%)	同心円叩き		黒灰色	赤黒色		精製土 径0.5%粒子				●	(傾き・上下関係不明)
211	不 明		51・C	6 層		カキ目調整	同心円叩き		淡褐色	淡黄褐色		径0.5%粒子				●	(傾き・上下関係不明)
212	不 明		53・C	5 層		平行叩き(幅1.5%) + カキ目	同心円叩き		淡灰色	淡灰色						●	(傾き・上下関係不明)
213	不 明		52・B	かく乱		格子目叩き(2×2) + なで	同心円叩き		淡灰色	淡灰色		精製土				●	(傾き・上下関係不明)
214	不 明		56・A	5号住	埋 土	カキ目調整 + なで	なで調整		淡灰色	淡灰色		精製土					(傾き・上下関係不明)
215	不 明		51・A	6 層		叩き(詳細不明) + カキ目	同心円叩き		淡灰色	淡赤色		精製土					(傾き・上下関係不明)
216	不 明		53・C	2号溝	白色細砂層(下層)	格子目叩き + カキ目調整	同心円叩き + なで		青灰色	青灰色		精製土					(傾き・上下関係不明)
217	不 明		53・C	6 層		格子目叩き + なで	同心円叩き + なで		青灰色	青灰色		精製土					216に類似 (傾き・上下関係不明)
218	甕( ? )		(接合)	(接合)		格子目叩き + カキ目調整	同心円叩き + なで		青灰色	青灰色		精製土					216, 217, 218, 219に類似 (傾き・上下関係不明)
219	甕( ? ) (頸部片)		(接合)	(接合)		格子目叩き + カキ目調整	同心円叩き + なで		青灰色	青灰色		精製土					216, 217, 218, 219に類似 (傾き・上下関係不明)
220	不 明		55・C	かく乱		格子目叩き	同心円叩き		赤紫色	淡灰色		精製土					一部自然釉の付着あり (傾き・上下関係不明)
221	不 明		55・C	4 層		格子目叩き(幅(4×3))	平行叩き(幅約5%)		淡黒色	淡黒色		精製土				●	(傾き・上下関係不明)
222	甕( ? )		51・A	6 層		平行叩き(幅約2%)	同心円叩き		灰白色	灰白色		径0.5%粒子				●	(傾き・上下関係不明)
223	甕( ? )		52・B	5 層		平行叩き(幅約2%)	同心円叩き		灰白色	灰白色		径0.5%粒子				●	222に類似 (傾き・上下関係不明)
224	無蓋高杯(?) (口縁部)		54・A	3号住	埋 土	回転なで調整	回転なで調整		黒灰色	黒灰色		精製土				●	構造・施文・施文方向不明
225	甕( ? ) (口縁部)		53・B	2号溝	白色細砂層(上層)	回転なで調整	回転なで調整		青灰色	灰白色		精製土					施文・施文方向不明
226	高杯( ? )		52・B	5 層		回転なで調整	回転なで調整		灰白色	灰白色		精製土				●	施文・施文方向不明
227	杯(蓋)	(13.2)	54・B	4号住	埋 土	回転なで調整	回転なで調整		青灰色	灰白色		精製土					施文・施文方向不明
228	杯(身)	(13.3)	52・C	2号溝	6b類 似土 (下層)	回転なで調整	回転なで調整		灰白色	灰白色		精製土					施文・施文方向不明





表5 郡元団地I・J-9・10区出土石器観察表

No	種類	区・層	計測値 (単位cm, kg)				観察結果		備考	掲載 図
			長軸 (最大長)	横軸 (最大幅)	厚さ (最大厚)	重量	石材	現存状態		
S 1	軽石製品	1号住・床 面	13.1cm	8.4cm	3.3cm	0.11	軽石	側縁部をわ ずかに欠く	「十」字状の線刻が施 されている	18
S 2	蔽石	54-A区・ Ⅵc層	9.7cm	2.4cm	2.0cm	0.08	砂岩	完存	3号住埋土からの出土	24
S 3	スクレイ パー	4号住・床 面	4.8cm	2.9cm	0.6cm	0.01	砂岩	完存	製品の欠損片の鋭利な 縁辺部を刃部として利用	24
S 4	石庖丁	6号住・貼 床内	(7.4cm)	3.1cm	0.45cm	0.02	頁岩	半欠品	弥生時代の所産か	24
S 5	砥石	55-A区・ Ⅵc層	12.2cm	4.1cm	2.8cm	0.16cm	珪岩	上端部をや や欠く	6号住埋土	24
S 6	蔽石	51-A区 ・Ⅵc層	15.6cm	6.8cm	5.6cm	0.79	安山岩	完存	18号住埋土	30
S 7	磨石	56-B区・ Ⅵc層	6.5cm	6.0cm	5.0cm	0.28	砂岩	完存	2号住埋土、河原石を 利用したものか?	31
S 8	蔽石	55-A区・ Ⅵc層	17.0cm	4.8cm	3.9cm		砂岩	完存	上下両端に蔽打痕が認 められる。河原石を利用 したものか? H- 8床面出土。	31
S 9	縦断面楔 形蔽打用 石器	55-A・A 間ベルト内 ・Ⅵc層	5.7cm	5.4cm	1.2cm	0.04	安山岩	完存	未製品半欠品の転用 か? H 9埋土中からの出土	31
S 10	砥石	9号住床面	8.5cm	4.0cm	2.3cm	0.1	珪岩	完存	携帯用か?	31
S 11	縦断面楔 形蔽打用 石器	51-C区・ Ⅵc層	8.1cm	7.4cm	2.8cm	0.18	砂岩	完存?	H-16埋土中からの出 土	31
S 12	縦断面楔 形蔽打用 石器	2号溝・白 砂層	(10.3cm)	7.3cm	2.3cm	0.15	安山岩	ほぼ完存		36
S 13	石皿片?	2号溝・白 砂層	(7.0cm)	(7.2cm)	(1.5cm)	0.1	安山岩	欠損品		36
S 14	縦断面楔 形蔽打用 石器	2号溝・Ⅵ b層類似土 層	(5.5cm)	(5.2cm)	1.2cm	0.05	安山岩	欠損品		36
S 15	刮片利用 石器	2号溝・Ⅵ b層類似土 層	(6.8cm)	4.2cm	1.0cm	0.04	安山岩	半欠品?		36
S 16	縦断面楔 形蔽打用 石器	2号溝・白 砂層(下層)	9.1cm	7.4cm	2.7cm	0.23	砂岩	完存?		36
S 17	凹石	2号溝・Ⅵ b層類似土 層(下層)	8.3cm	(6.3cm)	2.1cm	0.2	安山岩	半欠品		36

No	種類	区・層	計測値 (単位cm, kg)				観察結果			備考	掲載図
			長軸 (最大長)	横軸 (最大幅)	厚さ (最大厚)	重量	石材	現存状態			
S18	蔽石	2号溝・V b層類似土 層(下層)	9.0cm	3.9cm	4.6cm	0.23	砂岩	完存	河原石利用	36	
S19	軽石製品	5号溝・埋 土	18.0cm	15.9cm	11.4cm	0.88	軽石	周縁部の一 部を欠くの み	陰石か?	37	
S20	石皿	51-A区 ・Va層	(6.8cm)	(6.7cm)	3.3cm	0.18	安山岩	欠損品	両面を利用	53	
S21	石皿?	51-A区・ Va層	(10.4cm)	(5.9cm)	(1.9cm)	0.15	安山岩	欠損品	使用面にわずかに凹部 が形成されている	53	
S22	凹石	53-C区・ VI層	9.7cm	6.6cm	4.7cm	0.34	安山岩	側縁部をわ ずかに欠く のみ	両面を利用	53	
S23	凹石	51-A区・ Va層	12.5cm	9.7cm	5.1cm	1.08	安山岩	側縁部の一 部を欠く	凹部はごく浅い	53	
S24	凹石	56-A区 ・V層	8.6cm	7.7cm	4.5cm	0.35	安山岩	完存		53	
S25	縦断面楔 形蔽打用 石器	51-C区・ Va層	7.5cm	7.0cm	1.3cm	0.07	安山岩	使用部位を 一部欠く		53	
S26	台石?	51-A区・ Va層	(8.5cm)	(5.2cm)	2.2cm	0.13	砂岩	欠損品	側面に整形のためと考 えられる蔽打痕が認め られる	53	
S27	台石?	53-B区・ V層	8.1cm	5.6cm	4.5cm	0.34	安山岩	完存?		53	
S28	蔽石	55-A区 ・VI層	19.1cm	6.1cm	5.2cm	0.87	安山岩	上下両端付 近を一部欠 く	上下両端に蔽打痕が認 められる	53	
S29	蔽石	54-B区・ IV層	9.9cm	4.4cm	3.3cm	0.21	砂岩	完存		53	
S30	軽石製品	51-A区・ Va層	5.7cm	3.9cm	3.1cm	0.01	軽石	完存	陰石か?	54	
S31	軽石製品	54-B区・ V層	(11.1cm)	9.1cm	6.8cm	0.15	軽石	一方の端部 を欠く	陰石か?	54	
S32	軽石製品	51-A区・ Va層	9.4cm	7.1cm	4.3cm	0.07	軽石	完存	整形痕を数ヶ所にとど める。	54	
S33	軽石製品	52-C区・ Va層	14.4cm	14.8cm	7.1cm	0.41	軽石	側縁部を一 部欠くのみ	陰石か?	54	
S34	軽石製品	53-A区 ・V層	20.9cm	(19.3cm)	17.2cm	1.91	軽石	側縁部を一 部欠く	陰石か?	54	



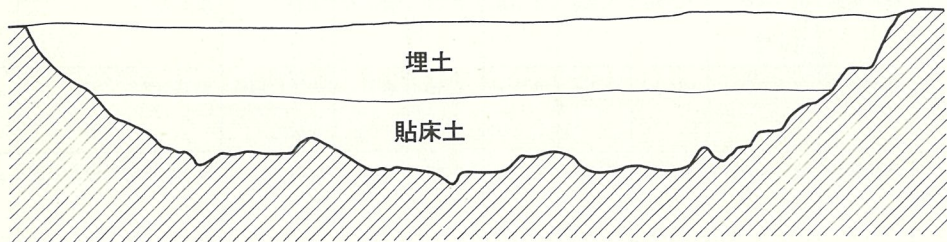
これらの遺構・遺物については今後検討すべき課題も多い。ここでは、本遺跡をめぐる二、三の問題点を提示し、本調査報告のまとめにかえたい。

### 住居址

今回の調査において、27軒の住居址が検出・調査された。これらは成川式土器期でも最終段階に位置づけられるもので、すべて方形プランを呈すると考えられる。現鹿兒島大学教育学部敷地内の県立医大遺跡<sup>(1)</sup>・日置郡吹上町辻堂原遺跡<sup>(2)</sup>・始良郡始良町萩原遺跡<sup>(3)</sup>等で検出されたような円形住居は1軒も認められなかった。

I・J-9・10区検出の住居址群はすべて方形プランを呈するという点の他、その規模も1辺3～4mとほぼ同規模であり、その床面中央部付近に炭の拡がりが見られること、及びその炭の拡がりの中央部分に脚部を故意に欠いたと思われる高坏坏部を据え置くことなど齊一的な様相を示す。高坏坏部が炭部中央に遺存した状態で検出された住居は3・7・10・19号住居址のみであったが、2号住居址の中央炭部においては炭部中央がくぼんでおり、この住居址においても当該部分に高坏坏部が本来据え置かれていたものと考えられる。おそらく過去に本調査区を襲った洪水によって据えおかれていた高坏が流されたものと思われるが、2号住居址と同様な状況は高坏坏部を残さない他の住居址のいくつかについても生じたことが容易に想像される。

このように何ら特別の施設を設けずに火を焚いたと思われる状況は本住居址群のみの特色ではなく、萩原遺跡・辻堂原遺跡・川内市成岡遺跡<sup>(4)</sup>といった既調査例から考えても該期の一般的な様相であろう。ただ、郡元団地I・J-9・10区遺跡例においては、炭の拡がりやどれも住居中央部を中心としていること、及び炭部中央に高坏坏部が据え置かれている点が他の諸例と若干異なる点である。住居址の様相については、このほかに成岡遺跡・辻堂原遺跡・萩原遺跡等で検出されたような住居壁際に設けられた0.5×0.5mほどの浅い凹部が本調査区検出の住居においては認められなかったことも注意される。



第54図 6号住居址横断面図(1/30)

今回調査された住居址においては柱穴が検出された例が極めて少なく、その配列が一部でも判明したのは1・14・17号住居址の3軒のみであった。1号住居址はその外縁に、西壁と南壁に沿って計6本の柱穴が検出されている。このような例は成川式期の住居例においてはおそらく初例ではないかと考えられ注目される。14号住居址は東半部のみ調査であったが、おそらく4本柱住居であったと考えられる。17号住居址は住居中央部で対角線上に4本の柱穴が配される4本柱構造をとる。さらにこの住居は焼失住居であったことから、遺存炭化材の状況の検討によって上屋構造をある程度推測することができた。

このほか、6号住居址・25号住居址を横断するサブトレンチを入れ、該期の住居構築法的一端を知ることができた。第55図は6号住居址に南北方向に設定されたサブトレンチ東壁の土層観察結果である。この観察結果から、住居構築に際してはまず凹レンズ状に掘り込み、次に適当な厚さに貼床を施すことによって平坦な床面を作り出したことが知られた。このような住居構築法のために、住居周壁の立ち上がり傾斜は非常にゆるやかである。本住居址例は17号住居址とともに、成川式土器期の住居構築法解明のための資料を提供したものとえよう。

#### 土器

成川式土器と呼称される南九州独特の土器が主体を占め、他に須恵器、弥生土器片が出土した。

成川式土器については、従来知られていなかったタイプの甕形土器(001, 002, 003)を1号住居址床面直上から検出することができ、さらに住居址の切合関係において新タイプの甕形土器の編年的位置を推測することが可能である。<sup>(5)</sup>

ここでは上記の成果とこれまでの成川式土器編年研究結果を踏まえた上で、鹿児島大学構内遺跡出土の成川式土器を甕形土器の口縁部の形態によって分類し、今後の調査・整理・研究にあたっての1つの指標としたい。

#### 第1類・「く」の字型口縁

<sup>(6)</sup>  
釘田第8地点遺跡出土土器の中に少量ながら認めることができる。

#### 第2類・退化「く」の字型口縁

<sup>(7)</sup>  
教育学部「水町遺跡」においてこれも少量ながら出土している。

#### 第3類・外反型口縁

本調査区における18号住居址床面直上出土土器にみられる口縁形態に代表されるものである。

#### 第4類・直口型口縁

本調査区における4号住居址床面直上出土土器の口縁形態に代表されるものである。

#### 第5類・内湾型口縁

本調査区における11号住居址床面直上出土土器の口縁形態に代表されるものであ



る。

#### 第6類・内湾肥厚型口縁（付・突帯）

外見上は第5類と何ら差異はないものの、突帯上位に粘土帯を貼り付け口縁部を肥厚させるタイプのものである。

#### 第7類・肥厚型口縁

本調査区における1号住居址床面直上出土土器に代表されるタイプのものである。

以上、甕形土器を口縁形態により、第1類～第7類に分類した。編年組列に関しては、第1類→第5類への変遷はこれまでの調査事例、研究等により明らかである。また、第5類と第7類とは今回の調査結果により先後関係を把握することができる。第6類については明確に位置比定を行うことのできる資料を得ていないが、第5類と第7類との中間的諸要素を具備していることから第5類と第7類の間に位置づけた。なお、第3類と第5類には、それぞれ口縁部の屈曲具合の程度において移行形態を示すと思われるものが数多く存在するが、混乱を避けるため、ここでは第4類・直口型口縁を基準に据え、いくらかでも外反傾向があれば第3類に、内湾傾向があれば第5類に含めることにする。

今回の調査では、全形を知り得るものが皆無であり、それ故、口縁形態による類型化に留めた。将来的には、各類型ごとに、突帯の種類・底部形態などによりさらに細分が可能であろうと思われる。なお、本調査区では第3類～第7類の甕形土器が出土している。

鹿児島大学構内郡元団地遺跡は弥生時代より連綿と続く大集落遺跡であり、それ故、今後、調査研究が進めば、成川式土器における小地域編年が可能であろうと思われ、従来の成川式土器の編年的研究における「地域性の等閑視<sup>(8)</sup>」という欠点の一部を補うことができるものと考えている。

須恵器については小破片のみであり、多くを語ることはできない。成川式土器においては、第5類の口縁形態を持つ甕形土器に6世紀代の須恵器が共伴することが知られている。今回の調査においても出土須恵器の主体は6世紀代のものであり、出土土器の大部分が第5類の甕形土器によって占められることとの関連が注目される。しかしながら、遺構内での確実な共伴関係はとらえることができなかった。

最後に今後の課題として残された問題点を列挙し、まとめとしたい。

- ① 1号住居址床面出土の新しいタイプの甕形土器（第7類甕形土器）および第6類甕形土器の構内遺跡の中での位置づけ、また鹿児島県内における分布状況の究明。
- ② 本調査区でもそうであったように、構内遺跡では丹塗高坏が多く出土する。従来、丹塗高坏に関しては祭祀的性格が考えられてきたが、炉の中央に据えられた状況、多大な出土量、および、煮焚きに使用された痕跡のある高坏の存在など、これらの現状をみるにおよび、あまりに日常容器化が進んでいる感が強く、今後、丹塗高坏の性格等について十分検討していかなければならない。



## 石器

今回の調査において、軽石製品・敲石・スクレイパー・石庖丁・砥石・磨石・石皿・凹石・台石等の他、便宜的に縦断面楔形敲打用石器と仮称した石器が出土している。これらのうち石庖丁は住居貼床土内からの出土である。他の石器についても確実に遺構に伴う形で出土したものはごくわずかでありその所属時期を明確にはし難いが、少なくともⅥ層出土の石器は成川式土器期の所産と考えて大過ないであろう。

これらの成川式土器期に属すると考えられる石器を通観すると、砥石や軽石製品を除き、手ごろな自然石をほぼそのまま利用したものが多いことに気付く。また、利器の類がほとんどみられず、敲打や磨り潰しの際に用いられたと思われる石器類が多い。同様な傾向は他の諸遺跡の事例においても認められるようであり、このような状況は利器についてはかなりの程度鉄製品が用いられていたことをネガティブに示すものであらうと考えられる。

### ——— 注 ———

- (1) 河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺蹟について」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 1952年
- (2) 池畑耕一他『辻堂原遺跡』吹上町教育委員会 1977年
- (3) 平田信芳『萩原遺跡』始良町教育委員会 1978年  
平田信芳『萩原遺跡Ⅱ』始良町教育委員会 1980年
- (4) 池畑耕一他『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡』鹿児島県教育委員会 1983年  
牛ノ浜修他『成岡遺跡Ⅱ』鹿児島県教育委員会 1985年
- (5) 平田信芳「隼人が用いた土器—成川式土器」『隼人文化』第5号 1979年  
池畑耕一「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古』第14号 1980年  
多々良友博「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 1981年
- (6) 昭和51年5月から同年12月にかけて発掘調査が行われた。報告書未刊。
- (7) 昭和59年11月から昭和60年3月にかけて発掘調査が実施された。報告書未刊。
- (8) 鹿児島大学法文学部考古学研究室編『中町馬場遺跡』里村教育委員会・鹿児島大学法文学部考古学部研究室 1985年
- (9) 河口貞徳「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号 1976年  
河口貞徳「植平遺跡」『日本考古学年報』28 1977年

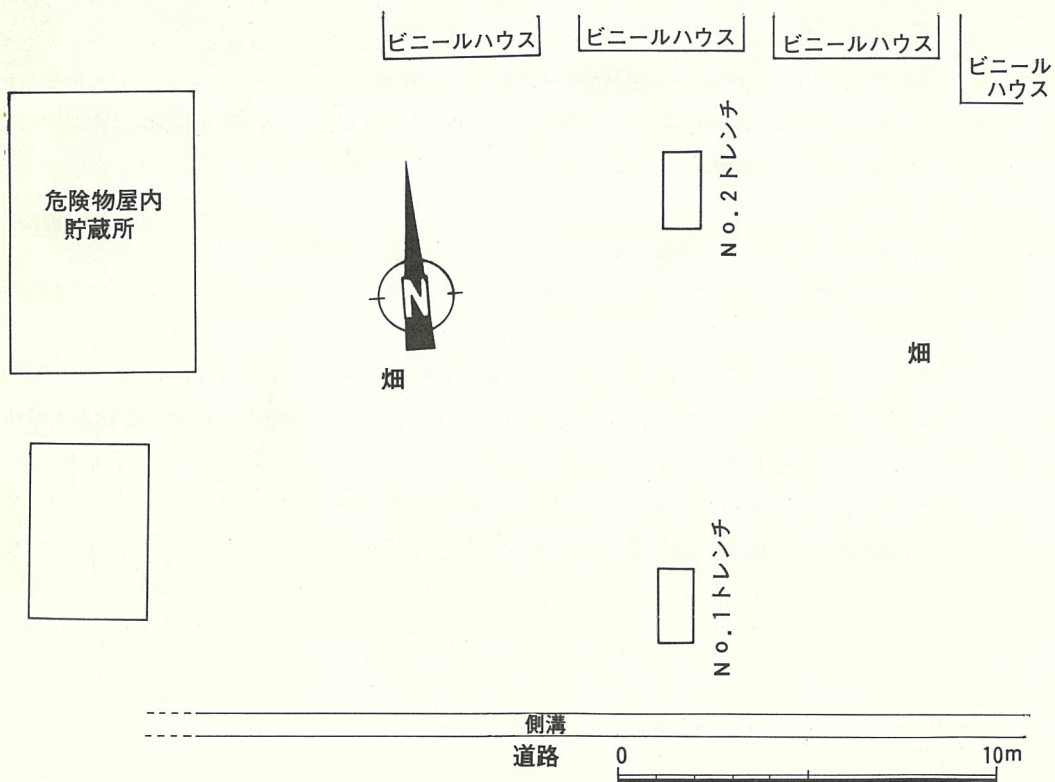
## 2. 郡元団地0-3・4区における発掘調査（教育学部福利厚生施設新設に伴う埋蔵文化財確認調査）の報告

調査期間 昭和60年6月24日～昭和60年6月28日  
 調査主体者 鹿児島大学学長  
 調査責任者 上村俊雄（鹿児島大学埋蔵文化財調査室長）  
 調査員 坪根伸也・金子千穂枝（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）  
 作業員 脇トシ子・脇タミ子・脇ツルエ・前田スガ

### 調査の概要

#### ① トレンチの設定

調査地点は現在、農場として利用されており、自ずと発掘調査面積が制約され、そのため鹿児島大学構内釘田第1～第8地点を包括する全体のグリッドにあわせることができなかったの  
 で、任意に2m×1mのトレンチを2ヶ所設定した。南側からNo.1トレンチ、No.2トレンチと  
 命名する（第55図）。



第55図 0-5区試掘トレンチ位置図（1/200）

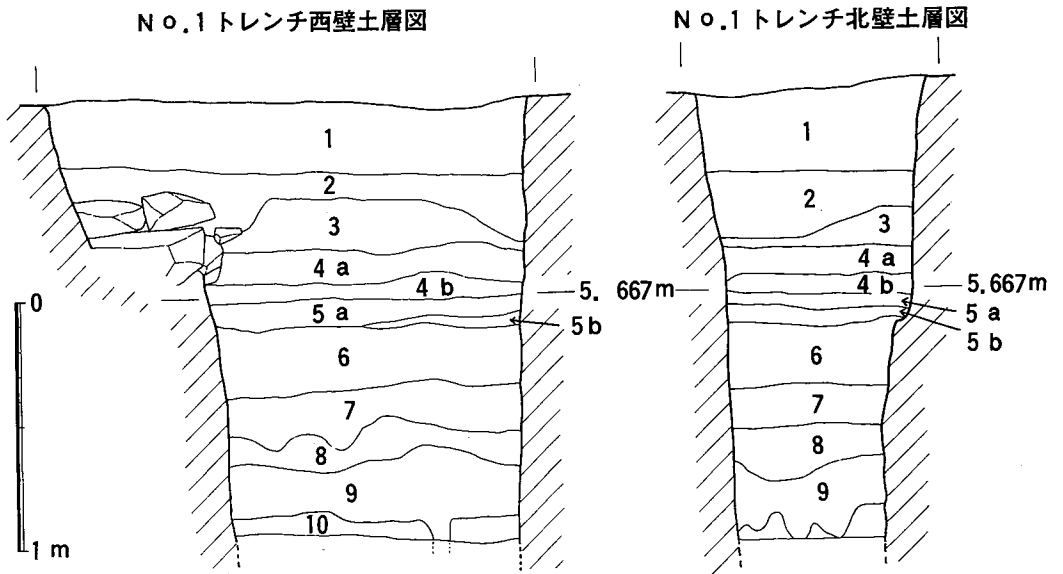
## ② 層 序

現地表面約2mまで確認した。部分的に水田埋立ての際の攪乱が認められたが、基本的に12層に分層することができた。No.1, No.2 トレンチとも上部6層までは、先に調査された水町遺跡(昭和59年11月19日～昭和60年3月30日調査), 鹿児島大学構内釘田第7地点遺跡(昭和54年5月23日～5月24日調査)とほぼ同様な堆積状況を示す。

### 基本層位(第56図)

1層(耕作土): 黒茶褐色を呈し, 下部には黄色の軽石を多数含む。 2層(客土): ピンクシラスを主構成要素とする客土(人頭大の凝灰石などを包含する。) 3層: 灰色砂質土層(軽石の小粒含む。) 4a層: 淡灰色砂質土層(鉄分を含み赤味が強い, 小片であるが炭を包含する。) 4b層: 黄灰色砂質土層(基本的には, 4a層と同様, 黄色パミスを含む。) 5a層: 灰褐色砂質土層(黒褐色の鉄分を5a層は5b層よりも多く含む。5a層には微量であるが黄色パミスを含む。) 5b層: 灰褐色砂質土層。 6層: 灰色粘質土層(下部には茶褐色の鉄分含む。) 7層: 暗灰色粘質土層(粘性が強く, 上部は硬質) 8層: 黒色土層(砂質ではあるが若干粘性を帯びる。) 9層: 黒茶褐色粘質土層(8層ほどではないが, 若干粘性を帯びる。) 10層: 茶褐色砂層(軽石の小粒含む。)

1層は農地耕作土であり, 2層はかつて水田であった当地に「農業試験場」を建設する際に, 埋立てのための覆土として持ってこられたものである(1・2層とも客土である)。3～6層については, すべてシラスの二次堆積土であり, 水町遺跡でのプラント・オパール定量分析の結果などから察するに, 水田として利用されていたと思われる。各水田層の時期比定については, 遺物が非常に少量であるため, 限定することはできない。



第56図 No.1 トレンチ北壁・西壁土層図 (1/30)



7～9層は粘性の非常に強い泥炭質の様相を示す層である。水町遺跡では本層に該当するとされる泥炭層と、上述の水田層との間に成川式期（古墳時代相当）の包含層が溝状遺構などを伴い存在したが、本地点では全くその痕跡すらないままに6層（水田層？）→泥炭質層へと移行している。6層出土の遺物からみて、6層は古墳時代相当期まで、さかのぼり得る可能性はなく、古墳時代、当時はヨシなどが繁り、人もめったに近寄ることのない低湿地帯の様相を呈していたと考えられる。10層は砂層である。付近のボーリング調査の結果などから、本層以下は砂層が続くものと思われ、水町遺跡でのA-2区深掘部の結果などからも10層以下には文化層は存在しないと判断し、10層上面において掘り下げを中止した（現地地表下200cm）。

土層については、No2トレンチ南壁において、各層の土壌サンプリングを行うという処理を講じた後、埋めもどし、現状に復した。

### 遺物

遺物は第3層から陶器片などが出土し、5層からは青磁の高台部分、土師器片数点が出土した。土師器片については、すべて磨滅しており、特徴をつかめるものは皆無である。

### 遺構

3層以上において、埋立ての際に掘り込まれたと思われる掘り込み（6層まで掘り込まれており、中には人頭大の凝灰岩を多数内包する）をNo1トレンチにて確認した。発掘調査中、折に触れて実施したボーリング棒（長さ1m）による調査や「機械耕作中に石がゴロゴロできて困る。」という農場職員の話などから、この攪乱遺構は農場敷地内においてNo1トレンチ付近を中心に広範囲におよんでいることが予想される。4層上面に規則性のない、数条の溝状遺構（？）のようなものが検出されたが、これらは水成作用による所産と考えられ、特に問題はないと思われる。10層上面において、径3～5cm程度の多数の落ち込みを確認した。人工的なものとは考えられず、当該地が湿原地帯であった頃、植物根の浸透などにより、成立したものであろうと考えられる。

### 調査結果

- ① 工事対象地域南側においては、多数の凝灰岩を内包する攪乱穴が広く存在していることが予想される。
- ② 当地は中世から近年まで、脈々と水田が営まれていたと考えられるが、今回の調査では、畦・溝・足跡など、視覚的に具体的な遺構は確認できなかった。
- ③ 遺物についても青磁片や土師器片など中世遺物の出土を見たが非常に僅少である。
- ④ 当地においては、鹿児島大学郡元キャンパスに広く分布する成川式期（古墳時代相当）の包含層は存在しない。水町遺跡の調査結果から考え、この時期の文化層は本地点より西の方向に広がっているものと予見される。本地点において、人間の生活の痕跡が認められるのは

中世以後である。

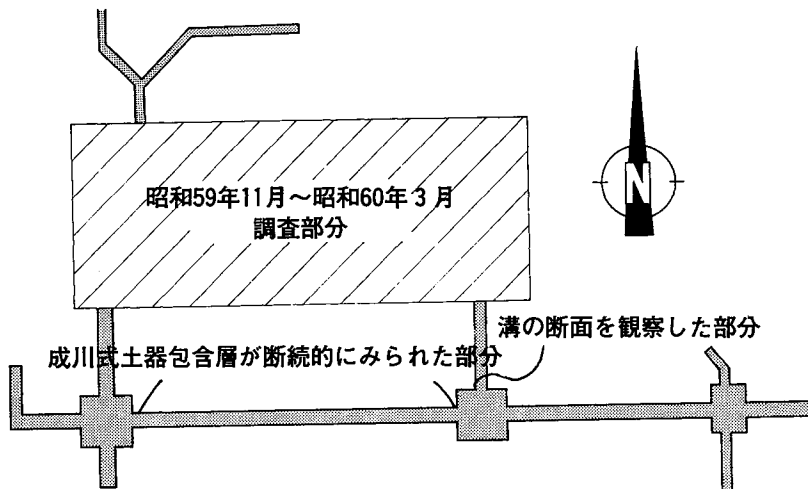
#### 備考

当地には昭和4年～昭和33年の間、「農業試験場」があったということであり、3層上面からの攪乱はこの時期のものと思われる。農場内には土器片（成川式土器）の散布がみられるが、調査の結果から考えて、これらは1層又は2層（共に客土）のいずれかに付随し、当地に持ち込まれたものであろうと考えられる。

### 3. 昭和60年度の立合調査の概要

昭和60年度には、郡元団地において、下記の4件の立合調査を行なった。

- (a) 理学部1号館増築工事に伴う仮設電柱建柱工事（J-10～12区，1985年10月17日）
- (b) 中央図書館北側における高圧電線管付け替え工事（K-6区，1985年11月28日）
- (c) 教育学部校舎新営工事に伴う高圧電線管配管工事（P・Q-6・7区，1985年12月23・24日・1986年1月14・16・17・20・21日）
- (d) 福利厚生施設前における電線管配管工事（I-4・5区，1986年1月18・20日）

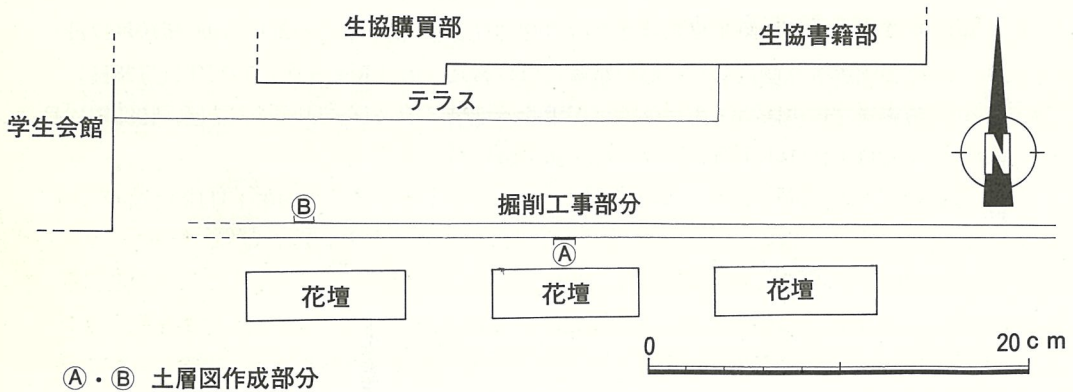


第57図 教育学部校舎新築に伴う高圧電線配管工事部分位置図（1/600）

以上の4件のうち、(a)・(b)については掘削深度が浅く、埋蔵文化財への影響はなかった。(c)は工事地点が水町遺跡内に存在するため、埋蔵文化財への影響が懸念された。工事は昭和59年11月から昭和60年3月にかけて実施された発掘調査区域の北側と南側に隣接する部分（第58図）で行なわれたが、当該地域は各種の配管が縦横に行なわれているため、ほぼ全域にわたって1m前後の深さまで既に掘削されていた。このため南北両側とも掘削部分からの遺物の出土はきわめてわずかであった。ただ、南側の工事地点においては水町遺跡の発掘調査で検出され

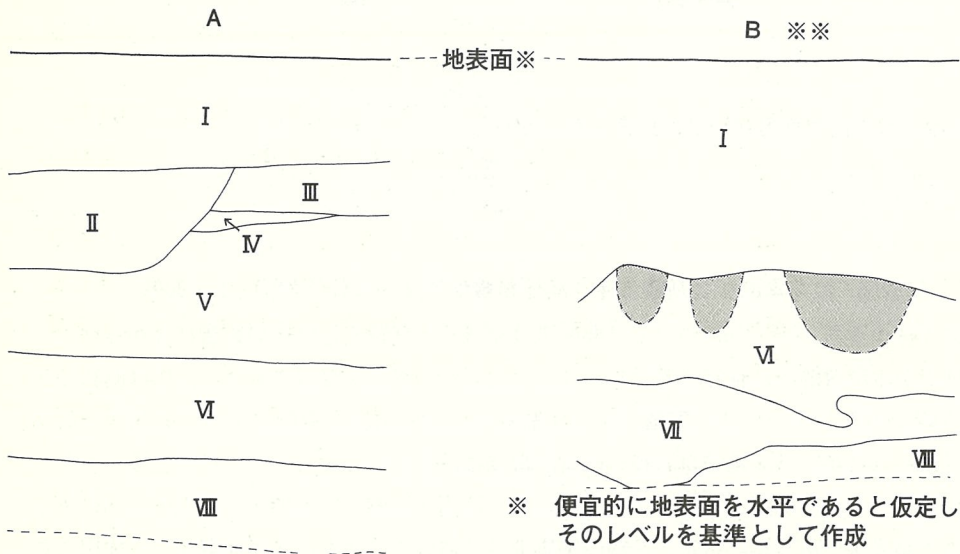
た成川式土器包含層がごく薄い断続的な層として現われ、この包含層の南限がこの付近にあることを推測させている。また、新築校舎南側で南北方向にトレンチ状に掘削された部分において、おそらくは東西方向に流走する溝であろうと考えられる遺構の存在が断面観察によって確認された。

(d)は郡元団地においてもっとも密に遺構が分布していると考えられる教養部の北側に連続する地域において工事が行われることになった(第58図)が、既掘部分に重複して掘削を行なうということであり、当初埋蔵文化財への新たな影響はほとんどないと判断していた。ところが、既掘部分はやや蛇行しており、今回の掘削部分とわずかにずれる部分が生じたことによって遺物包含層が削られることとなった。このため、工事を一時中止し土層断面観察ならびに実測図作成、及び遺物の採集を行なった。土層観察の概略は、以下のようなものである(第59図参照)。



①・② 土層図作成部分

第58図 I-4・5区立合調査実施地点 (1/400)



- ※ 便宜的に地表面を水平であると仮定し、そのレベルを基準として作成
- ※※ スクリーントーン部分は土器が密に堆積していた部分

第59図 I-4・5区立合調査時作成土層模式図 (ほぼ 1/20)



I～III層：現代の攪乱層

IV層：黄褐色砂質土層（2～3cm大の軽石粒をやや含む）

V層：茶褐色砂質土層

VI層：灰色砂質シルト層（成川式土器包含層）

VII層：淡灰白色砂質シルト層（上下の層の土と混合されたような状況がみられる）

VIII層：暗灰色粘質土層

このような土層の堆積状況は、教養部の校舎増築工事に伴って行われた発掘調査において得られた所見ともほぼ対応するようである。包含層（VI層）における成川式土器の出土状況は非常に密であり、この部分においても教養部校舎増築地同様、住居址をはじめとする遺構群が存在することを強く示唆している。

#### 4. 昭和60年度の調査活動のまとめ

昭和60年度には郡元団地において本調査1件・試掘調査1件・立合調査4件を実施した。これらの調査によって得られた成果についてここで簡単にまとめたい。<sup>(1)</sup>

まず、理学部1号館増築予定地（郡元団地I・J-9・10区）内の発掘調査においては成川式土器期の住居址27軒が検出され、理学部から教養部にかけての地域が郡元団地構内所在遺跡群の中心的位置を占めることを再認識することとなった。本調査区では上記の住居址の他に東西方向あるいは南北方向の該期の溝が5条検出されているが、これらの溝埋土の断面観察及び成川式土器包含層直上層（V層）の観察によってこの地が数回にわたる洪水に見舞われたことが推測された。これは住居址内出土遺物の少なさとともに昭和51年に行なわれた理学部2号館増築地内の発掘調査において検出された自然河川内の大量の完形土器の由来を示唆するものであろう。また、この調査においては、焼失住居址検出炭化材の遺存状況の検討及び住居址に設けたサブトレンチの断面観察によって該期の住居構造の一部を推測することができた。

教育学部においては試掘調査1件（郡元団地O-4・5区）、立合調査1件（郡元団地P・Q-7・8区）が行なわれたが、それぞれ成川式土器包含層の拡がりを検討するための資料を提供した。

福利厚生施設前（郡元団地I-4・5区）で行なった立合調査においては、昭和50年の教養部校舎増築地内の発掘調査で知られた層位を確認するとともに、遺物包含層内に非常に密に遺物が含まれていることも観察した。ここで得られた所見は、教養部敷地内で検出された遺構群が従来の推定通りかなり広範囲に拡がって存在することを予想させるものである。

鹿児島大学郡元団地においてはこれまでに各時期にわたる遺物の出土をみているが、遺構については水田址を別にすれば成川式土器期のものに集中している。今年度の調査においては、郡元団地I・J-9・10区で弥生時代前期末～中期前半の資料を得ているが、今後、これら成川式土器期以外の諸時期の包含層や遺構の所在を追求することが必要である。また、成川式土

器期の遺構についても郡元団地においては集落址しか知られておらず，将来，墓地等の所在が明らかにされることが期待される。

—— 註 ——

- (1) 本年報においては昭和60年度の調査活動のうち，調査室が発足した昭和60年6月1日から昭和61年1月31日までの間に実施した調査について報告を行った。

# 付 編

1. 鹿児島大学郡元団地 I・J-9・10区検出17号住居址出土炭化材の樹種鑑定結果  
鹿児島大学農学部 藤田 晋輔
2. 鹿児島大学理学部1号館増築予定地（I・J-9・10区）におけるプラント・オパール分析について  
宮崎大学農学部 藤原 宏志
3. 脇田亀ヶ原遺跡について —— 鹿児島大学宇宿キャンパス及びその周辺地区に於ける採集遺物の紹介 ——  
鹿児島大学法文学部 本田 道輝



# 鹿児島大学郡元団地 I・J-9・10区検出17号住居址出土炭化材の 樹種鑑定結果

鹿児島大学農学部 藤田晋輔

## 針葉樹

試料番号 №.8, №.9 : スギまたはヒノキ?

暖帯地域において主流を占めるスギ、ヒノキは組織学的には大差が無く、樹皮が存在しなければ非常に判別が困難である。したがって、推定される樹種名は併記したが、試料の特徴は以下の通りである。

構成要素は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞の3種類からなっていることによってスギかヒノキである。スギ、ヒノキの判別は放射組織の高さ(柔細胞の垂直方向の数)は、いずれも単列であるが、前者は比較的高く(～15細胞)、後者は低い(1～10細胞)。今回の試料では観察困難であったが、放射柔細胞の分野壁孔の確認ができれば(スギ型の分野壁孔、ヒノキ型のスギ壁孔)、スギ、ヒノキの判別の可能性があったが、今回は判別不可能であった。

試料番号 №.6, №.10 : クロマツorアカマツ

本試料には仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および樹脂道(垂直)が存在している。よってマツであることが判断されたが、樹皮が存在していないので、アカマツかクロマツであるか判別できにくい。海拔高からすれば(天然であると考えれば)、この地域ではアカマツは海拔700m付近以上にならないと出現しない。したがって、クロマツである可能性が大きい。

## 広葉樹

試料番号 №.1, №.5, №.11 : カシ?

本樹種は道管要素、仮道管、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞から構成されている。観察結果の大きな特徴は道管の配列状況である。№.1, №.5, №.11は明らかに放射孔材で、放射組織もかなり大きい。道管には単せん孔が見られ、柔細胞が接線方向に1～3細胞の独立帯状柔組織が観察された。しかし、これがカシ類のどの樹種に属するか判別できない。

試料番号 №.3 : ツバキまたはサザンカ

構成要素は道管要素、木繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞から成っている。道管配列は散孔材であり、道管が材面に一様に分布している。また、道管は単独あるいは2～3個接合して1年輪内に均等に分布している。軸方向柔細胞は接線状ないし散在状に分布している。木繊維の壁はかなり厚いので硬い木であることが類推できる。

試料番号 №.2 : イスノキ?

構成要素は道管要素, 軸方向柔細胞, 木繊維および放射柔細胞から成っている。道管の配列は散孔であり, おおむね単独である。また, 大きさ, 数ともに年輪内全体を通してほぼ平等に分布している。この樹種の特徴は柔細胞が接線方向に黒い接線状に並んで見られるのが特徴である。この地方には非常に多く見られる。

試料番号 №.4, №.7 : ヤマハゼ

構成要素は道管要素, 木繊維, 軸方向柔組織, 放射柔組織を構成している。道管は年輪に接して1~2列からなる環孔状に配しており, 時に半径方向に数個の道管が接合している様子を見る。放射組織の幅はせまく, あまり目立たない。

表6 郡元団地I・J-9・10区17号住居址出土炭化材樹種鑑定結果

SP.No.	種類	備考
1	広葉樹	カン? 放射孔材
2	広葉樹	イスノキ? 散孔材
3	広葉樹	ツバキorサザンカ? 環孔材
4	広葉樹	ヤマハゼ? 環孔材
5	広葉樹	カン? 放射孔材
6	針葉樹	マツ
7	広葉樹	ヤマハゼ? 環孔材
8	針葉樹	スギorヒノキ?
9	針葉樹	スギorヒノキ?
10	針葉樹	スギorヒノキ?
11	広葉樹	カン? 放射孔材

(追記)

SP.No.1, 11のカンの種類までは判別困難

サンプル採取位置については第27図参照

# 鹿児島大学理学部1号館増築予定地（I・J-9・10区） におけるプラント・オパール分析について

宮崎大学 藤原宏志

1985年9月27日、鹿児島大学理学部1号館増築予定地（I・J-9・10区）で採取した試料のプラント・オパール分析結果について以下のように報告する。

## 1. 試料および方法

試料はI・J-9・10区で10.0cc採土用試料円筒を用いて行った。試料採取時にV層以上の層はすでに除去されており、VI b層からXVI層まで計16試料を分析に供した。

プラント・オパール定量分析は常法に順じ宮崎大学農学部農作業管理学研究室で行った。

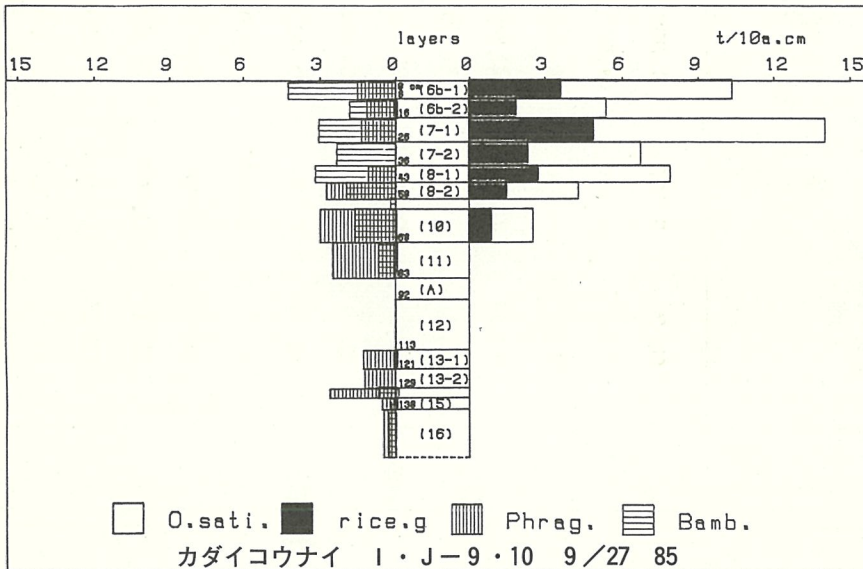
## 2. 分析所見

- (1) VI b層からX層まではほぼ連続的にイネ（*O.sativa*）が検出されるが、XI層より下層では全く認められない。
- (2) VI b層からX層で検出されるイネの量は極めて多く、水田もしくは何らかの理由でイナワラを集積した場所と思われる。その何れであるかは検出遺構と照合の上検討されたい。
- (3) 当該地点は砂層と黒色有機質土の互層であるが、VIII層以下の有機質土にはヨシが多く検出され低湿地の様相を示している。VII層より上層ではヨシが少なくなりタケ亜科が増加する。このことは周辺環境がより乾燥した状態に変化したことをうかがわせる。VII層より上層でイネの量が増えることを合わせ考えると、この時期に灌漑施設などの治水技術が施されたことも考えられる。



## グラフの見方について

1. layers : 採取地点の土層模式図, ( ) 内の数字は土層番号, 左すみの小数字は表層からの深さをcmで表したものの。
  2. O. sati. : *Oryza sativa*. 栽培稲の地上部乾物重.  
 rice.g : *Oryza sativa*の穎果(粳)乾物重.  
 Phrag. : *Phragmites communis*. ヨシの地上部乾物重.  
 Bamb. : *Bambusaceae*. タケ亜科の地上部乾物重.  
 各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壤中から検出された各植物由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
  3. 土柱模式図の右側に栽培植物, 同左側に野・雑草を示している。単位  $t/10a \cdot cm$  はその土層の厚さ 1 cm, 面積 10 a (1000 $m^2$ ) に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量を t (トン,  $1 \times 10^3$  kg) で表わしたものである。例えば, その土層が 10cm の厚みであると, グラフで示された値に 10 を乗じた量の植物体とその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。
  4. 水田が埋蔵されている土層では O. sati. の値がピークを形成することが多い。土層の堆積状況により一概にいえないが, 水田の層位はこのピークと一致するのが通例である。
  5. Phrag.(ヨシ), Bamb.(タケ) の乾物量変遷はその地点における土壤水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し, タケ(ササ)は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると, その地点の乾湿変化を推定できる。
  6. 最下段は遺跡名, 採取地点, 採取年月日を示す。
- なお, プラント, オパール定量分析結果の数値表を添付するので参照されたい。



第60図 I・J・9・10区プラント・オパール分析結果グラフ

表7 郡元団地I・J-9・10区プラント・オパール分析結果

層名	I・J-9・10ク地点		9/27・85・サンプリング						
	イネ (O.sati.)	イネ類 (rice g.)	キビ族 (Panl.)	キビ族種実 (Panl.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)		
	植物体乾重 (t/10a.cm)								
6b-1	10.380	3.637	10.768	4.890	1.529	4.237	3.283		
6b-2	5.392	1.889	4.068	1.847	1.155	1.841	1.034		
7-1	14.020	4.912	14.544	6.604	1.377	3.052	1.971		
7-2	6.713	2.352	15.001	6.812	0.000	2.361	3.049		
8-1	7.893	2.765	9.633	4.374	1.094	3.184	0.783		
8-2	4.269	1.496	6.442	2.925	2.744	1.964	1.801		
9	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.224	0.193		
10	2.537	0.889	5.265	2.391	2.991	1.657	2.140		
11	0.000	0.000	1.474	0.669	2.511	0.696	1.198		
A	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		
12	0.000	0.000	2.393	1.087	0.000	0.047	0.486		
13-1	0.000	0.000	9.327	4.235	1.324	0.046	1.185		
13-2	0.000	0.000	7.734	3.512	1.255	0.000	0.898		
14	0.000	0.000	8.080	3.669	2.623	0.727	1.877		
15	0.000	0.000	3.966	1.801	0.563	0.195	0.302		
16	0.000	0.000	0.452	0.205	0.514	0.302	0.230		

層名	深さ (cm)	層厚 (cm)	GB数/g	植物名	PO/GB	PO数/g	仮比重	PO数/c	地上部乾重 (t/10a.cm)	種実重 (t/10a.cm)	種実生産総量 (t/10a)
6b-1	0	8	301180	イネ	16 / 165	29205	1.209	35305	10.380	3.637	29.092
				キビ族	4	7301		10.768	4.890	39.119	
				ヨシ	1	1825		2207	1.529		
				タケ	40	73013		4.237			
				ススキ	12	21904	26480	3.283			
6b-2	8	8	292855	イネ	11 / 198	16270	1.127	18341	5.392	1.889	15.113
				キビ族	2	2958		4.068	1.847	14.779	
				ヨシ	1	1479		1.155			
				タケ	23	34019		1.841			
				ススキ	5	7395		1.034			
7-1	16	10	318890	イネ	24 / 176	43485	1.097	47686	14.020	4.912	49.116
				キビ族	6	10871		14.544	6.604	66.045	
				ヨシ	1	1812		1.377			
				タケ	32	57980		3.052			
				ススキ	8	14495	15895	1.971			
7-2	26	10	295202	イネ	13 / 187	20522	1.113	22835	6.713	2.352	23.520
				キビ族	7	11050		15.001	6.812	68.118	
				ヨシ	0	0		0.000			
				タケ	28	44201		2.361			
				ススキ	14	22101	24591	3.049			
8-1	36	7	292355	イネ	17 / 180	27611	0.972	26847	7.893	2.765	19.356
				キビ族	5	8121		9.633	4.374	30.621	
				ヨシ	1	1624		1.094			
				タケ	42	68216		3.184			
				ススキ	4	6497	6317	0.783			
8-2	43	7	282536	イネ	11 / 218	14256	1.019	14520	4.269	1.496	10.469
				キビ族	4	5184		6.442	2.925	20.476	
				ヨシ	3	3888		2.744			
				タケ	31	40177		1.964			
				ススキ	11	14256	14520	1.801			
9	50	4	301250	イネ	0 / 179	0	0.924	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0.000			
				ヨシ	0	0		0.000			
				タケ	3	5049		0.224			
				ススキ	1	1683	1555	0.193			
10	54	14	291848	イネ	6 / 212	8260	1.045	8631	2.537	0.889	12.446
				キビ族	3	4130		5.265	2.391	33.470	
				ヨシ	3	4130		2.991			
				タケ	24	33039		1.657			
				ススキ	12	16520	17261	2.140			
11	68	15	314314	イネ	0 / 229	0	0.880	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	1	1373		1.474	0.569	10.038	
				ヨシ	3	4118		2.511			
				タケ	12	16471		0.696			
				ススキ	8	10980	9664	1.198			
A	83	9	300000	イネ	0 / 300	0	1.000	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0.000			
				ヨシ	0	0		0.000			
				タケ	0	0		0.000			
				ススキ	0	0	0.000				
12	92	21	305709	イネ	0 / 315	0	1.011	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	2	1941		2.393	1.087	22.821	
				ヨシ	0	0		0.000			
				タケ	1	971		0.047			
				ススキ	4	3882	3923	0.486			
13-1	113	8	298093	イネ	0 / 211	0	0.676	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	8	11302		9.327	4.235	33.882	
				ヨシ	2	2826		1.324			
				タケ	1	1413		0.046			
				ススキ	10	14128	9556	1.185			
13-2	121	8	286975	イネ	0 / 183	0	0.578	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	7	10977		7.734	3.512	28.096	
				ヨシ	2	3135		1.255			
				タケ	0	0		0.000			
				ススキ	8	12545	7245	0.898			
14	129	4	293175	イネ	0 / 192	0	0.620	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	7	10689		8.080	3.669	14.676	
				ヨシ	4	6108		2.623			
				タケ	16	24431		0.727			
				ススキ	16	24431	15138	1.877			
15	133	5	291447	イネ	0 / 193	0	0.538	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	4	6040		3.966	1.801	9.005	
				ヨシ	1	1510		0.563			
				タケ	5	7550		0.195			
				ススキ	3	4530	2438	0.302			
16	138		250682	イネ	0 / 214	0	0.316	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	1	1171		0.452	0.205		
				ヨシ	2	2343		0.514			
				タケ	17	19914		0.302			
				ススキ	5	5857	1853	0.230			



# 脇田亀ヶ原遺跡について——鹿児島大学宇宿キャンパス 及びその周辺地区に於ける採集遺物の紹介——

鹿児島大学法文学部考古学研究室 本 田 道 輝

鹿児島大学郡元キャンパスが古墳時代を主体とする遺跡からなることは、関係者の間ではすでによく知られているところである。しかし、一方、医学部・歯学部等が所在する宇宿キャンパスやその周辺地区が縄文～弥生時代の貴重な遺跡であることは、あまり知られていない。筆者は、かつてこの地域の踏査をおこなった者の一人として、本誌を借りてその状況を報告しておこうと思う。なお、この地区に存在する（あるいは存在した）と予想される複数遺跡の総称として、地元の人々が呼称する「亀ヶ原」の名称をとり、脇田亀ヶ原遺跡と呼んでおきたい。また、ここに報告する遺物は筆者の採集になるものであり、後述のように当時採集された遺物の実数は、これをはるかに上回るものであったことも付記しておく。

脇田亀ヶ原遺跡は、脇田川と永田川に挟まれた略三角形のシラス台地東北端に位置し、眼下に鹿児島市南部の市街地や鹿児島湾が広がる標高70m前後の高台にあり、台地下の沖積地とは65m前後の比高差をもち急崖をなして接している。周辺の遺跡としては、台地下に所在する笹貫遺跡・薬師堂遺跡が古く調査されて著名であり、永田川川床及びその周辺の沖積地からも古くからしばしば土器の出土が伝えられている。これらは多くが古墳時代の遺跡であり、この地域にも当時集落が点在していたことが知られるが、その内容も不明なまま市街地と化して消滅し、現在ではその正確な位置さえも不明瞭となった遺跡の多いことは極めて残念なことである。

ところで、亀ヶ原に遺跡が発見されたのはいつのことであろうか。発見者やその経緯については知らないが、筆者が最初に現地を訪れたのは昭和45年末あるいは昭和46年の早い頃であり、中間研志氏（現福岡県教育庁文化課勤務）に同行してのことであった。当時すでにキャンパス予定地の造成は終了しており、削平された地表面には破碎された土器片が点々と認められる状況で、遺跡は広範囲に破壊されたものと思えた。その後、筆者は休日等を利用して何度も現地を訪れ遺物の採集を行う一方、キャンパス予定地外地区も踏査して何方所かで遺物の散布する畑地を発見した。キャンパス予定地では遺物採集をする人の姿をしばしば見かけ、中には大きな土器破片を採集された人もあったが、それらの遺物の所在は今では知る由もない。

当時の記憶をたどりながら現在の宇宿キャンパス地図に遺物散布地点を書き加えたものが第3図である。8地点に区分しA～H地点と仮称して、各地点毎にさらに説明を加えよう。

A地点 大半がキャンパス外で、当時は雑木林や荒地が広がる荒涼とした場所であり、一日中歩き回っても人影を見ない程であった。畑地がその間に散在し、何方所かで土器片を採集したが、いずれもキャンパスに近い地点で、時期が判断できるものとしては弥生中期甕破片があった。この地点はその後造成されて団地となり景観は一変している。遺跡はその過程で破壊

され消滅した可能性が高い。

B地点 歯学部関連棟及びその北側のグラウンドに該当する地点で、当時縄文前期・弥生前期土器小破片を採集した。しかしこのB地点及びC地点では弥生中期土器片が多く採集されていたのを見たことがあり、むしろこの時期の遺物が主体となって遺跡を形成していたものと思われる。破壊箇所が多いであろうが、場所によっては遺跡残存の可能性もある。

C地点 医学部関連棟及び附属学校や駐車場に該当する地点で、少量の縄文早期・弥生中期土器片を採集した。C地点北半分から台地端部にかけては削平深度は浅く遺跡は残存する可能性が高い。

D地点 医学部附属病院北側地点に該当し、当時縄文早期土器片が多く散布していた地点で、この時期の遺跡が形成されていたことは間違いない。この地点もあるいは遺跡残存の可能性があり、台地北側端部はなおその可能性は高いであろう。

E地点 医学部関連棟が建ちならぶ地点に該当し、当時かなり削平されており遺跡は壊滅的打撃を受けていると思われる。少量の土器片を採集したが時期不詳。

F地点 駐車場や芝生地等になっている地点で、当時縄文早期・弥生中期土器片を少量採集した。遺跡は特にその東半部に残存する可能性が考えられる。

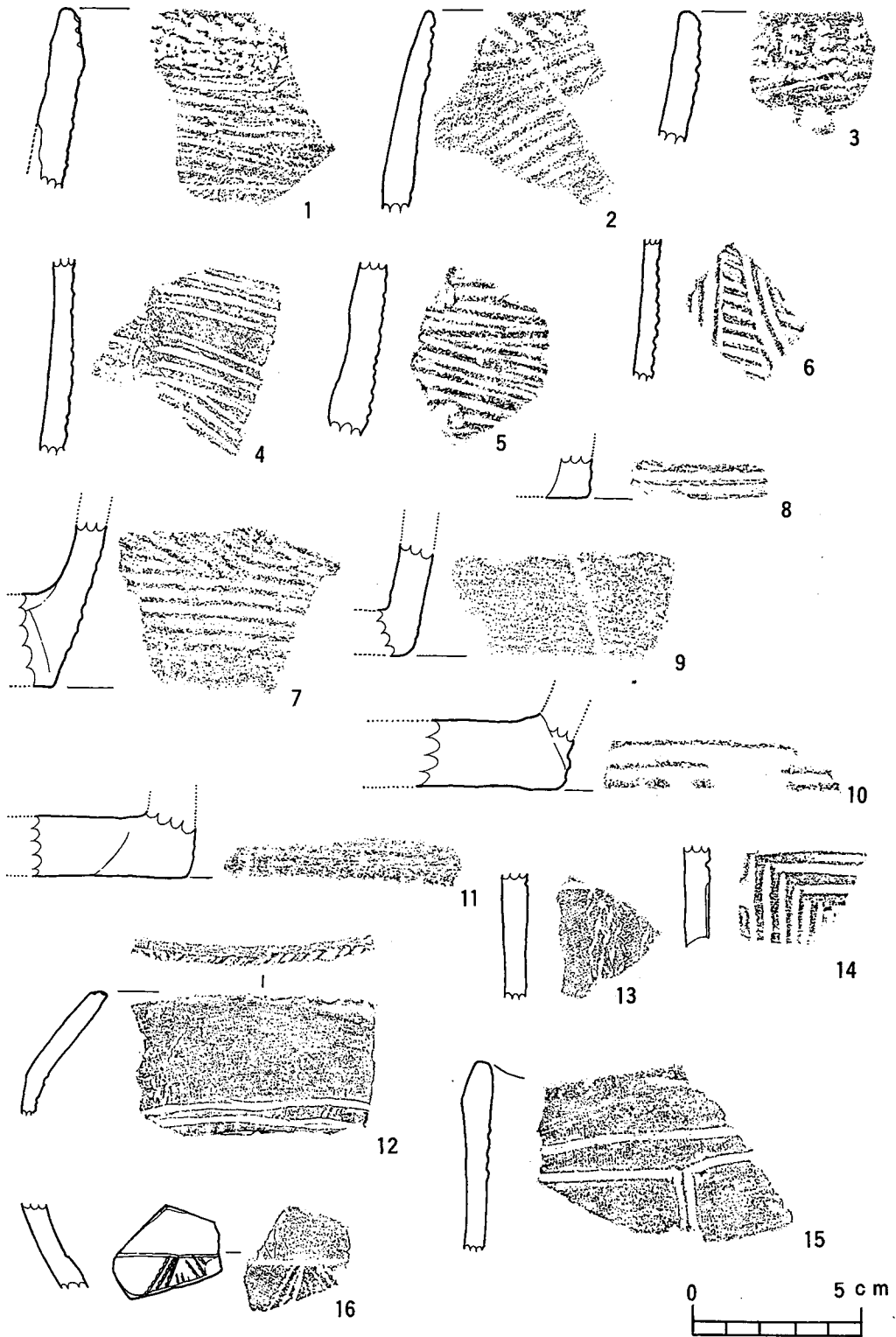
G地点 キャンパス外の地点で、当時造成がおこなわれていたが現状もほとんど変化がない。その大部分は遺跡があったとしても完全に破壊されているであろう。ただ、その北西部に一部旧地形を残す箇所があり、この箇所には遺物包含層が認められ、縄文早期末あるいは前期初頭に編年されている塞ノ神式土器が採集された。

H地点 筆者が現地を訪れた頃は畑地で、少量の土器片を認めたにすぎなかったが、昭和46年の末頃大栄団地のための宅地造成が始まり多くの土器片や石器が出土した。ただちに県教育庁に連絡したものの、文化課設置前でもあり何ら処置がなされなかったことは遺憾極まりない。筆者の採集品の大半はこの地点のもので、縄文後期・弥生前、中期土器片及び石斧・石鎌・磨石等の石器、古銭（洪武通宝）からなる。現在は、旧地表面より数m削平されて団地となっており、遺跡は完全に消滅した。

次いで採集した遺物について簡単に報告する。

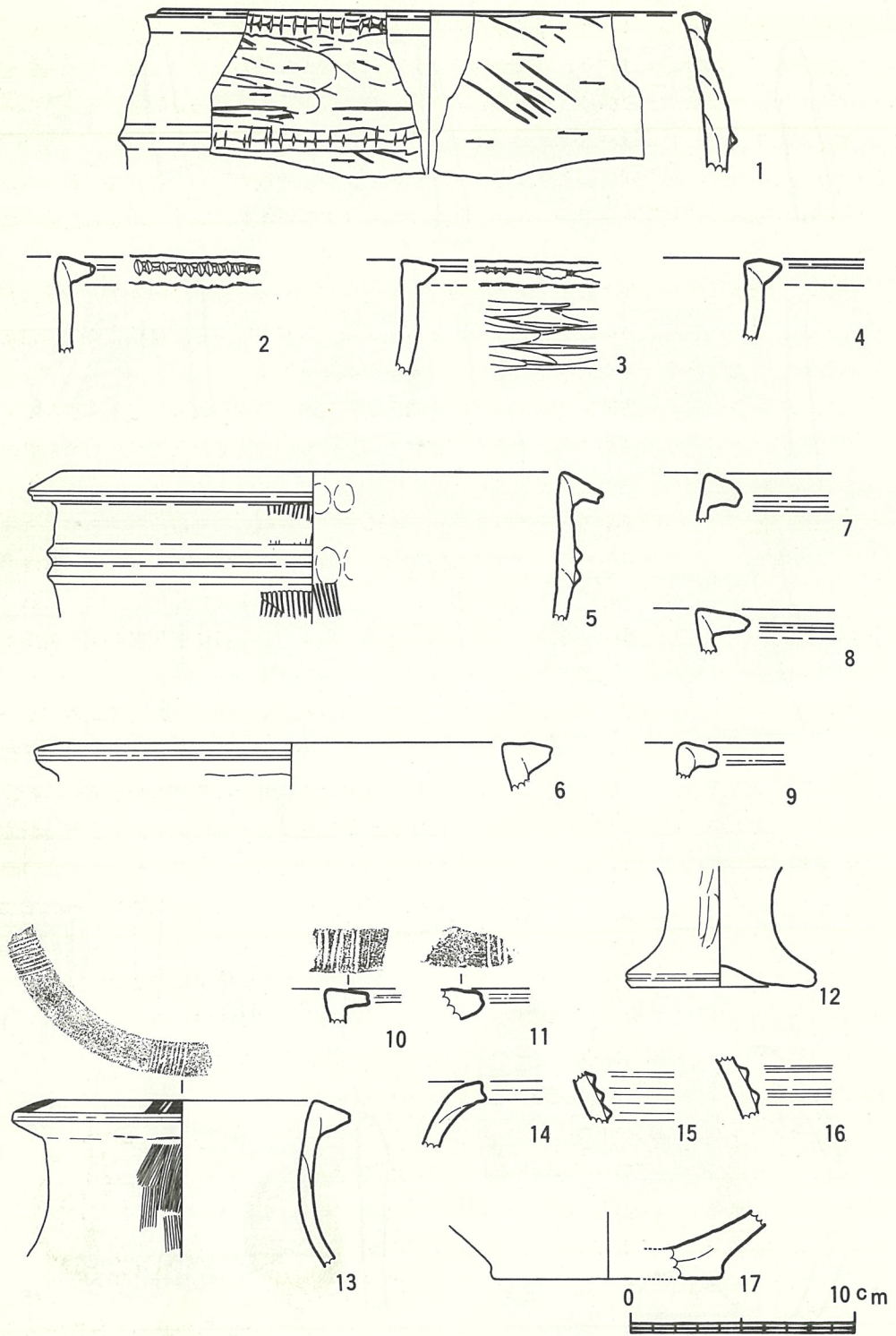
第61図1～11は、いわゆる円筒形土器で縄文時代早期に編年されている。D地点を中心にC・F地点でも少量採集され、この付近に遺跡が形成されていたことは間違いない。器面がやや風化したものが多いが器表面には斜位の貝殻条痕が認められ、7～11のように底部付近は横位の貝殻条痕となる。底部下端には11の1例を除いて刻みは施されていない。5は貝殻条痕の上に何かの圧痕が認められ、6は貝殻条痕を重ねて文様風にしたものである。口縁部は1～3の3点あるが、いずれも口縁部上端近くに斜位の貝殻刺突文を1単位施す。内面は削痕が認められるものが多く、以上のような特徴からこれらの土器は前平式土器の一タイプとしてよいであろう。

第61図12・13は塞ノ神式土器で縄文時代早期末～前期初頭に編年されている。G地点北西端



第61図 脇田亀ヶ原遺跡採集土器 (1/2)





第62図 脇田亀ヶ原遺跡採集土器 (1/3)

に少量認められ、あるいはF地点やD地点東側にかけて遺跡を形成するものかもしれない。12は口縁部片で、口唇部には刻みと刺突連点文を施し、頸部には間隔をおいて施された縦位の撚糸文とそれに重なる三条の横位沈線が認められる。13は胴部片で施文法は同様であり、いずれも塞ノ神A式a土器の特徴を示すものである。

第61図14は縄文時代前期に編年される曾畑式土器である。B地点から1点採集されたのみで、この時期の遺跡が存在するかどうか不明。幾何学的な沈線文を施し、胎土に滑石は認められない。

第61図15は縄文時代後期に編年される指宿式土器である。H地点から1点採集したが、F又はD地点でも採集されているのを見たことがある。あるいは脇田亀ヶ原遺跡の東端部に遺跡が形成されていた可能性もある。波状口縁で並行する沈線文を施す。

第62図1は、いわゆる凸帯文甕形土器で縄文時代晩期末から弥生時代前期に編年されている。ヘラ状工具による刻目は鋭く、内外面をナデ調整する。これらの土器はH地点に認められ、この付近に遺跡を形成していたものと思われる。

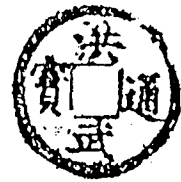
第62図2～4は、口縁部断面三角形をなす甕形土器で、口縁端部に刻目を施すものや外面をヘラミガキするもの等が存在する。弥生時代前期末～中期初頭に編年されるもので、H地点に認められこの付近で遺跡を形成していたと思われる。B地点で採集した第61図16は、これらの土器に近い時期の壺形土器片である。ただ1点の採集であり、B地点にも同様時期の遺跡が存在したか明らかでない。

第62図5～11は、口縁部が垂れ下がり気味に外方へのびる甕形土器で、口縁端部を凹ませ、5のように胴部にも凸帯をめぐらすものが一般的である。10・11にみられるように、口縁部上面に櫛状工具あるいはヘラ状工具による短線を間隔をおいて数カ所に施すものもあり、底部は12が該当するものであろう。これらは弥生時代中期中葉に編年されるもので、脇田亀ヶ原遺跡で最も多く採集された土器であり、採集地点もA～D・F・H地点と広域にわたり、この時期宇宿キャンパスを中心としてかなりの規模の遺跡が形成されていたものと判断できる。第62図13～17は同様時期の壺形土器片であるが、甕形土器と比してその量は少ない。口縁部形態は13、14の二種あり、13は10、11同様口縁部上面に4条を1単位とする櫛状工具で2単位を一組にして間隔をおいて短線を施す。口縁端部を凹ませるのは甕形土器と同様である。

第63図はH地点で採集した古銭拓影で、銭文明瞭な洪武通宝である。近年本県においても発見例が増加しつつある。

以上筆者が本遺跡において採集した遺物について報告したが、凸帯文土器や弥生土器の一部、石器については時間の都合で図化できず今回は省略した。次の機会に追加して報告したい。

亀ヶ原地区は、すでに縄文早期にその一部に遺跡が形成され、その後も断続的ながら長期間にわたって人々に利用された痕跡があり、弥生時代中期中葉頃には宇宿キャンパスを中心に



第63図脇田亀ヶ原遺跡採集古銭（実大）

かなりの規模の遺跡となったものと考えられる。この時期は本県では未解明の時期でもあり、遺跡のかなりの部分が消失してしまったことは返す返すも残念でならない。今後はこの地区の埋蔵文化財に十分な配慮がなされることを切望して止まない。

最後になったが、発表の機会を与えていただいた鹿児島大学埋蔵文化財調査室、遺物の図化に協力していただいた坪根伸也・下山 寛の両氏に深く感謝の意を表したい。



## 受贈図書目録（1985年6月1日～1985年1月31日）

書名	発行機関	
<b>単行本</b>		
甦る河内の歴史	財団法人東大阪市文化財協会	1984年
河口貞徳先生古稀記念著作集 上巻	河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会	1981年
河口貞徳先生古稀記念著作集 下巻	河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会	1983年
南西諸島の先史時代に於ける考古学的基礎研究	鹿児島大学法文学部考古学研究室	1984年
文化行政の手引き	鹿児島県教育委員会	1978年 8月
鹿児島市内の史跡めぐりNo1 〈上町地区・1〉	鹿児島市教育委員会	1981年
鹿児島市内の史跡めぐりNo4 〈伊敷地区〉	鹿児島市教育委員会	1980年
鹿児島市内の史跡めぐりNo5 〈甲突川以南〉	鹿児島市教育委員会	1981年
鹿児島市内の史跡めぐりNo6 〈中央地区・甲突川以北〉	鹿児島市教育委員会	1982年
鹿児島市文化財の手引・その3	鹿児島市教育委員会	1985年
鹿児島市文化財のしおり	鹿児島市教育委員会	1985年
異人館	鹿児島市教育委員会	1985年
大隅町の文化財	鹿児島県曾於郡大隅町教育委員会	1984年
具志川村の文化財（久米島）	沖縄県島尻郡具志川村教育委員会	1983年
<b>定期刊行物</b>		
年報 4	神奈川県立埋蔵文化財センター	1985年
(財)東大阪市埋蔵文化財協会年報 1983年度	財団法人東大阪市文化財協会	1984年

紀要 I	財団法人東大阪市文化財協会	1985年
蒜山研究所研究報告 第1号	岡山理科大学蒜山研究所	1975年
蒜山研究所研究報告 第2号	岡山理科大学蒜山研究所	1976年
蒜山研究所研究報告 第3号	岡山理科大学蒜山研究所	1977年
蒜山研究所研究報告 第4号・第5号	岡山理科大学蒜山研究所	1980年
蒜山研究所研究報告 第6号	岡山理科大学蒜山研究所	1981年
蒜山研究所研究報告 第7号	岡山理科大学蒜山研究所	1982年
蒜山研究所研究報告 第8号	岡山理科大学蒜山研究所	1983年
蒜山研究所研究報告 第9号	岡山理科大学蒜山研究所	1984年
蒜山研究所研究報告 第10号	岡山理科大学蒜山研究所	1985年
岡山大学構内遺跡調査研究年報 1 昭和58年度	岡山大学埋蔵文化財調査室	1985年
岡山大学構内遺跡調査研究年報 2 昭和59年度	岡山大学埋蔵文化財調査室	1985年
鹿大考古 第3号	鹿児島大学法文学部考古学研究室	1985年 10月
琉大史学 第3号	琉球大学史学会	1972年 3月
琉大史学 第5号	琉球大学史学会	1974年 6月
琉大史学 第6号	琉球大学史学会	1974年 12月
琉大史学 第7号	琉球大学史学会	1975年 6月
琉大史学 第8号	琉球大学史学会	1976年 2月
琉大史学 第9号	琉球大学史学会	1977年 4月

琉大史学 第10号	琉球大学史学会	1978年
琉大史学 第11号	琉球大学史学会	1980年 10月
琉大史学 第12号	琉球大学史学会	1981年 12月
琉大史学 第13号	琉球大学史学会	1983年 3月
紀要 第1号	沖縄県教育委員会文化課	1984年 3月
紀要 第2号	沖縄県教育委員会文化課	1985年 3月
<b>調査報告書</b>		
鳥羽離宮跡発掘調査概報	京都市埋蔵文化財研究所	1984年
京都市内遺跡試掘立会調査概報	京都市埋蔵文化財研究所	1984年
中臣遺跡発掘調査概報	京都市埋蔵文化財研究所	1984年
植物園北遺跡発掘調査概報	京都市埋蔵文化財研究所	1984年
小栗栖瓦窯跡発掘調査報告	京都市文化観光局 財団法人 古代学協会	1984年
長法寺南原古墳 III	大阪大学南原古墳調査団	1985年 3月
京都大学埋蔵文化財調査報告 III	京都大学埋蔵文化財研究センター	1985年 3月
高井田遺跡第2・3次調査報告	東大阪市文化財協会	1984年
若江北遺跡	東大阪市文化財協会	1985年 3月
岡山大学津島北地区小橋法目黒遺跡 (AW14区)の発掘調査 駅東三丁目遺跡調査報告書	岡山大学埋蔵文化財調査室 福岡市教育委員会	1985年 1984年
野多目古屋敷遺跡	福岡市教育委員会	1984年
高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 IV	福岡市教育委員会	1984年



那珂君休遺跡	福岡市教育委員会	1984年
麦野下古賀遺跡	福岡市教育委員会	1984年
諸岡遺跡	福岡市教育委員会	1984年
中尾遺跡	福岡市教育委員会	1984年
徳永古墳群	徳永古墳群調査会	1985年
宮崎大学埋蔵文化財調査報告 I	宮崎大学・宮崎県教育委員会	1984年
都城・中之城跡・菓子野地下式横穴	都城市教育委員会	1983年
鏡遺跡・藤掛遺跡	宮崎県新富町教育委員会	1983年
川床地区遺跡	宮崎県新富町教育委員会	1985年
長浜金久遺跡	鹿児島県教育委員会	1985年 3月
国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵 文化財分布調査報告書	鹿児島県教育委員会	1985年
王子遺跡(付)西祓川遺跡・薬師堂遺跡	鹿児島県教育委員会	1985年
成岡遺跡	鹿児島県教育委員会	1985年 3月
平泉城跡	鹿児島県大口市教育委員会	1982年
諏訪野地下式土壙3号	鹿児島県大口市教育委員会	1982年
諏訪野地下式土壙5号	鹿児島県大口市教育委員会	1984年
広徳寺跡古墓・王城古墓	鹿児島県大口市教育委員会	1985年
山下遺跡	鹿児島県伊佐郡菱刈町教育委員会	1985年
小向江古墳	鹿児島県出水郡東町教育委員会	1985年

薩摩国分寺跡環境整備事業報告書	鹿児島県川内市教育委員会	1985年 3月
萩原遺跡	鹿児島県始良郡始良町教育委員会	1978年
萩原遺跡 II	鹿児島県始良郡始良町教育委員会	1980年
大龍遺跡	鹿児島市教育委員会	1982年
大乘院跡	鹿児島市教育委員会	1983年
鹿児島(鶴丸)城二之丸跡	鹿児島市教育委員会	1984年
大乘院跡	鹿児島市教育委員会	1985年
神川堤第一地点遺跡	鹿児島大学工学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室	1885年
野畑遺跡	揖宿郡喜入町教育委員会	1985年
上加世田遺跡—I(第I地点・第II地点)	鹿児島県加世田市教育委員会	1985年
俣刈遺跡・鶴羽遺跡	鹿児島県鹿屋市教育委員会	1985年
柳井谷遺跡	鹿児島県志布志町教育委員会	1984年
倉園B遺跡	鹿児島県志布志町教育委員会	1984年
中原遺跡	鹿児島県志布志町教育委員会	1985年
倉園A遺跡・土光遺跡・風穴遺跡	鹿児島県志布志町教育委員会	1985年
箱根遺跡・前畑遺跡・真方入口遺跡・通山上川跡遺跡・野田後遺跡	鹿児島県末吉町教育委員会	1985年
大畝町園田遺跡	鹿児島県宮之城町教育委員会	1985年
札元遺跡・山原遺跡	鹿児島県曾於郡有明町教育委員会	1985年
大牟礼遺跡・ほか3遺跡	鹿児島県肝属郡吾平町教育委員会	1985年

中町馬場遺跡	鹿児島県里村教育委員会・鹿児島大学法文学部考古学研究室	1985年
安納調査区(俣I遺跡)・住吉調査区(高峯遺跡)	鹿児島県西之表市教育委員会	1985年
カムイヤキ古窯跡群 I	鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会	1985年
面縄貝塚群	鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会	1985年
カムイヤキ古窯跡群 II	鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会	1985年
中甫洞穴	鹿児島県大島郡知名町教育委員会	1985年
赤嶺原遺跡	鹿児島県大島郡知名町教育委員会	1985年
石城山	沖縄県教育委員会	1978年
石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告	沖縄県教育委員会	1980年
長間底遺跡	沖縄県教育委員会	1984年
野国	沖縄県教育委員会	1984年
カンドウ原遺跡	沖縄県教育委員会	1984年
概報・与那国島トウグル浜遺跡の発掘調査	沖縄県教育委員会	1984年
石川市・古我地原貝塚発掘調査速報	沖縄県教育委員会	1984年
牧港貝塚・真久原遺跡調査概報	沖縄県教育委員会	1984年
アラスク村跡遺跡・ウイヌズ遺跡発掘調査報告書	沖縄県教育委員会	1985年
名護貝塚	沖縄県教育委員会	1985年
名蔵貝塚群発掘調査報告書	沖縄県教育委員会	1985年
与那国島トウグル浜遺跡	沖縄県教育委員会	1985年



名護市の遺跡(2)分布調査報告	名護市教育委員会	1982年
名護貝塚緊急発掘調査報告	名護市教育委員会	1985年
喜友名遺跡群	宜野湾市教育委員会	1984年
うらそえの文化財	沖縄県浦添市教育委員会	1980年
今姿を見せる古琉球の浦添城跡	沖縄県浦添市教育委員会	1983年
新富祖遺跡	沖縄県浦添市教育委員会	1983年
浦添城跡第二次発掘調査概報	沖縄県浦添市教育委員会	1984年
住屋遺跡(俗称・尻間)発掘調査報告	沖縄県平良市教育委員会	1983年
具志川島遺跡群(第一次発掘調査報告書)	沖縄県伊是名村教育委員会	1977年
具志川島遺跡群(第二次発掘調査報告書)	沖縄県伊是名村教育委員会	1978年
具志川島遺跡群(第三次発掘調査報告書)	沖縄県伊是名村教育委員会	1979年
伊是名貝塚	沖縄県伊是名村教育委員会	1979年
具志川島遺跡群	沖縄県伊是名村教育委員会	1981年
勝連城跡	沖縄県勝連村教育委員会	1976年
勝連城跡	沖縄県勝連町教育委員会	1983年
勝連城跡	沖縄県勝連町教育委員会	1984年

# 圖 版

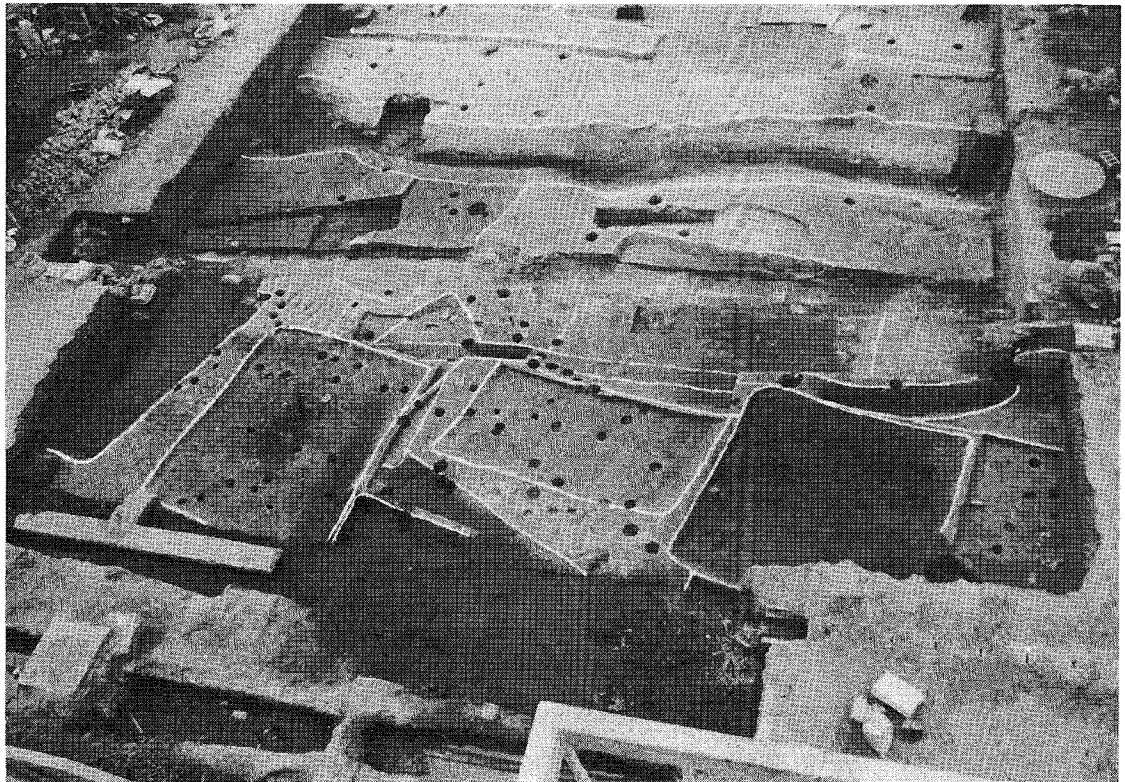
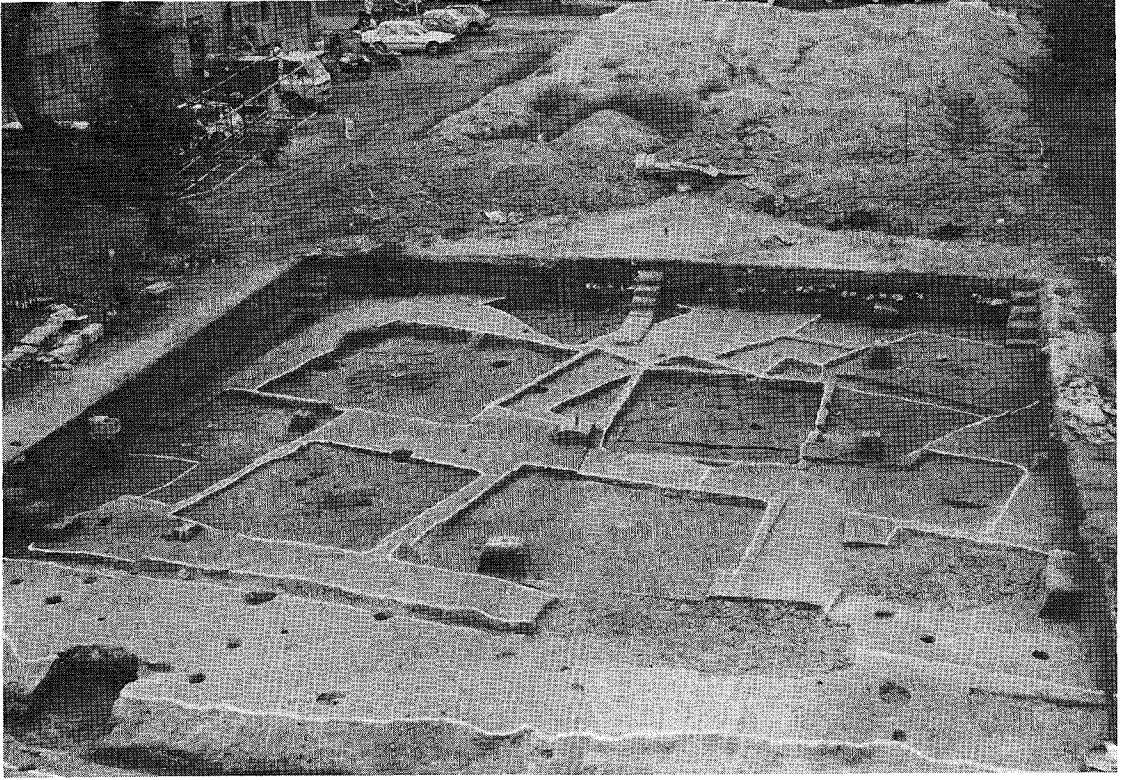
図版一 郡元団地Ⅰ・J19・10区検出遺構全景(東から)



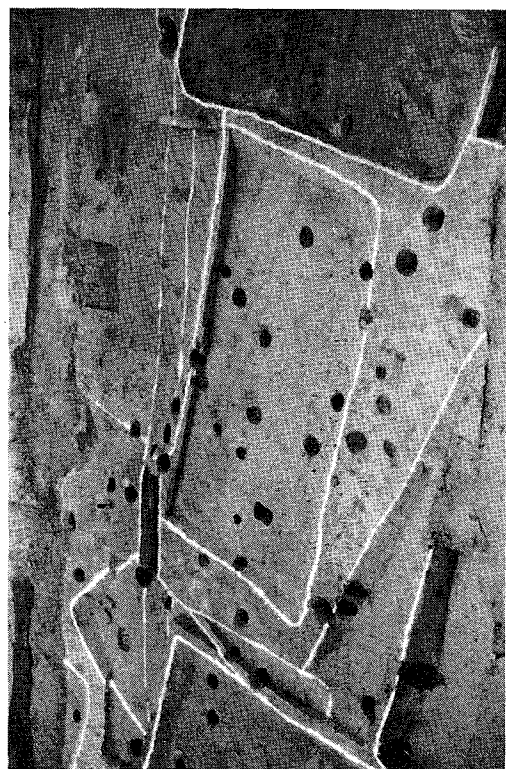
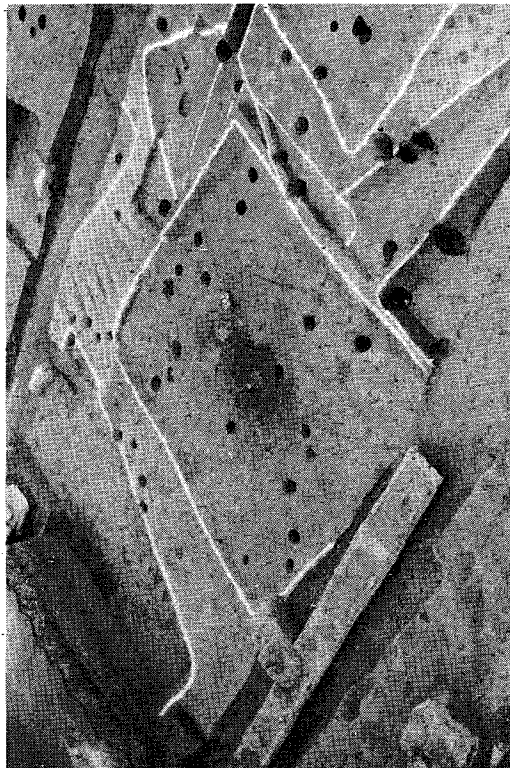
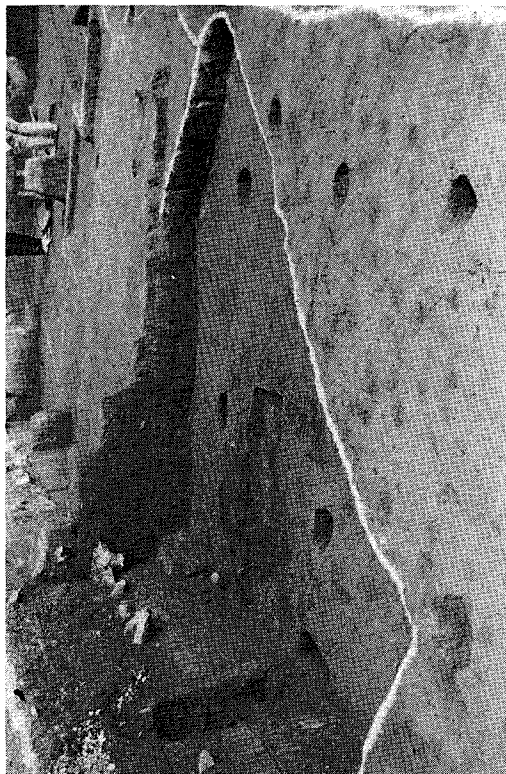
調査区全景



図版二 郡元団地Ⅰ・J-9・10区検出遺構(東から)



上. 調査区西半部  
下. 調査区東半部

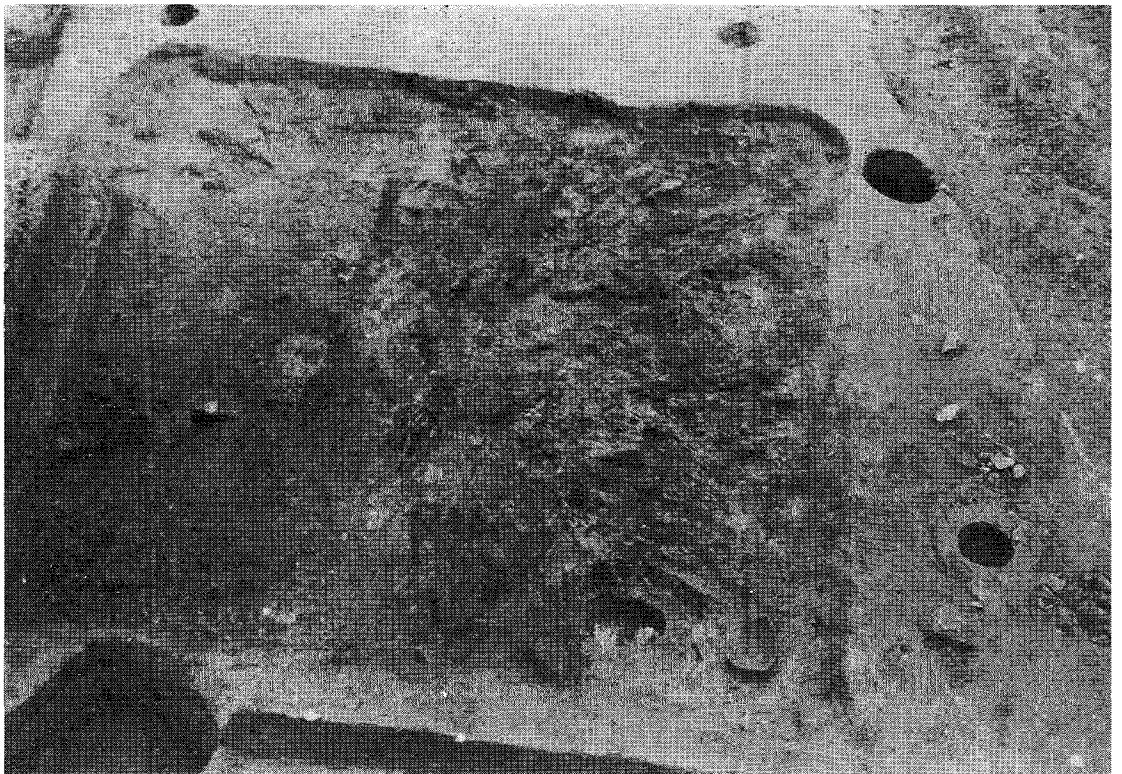


上左. 2号住居址  
下左. 19号住居址

上右. 24号住居址  
下右. 配石をもつ方形掘り込み



図版四 郡元団地Ⅰ・J-9・10区17号住居址



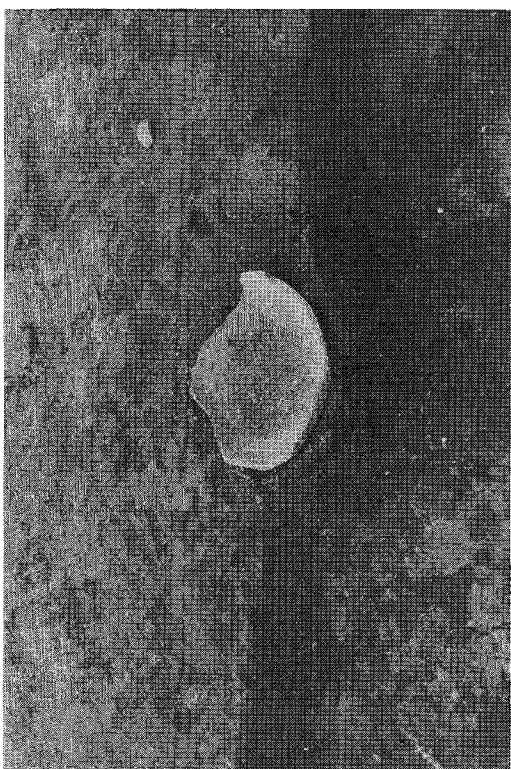
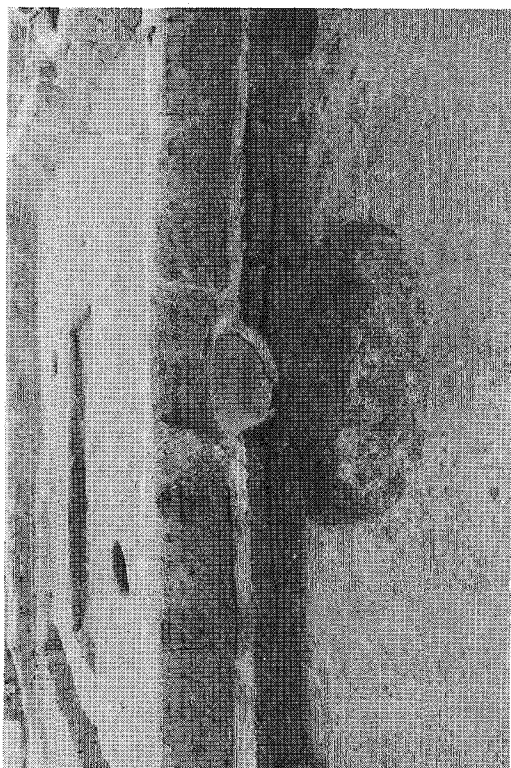
上. 東から  
下. 北から



图版五 郡元团地 I · J 19 · 10 区 17 号 住居址出土炭化材

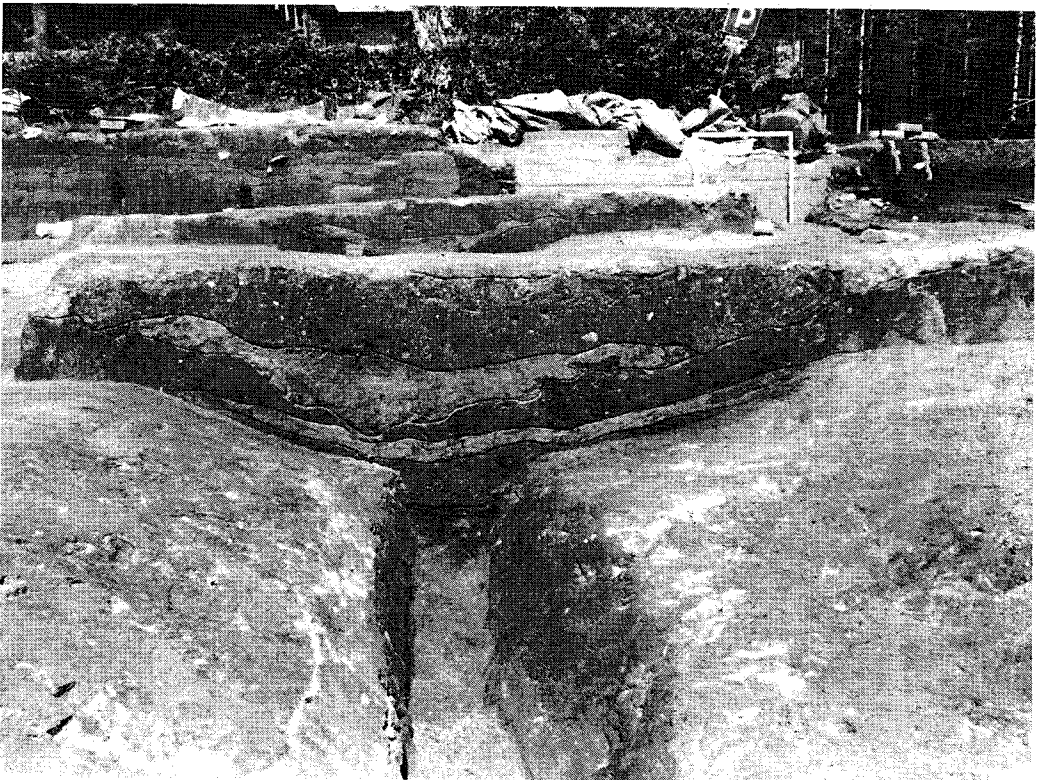


图版六 郡元团地1・J19・10区住居址中央部高坏出土状况



上 左右. 7号住居址検出高坏  
下 左右. 16号住居址検出高坏

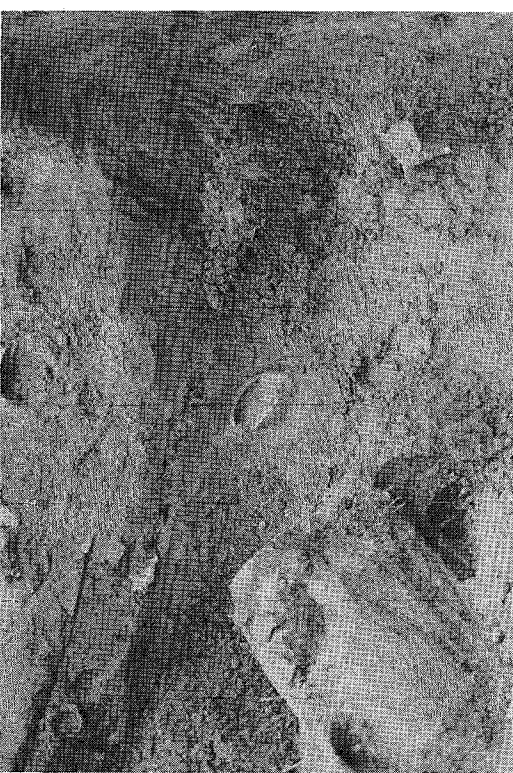
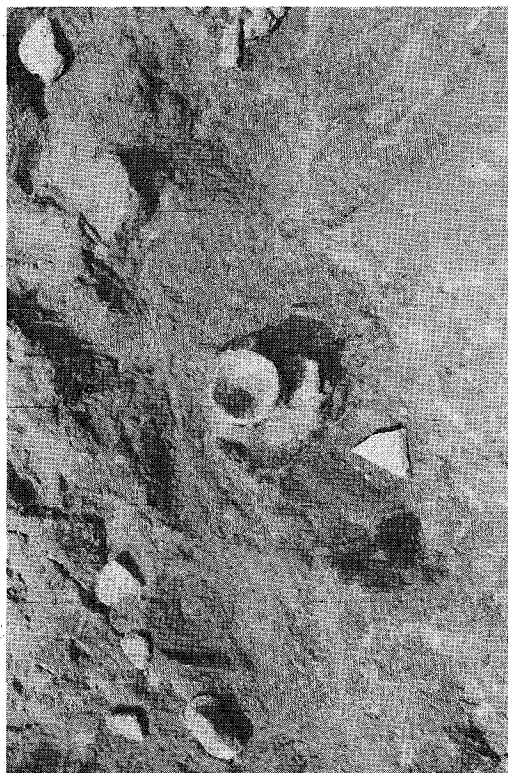
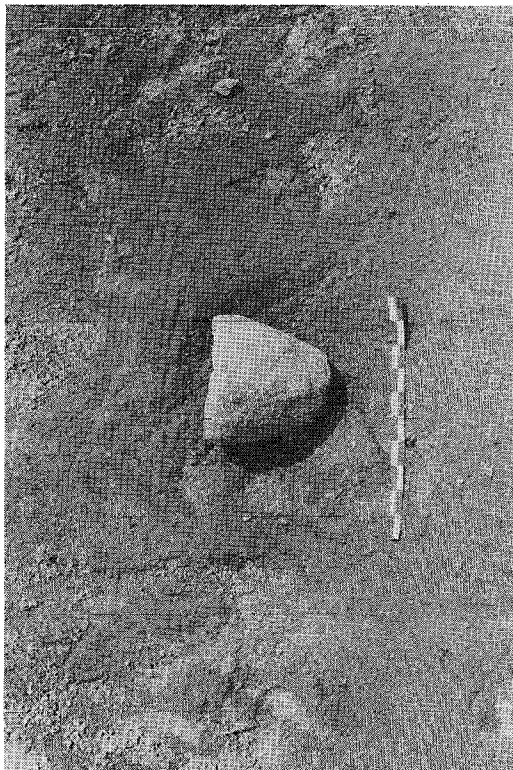
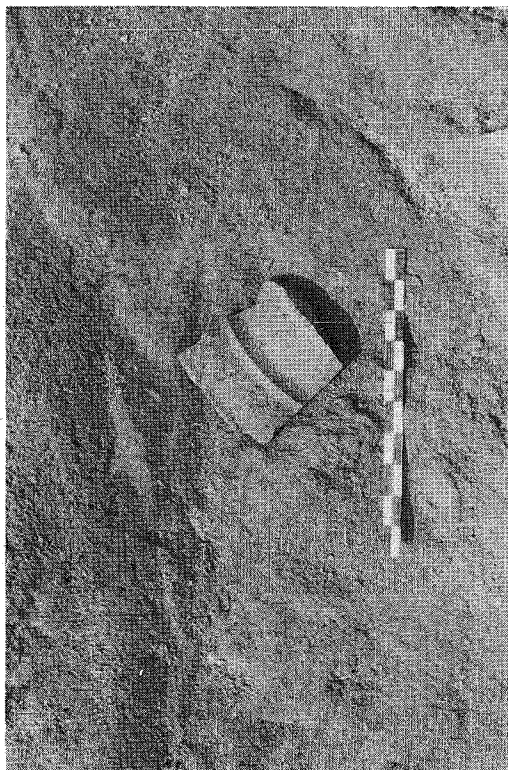


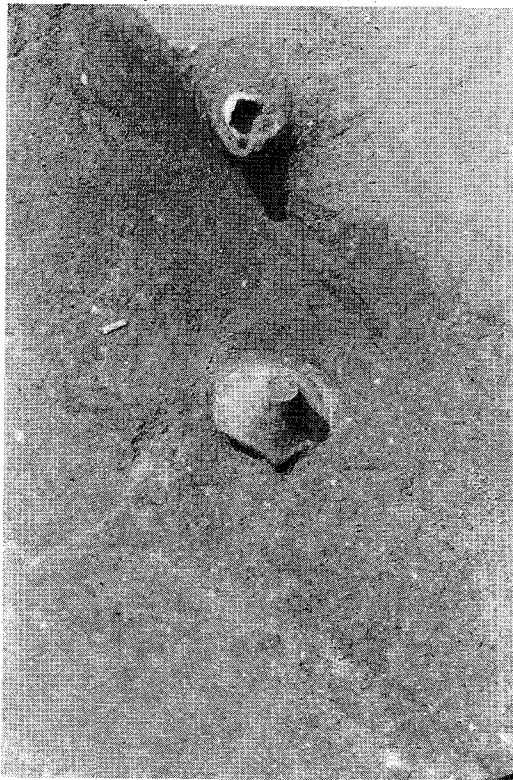
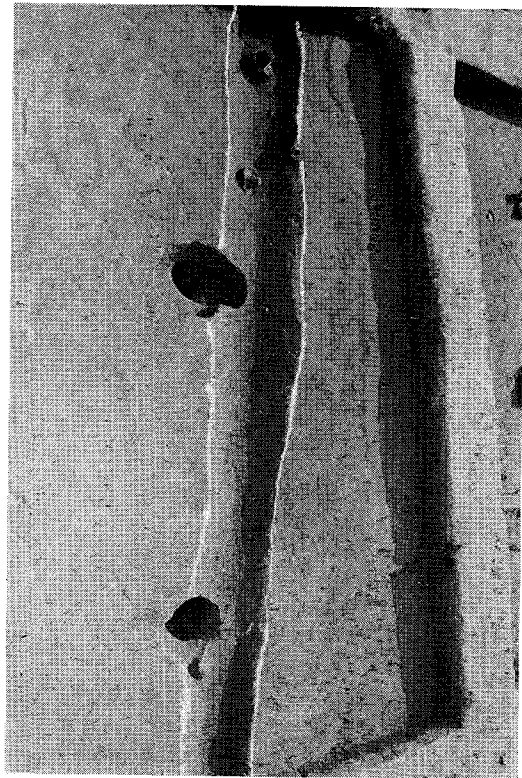
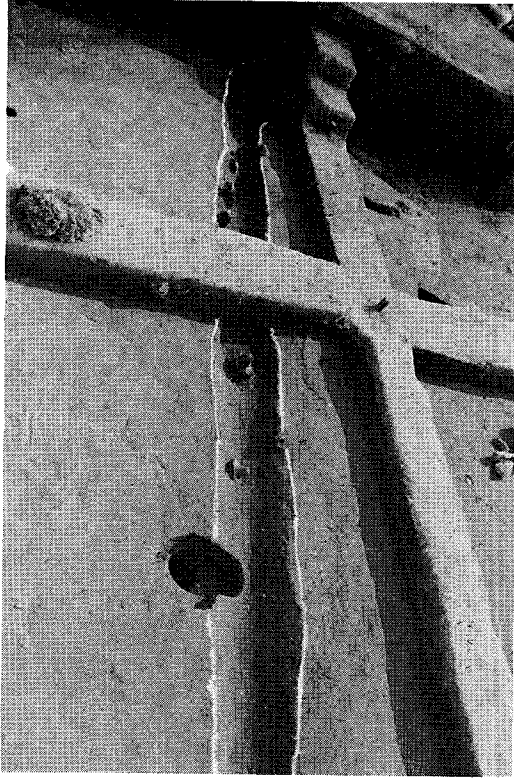


上左. 2号溝完掘状況  
上右. 2号溝遺物出土状況  
下. 2号溝埋土堆積状況



図版八 郡元団地I・J-9・10区2号溝遺物出土状況一

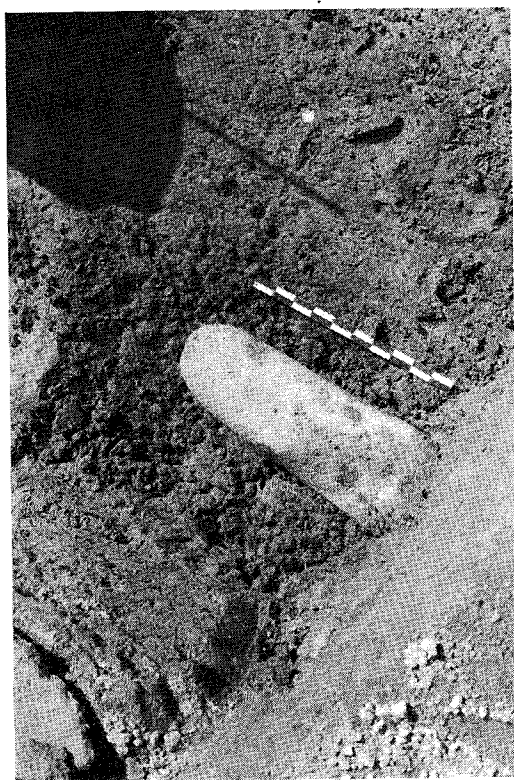




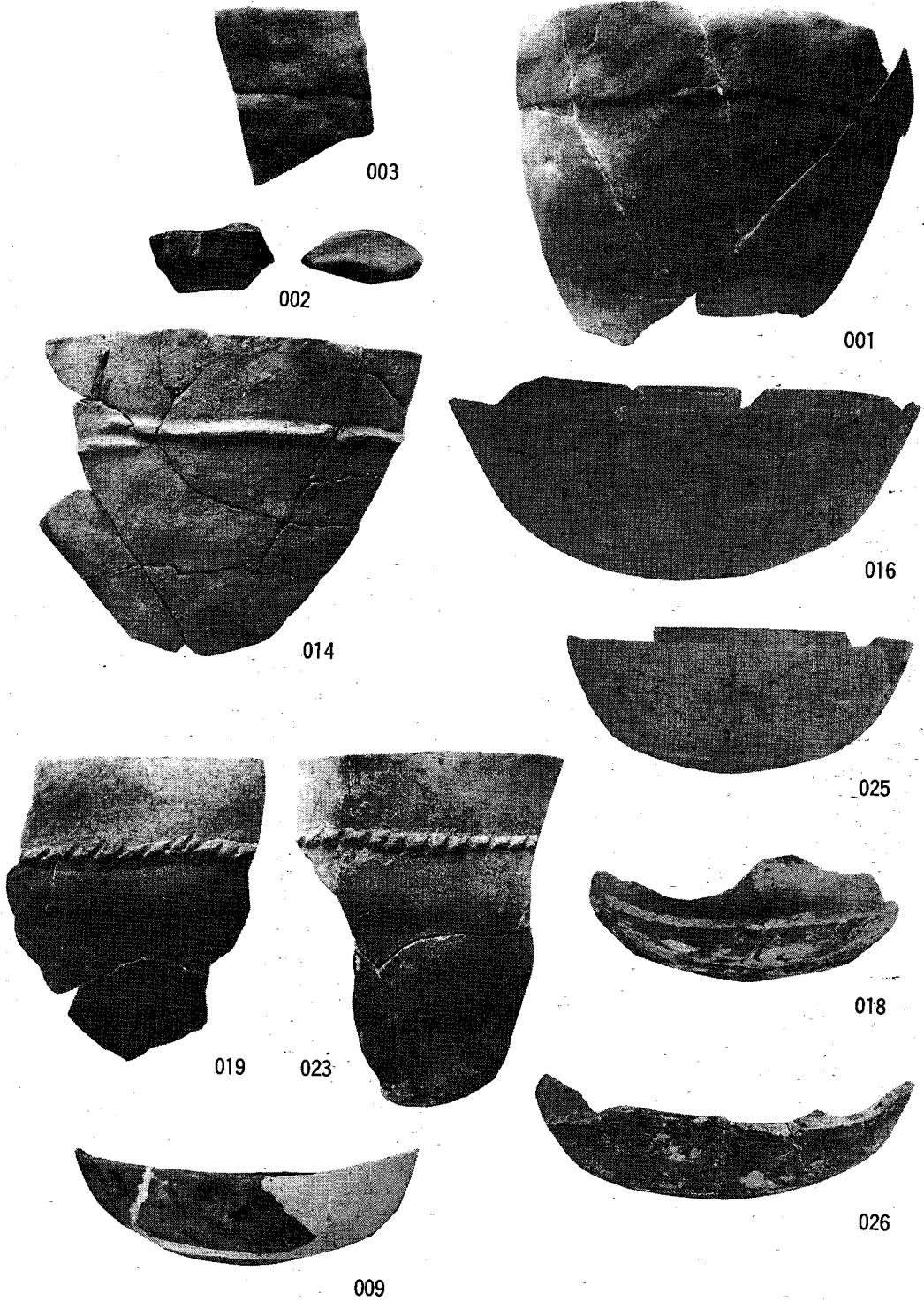
上左. 北から  
上右. 東から  
下左右. 遺物出土状況



図版十 郡元団地Ⅰ・JⅠ9・10区Ⅵ層遺物出土状況



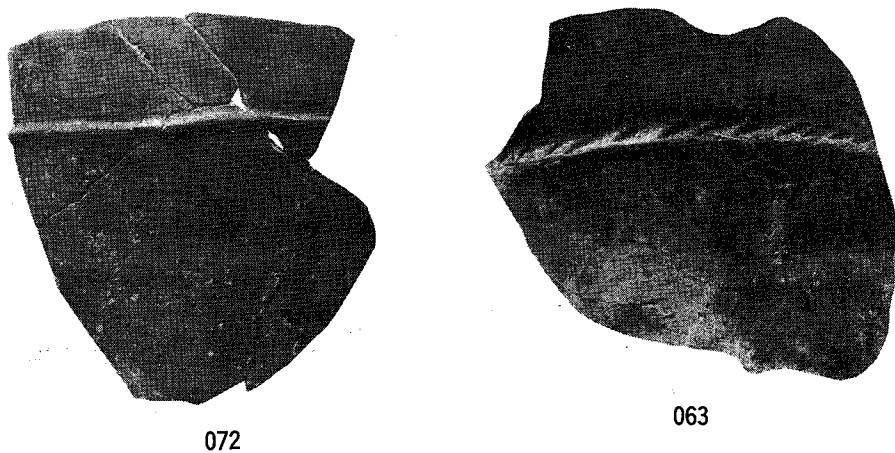




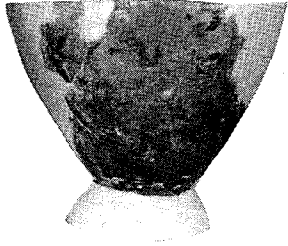
1. 住居址床面出土土器



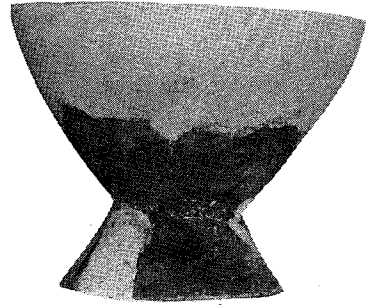
1. 特殊遺物



2. 出土土器 (1)



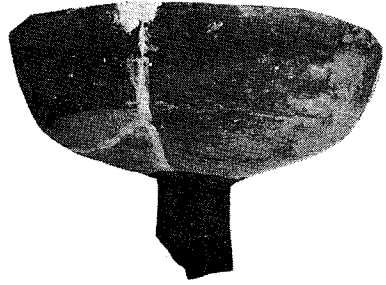
059



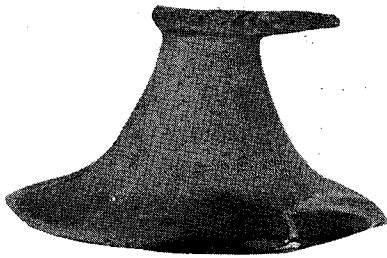
066



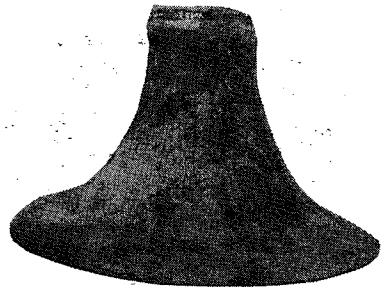
009



030



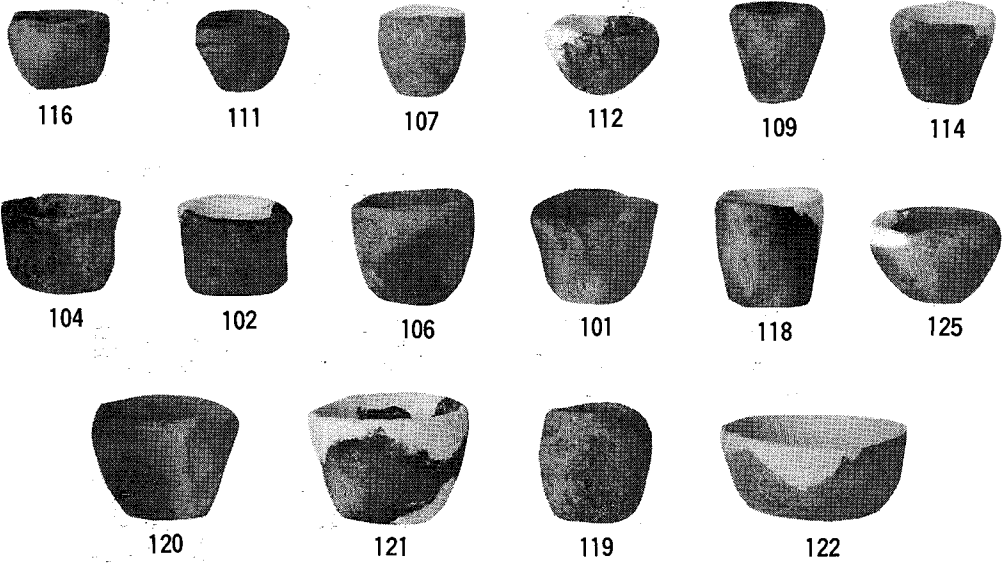
056



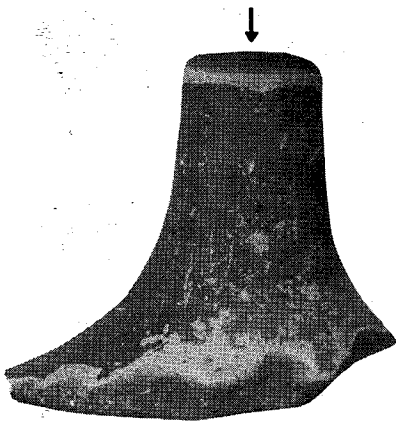
100

1. 出土土器 (2)

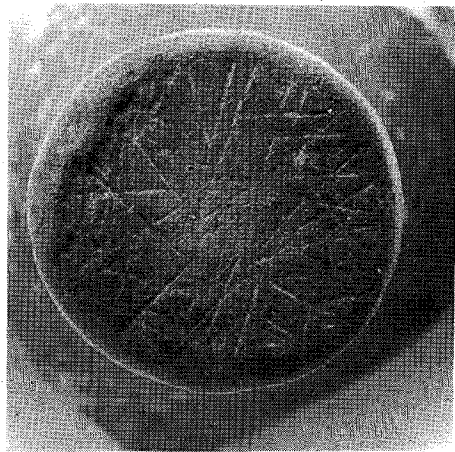




1. てづくね土器

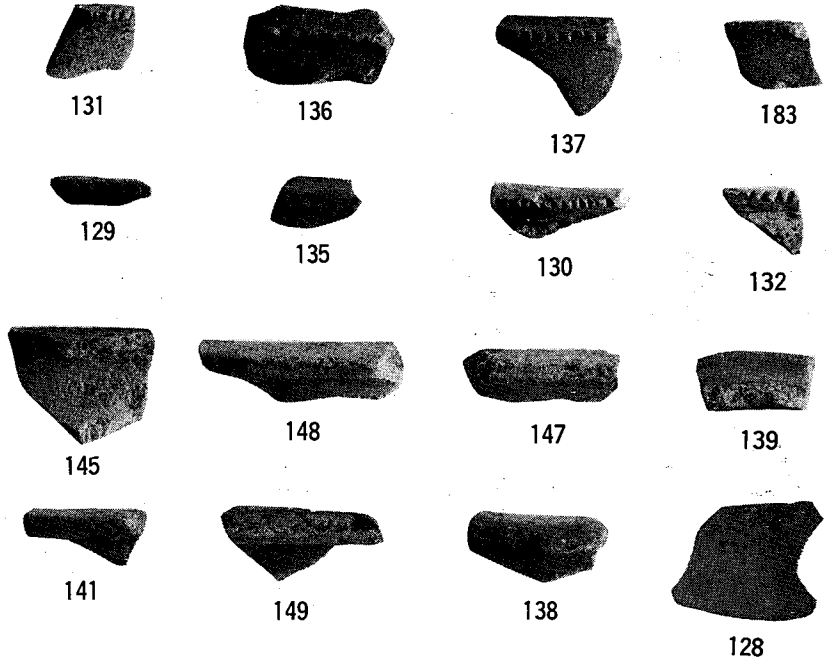


123

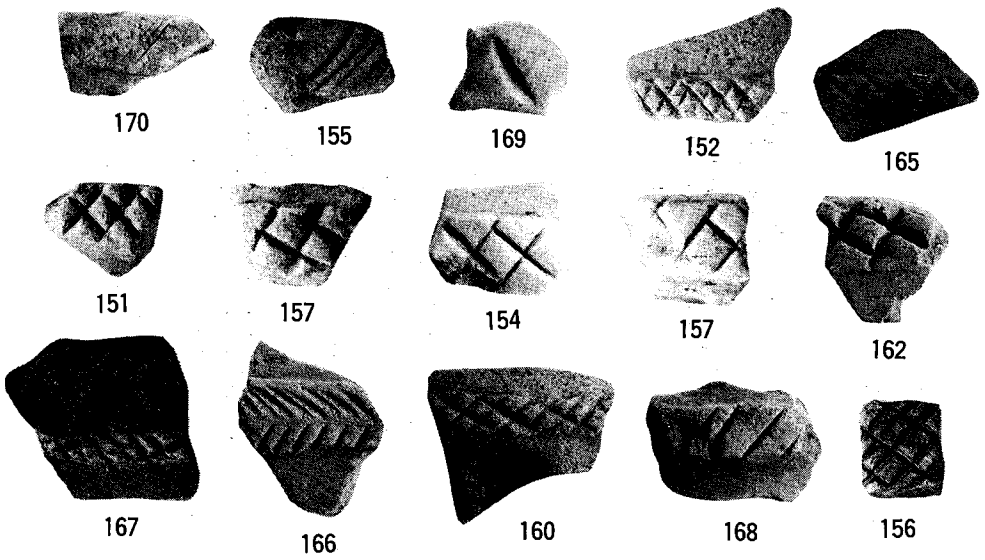


・拡大写真（矢印部分）

2. 線刻を有する高坏



1. 弥生土器



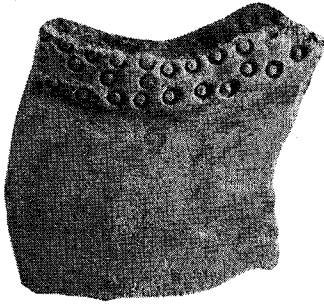
2. 突帯 (1)



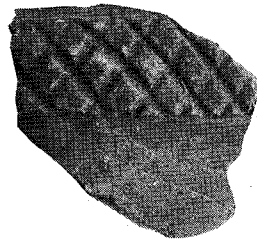
171



186

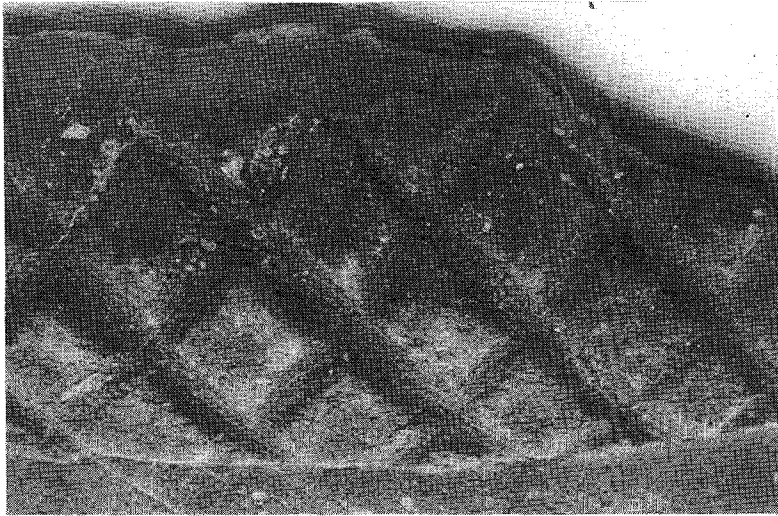


172



173

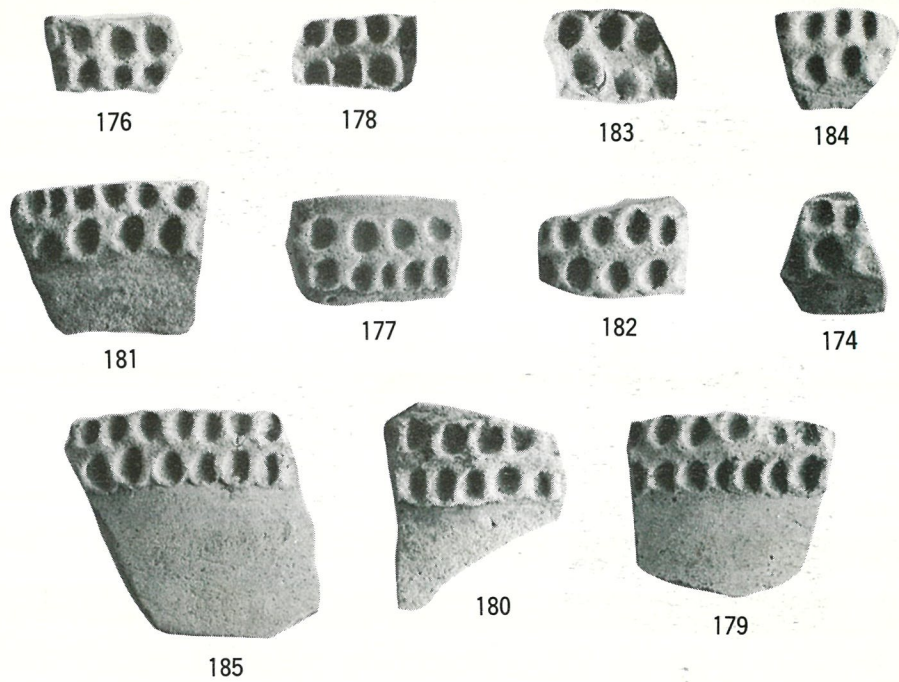
1. 突帯 (2)



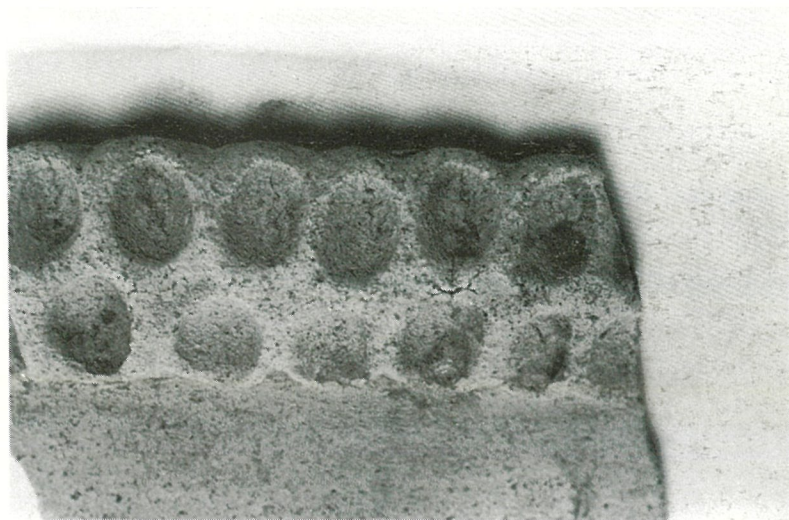
173

2. 部分拡大写真



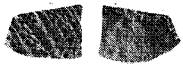


1. 指頭押压幅広突帯

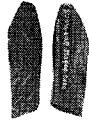


185

2. 部分拡大写真



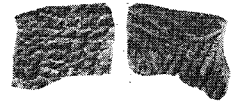
193



197



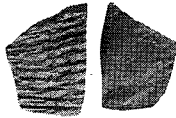
196



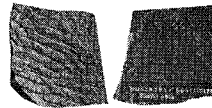
194



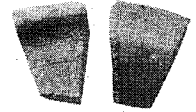
187



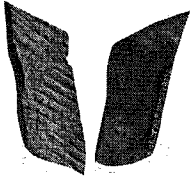
198



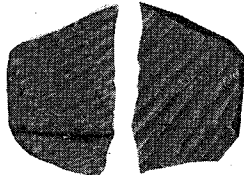
192



188



200



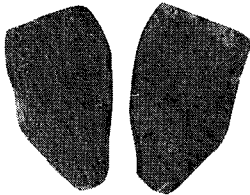
203



195



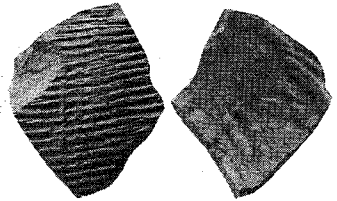
199



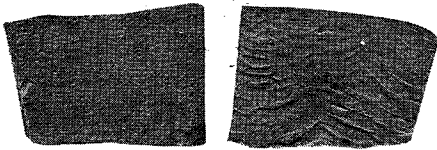
207



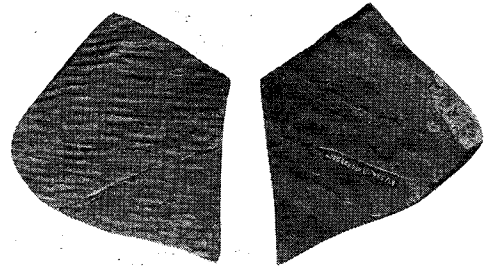
202



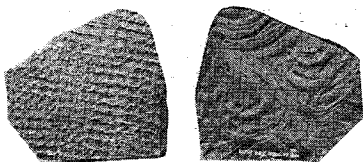
201



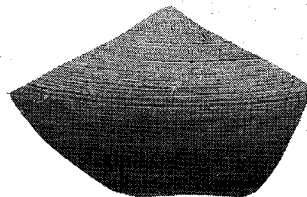
206



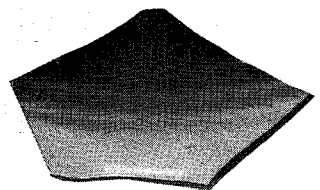
205



204



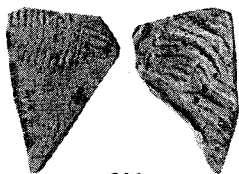
190



1. 須恵器 (1)



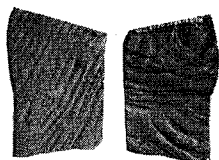
212



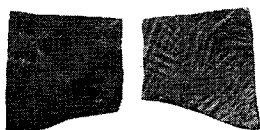
213



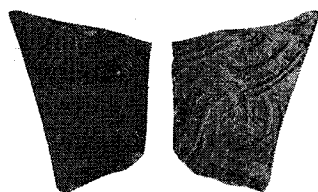
210



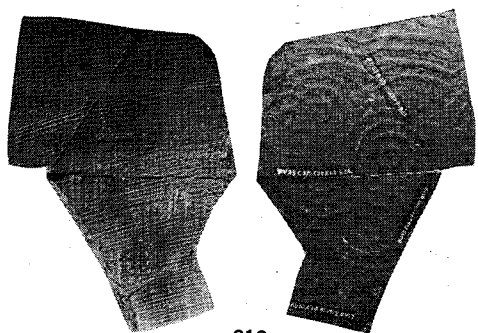
209



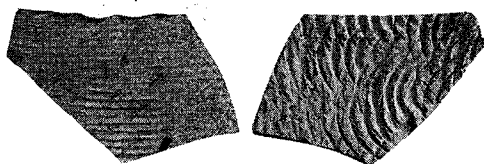
211



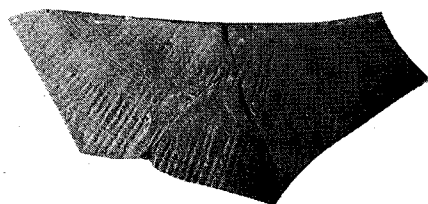
215



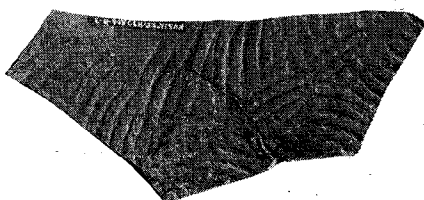
218



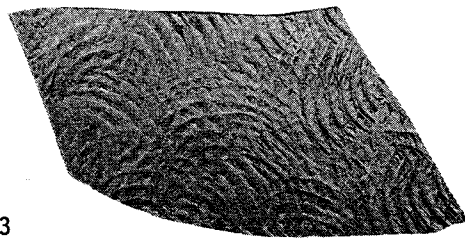
222



219



223

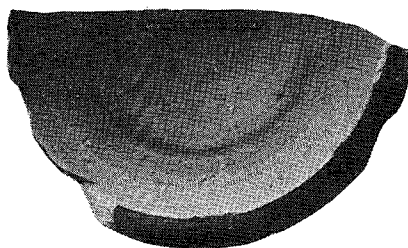
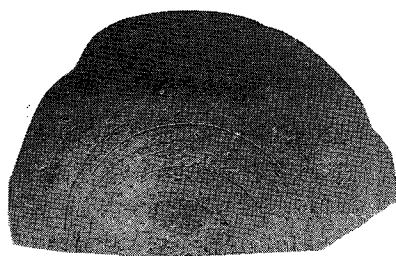


1. 須恵器 (2)

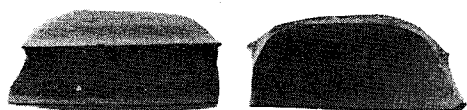




228



229



227



230

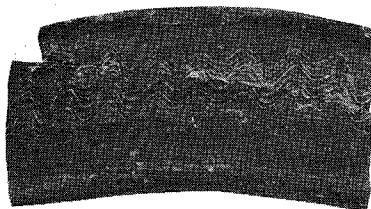
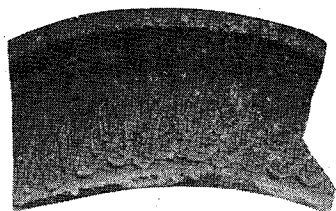
1. 須恵器 (3)



225



224



2. 須恵器 (4)



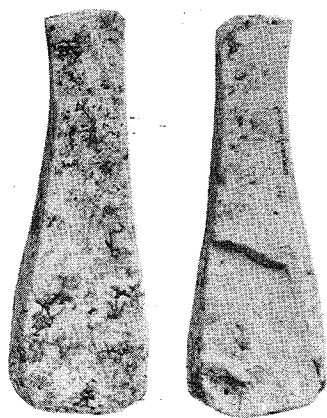
S 15



S 4



S 10



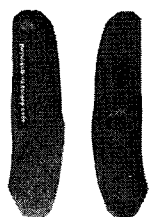
S 5

S 15. 剥片利用石器

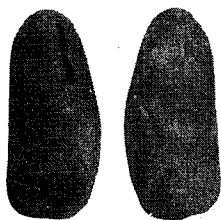
S 10. 砥石

S 4. 石包丁

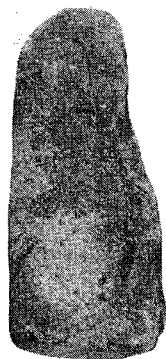
S 5. 砥石



S 2



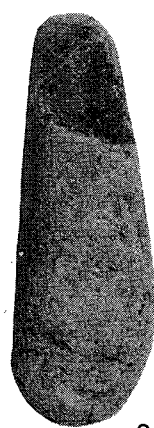
S 29



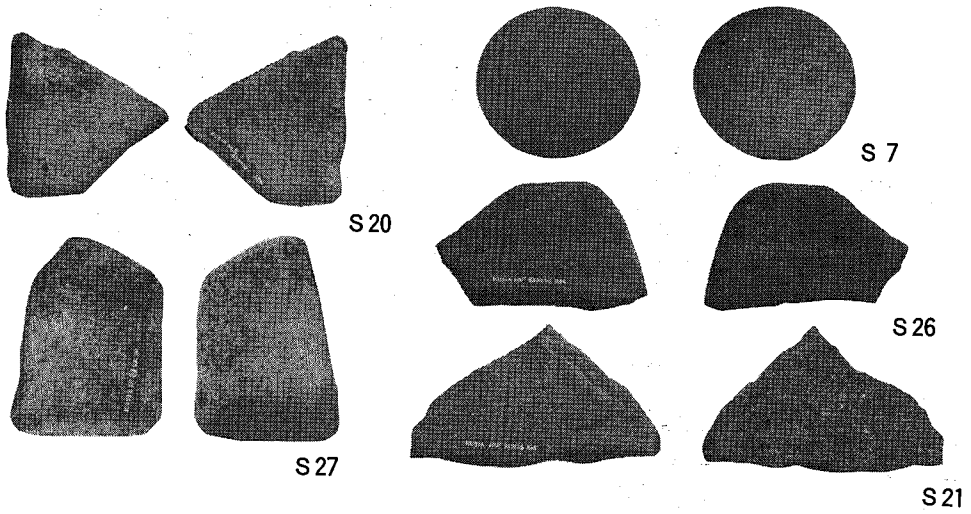
S 6



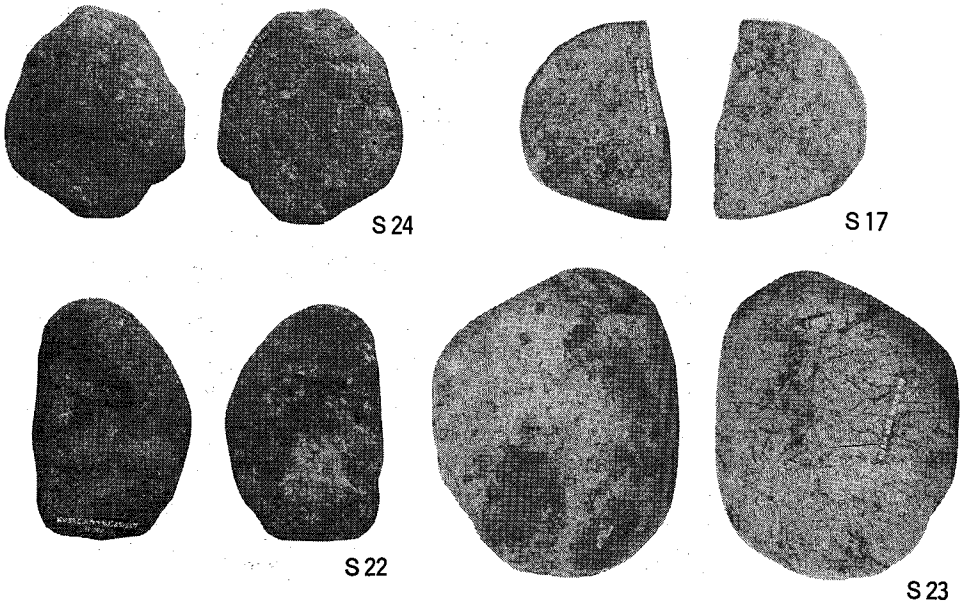
S 28



S 2 · 6 · 28 · 29. 敲石

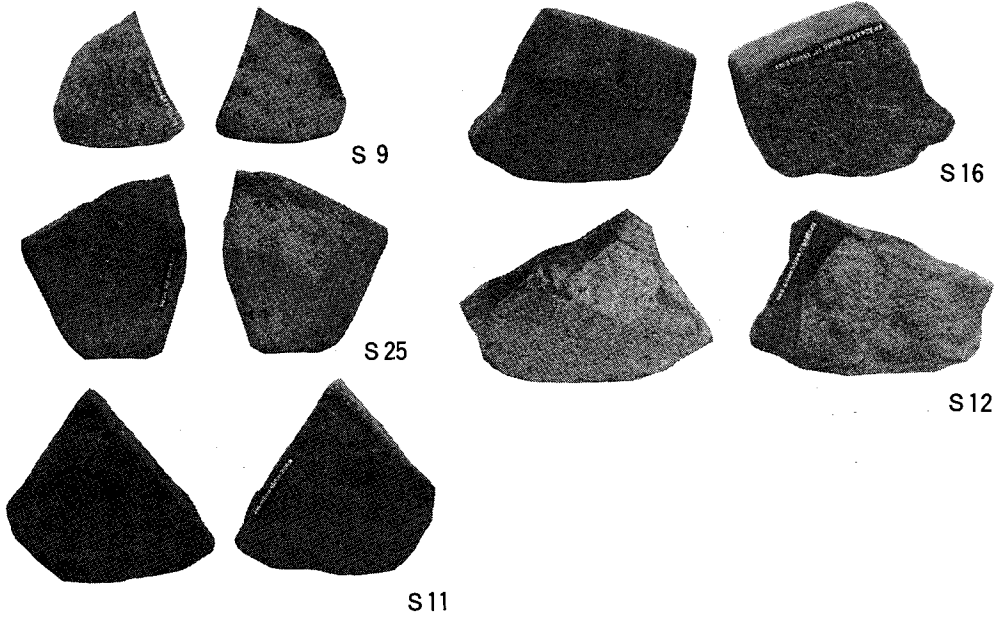


S 7. 磨石 S 20. 石皿 S 21. 石皿? S 26. 台石?  
S 27. 台石?

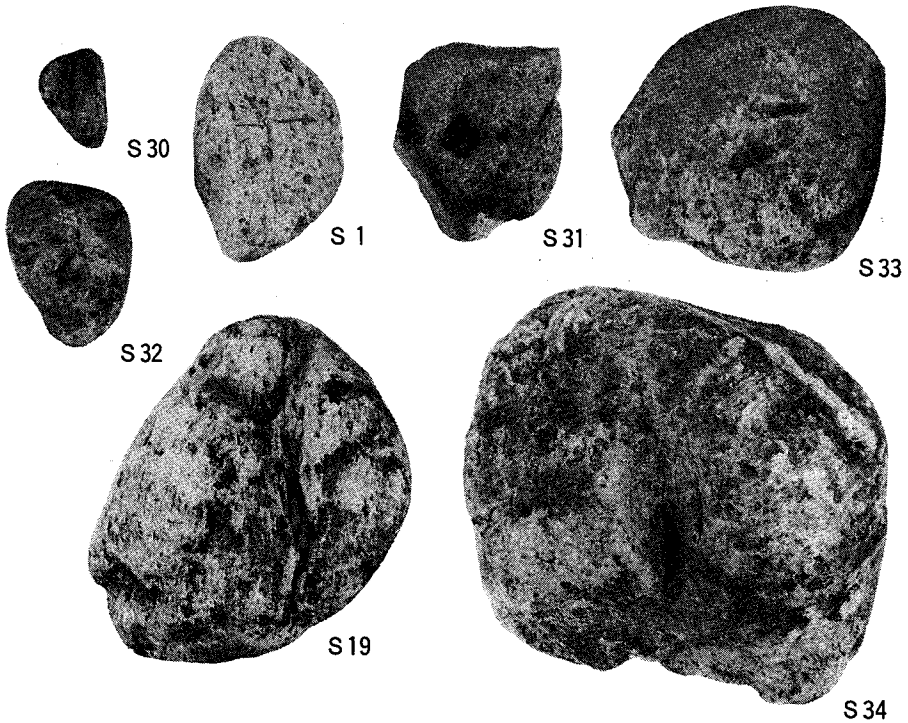


S 17 · 22~24 凹石

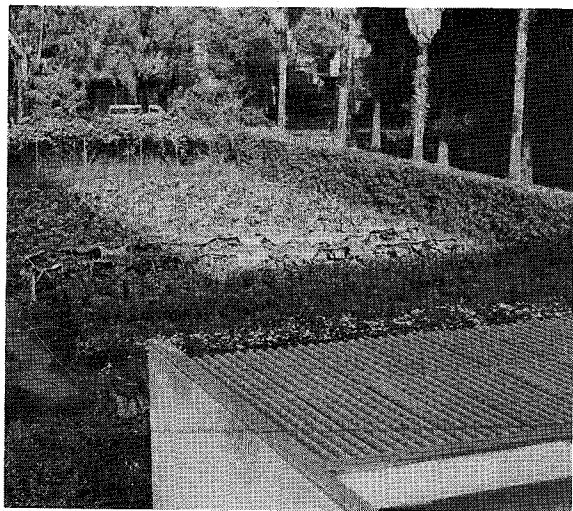




S. 9・11・12・25 縦断面楔形敲打用石器



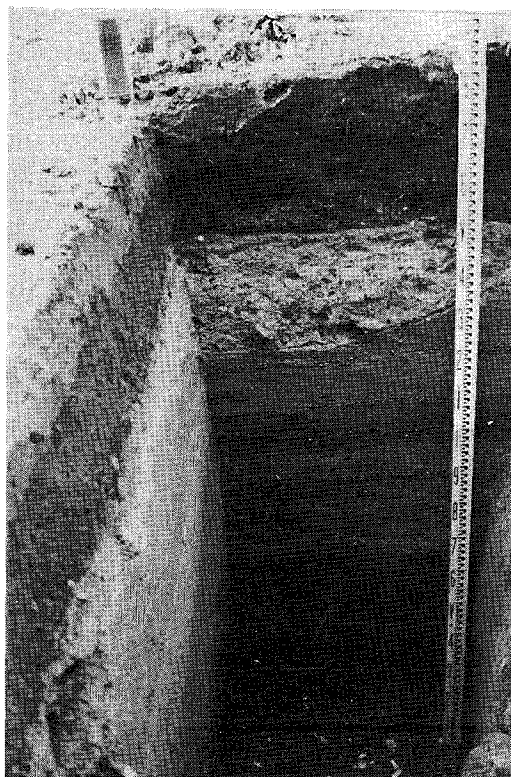
S 1・19・30~24. 軽石製品



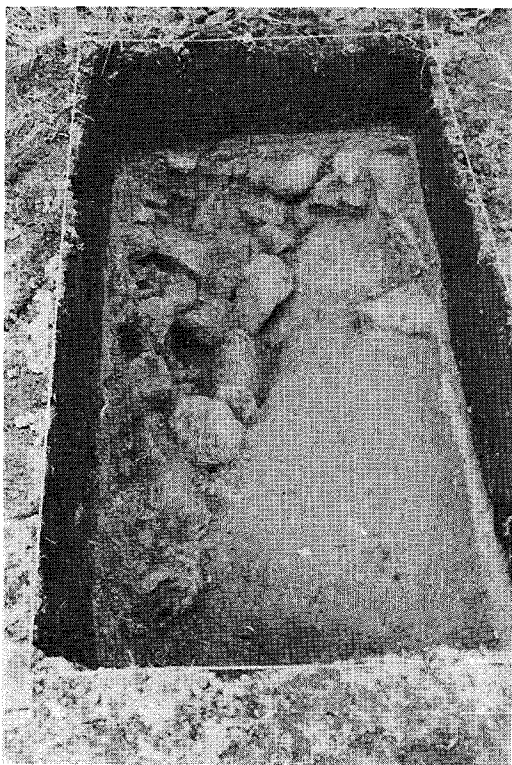
1. 調査前状況 (西から)



2. 出土状況 (青磁片)



3. 土層断面



4. 掘り込み遺構 (攪乱)

鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報 I

1986年 3月

編集  
発行

鹿兒島大学埋蔵文化財調査室  
鹿兒島市郡元一丁目21-24

印刷

(有) 朝 日 印 刷

鹿兒島市上荒田町854-1